
傍観者-HARD RAIN-

零河 時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍観者—HARD RAIN—

【Nコード】

N0300Q

【作者名】

零河 時

【あらすじ】

傍観者シリーズ第三弾！

《傍観者》嘉の前に現れた一人の女教師。
その教師が新たな《不穏》を巻き起こす！

他人を無差別に墜とす《敵》と嘉は相對する。

【始まり】

飛べない鳥
地に墜ちた翼
地面を這って
生きる僕ら

―天星織嘉《傍観者》―

「ねえ、ヒイロ。いーこと教えてあげようか」

「……………」

私は目の前に座って意味深な微笑を浮かべそう言った従姉妹を、
怪訝な表情で見つめた。

『いーこと』。

《偽善者》の異名よひなを持つこいつの『いーこと』は大概本来のいいことではない。ほぼ確実に《不穩》のことを差す。それを私に話して
どうなるというのだろう。

私は眉を顰めたまま溜め息をついた。

「あまり興味はないな。それは私にとってプラスになるのか？」

「多分恐らくほぼ確実にね。ヒイロは《不穩》に巻き込まれやすい
やん。近い所にいるからね、聞いて損はしないと思うよ。特に《傍
観者》としてね」

「『多分恐らくほぼ確実』って……………どっちなんだよ」

「感覚で分かってくれるでしょ？ ヒイロなら」

彼女は偽りを真実に見せるような微笑で言う。私は試すようにその顔を見つめていた。

《偽善者》。そう呼ばれる目の前の彼女だが、私に偽りを語ったことはない。関わるのは《不穏》関係の事だけだが、私に対して《偽善者》として行動した事はない。なら、聞いて損は無いのかもかもしれない。

何だか胸に引っ掛かるものもあるし、多分近いうち無関係ではなくなる、そんな予感がする。

「じゃ、聞いてみようかな」

私はそう返した。

その私の返事を聞いて《偽善者》はうつすらと笑い——相変わらずの偽りの微笑で——テーブルに膝を立てて口を開いた。

「うちの学園にね、藤紅藤^{ふじ あかふじ}て、めっちゃめっちゃ厄介な教師がいるんだよ」

「…………聞いたことあるような無いような」

「多分、ヒイロのクラスの英語の教科担当やったと思うよ。ほら、二十後半から三十前半くらいの、天パで瓶底メガネの女教師。姫系の雰囲気醸し出してる、身長は嘉と同じくらいかな。思い出したと？ まあまあ良家のお嬢様教師なんやどね」

「…………ああ、分かった」

そこまで説明されてようやく思い出した。

藤紅藤。

英語の教科担任だ。確かにクネクネブリブリの女教師で、可愛いと生徒の間で評判だが、ちょっと私には理解できない。なんだか胡散臭い感じだ。

藤の情報を脳から引き出している私に、《偽善者》は《偽善》の笑みを浮かべたまま話を続ける。

「あの人、キャピキャピブリブリいい子ぶりっこなんよ。あ、年齢的に『子』は無理があるか。文章にしたら（笑）って入るところだ

よ。ともかく、いい人ってキャラを作っているんよ。いかにもお嬢様って感じで。ヒョロ感じない？」

「確かに胡散臭い感じはするな」

「そうやろ？『なんか分からんけどヤバいにおいする』って思うやろ」

やっぱり、というように私に人差し指を向け、《偽善者》は背もたれに背を預けた。薄ら笑いは相変わらずだ。

そしてもう一度机に膝をついて体重をかけ、私にぐっと顔を寄せた。一瞬にして薄ら笑いは消える。ようやく本題に入るようだ。

「自主退学した三年生の噂聞いたことあると？」

「……………さあ」

「知ってる人と知らん人がおるけんね。まああれからまだそう経ってないし。表向き自主退学になっとるけどね、本当は違うんよ」

「また面倒くさそうな話だな」

「面倒くさい話なんよ」

うんうん、と頭を縦に何度か振り腕を組んで言う《偽善者》。その表情からはこれといった感情は汲み取れない。あるいはわざと読み取れないようにしているのか。

更に《偽善者》は続ける。

「退学に追い込まれたのは男子生徒でね。まあ、普通にすると絶対墜とせないような生徒なんよ。絶対に悪さはしないようなね。それで藤が、裏で色々手を回した。彼の父親の会社を倒産ギリギリに追い込んだり、敢えて言わないけど、その他色々ね。彼にも権力者の知り合いは居るけど、自分が辞めさえすれば全て丸く収まるって言って、自主退学したと。でも実際には藤が追い込んだんよ。簡単に説明するとそんな感じ」

「良い人過ぎねえか」

「面倒くさかったんやない？事を大きくしたくなかったんやと思う」「私には分からない感覚だな」

小さく溜め息。

面倒くさいという感覚は分かる。私の口癖のようなもの、というか口癖だから。行動を殆ど司っている感情でもあるし。しかし、この状況で『面倒くさい』と身を引くのは理解し難い。

更に分らないところだらけだ。私はそれを問おうと口を開いた。「あの教師は何が気に食わなくてそんなくだらないことしたんだ？」

「あいつが『気に食わない』っていう理不尽な理由で目をつけた生徒を、彼が庇ったんよ。攻撃されていた生徒をね。『あなたは間違ってる』って。藤が目を付ける要素は大体、気に食わないっていうのと、自分の偽善を見たか否かみたいなんよ」

「つまりその生徒には全く非はないわけだろ？それを大人しく引き下がるなんてやっぱり理解不能だな」

「確かに普通はね。ああ、でもその頃その生徒、丁度体調崩して病氣したとよ。急に。それもあるんじゃないかな」

「あー……確かに病氣したら闘えないしな」

悪いことは重なるものだ。

しかしだからといって『問題』を重ねさせている奴が、それを理由に責任逃れをすることは赦されることではないだろう。しかもそれが理不尽で邪悪なものなら尚更だ。

本当に。

「しかし、本当に根性曲がった教師だな。教師をしている事自体不思議だ。訳分らない」

「本当やね。ヒロも氣いつけてな。あの人に捕まったら面倒くさいよ。逃げられないよ」

「私はどんな《不穩》が来ようと逃げたりしない」

「うん。ヒロがそういう人だったのは分かる。ヒロにとって、もし藤が《不穩》の元凶になっても、それは些細なことってこともでも面倒くさいことには変わらないからね。それに……藤、《闇》では《仮面》って言われとるんよ」

「……こっちの人間なのか？」

《仮面》の単語に反応して尋ねると、《偽善者》は軽く片目を細め

た。

「まあ一応ね。A級ってわけじゃないけど。もしかしたら『自称』かもしれないし。私もあまり詳しい情報は知らないんよ。只、信憑性はわりと高めの『噂』ってくらいで」

「なんだ。どっちにしろ大した奴じゃなさそうだな。……………それなら余計教師をしている意味が分らない」

「多分ね、『そういう』対象を探す為だと思うんよ。学校っていう、いわば『釣り場』やね。あいつに墜とされた生徒や教師は結構いるみたいだから、一応そういう奴がいるって事、頭の端っこに入れている。ヒロなら《標的》にされても大丈夫だとは思うけど」

「そうだな」

「天星織さーん」
あませおり

「……………あ」

私を呼ぶ声で私は我に帰った。またもや妄想族になっていたようだ。意識を現実に戻すと、目の前の大きな鏡に映るアフロな美容師と目が合った。

アフロがゆさゆさと揺れ、美容師はにっかりと笑った。

「もしかしてマイワールドに入っていました？」

「……………そんな感じですかね」

視線を落とし、溜め息をついて返す。

そんな私の反応にハマったのか、アフロの美容師は更に話し掛けてくる。

「いいですよね。あたしも自分のマイワールド大好きなんです」

「……………」

自分で言うな。

しかも、私『も』ってなんだ。私は同類になった覚えはないぞ。

私は再び溜め息をついて目を閉じた。

今私は美容室に来ている。ここの美容師と、私の同居人の月姫つきひめが知り合いらしい。

そして何故こうなったのかよく覚えてないが（多分成り行きだろう）、こうして人生初のパーマを当てることになった。まあ、長い間只伸ばしっ放しだったから丁度良かったのかもしれない。

（でもなあ……………）

私は瞼を開けて鏡越しに、無駄にボンバーなアフロ髪に目を向けた。

なんて言うか、とにかくすごい。今日この美容室に入った瞬間、いろんな意味で衝撃を受けた髪型だ。どうやらこれもファッションの一種らしい。タワシか鳥の巣に見えるのは私だけだろうか。

と、私がアフロ髪を凝視しているのに気付いた美容師。キラリと目を輝かせた。

「あ、もしかして魅力感じます？ 今から変更してやります？」

「……………遠慮します」

断固、拒否します。

しかし美容師はそんな答えを気にした様子もなく、シャキシヤキと軽い音を立てて髪をすいていく。ノリノリで鼻歌まで歌っている。私はぼうつとそれを見ていた。なんだか楽しそうだ。

「そういえば天星織ちゃん」

と、呆けていた私を呼び、美容師は口を開いた。名字に『ちゃん付け』をされたことに違和感を感じつつ、しかし敢えてつつこまずに鏡越しに視線を合わせる。

手を休めずに美容師は続けた。

「月姫ちゃんがね、天星織ちゃんをべったべたにべた褒めしてましたよ。まさに褒め殺し！ ってくらい」

うししし、と何故か自分が褒められたかのように笑い顔を赤らめる美容師。私は「はあ」とだけ答えて只鏡を見ていた。

「天星織ちゃんは月姫ちゃんの命の恩人なんだってね。心身共に崖っぷちから救われたんだって、月姫ちゃん話してましたよ。掛け替えのない存在だって。本当に本当に大切な存在だって」

「……………そんな立派なものじゃないですよ」

私は短く返して目を逸らした。

美容師は『うししし』とよく分からない笑みで笑う。

「またそんなご謙遜を。あたし、それでも人を見る目はあるんだよ。天星織ちゃん、心の奥の奥の奥の奥に、深い深い優しいさと強さを秘めてる感じがしますもん。瞳の深く深く一番深いところに、ぬくもりが見える感じがしますもん」

「……………」

感じ、ですか。

私は敢えて反論せずに只美容師の言葉を耳に入れていた。きっと否定してもそれを否定される筈だ。月姫との会話で似たようなやり取りを何度か経験しているので私は黙る事にした。

月姫もこの美容師も、私を過大評価し過ぎだ。私はそんな立派な人間じゃない。『人間』といえる程人間らしい感情は持ち合わせていない。まして褒められるようなところなどある筈がない。

美容師は私の髪型をセットしながら再び口を開いた。

「きつと天星織ちゃんは見掛けによらず照れ屋さんなんですけどねー。だけど、月姫ちゃんを救ったっていうのは紛れもない事実だよ。そして変えられない真実。あたし、月姫ちゃんが一番大変だった時期を知っているから、天星織ちゃんが存在がどれだけ大きいかわかるよ。今の月姫ちゃん見てもね。天星織ちゃんがいてくれて、本当に良かったです」

敬語とタメ口の混じった不思議な台詞を言い、美容師は穏やかに微笑んだ。まるで月姫のそれのような、私を包み込むような微笑。

こんな私に。

笑みを知らない私に。

与える事などできない私に。

何故。

「さあ、できましたですよ♪どうでしょう！」

美容師は両手を広げ、後ろ髪を見せる為に鏡を広げた。私は鏡を見て確認する。

ふわふわと緩く波打つ漆黒の髪。前髪は少し軽くなっている。どう、と尋ねられてもよく分からないが、ちゃんと仕上がっていると思う。多分悪くはない。

私が頷くと美容師は私に着せていたものを外し、椅子を回転させた。促されるままにレジへ行き、会計を済ませる。

美容師は外まで私を見送り、にっこりと微笑んだ。

「今日は天星織ちゃんに会えて本当に良かったです。またおいでね。月姫ちゃんによろしくお伝えくださいね」

「……………」

私は軽く頭を下げて帰途についた。

「うわあ！！^{ひろ}嘉っちゃんが更に更にの絶世の美女になってる！！イッツ・ビューティフル！！アジアンビューティー世界一！宇宙一！キヤー！」

家に入った瞬間、あの美容師より何倍もテンションの高い声が叫んだ。その耳をつんざかンばかりの声に反比例するように私のテンションはダウンして思わずそいつを睨み付ける。

「…………テンション下げろよ。喧しいし姦しい」

「しょうがないじゃないっ！可愛い可愛い可愛い可愛い！嘉っちゃん

美人っ！美しすぎる！惚れちゃうっ！」

「…………惚れちゃわないでくれ」

私は一気に気力を吸われ、声の主、妃七を適当にあしらって溜め息をついた。畜生、最近静かだと思っていたのにまた来やがった。

あまつぎ きな
天月妃七。

私の同居人、月姫の従姉妹で同い年の、ファッション&テンションぶっ飛び娘だ。『月姫の手伝い』と称し、よくこうして静かな空間を邪魔しに来る。

「も、嘉っちゃは美人なの分かってたけど…………更に美人さんなっでどうするの！変な男が寄って来たらどうするの！」

「五月蠅いな」

私は手を振って妃七をあしらいいりビングに入る。入ってすぐ、りビングのソファに一人金髪の彼女が見えた。

「お帰りなさい」

ソファに腰掛けて洗濯物を畳んでいた彼女が顔を上げ、私に微笑んだ。

僅かにピントのずれた、穏やかな瞳。

「…………只今」

私は小さく返した。

あまつぎ

彼女の名前は天月月姫。同い年の同居人だ。数ヶ月前《不穩》で知り合い、色々あって一緒に住むようになった。今は学校には行かず、専業主婦をしている。日本人の母親とアメリカ人の父親を持つハーフで、金色の髪に青い瞳を持つ同級生。

しかしその瞳は、何かを映すことはない。

隣に座って、とソファを軽く叩く月姫の隣に腰を下ろす。月姫は手を休め、私の髪に触れた。

「あの美容室のにおいがするわ。あ、ふわふわ。私とお揃いね。ね、ユラさんどうだった？」

「んー、あのテンションはヤバいだろ」

「あ、やっぱり？でも妃七よりはヤバくないでしょ？」

「ん!？」

うふふ、と笑った月姫の台詞に、妃七が反応した。バシン、と思
い切りテーブルを叩いて（手、痛いだろ）目を見開く。

「ひ、酷いっ！ヤバいって何!？」

「ヤバいのはヤバいのよ。さ、妃七夕飯の準備するわよ」

締めるように言って月姫は立ち上がり、まだなんやかんや言っ
ている妃七をあしらってキッチンに向かった。妃七はブツブツ呟い
ていたがようやく諦め、テーブルを叩いた方の手をぶらぶらさせなが
ら（やっぱり痛かったんだ）月姫の後に続いて夕飯の支度に向かっ
た。

「どうするの、月ちゃん!嘉っちゃんが変人に捕まったら!」

「大丈夫よ。妃七が心配することじゃないでしょ?」

「そんなこと言っちゃって!誘拐されてからじゃ遅いんだからね!」

「大丈夫大丈夫。必ず誰かが護ってくれるわ」

「誰かって、誰が!？」

「白馬の王子様がよ」

「……………」

キッチンで話す二人の声を聞きながら私はソファに横たわった。
ずっと座っていたからか、あのテンションに付き合わされていたか
らかどっと疲れが出て、一つ重い溜め息を落とした。頭痛が少しず
つ酷くなってきた。後頭部が鼓動している。

「……………」

少し休もう。月姫が私を呼ぶまで。

【開始】

拘束すること

束縛すること

それは同義語で類義語

私という定義

― 藤紅藤《仮面》 ―

「うーん……………」

小さく唸って溜め息。校門までの『私道』を歩いていた私は思わず立ち止まった。

朝から頭痛が酷い。別に珍しいことではないがほぼ毎日続く頭痛に、呆れて溜め息しか出ないという感じだ。首を傾けて何気に空を仰ぐ。

空は厚い鉛色の雲で覆われている。この頃、快晴というのを見たことがない気がする。頭痛はこの重たい天気のせいもあるのだろうか。あるいは。

ざわ、と。

風が一つ通り抜け、私の髪を弄んで過ぎて行った。まだ生徒の数もまばらな校庭に風の音が満ちる。私は取り敢えず足を動かし進む事にした。

(……………相変わらず、朝から頑張るなあ……………)

風が舞うその先、こちらから見える陸上用のグラウンドに目を向

けて、またまた溜め息。

この朝の光景はもうお馴染みになっている。毎朝練習に励む陸上部部員。他人の顔をあまり覚えないう私だが、陸上部は名前と顔を合わせる事ができるくらい毎朝毎朝見ている。

(見てるだけで疲れる……………)

猛ダッシュやらランニングやらしている部員から視線を外す。見ているだけで気力が吸われてしまいそうな感じだ。体力、夕方まで持つだろうか？

ざわ、と再び強い風が吹いた。

「……………」

なんだか、少し胸に引つかかるものを感じて舌打ちする。飲み込んだ骨が喉にかかっているような違和感を覚える感覚。なにか不合理なような、歪んだ感覚。私はこの感覚を知っている。

それは私にはどうしようもないことで。そして回避出来ない『予言』のようなもの。『予感』。

恐らくは今回も。

「……………畜生、またかよ」

毒づいて私は歩みを早めた。その時。

「嘉？」

と、聞き覚えのある声がかかった。このパターンにも大分慣れた私は立ち止まり、ゆっくりその声のする方に視線を向ける。

そこには、いつもこの辺で遭遇する教師三人組が当たり前のように立っていた。

一人は、保健医の銀斧願。ぎんおの ねがい オレンジの髪で中性的な顔の男性教師。にっこりとスマイリーな人だ。そしてもう一人は、数学教師兼生徒会顧問の流星流星。ながれぼし りゅうせい この学園で一番人気があるらしい教師だ。

そして、担任の臨安我哲留。りんあんが てつる まだ二十四歳でありながら学園内で結構な権力を持っているらしい。理事長の次に権力を持っているとかいないとか。クールでポーカーフェイスな教師だ。

この三人は仲がいいらしく、いつも一緒に登校（出勤？）する。

タイミングが合うらしくよく遭遇するのだ。

「おー、おはよう。天星織じゃん。髪型変わったから誰かと思った」
「何でも似合うんだね」

ゆったりとした口調の流星に続くように、なんだか嬉しそうな願の台詞。ニコニコと柔らかい雰囲気はいつもと変わらない。なんだか女の子みみたいだ。

「ほんじゃ、まったねー。いつでも保健室来ていいからねー」

楽しそうな願の台詞の後、三人は校舎へ歩いて行った。朝から何かと忙しいのかいつもこんな感じだ。言いたい事だけ言って去って行く。私は只三人の後ろ姿を見送る。

「嘉ー？」

と、またまた私を呼ぶ声。

声の主を顔だけ振り向かせて見る。すると小走りでこちらに走ってくるのが見えた。

「おー、嘉の髪がくるくるになってるー」

満月はそう言って薄く笑った。

《傍観者》 《同類》、深夜満月。しんや まつき

数ヶ月前に《不穏》によって炙り出された《同類》だ。外はねの色素の薄いショートヘアに、眠そうな二重の目。一見普通そうな雰囲気醸し出している人物。しかしこいつも《闇》の顔を持つ。

その満月は相変わらずの眠そうな目を笑ませ、尋ねてきた。

「珍しいね、嘉が髪型変えるって。イメチェン？」

「さあ、なんでだろうな。成り行きのこうなった」

「『なんとなく』ってヤツだね。でもすごく似合ってる」

にっと笑って私に目を向ける満月。私は肩を竦めて一息を吐き出した。

(……………)

どくん、と。

さっき感じた〈感覚〉。それは段々と強くなっているようだ。満月と相對して、一段と強くなった。それと同調するように頭痛まで酷くなってきた。胸の鼓動も強く締め付けるような感覚に変わりつつある。眉を顰めて不快感を露わにする。

まったく、勘弁してくれ。

そんな私の様子に気付き、満月が顔を覗き込んできた。

「嘉、もしかして、〈予感〉？」

「ご名答」

短く答えると満月は唇を横に引いた。純粹に笑ったのではない、冷めて凍えた《傍觀者》の表情で。

そして《傍觀者》の声色で。

「あたしも。昨日くらいからかな。なんとなく、嫌あな感じ。何かがじわじわ迫ってきて、べったーってべっとりまとわりついてる感じがな。『近い』。すごく近い。そんな感じ」

「まったく……この前一つ《不穩》終わったばかりだろ……」

チツと舌打ちして溜め息。やはり満月も感じていたらしい。

やはり《不穩》は私達を放ってはくれないらしい。

しかも、近い。

「ま、逃げられないのは分かっているし、逃げるつもりもないしね。どうせくだらないものだよ、きつと。死ぬ程のものじゃないと思うし。何時でも何処からでも来るなら来いってね。本当は来てほしくないけどねー」

ぐん、と背伸びして面倒くさそうに言う満月。私は視線を地面に落として校舎に向かって歩き始めた。満月も隣に並んで歩調を合わせる。

無駄に広い、学園内。世界有数のブルジョワ校の河柳学園は、セ
かわやなぎ
レブな連中が通う学校だ。といっても私は庶民だけど。学園の至る所に、一体いくら金があるんだと突っ込みたくなる程色々なものに

金をかけている。この校門入ってすぐの庭園はその一つだ。

敷地の入り口から校門までが滅茶苦茶遠いのに、それをくぐった後も校舎までがまた遠いのだ。まるで豪邸の庭園のように広い敷地を花々が飾り、巨大な噴水があり、その向こうに校舎が見える。移動が真剣に面倒くさい。何故このスペースが必要だったのか、これを考案した人に訊きたいくらいだ。

金持ちの考えることは分からない。あまり分かりたくもない。

とりあえず、ようやく校舎にたどり着いた。いつもの玄関(?)をくぐり、教室ではなく図書室に向かう。『嫌な予感』がする時は図書室に逃げるに限る。私の中でそういう習慣が定着しつつあった。

と、その時。

「嘉、あれ見て」

突然満月が立ち止まり、私を呼んだ。その微かに緊張の含まれる声色に私の感覚が反応し、私は自然と満月の視線が向けられる廊下の先に目をやった。

私達のいるロビーから向こう側に伸びる、とりわけ人の通らないような廊下の端。そこには、なにやら異様な雰囲気生徒と教師が一人ずつ。

「陸上部員の生徒と藤さんだよ」

小さく満月が囁いた。

「河原吟、同じ一年生で陸上部員。元気で素直な人なんだって、知り合いが言ってた。……なんかもめているみたいだね」

「……そうみたいだな」

「なんか、藤さん、いつもと雰囲気まるで違うね。別人みたい」
「ああ」

私は目を細めてその生徒を見ていた。

先程も言ったように、陸上部は毎朝練習を見ている。だから部員の顔はよく知っている。まだ部活中なのか、吟はジャージ姿のままだ。

そして吟の腕を掴み、何やら言っている藤紅藤。その穏やかではない雰囲気から、只言葉を交わしているわけではないことが窺い知れた。

もしかして、これなのか？

「……………」

従姉妹の《偽善者》の言葉が脳裏によぎる。藤について私に明かした一つ一つの情報が。

そしてそれとシンクロするように、私の中の『予感』がどんどん膨らみ始めた。それはシグナルのように点滅を繰り返す。

と、殆ど聞き取れない会話の中、教官室に一緒に来るように、というような内容が小さく聞こえてきた。どうやらそこで説教するつもりらしい。

私と満月は顔を合わせた。

「……………」

「……………」

そして一瞬のアイコンタクト。それと同時に足音を立てずに早足で私達は歩き出した。

回避してはいけないと、私の奥の奥で声がした。

こういうことに首をツッコむのは面倒だが、どうせ後から付き合わされるだろうから。それなら今乱入しようが後から巻き込まれようが大差ない。『巻き込まれる』よりは自分から向かって行った方が気分的にも楽だ。

私達は先回りして、とある教官室に忍び込んだ。教官室など此処だけでなく至る所にあるが、此処に来るという根拠の無い自信があった。そしてそれは外れる事はない。

とりあえず、私達は奥に進み、本棚の向こう側の死角になる場所に身を潜める。

そして溜め息。

「…………こそ泥みたいだな…………」

「盗み聞き。だから分類的に泥棒だね。たまにはいいじゃない」

楽しそうな、満月。緊張状態のその中を敢えて楽しんでいるようだ。こいつはこんな奴だ。

どうせなら楽しむ、か。私には分からない感覚だけど。
楽しくともなにもない。

「でも、いつもの藤さんじゃなかったよね。いつもキャピキャピしてるじゃん、あの人。『おはようございます』（ハート）』みたいな。怒るのも、教え諭すみたいな感じなのに、なんかオーラが異様だよ。人格が全然違う」

「そこが問題なんだよな……………」

私は満月に目を向けて頷いた。

「奴の本性が見れるかもしれない」

「化けの皮が剥がれちゃうかも？」
がちやり

「……………」

本当に入って来た。私と満月は口を閉じ、藤と吟を確かめた瞬間体を死角に引っ込めた。

足音は二つ。ドアが閉まる音が響き、足音も止まった。そこで対峙しているのが雰囲気で分かった。

異様な空間。異様な空気。僅かな沈黙がそれを支配する。

口を開いたのは藤の方だった。

「で？ 答えは決まったの？」

それはこれ以前に、何らかのやり取りがあったことを暗示する台詞。その続きを匂わせる言葉だった。

「……………」

そして、沈黙。

少し状況を知ろうと、向こうからバレないよう気を付けながら顔を出す。

視線の先には、感情を堪えて唇を噛みしめる吟と、それを見下すような紅藤が相対していた。全く話が見えないが、あまりいい話ではないことは確かだ。

なかなか口を開かない吟に、苛々した口調で重なる紅藤。

「一日も時間を与えたのに、まだ決まってるの？ あんた、馬鹿？」

「……………」

人格を踏みにじるような紅藤の言葉にも、吟は答えない。視線を伏せ、只黙っている。

「っ」

そんな吟に痺れを切らし、紅藤は吟の腕を掴んだ。吟を睨み付ける目は、怒る獣のようににぎらざらしている。

「忘れた？ あたしはあなたを簡単に捻り潰せるのよ。あたしの思いのままにね」

「……………」

「……………」

その言葉に、私と満月は顔を合わせた。

それが意味することとは。

紅藤は更に続ける。

「ちよつと細工しろって言ってるだけじゃない。細工するだけのことなのに、何をそんなに考えているのよ」

「……………俺」

と、そこでようやく吟が口を開いた。呟くように漏れた声は小さかったが、ハスキーなその声色には確かな強い思いが込められているようだった。

真っ直ぐ紅藤を見つめ、吟は言う。

「それについてはちゃんと、お断りした筈です。俺にはそんなこと

は出来ない」

「……………」

その吟の言葉に、明らかに藤の表情が変わった。先程とは違う、煮えたぎるような怒りに表情が支配される。

憤りの唇が言葉を細ぐ。

「ああそう。あたしに楯突く訳。あんた、余程馬鹿なのね」
ふ、と歪ませた唇は更に重ねる。

「あんた、これを断ったところでどうするつもり？あんたがしなくたって、あんたの『親友』を墜とすのは簡単なのよ。手段はいくらだってある。それに、あんたもあたしからは逃げられない。この学園から追い出すことくらい、あたしには造作ないことだもの」

「……………」

「時間稼ぎにもならないのよ。あんたも『親友』も、簡単に消せる」
「……………」
「……………」

自らの力を豪語する藤に、吟は『信じられない人だ』というような口調で言葉を投げる。

「どうして朋也^{ともや}を攻撃するんですか？朋也が何をしたんですか？」
恐らく藤の口から出た『親友』と見られる人物の名前を挙げて尋ねる。私と満月はまた一瞬目を合わせ更に耳を澄ます。

その吟の問いに、はっ、と嘲笑うような笑みを浮かべた藤。同色の声色は返答する。

「下らない質問ね。それを知ったところでどうするの？『あたしにとって悪だから』とでも言えば納得する？しないでしよう？」

「……………」

「あんたには理解出来ないわよ、説明したところで。だから訊くだけ無駄。只、一つあんたに忠告しておくわ」

そう言い、只藤を見つめている吟の胸ぐらを掴んだ。

そして低い声で。

「あたしのことバラしたら、即刻あんたは消すわ。あんたと、『秘密』を知った奴らもみんな。だから、気を付けな？」

(ふうん)

その様子を見て、一人頷く。

こんな上手い具合に色々べらべら喋られると手間が省けて助かるが、なんとなく逆に拍子抜けしてしまう。まあ、面倒じゃないことにこしたことはないけど。

取り敢えず。

藤が下らないことを考えていて、それに吟やその周りの人間が巻き込まれていることは分かった。そしてその計画が表に出ないよう

に防衛策を張っているということも。

詳しい経緯が分からなくても、これだけ分かれば十分だ。

きゅ、と唇を噛みしめる吟を追い詰めようと、藤は畳み掛ける。
「断るか否かはあんたの自由だけど、陸上部を無期限活動停止にすることだって出来るの。部長に迷惑かけたくないでしょう？ どう足掻いたってあたしからは逃げられない。七強の知り合いが居るからって調子に乗るんじゃないわよ、庶民のくせに。私を誰だと思っているのよ」

藤は勝利したと言わんばかりに言い放ち、蔑むような目で吟を見た。吟はじつと藤を見つめ返している。

まるで汚いものを見ているような目付きに、私の感情はかき乱される。 河柳学園。

世界有数の”ブルジョワ校”であるこの学園に通っているのは、私のような『庶民』はごく少数で、いわゆる貴族や権力者の子供が九割以上を占める。教師の殆どもセレブな人間だ。

故にこの学園の中でその権力を乱用するのは原則として禁じられている。権力のみで退学等の措置を取るのは言語道断だ（裏ではどうか分からないが）。『表』でそれを行うつもりである今の場合、

明らかに『権力の乱用』にあたるだろう。

しかも、藤に吟を退学や停学にする権利はない。それを決めるのは理事長と校長と私の担任だけだ。

だとすれば、藤が使おうとしている『手段』が何を意味するのか、自ずと見えてくる。

「……………」

私は藤の様子を見て溜め息をついた。

普段の藤とは本当にまるで別人だ。《偽善者》の台詞がありありと蘇るような藤がそこに居た。人を墮とすことを何とも思っていないような奴が。それどころかそれを楽しんでいるような藤が。

（成程ね。あいつが言ってたのはこういうことか）

あらゆる手を使って生徒を追い込んだというのは。まるで快楽を追うように。

何が藤をそこまでさせているのかよく分からないが、藤がくだらないことに熱意を燃やしているのは分かった。

本当に。

（……………呆れるくらい暇な奴だな……………もっと別の事に力使えよ）
体力温存タイプの私には全く理解できないことだ。こんな奴は理解する必要なんてないけど。

どくん、と。

突然。

それは強く、強く鼓動するように。

段々と私の中で大きくなる衝動。それは止まる事なく増幅して胸から膨れ上がり、喉を通り越す。

そしてその瞬間私を突き動かす衝動は、私の口を開かせていた。

「先生ですね、あの三年生を自主退学に追い込んだのは」

「…………なに!？」

突然の私の台詞に飛び上がらん程の藤の口調。それは当然だろう。自分達以外この部屋の中に居ない筈なのだから。

出るタイミング……………おかしい？

「面倒くさ……………」

やっちゃったよ。

的な感じで私は呟き、ゆっくり立ち上がった。そして本棚の陰から藤と吟の前に姿を現す。

そこには、これでもかという程目を見開いている藤と、目をしばたかせて私達を見ている吟がいた。

あまりに予想外な展開だっただろう。驚きに声が出ない藤。私はそんな藤を睨み付けて口を開いた。

「自分が気に入らない生徒を墮とすなら、もう少しマシなやり方無かったんですか。今までも似たような方法でやってたんですか。こんな露骨で稚拙なやり方……………聞いて呆れます」

藤の浅はかさを強調して。

私と藤を隔てる『敬語』で。

本当は、吟を庇うような義理はない。しかしここで間に入らなければ、まんまと藤の罠に嵌ってしまうだろう。きっと退学になったあの三年のようにずるずると。それだけは赦せなかった。

こんな藤のような汚い奴が、のうのうと生きていい筈がない。そしてその私の言葉に続けるように満月も口を開いた。

「確か、権力の乱用って、禁止でしたよね。しかも、センサー一人の権限で退学とか活動停止とか謹慎とか、勝手に決められないんじゃないですか？あ、墜とせればいいんですけどっけ」

「五月蠅いわ」

いつものぶりっこキャラはすっかり身を潜め、藤は凄むように唸り声を上げた。

「途中で割り込んで来たんでしょ。話も半分以上分からないくせに突っ込んでくるんじゃないわ」

「これだけ聞けば充分ですね。もう完璧ですよ。ていうか、聞かなくたって、明らかにオカシイでしょ。ちゃんと調べればすぐに真実は明るみに出ると思いますし。あ、別にソッコーでバラしてもいいんですよ？ センセーの『裏』。録音しちゃいましたし」

録音の仕方なんか分からないくせに、携帯を見せ満月は飄々とそんな嘘をつく。藤を揺さぶり小馬鹿にするような口調だ。

私は溜め息をつき、藤から視線を外した。そして未だに反論らしい反論が出来ない藤に再び目をやる。

「あの三年生も、小さなことから攻めて退学まで追い込んだんでしようねえ。どんな罠を張ったのかは興味ありませんけど。そして今度は彼ですか。先生、《仮面》って呼ばれてるらしいですが、人を嵌めて墜とすってどんな気分ですか。そんなに快感ですか。そんなに楽しいものなんですかね」

「……………何言って」

《闇》の『異名』に触れた瞬間、一瞬緊迫に空気が極限まで張りつめたが満月はそれを無視して続ける。

「くだらない。ネコ被っても無理だと思いますね。気持ち悪いし。必ずいつかは剥がされますよ、化けの皮。それとも私達が剥がしてやりましょうか。そんなの要らないでしょう」

「……………ふざけるんじゃないわよ」

藤は唸り、しかし返す言葉は出て来なかった。藤の怒りは方向を変え、段々私達の方に向く。その間で吟は居心地悪そうに——何故か済まなさそうに——立ち尽くしていた。

「いいんじゃないですか、何するにもあなたの自由ですし。あたしには関係ないし興味ないですし。後はあなた次第ってことで」

わざと《傍観者》の口調で私は言い、目を軽く細めた。藤を嘲笑

うように。その言葉は藤の憎しみの矛先を私達に固定させる。吟な
ど眼中から消えていくように、私達にそれは向く。

藤の、《仮面》の標的^{ターゲット}は変わった。

さあ、

いよいよだ。

【開始（2）】

沈黙。

私達は只沈黙に身を任せて時間を過ごしていた。

あれから。

藤の無言の《宣戦布告》を受けて後は取り敢えず目立った事はなく一日が過ぎ、放課後いつものように図書室にいた。只、いつものように語ったりする事はない。新たな《不穩》を迎え撃つ準備をするように、只沈黙を置く。

「……………」

私は、向かいの椅子に不動で座りテーブルをじっと睨み付けている満月に目をやった。満月の目は真剣そのもので、教官室に忍び込んだ時のような、『楽しむ』というオーラは欠片も微塵もない。満月がこんな真剣な顔で考え込んでいるのはとても珍しい。いつも真剣さの中に飄々と、まるで『ゲーム』のように《不穩》を歩く満月。これ程までに目が真剣^{マッ}になっているという事は、無視できない何か^{マッ}が頭と心に渦巻いているということなのだろう。

それが何かは、私に知る由はない。
と。

「ねえ、嘉」

長い沈黙を切り裂き、満月が私を呼んだ。視線は下に這わせたまま、呟くように零れた声色は無理矢理感情を押し殺したような重いもの。私は満月に視線を合わせ、続きを待つ。

そして満月は、私が予想しなかった言葉を口にする。

「藤さん、あたしの弟の担任だったかもしれない」

「……………弟」

初めて聞いた『弟』の存在に意外の意を表わして反芻する。満月

は目を上げてこくと頷いた。

「夜月^{きげつ}っていうの。今は河柳中等部三年生。殆ど学校は行っていないみたいけど」

そう小さく言い、満月は溜め息をついた。そしてすぐに続ける。

「多分、そうだ。夜月が中一の時の担任。正規の担任が病氣して、臨時で担任が入った事があったの。その後から急に夜月の様子がおかしくなって……」

下唇を強く噛み締める満月の表情。その時の状況を思い出しているようにその表情は硬い。兄弟の苦しみを話す時、満月はこんな表情^おをする。

満月の表情が真剣な理由が分かった気がした。

感情を抑えるように満月は息を吐き出す。

「夜月、元々お喋りって訳ではなかったけど、本当に喋らなくなつた。言葉を晒すのを怖がつてみたいに。喋ってしまったらもう感情を抑えられないっていう感じで。ずっと、何かに対して憎悪や嫌悪を抱いているような感じ。もし夜月に何か尋ねたらそれが爆発してしまいそうな感じんだ。だから恐くて、今まで聞けず仕舞いで。」

……《人形》。そう、《人形》になってしまった感じなの。人間にとって大切な『感情』、それが大きく欠落したみたいに、まるで挟られたみたいに」

「……もしかしたら奴が関わっているかもしれないってわけか」

「うん、もしかしたらね。多分ほぼ確実。あの子が『担任が変わった』って言った時、その担任に興味なかったから名前とか覚えてなくて。でも、藤さんは中等部から此処に來たし、あの夜月をあそこまで変えてしまうくらいなもの。時期的にも合うし、藤さんしかないと思うんだ。ああ……覚えておけば良かったなあ……あ」

また何か思い出したような満月の表情。

「もしかしたら氷鳥が知ってるかも！なんで今まで気付かなかったんだろ……。『indigo』でお茶でもしながら訊いてみようよ」

無理矢理空気を変えるように明るくした声で言い、満月は携帯を取り出した。

ひとりもん　ひとり
独門氷鳥。

主に《制裁者》として《闇》で名を馳せる、実力派の同い年。河柳学園を文字通り支配する財閥七強の一つ・柳義家りゅうぎの分家長男で、満月とは従兄弟同士だ。氷鳥も私も物心つく前からこの一貫校に在籍しているため、腐れ縁のような関係になっている。

しかも最近では、何か《不穏》がある毎に関わっている気がするのだが。気のせいだろうか？

「……………確実に情報持っているんだろ？」

「勿論。結構氷鳥の情報は馬鹿にできないよ。氷鳥のバックにはあの《侵略》クラッカーがいるんだからね。ケーキ、奢るからさ♪」

「……………行けばいいんだろ」

ケーキにつられたわけではないが（半分そうだった？）私は頷いた。しかし、『奢るからさ♪』の後に密かに『氷鳥がね☆』とついていたような気がしたのは私だけだろうか。

一応、藤の情報も手に入るだけ入れておきたい。聞いて損することはないだろう。夜月の事も、一応聞いておきたいし。

満月は電話で氷鳥と連絡を取り、いつもの喫茶店『indigo』で待ち合わせるようになった。取り敢えず立ち上がり、そこに向かうことにする。

さて。

いよいよ始まる。

喫茶『indigo』。

学園からさほど遠くない高級ビルの最上階に位置するこの喫茶店はセレブ御用達の高級喫茶店だ。内装からメニューから全てにこだわっているらしい。満月がこの常連だったらしく、何かあるごとに私も世話になるようになった。

中に入り、いつもの奥のスイートルームに向かう。このスイートルームは氷鳥がよく使う上流専用の部屋らしく、従姉妹の満月はその恩恵にあずかっている。氷鳥は分家とは言え、財閥七強の御曹司。その権力を使えばそういうこともできるらしい。

スイートルームのドアをくぐると、氷鳥は先に腰掛けていた。色素の薄い短髪。切れ長の細い目。シャツには七強の証であるバツジが鈍く光を放っていた。

「ヤッホー、氷鳥ー」

満月が声を掛けると氷鳥は小さく笑い手を上げる。そして満月のやや後ろに立つ私に目を向けた。

「……………」

一瞬氷鳥は私を見て固まり、目をしばたかせた。私はその反応に眉を顰める。

「なんだよ、凝視して」

「……………いや、髪型変わったなって思ってた」

「そんな驚くようなことでもないだろ」

「いや、驚くようなことだぞ」

「そうかな」

そんな氷鳥の言葉に肩を竦め、取り敢えず椅子に腰掛ける。満月は早速メニュー表を広げてウェイトレスを呼んだ。

いつものように適当に注文をし、ひとまず一息。すぐに話を切り出したのは氷鳥だった。

「また何か楽しそうなこと、やらかしたんだって？」

「またって。氷鳥に言われたくないけどやらかしちゃったんだよねー。楽しい事、かどうかはまだ分かんないけど」

氷鳥の問いに返し、満月は溜め息をついた。さっき運ばれてきた

水を一気に飲み干す。

「でね、それが始まる前に、色々お聞きしたいんですよ。情報に通じてる氷鳥に」

「ま、最近お決まりのパターンだよな」

満月の台詞に苦笑いして氷鳥はテーブルに肘をついた。「で、何が聞きたい？」と口が開く。

「じゃ、取り敢えず、まずは藤紅藤の情報。アバウトだけど、どんなものでもいいよ」

満月は返す。氷鳥は頷き、椅子の背もたれに身を委ねた。考えるように、長い指が唇をなぞる。

「あまりいい噂は聞かないな。『裏』では」

「『裏では』。意味深だね」

「まあな。満月も嘉も気付いているとは思うけど、あいつ表面は”良い人”だろう？だから『裏では』なんだよ。あいつの本性を知るのは数少ないからな。本性を知った奴を消していくから当然っちゃ当然だ。真相は《闇》の中で蠢いているんだ。只見えないだけで、その『正体』はそこにあるということ。そしてそれは《闇》の《仮面》へ続いているという事。それだけだ」

「……成程ね」

私は頷き、眉を顰めた。

確かに表面的に見れば、あいつの文句を言ったりするのは殆んど聞いたことはない。性格の好き嫌いというレベルではなく、『人間性』というレベルで、意義を唱えるのは聞いたことがない。まあ《表》では完璧に『良い人』を演じているわけだ。殆どの人間がそれに気付いていないくらいだ。これじゃまるで《演技者》だ。

そんなことをして何のメリットがあるのか、私には理解できないけれど。あるいは意味があるのか分からない。

そこでドアがノックされ、注文したものが運ばれてきた。満月はその瞬間目を輝かせ、速攻で苺のショートケーキにフォークを入れた。嬉しそうに頬張る。さっきの真剣な顔はどこに行ったんだか。

嘘だったのか？と思うくらいだ。

「でも」

私は珈琲を一口流し込み氷鳥に目を向けた。

「甘いな。あんなやり方がいつまでも通用すると思っているのか、あいつは」

「さあ、どうだろうな。嘉達の場合は一筋縄ではいかない感じはしているんじゃないか？一応今まではある程度成功しているようだし、自信に満ち溢れている感じだよな。まあ、突き通すつもりなんじゃないの？笑っちゃまうぜ」

はっと鼻で笑い氷鳥は嘲笑うように唇を歪ませる。

「嘉が感じているように、そんな脅威ではないな。大した奴じゃない。あくまでも《表》では、だけどな。敢えて言うなら『姦しい』ってとこかな。なかなか殺せない蚊みたいなもんだ。放置してもいいが消した方が煩わされなくて済むだろ、そういう輩は。刺されて痒みに苛立たせられるよりも、耳の傍で耳障りな音を聞かされるよりも、多少動かないといけないにしても早めに叩き潰した方が断然いい。そうだろ？」

「『蚊』か」

ものすごい比喻だ。否、実際にはそれ以下か。蚊は鼻が高いわけではないだろうし。奴は大した力もないくせにでしゃばっているのだ。蚊以下でもいいだろう。私に言わせればそれでもまだ足りないくらいだ。

「すごい比喻だねー。虫ケラ以下かー。ま、ぴったりっていうか。しっくりくるっていうか。あの人、自分が良家のおじよーさまだからあんな威張ってんのかな」

既に一つ目のケーキをたいらげた満月は二つ目のモンブランに着手し、おもむろに口を開いた。氷鳥が使った比喻が面白かったようで、ニヤニヤニヤニヤと笑っている。

氷鳥は唇を歪ませる。

「『良家』のお嬢様って言っても、大した家じゃないぜ。藤家はい

わゆる『中』の『下』だからな。俺に言わせれば『普通』だ」

「そりゃ氷鳥から見ればそうでしょうよ。あなた七強だもん。『上』の『上』、その上には『二帝』しかないもの」

満月はモンブランをフォークで分けながら言った。食べるのに一生懸命で聞いているのかと思いきやちゃんと聞いているようだ。なかなか器用な奴だった。

「七強の財閥と他の財閥とか金持ちは比べ物にならないでしょ。学園内でも権力行使は原則禁止でも、待遇はやっぱり違うじゃない。当たり前だけど。あ、そういえばさ、理事長は知らないのかな、藤さんのこと」

メニユー表を広げて再び満月が尋ねた。まだテーブルに一つミルフィューが残っているのにまた注文するのかというツツコミは敢えてしないでおく。こんなのいつもの事だ。

河柳学園高等部と大学は、氷鳥の母親の一番上の兄、つまり氷鳥の叔父に当たる人物が理事長を勤めている。だからその辺の情報も氷鳥は持っているのだろう。

氷鳥は苦笑して足を組んだ。

「あまりそういう直接的なことは行かないみたいだぜ、マジで大きな問題じゃないと。基本的にそういうのは現場で、ってな。教師の間でも奴の本性知ってる人間も少ないし。まあ、もし情報が行くようなら一応動くんじゃないか？ほら、嘉の担任の哲留は現場の教師を統括しているだろ。あの人は少し勘付いているんじゃないかねえかな。多分今のところ情報が少ないんだと思うぜ。決定的なものがない。それがなきゃ動けない」

「だよねー。そこまで単純じゃないか、流石に。藤さん馬鹿だけどその辺はやっぱり気をつけているだろうし。そこができてなかったら只の馬鹿でアホでマヌケな抜け殻だよね。でもいいんじゃない。奴を墜とすなら高いところからがいいしね。それまで舞い上がらせておけばいいよ。それから奈落の底まで真っ逆さまって感じかな。その方が『ざまあみろ』って感じだし？」

そんなことを言い、満月は《傍観者》の凍えた笑みを浮かべた。
(《偽善者》みたいなこと言ってんな、こいつ)

さらっと吐かれたあくどい満月の台詞に溜め息をつき、私はフォークを置いた。珈琲カップに口を付けて氷鳥に目を向ける。

「あいつがこんなくだらないことをし始めたのは最近？」

「ああ。ここ二・三年じゃないか？ やってるとしても。奴が大学卒業して河柳に赴任してそれくらいだからな、年齢的にも。まだ二十とかその辺だろ。大学にいた頃のことまでは流石に知らないけど、その頃の事は《情報屋》が情報を掴んでないくらいだ、最近からと見て間違いないんじゃないかな」

「二十五でこんな汚れて歪んでちゃ最悪だね。もらい手もきつとしないよ、一生。大切な人も出来ないで、一生独りぼっちだ。可哀想にねえ」

全然可哀想とは思っていないような口調で満月は言い、三つ目のケーキを平らげにかかった。なんだかこいつの食べっぷりは見ているだけで気持ちが悪くなりそうだった。何度見ても慣れるものじゃない。

「確かにな」

氷鳥はそんな満月の言葉に同意して頷き、唇を歪ませた。

「まあ、一応警戒しなきゃならないのは、《闇》の《仮面》としての顔だな。そっちは少し気を付けた方がいいかもしれない。特に嘉は」

「ん」

名指しされた私は目を氷鳥に向けた。

「肉弾戦だから、か」

「ああ、そうだ」

氷鳥は頷いて溜め息をついた。

「奴は《仮面》として攻撃を仕掛ける時、例外を除けば殆どの場合文字通りの仮面をつける。《表》の自分と存在を分断する為にな。だから《闇》の人間の中にも藤と《仮面》が同一人物だと知らない

者も多い。しかも奴の場合、真剣に殺しに来る。しかも苦しみを与えながら、執拗にな。だから一応気を付けて」

「そんな強いのか？」

「《闇》で渡り歩いているくらいだ。油断していたら足元すくわれるぞ、満月」

全く緊急感というものを感じさせない満月の口調に、苦笑しながら返す氷鳥。しょうがないな、と言いながらもたしなめるような事はしない。満月の性格を知っているが故の反応だ。

基本、どんな《不穏》でも同じように望む。あまり構える事もなく。それは私も同じだけど。

氷鳥は続ける。

「《仮面》に文字通り抹消された例ってのは、他に比べりゃそんなに多くないみたいだが、一つだけ知っている。原形とどめなくらいバラバラに切り刻まれたってヤツをな。その前に執拗に執拗に苦しみを与えて。《裏》の人間は文字通りの抹殺を、《表》の人間は比喩的な抹消を、という感じらしい。《表》で攻撃されるなら回復する余地は十分あるが、殺されたらどうにもならない」

「へえ、藤に人が殺せるんだ。それはちょっと意外だな」

満月は唇を尖らせた。何故か面白くなさそうな表情。何が気に食わなかったのか、何が面白くなかったのか。満月の感じ方は時々意味が分からない時がある。

(……………面倒)

私は溜め息をつく。

やっぱり肉弾戦になるのか。なんでこんな輩ばかり私の周りに集まるんだ。面倒くさいこの上ないじゃないか。

《不穏》で負けるつもりはないが、肉弾戦のできない私はまたまた不利な状況になるということ。傷の一つや二つは当たり前、という感じだ。

やはり護身術くらいは身に付けるべきか。《不穏》の度にそんな事を考慮している気がするが、未だ実現していない。させる気もな

い。今のところは。今までなんとか生きてきたし、これからもきつとどうにかなる。ならなかった時はならなかった時だ。その時はしようがない。

「藤さんの事はもういいんだけど、ちよっともう一つ訊きたい事があるんだ」

そこでトーンダウンした声色で満月は氷鳥に言葉を投げた。急にそのオーラが《傍観者》を纏う。氷鳥はその意味を理解し、スッと表情を消した。《制裁者》の表情に変わる。

満月は僅かな沈黙を置き、思い切ったように口を開いた。

「ね、もしかしてさ。もしかしてだけど。夜明の中一の時の臨時の担任、藤さんだったりしない？」

「あ？」

その満月の言葉に、氷鳥は驚いたように目を見開いた。

「なんだ、夜月お前にも話してなかったのか。ああ、あいつ話せる状態じゃなかったしな。今も似たようなものだし。……………確かにあいつは夜月の臨時担任だった。俺もちょっと気になって前に調べさせて分かったんだが。あれだろ？夜月が《人形》になってしまったのは、奴が関係してるかもしれないって事だろ？」

「うん。多分絶対ほぼ確実にあいつのせいだと、あたしは思ってる」
「俺もそう思う。ほぼ確実ではあるが、その辺は早いところはつきりさせた方がいいかもしれないな。もうあれから二年経とうとしてんだもん。まあ、俺も夜月から直接聞いたわけじゃないけど。あいつから聞きたいと思って、それ以上は調べてないんだ。……………そうだな、ちゃんと向き合って話をした方がいいような気がするな。夜月の為にも、満月達兄弟の為にも。丁度あいつうちにいるから、明日にでも場を持つとか。早い方がいいだろ」

「うん。そうだね、ありがと。本当はもっと早く動くべきだったんだろうけど。取り敢えずよろしく頼みます」

氷鳥の提案に満月の表情が少し和らいだ。ぺこりと氷鳥に頭を下げる。

そして私に目を向けた。

「夜月、放浪癖があつてね。あまりうちにいないんだ。だからたまにしか会わないんだけど。携帯持つてつて言っても絶対嫌なんだつて。でもよく氷鳥に世話になつてるの。……嘉も明日話に付き合つてよ」

おどけていながら、まるで懇願するように補足説明をする満月。その表情は真剣そのものだ。何かにすがりたいというような、必死な響き。

真剣に、只弟のことを思うその思いが溢れ出る程に滲んで溢れている。心の底から夜月を助けたいと願うその心が。私にはよく理解できないものだが、雰囲気を掴むことはできた。

敢えてそれをはねつける理由など、私にはない。拒否する意味もない。

そして何より、拒否出来なかった。

「分かつてる」

私は短く返した。

この泥沼から抜け出すつもりは毛頭ない。突っ込んだ以上最後まで付き合つてやる。どうせやるなら徹底的に入り込んでやる。

どうせ《不穩》に好かれる身だ。一つそれが増えたところで痛くも痒くもない。避けられないものなら、自分でコントロールしてやる。

「ありがとう」

満月は嬉しそうに微笑んで、再びケーキに着手した。その横顔は安堵で幾分落ち着いたように見えた。

（さて………早速動き出しますか）

心の中で溜め息をつき、それを流すように珈琲を喉に通す。じんわりと温かいそれは、溜め息諸とも溶けていった。

大きな窓ガラスの外に広がる世界を眺め、暫く沈黙と時を過ごしていた。

【満月】

欠落した思い

奪われた心

護りたかったのに

護れなかった

―深夜夜月《人形》―

「昨日は面白いもの見たねー」

のんびりと満月は言い、にやりと唇を歪ませた。

穏やかな空間を作り出している図書室でいつものようにいつもの席に腰掛け、私と満月は静かな時間を過ごしていた。長休みなので結構利用者は多いが、図書室という環境もあって教室とは打って変わってとても静かだ。

『昨日見た面白いこと』。

それは藤の『本性』に他ならない。

「あー、最高だよ。これからどんなことが待ち受けているんだろうねー。どう転がってくんだろう」

そう言う満月の表情は、笑っているながら笑顔が無い、凍てついたものだった。『最高』と言いながらもその表情はそう言っていない。

その瞳は《復讐》の色に似ている。

紛れもない、憎悪に酷似している。

「……………」

私は溜め息をついて目を細めた。

心なしか、満月のオーラが”戦闘モード”に入っている感じがする。いつもの『ゆるゆる』なオーラで覆い隠すように、《傍観者》がぬらぬらと奥で蠢いている。

あからさまなまでに。

深い深い、闇のように。

少しずつ、這わせるように。

「なあ」

そんな満月に声をかける。

昨日詳しく訊かなかった夜月のことをもう少し訊いてみようと思った。

「あんたの弟、その担任が変わった時期にどんな感じでおかしくなったんだ？」

その問いに、当時を思い出したように満月は表情を曇らせた。そして顔を伏せる。

「うん。なんて言うのかな。ガラッと変わったって言ったらそうなんだけど、あまり変わってないって言ってもそうなんだよ。ちょっと矛盾しているけど、そんな感じ」

「抽象的だな。なんとなく感じは分かるけど」

「うんとね。オーラが変わった。一気に《闇》のオーラになってしまったってね。昨日も言ったように、元々あまりお喋りではないんだけど、失声性なんじゃないかって思うくらい喋らなくなった。『喋れなく』なったって言っても間違いではないと思う。多分全部を自分の中に封印して、自分が壊れるのを堪えてるんじゃないかな。夜月はそんな風に自分を護ってるんだと思う。そういうやり方しか知らないんだと思う。一見変化してないように見えるけど、やっぱり全然違うんだ。前の夜月じゃない。本当に感情が見えないの、殆ど」

「成程。ほぼ確実にその教師の影響だよ」

「うん。あれから夜月、教師に異常なくらい嫌悪感と敵意剥き出しになったから間違いないと思う。その感情だけは残っているみたいなんだ」

満月はそう言って目を伏せた。

「本当はやっぱり、あの時のことをちゃんと話し合いたいけど、黙っていることが夜月を支えているならそれを無理矢理こじ開けてもなってしまうんだ。夜月は脆くはなくとも、強い存在ではないだろう。少なくとも自分独りで背負うには早すぎる。話を聞き、今までの経験からも総合的に判断してそう思った。

このままでは。

このままでは多分。

「……………そうかもしれないね」

満月は俯いていた頭を上げ、淡く笑んだ。迷いで曇った思いが少しずつ晴れていくように。

「ただ考えるだけじゃ進まないもんね。これ以上引き摺るのはやめよつと。やってみなきゃね。ありがと、嘉」

「……………（礼を言われるようなことは何もしてないけど）」

そう、私は満月から視線を外して前を向いた。

と。

「……………きゃあー!!」

「……………っ」

と、誰かと肩がぶつかった。そこまで強く当たった訳ではなかったので私は体勢を大きく崩すことはなかったが、相手は派手に倒れて手に持っていたものがバラバラと散らばった。

「……………わざとらし……………」

私は倒れた相手を見下ろして小さく呟いた。

藤。弱々しく倒れる藤がそこにいた。いかにも『倒されました』というのを強調したがっているようだ。痛そうに顔を歪め、足首の辺りを抑えている。周りに居た生徒達が遠巻きに私達を見ていた。ざわざわと騒ぎ出す。

そんなぶっ飛ぶくらい強くぶつかってないだろうがよ。気持ちワ

リッ。

（これも作戦のうちか）

溜め息。ゾゾ、と鳥肌も立っている。隣で呆れている満月の口からも溜め息が漏れた。なよなよなよと、マジで気色悪い。

（気持ち悪い）

再び呟いて。

さて、無視して置き去ろうか。私は全く関係ないし。そう思って再び歩き出そうとした時だった。

「どうしたんですか？」

向こう側から男性教師が小走りで近付いてきた。見覚えはないが、制服を着ていないので多分教師で間違いない。

その教師（なかなかの巨体だ。体育教師だろうか）は藤の傍に屈み込み藤の背中を支えた。

「藤さん、大丈夫ですか」

「あ、ごめんなさい……」

眼鏡の奥の目を潤ませる藤。鳥肌ものだ。私はブルツと身震いしてまた溜め息をついた。先から溜め息と身震いの連続のような気がする。

その教師は藤に頷き、私を見上げた。

「倒しておいて謝罪も何もないのか、お前達は」

憤然とした言葉。少しムツとしたものの私も満月もそれに何も返さなかった。私に言わせれば、何も知らないくせに横から入ってくるなどといったところだ。まあこの状況、誤解していてもおかしくないのけど。悪いのは藤であって藤以外の人間じゃない。

こいつの本性も分からない筈だし。

もしかしたらこの男性教師は藤に惚れているのかもしれないし。そんなことはどうでもいいけど。

その教師は無反応な私達にしびれを切らし、再び藤に目を向けた。そっと藤を支える。

「立てますか」

「ちょっと足が……」

足首を抑えたまま力無く言う藤。そろそろ鳥肌がMAXになってきた。それどころか吐きそうだ。もう見るに聞くに耐えない。

「心配ですので保健室に行きましょう」

その教師に肩を支えられながら、藤は保健室へとゆっくり向かった。ようやく私は鳥肌から解放される。

と、満月が私の顔を覗き込んだ。

「嘉、キレちゃ駄目だよ」

「……分かってる。今堪えた」

「ギリギリだね。嘉が口開いちゃうんじゃないかってちょっとハラハラしてたんだよ」

にと悪戯っぽい表情。まるでこの状況を面白がっているようだ。「限界って訳ではなかったけど」

溜め息について返す。

遠巻きに見ていた生徒達も少しずつ散り始めた。一体何があったのか分からないという表情のまま去っていく。まあ、若干私達に対する疑念のようなものも感じるが、そんなものどうでもいい。

分かる筈がないのだから。

「いつの間にか見せ物になってたみたいね、嘉。みんなこんな藤さん見てたのに、もうちょっとしたら全然違う藤さん見ることになるね。みんなどんな反応するんだろ。ほんとに楽しみだよ」

うつすらと笑みを浮かべて満月。

私は満月に横目をやる。

夜月の話が出てから、満月のオーラはずっとこんな感じだ。《傍観者》のオーラに、その奥に何か異物が蠢いている。いわゆる『私情』が挟まれているという意味で、今までの《不穏》とはまるで違う。

楽しんでいるように見せかけながらも、その瞳はずっと真剣だ。微塵も笑ってなどいない。それは藤の《最期》だけを見つめているようだった。

(…………ふう)

一つ息を吐く。

満月が兄弟思いなのは知っていた。それは兄弟のことを話す口調や表情、実際に接するその接し方など、その全てに表れていたからだ。

しかし、ここまで。否、兄弟ならこれが『普通』なのだろうか。

これほどまでに兄弟の為に何かをしたいと思えるものなのだろうか。

「……………」

それは私には分からない感覚で。七人兄弟でありながら互いに殆ど無関係な私には、満月のような兄弟に対する感情はないに等しい。

《同族》の兄貴

《破壊魔》の次男

《逆》^{リバーズ}の三男

《崩壊》の長女

《同類》の双子

生きながら死んでいる妹。

双子の茨姫^{いばらぎ}とは先月少し話したが、それは事務的なものであって事務的なものでしかない。また、三男の来夜^{らいや}とは最近からちよくちよく関わるようになった。しかしまだ『知り合う』という段階に入ったばかりだ。ましてや他の兄弟の事は、噂でしか知らない。

現在沖縄にいる長男の兄貴は私と月姫の生活費を全て負担している。あの人が何故そういう事をしてくれるのかは分からない。茨姫の情報では、《不穏》関係でこちらにたまに帰ってきているようだ。

次男の《破壊魔》は、本当に人間かと思う程感情が欠けている。情報だけでしか判断できないが、あいつの場合、《破壊》は存在そのものといっても間違いではないのかもしれない。

そして一つ上の長女の《崩壊》。同じ学園にしながら、珍しい事に(そして願わしい事に)一度も奴の《不穏》には巻き込まれた事はない。こいつもメチャクチャな奴らしい。

それから、双子は飛ばして、妹。彼女は二年程前に《不穏》に巻

き込まれ、植物人間になっている。彼女とも、まともに会話した事はない。

とまあ、こんな感じだ。その殆ど全ては他人からの情報で知り得たものだ。しかし、自分から直接知ろうと思ったわけではなく、成り行きのに聞いた事だ。私自身あまり知る必要性を感じない。今はまだ、そういう感覚はない。

今は、まだ。

【満月（2）】

「嘉、またあの人に捕まらないように、さっさと帰っちゃいましょう」

放課後、私の隣にぴょんと近付き満月が言った。あの異物の含まれた薄ら笑いは、まるで貼り付いたようにそのままだ。

これは重度だな。

「それは賢明な判断だな」

私は返して頷いた。

あいつの事だ、次に何をやらかすか分からないし、逃げるが勝ちという言葉もあるくらいだ。面倒な事になる前にさっさと逃げてしまおう。無駄に体力を消費したくない。

と思ったその時。

『一年十五組の天星織嘉さん、深夜満月さん。今すぐ中央教員室まで来て下さい』

校内放送が私達を呼び出した。呼び出しの声は藤のものではなかったが、ほぼ確実にあいつからの呼び出しだろう。なんて絶妙なタイミングだ。

満月は肩を竦める。

「はは。ナイスなタイミング。聞かなかったって事で」

「当然だな」

こんなのは無視するのが一番だ。あいつに見つかる前に校内から消えてしまおうと、私達は早足で教室を出た（あいつのせいで早足になっていると思うと腹が立つけど仕方ない）。

「嘉、今から予定ある？」

風を切りながら満月が尋ねてきた。私は首を横に振る。

「特にないけど」

「じゃ、付き合って？ 昨日の続き」

「……………」

「カロリー気になります？そんなんじゃないか」

にゃはは、とふざけたように言う満月。私は返さずに只黙って歩き続ける。

やはり人が多い。本当は生徒が減った頃まで図書室で待っておきたいのだが、今日はそうはいかない。ムカムカするのを抑えてひたすら進む。

あいつなら校内を探し回ることも有り得ない話ではない。捕まってしまうのはマジでごめんだ。とにかく学園の敷地内から出ないと安心して息すらできない。

「……………はあ」

ようやく敷地内から抜け出し私は深く息を吐いた。いくら距離があつて早足で歩いてきたからといっても、距離は知れてるし全力疾走した訳ではない。競歩でもない、ただの早歩きだ。それなのにこんなに息があがっているのはあまりにひどい。運動不足もいいところだ。身体が老朽化しているんじゃないだろうか。錆びて朽ちる寸前か？

「ごほっ、ごほっ」

今度は咳が出た。おまけに気管支まで狂っているようだ。全くもって酷い身体だ。

「嘉、大丈夫？」

それとは正反対に全然平気そうな満月。にっこり笑って私を覗き込む。私は眉を顰めてもう一つ溜め息をついた。

「見ての通りだ。全然大丈夫じゃない」

「そうだよ。嘉が早足なんて滅多にないもんね。この世に二つと無い貴重映像だよ」

にしし、と満月は笑う。

少し呼吸を整えようと深呼吸する。情けないが仕方ない。万年運動不足で運動嫌いなものだからこうなってもしょうがないだろう。ちよつとあまりにも酷すぎるけど。

「お、氷鳥に夜月」

と、満月の声。私は目を上げた。

少し遠くに見覚えのある人影。そしてその隣に初めて見る人影。二人は満月と私に気付き、こちらに歩いてきた。

「久し振り、夜月」

満月は嬉しそうに氷鳥の隣の人物に声をかける。夜月と呼ばれた少年は満月を見つめて微かに表情を動かした。

深夜夜月。満月が話していた弟だ。

（こいつら兄弟はみんなそっくりだな）

私は夜月を見てそう思った。

外はねの色素の薄い髪。二重の瞳。極細の身体。兄の満夜や、満月、双子の夜明よあけもこんな感じだ。みんな似ている。

しかしその瞳はまるで死んでいた。

《人形》。その呼び名が酷い程当てはまる、闇に濁った瞳だった。ビー玉でも光を通すのに、それすら映さない程の。

成程。私は密かに頷いた。

「紹介するね、嘉。こちら夜月、あたしの弟。夜月、あたしの《同類》の嘉。最近からの付き合いだけど、とってもいい人だよ」

私に夜月を紹介し、次いで夜月にそう紹介する満月。満月の声に導かれるように夜月は目を私にゆっくり向けた。

暗い瞳に私が映る。表情は動かない。

(……………)

私はその瞳をじっと見返して溜め息をついた。
ふと思う。

この夜月の視線は、『見ている』うちに入るんだろうか。私の姿は映っているが、これは『意識』のうちにいるんだろうか。

深い、深い闇が混濁する瞳。

少し、重いかも知れない。

と、私達の間の沈黙を破るように氷鳥が口を開いた。

「なあ、折角だし、『indigo』にケーキでも食べに行くか？
夜月も向こう行くの久し振りだろ」

ん？と誘い夜月に返事を求める。夜月は少し間を置いて頷いた。
そして私と満月に意味ありげな視線を超越す氷鳥。その意味を悟り、目を細めて合図を送った。

「よし、じゃあ行こうぜ。俺の奢りだ」

そう言って親指をくいと向こうに指して氷鳥は歩き出した。夜月、私、満月と続く。

昨日の延長戦。

「……………」

ということいつもの喫茶店『indigo』に行くこと(二日連続だ)になった。

『indigo』のスイートルーム。到着して腰を下ろした後は昨日と同じだ。満月は早速メニュー表を嬉しそうに覗き込んでいくつかピックアップしている。昨日あんなに食べたのに今日も大量に食べるつもりらしい。こいつの体は一体どうなっているんだ。

私の向かいでは、氷鳥と夜月がメニュー表を見ている。何やら夜月の方が迷っているようだ。氷鳥が、欲しいの全部注文しちゃえよ、なんて言っている。

(……月姫に連絡入れるか)

ふと思いついた私は、ちよつと電話してくる、と席を立った。満月はうっすら笑い「適当に注文しとくね」と気を利かせてくれた。スイートルームを出、廊下の少し離れたところの壁にもたれて電話を耳に当てる。いつもの呼び出し音が暫く響き、繋がった。

『嘉？今日は朝帰りなの？』

「……………なんでだよ」

開口早々そんな台詞を口にした月姫に不意を突かれた風になった私は、一つテンポが遅れてそう返した。なんてこと言うんだ。しかも朝帰りなんてやったことないだろ、同居始めて。

もしかして、ついに妃七に毒されてしまったか？

そういう私の気持ちを知ってか知らずしてか、電話の向こう側は、うふふ、と笑った。

『それで、どうしたの？』

「少し遅くなるかも知れない。ちよつとややこしいことになって。いや、全然大丈夫だけど、ちよつと話しをする必要があるから。一応連絡しておこうと思って」

『……………《不穩》、ね？』

「そう。そんな大したものじゃないけど」

『……………分かった。気を付けて』

「ああ」

穏やかな月姫の声色に返す。その声からは、私を心配しているのが伝わってきた。

《不穩》に敏感な月姫。先月の《不穩》の時も同じように無理矢理繕っていた。あまり気は遣わせたくないのだが、月姫にはいずれ知られてしまうから仕方ない。

だから私は敢えて話題を切り替えた。

「前から訊こうと思ってたんだけど」

『なあに？』

「電話出る時、なんで声聞く前に私だって分かるんだ？」

『嘉の着信音は固定で登録してるの♪』

「……………あ、そう」

答えを聞いて何だか力が抜けてしまった。無理矢理出した明るい声と分かっているが、予想外の不意打ち。

月姫は月姫なりに気を遣っている。これ以上遣わせて疲れさせたくない。

『じゃ、待ってるわね、嘉』

「うん」

そう短く交わして終話ボタンを押す。帰りにケーキを土産に持って帰ろう、と私は満月達のいるスイートルームに向かった。

「嘉ー。もう来てるよ。早くおいでよ」

スイートルームに入ると満月が私を呼び、テーブルに目をやると注文したものが既に運ばれていた。早いな、と私は席につく。

（……………？）

私の正面に座る夜月の前には、計五つのバリエーション豊かなスイーツが並べられていた。どうやら全て夜月のものらしい。テーブルが大きいので狭くはないが、なんというか、すごい光景だ。夜月はフォーク片手に苺のシフォンケーキを食べ始めている。

「……………」

私は啞然として夜月を見つめた。

こいつら兄弟は好みまで似ているらしい（満月を筆頭に、満夜も夜明も激甘党）。これだけ注文しているのを見る限り、その細身の体からは信じられないくらいよく食べるようだ。否、食べ過ぎだろ。しかも激がつく甘党だ。レモンティーに、当然のようにシュガーポット二つ分のシュガーを混ぜやがった。満月に負けず劣らず、だ。シュガーの味しかないだろ、そんなに入れたら。

隣を見てみると、満月の横にも三つスイーツ。しかも全部滅茶苦茶に甘そうなものばかり。横にあるティーにも、夜月と同じくらいシュガーが混ぜられているのだろう。ティーの底で、ぬらぬらとシュガーが漂っていた。

おえ。

こいつら、絶対おかしい。

「……………」

私は溜め息をついて取り敢えず食べることにした。満月が注文してくれたのだろう、ガトーショコラに視線を落とす。

暫く沈黙が続く。スイーツをそれぞれ口に運びながら、満月と氷鳥は話を切り出すタイミングを見計らっているようだ。最初の一言を探しているようにも見える。

それ程切り出しにくい話なのか、あるいは慎重に進める必要があると感じているのか。

「……………」

私は黙っておく。

どんな方法が一番最善か、何が良い策なのか。それは私には判断出来ない。私がこの場にいる事自体自然な事ではない。だから二人が話を進めるのを待った。どういう風に話を持っていくのか見守る事にした。それから出方を考えよう。満月が私をこの場に連れてきたのは恐らくこの為だから。

そして、沈黙を切り裂いたのは氷鳥の方だった。

ごく自然に、当たり前のように、いつもの飄々とした口調で、世間話でも始めるように敢えて軽い口調で。

「そういえば今日、何かと騒がしかったな。藤の奴がまた何かやらかしたとか?」

「……………」

その氷鳥の台詞に、夜月の身体が反応したのが分かった。今まで動いていた手がピタッと止まり、伏せがちな瞼が開かれる。無表情ながらも、何か怒りが一瞬燃え上がったような緊張に引きつった表

情になった。そして無理矢理に誤魔化すように再び手を動かし始める。

確信。ほんの一瞬の出来事だったが、満月と氷鳥も私と同じものを読み取ったようだった。

しかしそれにはまだ触れず、満月は氷鳥に頷いてみせた。

「そーなんだよ。廊下で嘉にぶつかってきてね、派手に転んでさ。他の教師に支えられながら保健室に行ったよ。目も潤ませちゃってさ。一生懸命『倒された』ってアピールしてたよ。わざとみんなの前で。ちょー気持ち悪いんですけど。おえっ」

「完璧に狙われてんな。あれだろ？みんなを自分の味方にして二人を悪者扱いしようとしてんだろ」

「だね。あたし達は周りにどう思われようが全然全くこれっぽっちも関係ないけどね。だけどあたし達が全然崩れないのみて、また色々仕掛けてくるだろうね。あの人に付き合うの、スッゴク面倒なんだけど」

満月と氷鳥はそう言葉を交わし、一旦口を閉じた。私は二人が話している間、ずっと夜月の様子を窺っていた。

伏せられた顔、相変わらずの無表情。会話を聞いているのかいないのか分からないような虚ろな表情。しかし二人の会話が確実に夜月に作用しているのが分かった。無理矢理キーキに集中しようとしている夜月の頭の中では、二人の言葉一つ一つが木霊しているのだろう。自分の中のものと共鳴しながら。

「……………」

「……………」

「……………」

氷鳥、満月、私は目配せし合い、氷鳥と私の視線が満月に向かった。満月はその意味を理解し、意を決したように頷いた。その表情は一段と真剣なものになる。

そして満月は口を開いた。

「夜月、あたしね、あなたに訊かなきゃならない事があるの」

「……………」

その満月の言葉に、夜月は伏せられた顔を上げて満月に目を向けた。『無』という感情に濁った瞳に満月が映る。それはないと思うが、ある程度予想していたのかと思えるような反応。

今まで黙し続ける事で自分の精神（心）を護ろうとしてきた夜月。その封印を解き、護るという形ではなく、共に闘いたいと願う満月。

その二人の思いが交錯する。

二年の時を経て、正面から。

そして満月は口を開いた。

「あたし、藤と相対して思ったんだ。中一の時、あなたを《闇》に突き堕としたのは、藤紅藤なんじゃないかな？ って」

真っ直ぐな感情が、夜月に向かった。

その瞬間、ずっと無表情だった夜月の瞳に、微かに表情が浮かんだ。それは恐怖にも見え、悲しみにも見えるものだったものの、満月の感情が間違いないく届いている事を示すものだった。

しかしまだ夜月は口を開かない。

どうしたらいいのか、戸惑うように、困惑しているように。それは、藤に対する恐れではなく、自分を護ってきたものが崩れてしまふんじやないかという恐れ of 感情に似ている。

でも。

「なあ」

そこで私は自然と口を開いていた。

このままではいけないと私の中の何かが反応し、私を突き動かした。

言葉を晒すようにと。

「あんたを追い込んだのはあいつなんだろ？」

私は敢えて脅迫するような口調で夜月に言葉を晒した。

口を開いて真実を明かさなければ、いつまでたっても夜月は地面を這いつくばったまま。黙っていては、前に進めない。

翼を剥ぎ取られた鳥のように地面を這って生きるしかなくなる。《人形》のまま生きて行かなければならなくなる。

そうなる前に。まだ翼が残されているうちに、助けを差し伸べる人がいるうちに。可能性が残されているうちに。

まだ、方法は残されている。

「……………」

微かに、また夜月の瞳に感情が宿ったように見えた。

「俺の知り合いで、昔、教師に裏でリンチされてた奴がいてな」

とそこで、黙って話を聞いていた氷鳥が口を開いた。どこか遠くに目をやり、窓の向こうを眺めながら記憶を辿るような口調で。

夜月に届くようにと願う口調。

「その教師も裏表の激しい奴で、《闇》にはいなかった分藤程厄介ではないが、ずる賢くてな。誰にもバレないようにリンチしてたんだ。『気に喰わない』つつう身勝手な理由でよ。で、俺はリンチ受けてるそいつに、手を貸してやると持ち掛けたんだがな、あいつは頑なに拒否した。どう見たってあいつだけの力じゃどうにもならないのに、自分でどうにかするってな。……………結論から言うと、あいつはボロボロになって限界超えて自殺した」

淡々と、しかし心に刻み込むような口調でそう語り、氷鳥は夜月に目を向けた。

その瞳は、真剣そのもの。

いつものようなふざけた感じは全くない。

「俺の言いたいこと、分かるよな？」

「……………」

また少し、夜月の瞳が揺らいだ。

少しずつ、少しずつ。

「なあ」

私も再び口を開いた。

あと一つ、夜月に言っておきたいことがあった。藤如きに、夜月が蝕まれてしまうことのないように。それは絶対に許せない、そう思ったから。

「あんたには、共に闘おうと傍に居てくれる人が居る。独りで闘う必要なんてないだろ。しかも、もうあんたは二年も独りで自分を護り抜いた。もういいじゃないか。……助けを求める気力が残っているうちに、限界を超えて力尽きてしまう前に、一歩踏み出してみろよ。それを選んでも、後悔はない筈だ。一緒に闘っていけよ。こんなにあんたのこと心配してくれる人が他にいるか？」

私の言葉に、夜月は氷鳥と満月に目を向ける。

二人の表情は真剣そのもので、それ以外のなんでもなかった。只夜月を助けたい。夜月が抱える苦しみを取り除いてやりたい。その思いが溢れんばかりに滲み出ていた。

「夜月」

再び満月は夜月を呼ぶ。

懇願する表情。どうかしてやりたいという願い。夜月の力になりたいという思い。共に、共に。その強い思い。

それは夜月に届いていた。

「……………」

夜月はしっかりと満月に視点を据える。その瞳に、初めてはつきりとした『感情』が見えた。

決意。その瞬間、夜月は大きな決意をした。

そして。

「あいつは最悪だ」

まるでそれだけで藤を呪い殺してしまいそうな、これ以上の憎しみや怒りを含められない程負の感情で塗り固められ、形作られたような。

夜月の口から流れ出た言葉はそんな声色に乗っていた。そして夜

月はゆっくりと話し始めた。

【闇月（3）】

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

満月は『indigo』からそのまま夜月と家に帰宅した。氷鳥とも嘉とも別れ、二人並んで家に続く道を歩く。二人の間には、親しい者同士しか共有できない心地よい沈黙が流れていた。

「……………」

満月は視界の隅に夜月を入れながら、安堵の溜め息をついた。こうして並んで歩ける喜びを噛み締めながら。気付かないうちに夜月は成長し、自分より随分低かった身長はいつの間にか同じくらいになっていた。

「久し振りだね、一緒に歩くの」

沈黙を破って声をかけると、夜月は小さく頷いた。やや俯きながら歩く夜月。その横顔は昼よりも幾分柔らかくなっているようだった。

もうすでに日は暮れ、街のネオンが賑やかだ。沈黙の二人を包み込むように鮮やかに夜を飾っている。

満月は会話を続けようと尋ねる。

「最近、満夜兄ちゃんと夜明には会った？」

その問いに夜月は首を横に振った。小さな声で、久し振りに会いたいけど、と呟くように漏らす。

それに答えて満月はにっこり微笑んだ。

「今呼んでみようか？もしかしたら大丈夫かもしれないよ？」

「……………既婚者なの？」

「訊いてみない事には分からないでしょ。取り敢えず連絡してみるね」

「……………」

独り身で身が軽い訳ではない満夜と夜明に気を遣ってか、夜月は

すぐには頷かない。会いたいけど重荷になりたくない、そういう複雑な雰囲気も見え隠れする。

満月は足を止め、夜月を見つめた。それにつられるように夜月も歩みを止める。

満月はまだ沈んだ色をしている夜月の硝子玉の瞳を真っ直ぐ見つめて言葉を晒した。

「すぐとは言わないけど、二人とも、ちゃんと話した方がいいと思うんだ。二人、すぐ夜月を心配してたから。だから、胸の中のそういうのを解いてあげたいし。あたし達はね、夜月を負担だとか重荷だとか邪魔だとか、これっぽっちも思っていないよ。どうしたら夜明と一緒に戦えるのか、どうしたら夜月を楽にしてあげられるのか、それをずっと模索しているんだよ。夜月はあたし達の大切な兄弟だもの。……あ、夜月が話すの嫌ならいいよ。話すのだって、心身両方の力が必要なものね。相当な決心も要るし。ごめん、押し付けがましいね」

俯いてしまった夜月に謝罪し、行こうか、と満月は再び歩き出した。溢れそうな感情をぐっと堪える。

（駄目だな……兄弟の事になると。《傍観者》じゃいられなくなっちゃう）

少しだけ、嘉が羨ましくなった。こういう感情を知らないという事はとても重大な事だが、それでも胸が痛む度に『こんな感情を知らなければ苦しまなくて済むのに』と思ってしまうのだ。『欠陥』だとしても、その方が楽なんではないかと。

自分の無力さに思わず出る弱音。

「マヅ姉ちゃん」

と。

懐かしい呼び名で呼ばれ、満月は驚いて振り返った。こんな風に夜月に呼ばれるのは本当に久し振りで、満月は半ば信じられない気

持ちで夜月を見つめていた。

夜月は相変わらざるの無表情で、しかし懸命に感情を出そうとしているように唇を開き言葉を晒した。

「本当は、話したい。だけど、今これ以上話したら、俺が爆発しちゃう。だから……俺の代わりに兄ちゃん達に話して」

「……………代わりに？」

「うん」

夜月は頷き、視線を満月から逸らした。自分の中に蠢く、藤に対する『怒り』やその他の蠢く感情を一生懸命冷まそうとするように。（そうだよな）

満月は心の中で頷いた。

夜月は今まで二年間、ずっと沈黙を守って誰にも真実を晒さなかったのだ。そうやって護ってきたものを今日少しだが解放したばかりなのだ。あまり晒せないというのも無理はない。抵抗があつて当然だ。

だけど、確実に進めている。

搾り出すような細い声で紡がれた言葉。しかしそれは夜月の決意表明のように確かな思いに乗せられていた。

共に闘いたい、と。

「分かった」

言い、満月は泪を堪えて微笑んだ。

「満月」

兄に指定された高級レストランの入り口付近で兄弟達の到着を待っていた満月を、低い声が呼んだ。満月はぱっと顔を上げてその人

物に微笑んだ。

「満夜兄ちゃん、久しぶり」

「この前も会っただろ」

「毎日会わなきゃ『久しぶり』なの」

「そうなのか」

ふう、と溜め息をついて、取り敢えず入るか、と満夜はレストラン内に満月と共に入って行く。

浦風満夜、旧姓、深夜満夜。満月の兄で河柳学園の三年生だ。財閥の浦風家の娘と訳ありの結婚をしたので姓が変わっている。《闇》では、《断罪者》《欺きを欺く螺旋》として知られている。

レストランに入ると、礼儀正しいウェイターが丁寧に迎えた。名前を告げて席に案内してもらう。

「…………あれ、夜明は一緒にこないの？」

満月は自分の前を歩く満夜に問いを投げた。満夜と共に来る筈だった自分の双子の姉妹のことを尋ねると、満夜はやや後ろに顔を向けて満月を見る。

「風綾と出てる。京都に行っていて、明日にしか帰ってこないらしい。全く、妊婦は妊婦らしく大人しくしてほしいものだ」

「夜明も来ると思ったのに……………」

「俺も、さっき明日帰る事を知ったからな」

「自由奔放だね……………」

「基本的には好きにやらせている。俺がとやかく言う事じゃないしな。まあ、それだけ夜明も浦風家に打ち解けられているという事だ」

「……………そっか。体調も良さそうだね、その様子じゃ」

会えない残念な気持ちと、うまく行っているという安心感が混じり、満月は複雑な表情を浮かべた。

浦風夜明、旧姓深夜夜明。満月の双子の姉妹。夜明は浦風家の長男、風雅と（こちらにも訳ありの）結婚をした。満夜と同時期の事だ。どうやら今は満夜の妻と一緒に出かけているという事だった。因みに風雅と風綾は双子の十八歳だ。

満月は本題に入る前に、二人の近況を訊く事にした。

「風綾さん調子は良さそうだね。悪阻つわりとかもないんだ？」

「みたいだな。妊婦していると知る直前まで、風雅と剣道の訓練をしていた。妊娠が発覚してからは禁止したけどな。あの二人の剣道は剣道じゃないぞ。激しいってものじゃない。まるで武士の果たし合いだ」

「わお……なんか目に浮かぶ。あの二人、男女それぞれの大会で負け無しなんですよ」

「師範より強いらしい」

「すごいお嫁さんもらっちゃったね」

「正確には俺がもらわれたんだけどな」

入り婿だからな、と自嘲にも取れる口調で言い、満夜は薄く笑った。案内された席に腰掛け、渡されたメニュー表に目を向ける。

そして満夜は夜明の事に触れた。

「夜明の体調も良好だ。風雅ともそれなりにうまくやっているようだし。この前風雅と呑みながら話したんだが……」

「呑みながら？」

さらっと流れるように出た満夜の言葉に、思わずツツコミを入れる満月。しかし満夜は眉を顰め、怪訝の表情を浮かべた。

「なんだ？」

「……………ん、いや。続けて下さい」

『呑む』というのは、まさかジュースや茶のことではないだろう。

確かあなた未成年ですよね？と心の中で呟き、しかし満月はそれをぐっと堪えた。満夜があまりに不思議そうな表情をしていたからだ。

満夜は、なんだったんだろう、というように肩を竦め、再び続ける。

「まあ、まだぎこちない感じはやはり否めないが、『普通』に会話できるようにはなったと言っていた。それから少し驚いたんだが、風雅の方から訊いてきたんだ。夜明の事を」

「夜明の事って？」

「夜明の好みとか、趣味とか。まだ本人から訊くには恥ずかしいらしい。いずれは自分で知るようになるとは言っていた」

「へえ……有り得ない」

「一応は考えているみたいだな。あるいは夜明に興味を持ち始めたか。夜明の《過去》は直接本人に話させた方がいいと思って伏せておいたが、性格的な事は話した。……普段は口数は多い方ではないが、あいつは酒が入った時の方がよく喋る」

「やっぱりお酒だったのね」

「呑むといったら酒だろ。それ以外何がある？」

「ないデスね」

苦笑する満月。とにかく安心した。満夜は自分自身の事を話そうとはしないが、風雅と夜明よりは妻・風綾と上手くやっているのだろう。なんとなく雰囲気からそれは伝わってきた。

「それで」

満夜はウェイターに注文をして満月を見つめた。《闇》に濡れた瞳に満月が映り、揺れる。

「夜月はどうしてる」

重い声色で、満夜は問う。

今までとはまた違う、重圧のかかった雰囲気纏って。

満月はそれを受け、姿勢を正した。これからはふざけや冗談なしでの真剣な話し合いだ。表情を引き締めて満月は満夜を見つめる。

そして口を開いた。

「今日、色々話したの。夜月が《人形》になってしまった時の事。本当は兄ちゃん達にも自分で話したいんだけど、今これ以上話したら自分を抑えられるか心配みたいで。だから私に、代わりに兄ちゃん達に話してほしいって」

「……………二年前の事か」

「うん」

満月は頷いて告げる。

夜月を理不尽に攻撃し、人格を『破壊』して《欠落》させた人物

の名を。

「夜月をあんな風にしたのは藤紅藤だった」

「……………」

藤紅藤の名を聞いたその瞬間、満夜のオーラが一瞬激しい炎のように燃え上がった。しかし次の瞬間には自分を制し、深く息を吐く。

「やはり、奴だったのか」

「……………え？」

その眩きに驚いて返す満月。満夜は考えるように伏せていた目を上げて満月に目をやった。

「知らないか、最近自主退学した三年の事」

「あ……………ちらっと聞いた」

「俺と同じ学年で、同じクラスにもなった事もある奴だった。殆ど関わった事はないが、あいつが自主退学する事に不自然な点が幾つもあった。それに藤が関わっていると聞いて、夜月の事がすぐに浮かんだ。あいつが臨時担任になった丁度その頃に夜月はおかしくなつたからな。それは間違いではなかったんだな」

怒りに煮えたぎる瞳には、比類ない程の憎悪が蠢いていた。満夜がこれ程まで感情を露わにするのは滅多にない。それは夜月に対する思いを表していた。

満月は俯き、夜月の苦しみを思っ痛む胸を抑えて続けた。

「夜月は、どうして自分が標的にされたのか、分からないんだって。藤の目に留まるような事はしていなかつもりだし、藤の口から理由を聞いた事もなかつた。何がなんだか分からないまま攻撃され始めたんだって言ってた」

「確かにあいつは俺達兄弟の中で唯一『普通』だったし、放浪癖がついたのもあの後だからな。それなりに真面目だったし、目を付けられるようなタイプではないだろう」

「もし夜月が何かいけない事をしたんだとしても、人格が変わってしまうくらいの攻撃はしないと思うんだ。『普通』の教師ならね。」

藤のやり方は明らかに《敵意》が感じられる。しかも理不尽で身勝

手だっていうのが、夜月の言葉からひしひし感じられるんだ」

下唇を噛みしめる満月。感情を抑えるのに必死だ。少し油断すれば呪いの言葉が濁流のように荒々しいまでに流れ出てしまうだろう。満夜は一つ息を吐いて静かな口調で尋ねる。

「藤がどんな方法を使ったか、具体的な事は言っていたか？」

その問いに満月は首を横に振った。

「さすがにそこまではまだ言いきれないみたい。だけど存在否定と精神破壊を意図した攻撃があった事は確か。肉弾戦と《心理戦》が混じっているんじゃないかなって思った。藤の他のケースの情報とかも聞いたらね」

「そうか。簡単には口にできないような事をされたという事は確かなんだな」

満夜は返して瞼を伏せた。満月からの情報を整理してまとめる。

「奴が専ら使うのはいわゆる《心理戦》らしい。だから夜月の場合もそれが主要な手段だっただろう。夜月はまだ本当に無垢な子供だったし、俺達のように早い時期から《闇》にいた訳じゃない。だから簡単に《人形》にさせられてしまったんだろうな。それに抵抗する術を持っていなかったんだろうな」

「せめてあたしが早く気付いてあげられたら良かった。そしたらこんなことにならなくて済んだかもしれないのに」

「確かに俺もそういう兆候を全く気付いてやれなかった。それは夜月にも本当に悪かったと思う。でも只一つ救いなのは」

静かなトーンで言い、満夜は瞼を開いた。

「まだ手遅れではないという事だな。《心理戦》を仕掛けられたとしても、お前の《同類》がするような精神の《破壊》はされていない。奴が《仮面》だというのは水鳥から聞いたな？ 身体的な攻撃は受けたとしても、その《仮面》として攻撃され、殺された訳でもない。それだけは救いだ。そう思わないか？ これからは共に闘える。これから始められる。それなら夜月は奴に対して勝利を収める事が出来る。何も恐れる必要はない」

確かに夜月は、本当に大きな傷を負わされた。しかし今は積極的な事に目を向け、これからは只前進していこうと。

それは、夜月だけでなく、自分達の呪縛も解いていこうという言葉だった。藤ごときに後退したり足踏みしたりしないという励ましの言葉。

そして兄弟の絆を確かめる、強い誓いの言葉。

「そうだね」

満月はうっすら微笑んで頷いた。心にのし掛かる巨大な闇が少しずつ碎けていくようだった。

「勿論、奴には当然の《報い》は与えるがな」

満月の表情を見て満夜は目を細めて、再び引き締まるような口調で言った。

それは《復讐》という形で決着を付けるという固い誓いのようだった。

満月と別れ、満夜は夜の街の中を歩いていた。迎えを寄越す事もなく、ゆっくりと歩みを進める。そうしながら、満月との会話を思い出していた。

（やっぱりあのアマだったか……………）

満夜はアスファルトを睨み付けながら藤の顔を思い出し、再び怒りを感じてポケットの中で拳を握った。

ずっと気になっていた夜月の《敵》。それが《闇》と関係があるのかないのか、それが誰なのか、それがはっきり分からずにずっと消化できずにいた。しかしそれが分かった今では、モヤモヤとした感情は怒りへと転換されつつあった。

(…………今すぐ《断罪》してやりたいくらいだ)

怒りを抑えようと一つ溜め息をつく。

満月の前ではある程度感情を制御していたが、爆発しそうなのは満夜も同じだった。満月の手前兄としてそれを抑えるのに気力を殆ど使ってしまった程だ。今は気力の脱力感のようなものを感じている。

(でも、これではつきりした)

夜月を苦しめた張本人を断定できた事は大きな進歩だ。そしてそれはこの《不穏》が再び動き出すきっかけとなる。

藤を失墜させる事が出来る。それに自分が関与するのかどうかは今のところ分からないが、《復讐》を遂げる事ができるなら参加出来るか出来ないかはさほど大きな問題ではなかった。

《復讐》。

それが『事実』しか生み出さないことを、満夜は理解している。

その『副作用』なるものが新たに現れるかもしれないということも分かっている。

しかし、この呪縛から夜月を解き放つことが出来るなら。それなら自分はそれを受けて立とうと誓っていた。

それが、螺旋のように延々と続いても。

それが自分たちの未来(先)へと進んでいけるのなら。

「……………」

満夜は方向を変え、並木通りを抜けて公園を横切る事にした。この一体に広がる広い公園で、二ヶ月前に《不穏》で嘉と初めて相対した場所でもある。相変わらず薄暗い中を進む。

そしてそれ程進まないうちに、満夜はある人影を見つけてふと足を止めた。

「……………」

切れかかった外灯がチカチカとフラッシュのように照らすベンチ。そこに腰掛け、俯いて座る一人の少年。殆ど輪郭しか見えないが、満夜はそれが自分の弟であることが分かった。

なんてタイミングだ。

「……………夜月」

眩くように言い、満夜は早足でその元に向かう。するとその足音に気付き、夜月はゆっくり顔を上げた。

しかし、次の瞬間

「……………っ!？」

夜月は満夜を認識した瞬間に、勢い良く立ち上がり、物凄い速さで走り逃げ出した。満夜は一瞬驚き、しかしすぐにその後を追いかける。

(メチャクチャ足速えじゃねえか)

必死に逃げようとする夜月は、予想しなかった程俊足だった。それにも驚きながら満夜はその背中を追いかける。あっという間に視界から消えようとする弟の後を追う。

しかし暗さもあって、その姿は消えてしまった。

(……………ちよっと先回りするか)

満夜は速さを緩め、夜月が行きそうなコースを予想しながら別の方向に歩き出した。恐らく夜月は公園内の光の届かない場所を選んで隠れる筈。延々と走って逃走したりはしないだろう。そう予想しながらゆっくり木々の間を歩き、夜月を探す。

伊達に『兄貴』をしてきた訳じゃない。

「……………夜月」

そして夜月はすぐに見つかった。

満夜が予想した通り、夜月は薄暗い低い木々が密集した場所に身を潜めていた。その中の一本の木の幹に背中を預け、膝を抱いて小さくなっている。

しかし見つかってもう逃げようとは思わない。声を掛けられても只顔は俯いたままだ。

その夜月の様子から、夜月の思いが痛い程伝わり、満夜は目を細めた。夜月が、兄弟達の重荷になりたくないと思っているのを知っているの、夜月が逃げた理由も分かっていた。だからそれには触

れない。

満夜は屈み、夜月と頭の高さを合わせて口を開いた。

「久し振りだな。……………お前、前以上にメチャクチャ足速くなつたな」

「……………」

夜月は一瞬目を上げ、しかしすぐに逸らした。どうしたらいいかわからないというような雰囲気。何か負い目を感じているような表情だった。

満夜は夜月の髪をくしゃつと撫でて顔を上げさせた。

「なんとか元気そうだな、身体は。……………だけど、俺から逃げたな？」

決して責めるようにはなく穏やかに言うと、夜月の硝子玉が微かに揺れた。満夜が心配しているというのが伝わっているようだった。

自分独りで背負ってきた夜月。満夜はそれを解いてやる為に、共に闘う為に、夜月に手を伸ばす。

「夜月、来い」

満夜は夜月の頭を自分の胸に抱き寄せた。口を開く事を、荷を委ねる事を苦しく思っている夜月を気遣いながら。

「今は何も言わなくてもいい。お前は本当によく耐えてきた。俺も何もしてやれなくて、本当に済まないと思っている。本当にごめんな。独りきりで闘って、本当に今まで苦しかっただろう。けどな、夜月」

満夜は頭を抱く手に少し力を込める。

夜月の心に、届くように。

「俺は、少しでも前のように喜びを喜べる、そんなお前を取り戻してやりたいと思っている。その為に力を貸したいと思う。その為に兄貴というのは存在するんだ。俺はいつだってお前の味方だ。俺、満月、夜明も居る。これからは独りで闘う必要はないんだ。な？」

「……………」

満夜の言葉に、夜月の肩が小さく震えた。それは心が震えているようだった。

凍っていた心が少しずつ揺れ動いているようだった。

溶けるように、あたたまっていくように。

そして

「……………ミチにい」

きゅ、と満夜のシャツを握り締め。

小さく眩き、夜月は見えない涙を流していた。頭を満夜の胸に預けたまま、夜月は暫く動かなかった。

まるで二年分の痛みを満夜に委ねているように。

全てを託すかのように。

満夜は安堵し、目を細めて夜月の頭を撫でていた。

【兄弟】

何もかも失った

だけどあなたの温もりがあった

―天月月姫―

水がタイルに打ち付けられる。

「……………」

シャワーに当たりながら、いつもの如く私はぼうっとしていた。様々なことを考えながら水の音を聴く。

夜月の言葉の一つ一つ。

その口から流れ出てきた真実。

呼び覚まされた、封印していた記憶。

「……………ふう」

前髪をお湯が伝ってタイルに落ちる。それとシンクロするようにゆっくりと夜月の言葉が蘇る。

夜月の口から呪いのように出てきたあの言葉。それだけでも夜月が如何に藤に対して強烈な負の感情を抱いているかが窺い知れた。

夜月から感じたのは、恐怖でも怯えでもない。

夜月が抱いているのは、計り知れない程の憎悪だった。この上ない程の憎しみ、吐き出したくなる程の嫌悪感。それこそ、藤という存在を殺してしまえるのならそうしたいと思っっている程の強い感情。そして少ないながらもあの台詞の後に続いた言葉の数々は更に《闇》が混濁したものだった。短い夜月の言葉に、それが凝縮されていた。

(中一、か……………)

年齢的には《不穩》を経験するのに決して早いという訳ではない。私のように物心ついた頃にはその直中にいるという人は五万といからだ。《闇》の人間の過半数はそうだろう。

しかし夜月はきつとそういう〈淀み〉を全く、あるいは殆ど知らないうちに〈ああいふ〉ことをされた故に、その重圧に耐えられなかったのだろう。

人の歪みを

人を疑うことを

人を嫌うことを

人を忌むことを

人を怨むことを

人が醜いということを

人が汚いということを

人が下劣ということを

そういうことを知る前に、人の最も醜いところをあからさまにまざまざと見せつけられた故に、こんな風になってしまったのだろう。あまりに落差があり過ぎて、衝撃が強すぎて、感情のない《人形》のようになることでしか自分を護れなかったのだろう。

満月の話を聞く限りでも、夜月は最初から《闇》の中にいた訳ではなかったようだ。故に藤を撃退する術を知らなかったのだろう。藤に抵抗できるだけの『武器』を持っていなかったのだろう。

(……………)

でも、今日、夜月は口を開いた。二年間自分だけで闘っていたその『闘い』を、その荷を少し満月に委ねた。満月の訴えを受け入れて、勇気を出して真実を晒した。

夜月の闘いはまだ終わった訳ではない。一つの段階として区切られただけで、今日再び始まったとも言える。どのような形で幕を下ろすのか、その答えは恐らく夜月の中にある。何をもって夜月が『勝敗』を決定するのか、それは夜月に委ねられ任されている。

そして私達とあいつとの勝負も——くだらないものではあるが——進めていく必要がある。そして絶対に勝つ必要がある。

（負ける気はしないけどな）

決して傲慢なのでも高慢なのでもなく。それでも勝利出来るという、根拠はないが、今まで外れたことのない感覚として確かな自信が私にはあった。そしてそれに勝利しなければ、という思いがあった。

夜月の為に、という立派な動機故という訳でもないけれど、私達には早いうちにあいつを失墜させる必要があるそうだ。私の『敵』であるなら、尚更。

《人形》。そうならされた夜月を見て、早いところ片付けてしまおうという思いが強くなった。

目障りな『蚊』はさっさと叩き潰してしまおう。奴は私の《敵》。

「…………ふう」

きゅ、とシャワーを止める。物思いに耽って随分と長い時間シャワーに当たっていたようだ。指の皮膚がシワシワになってしまっていた。流れて行った水が勿体無い。バスタブに浸かっていた方が良かったような気がする。

老人のそれになったような手から視線を外し、私はバスタオルを掴んだ。

「よ、嘉。お前、結構長風呂だな」

「お邪魔してるよ」

風呂から上がると、兄の天星織家三男・来夜と、月姫の兄・夜空が来て風呂から上がった私を迎えた。二人は同じ河柳学園の三年で

同級生、そして親友らしい。先月くらいからちよくちよく私の家に顔を出すようになった。まるで自分の家のようにくつろいでいる二人。私は肩を竦めて二人に応える。

「嘉もお風呂上がったことだし、夕飯にしましょ」

月姫がにっこり微笑んでテーブルに手を向けた。来夜と夜空はそれに応えて立ち上がる。

いつもの如く、夕飯の支度は既に整っていた。今日は妃七は来ていない。普段の二倍人数はいるが、あいつが居る時より全然静かだ。私は月姫の隣に腰を下ろした。

「いただきます」

「いったきまゝす」

そして食事が始まる。来夜と夜空が何故か違和感なくそこに座っていることを不思議に思いながら（しかしそこに当たり前のように馴染んでいるんだ）私は箸を進める。そして咀嚼しながら来夜を盗み見る。

《逆》^{リバーズ}、天星織来夜。

一カ月前まで、ろくに顔も合わせたことはなかった。こんな風と一緒に食事をするなどまず有り得ない。まともに言葉すら交わしたことはなかった。

それが、今当たり前のように正面で味噌汁を美味しそうに啜っている。まるで今までもこうしてきたかのように。普段の習慣通りとでもいうように。

「……………」

私は茶碗と箸をそれぞれ持つ来夜の両手首に目をやった。

未だ生々しく残る切り傷や刺し傷。晒すことも隠すこともなく事実としてそこにある傷は、来夜の苦しみの時期を刻印していた。

一時は死を意識した来夜。死を望んでいた来夜。自らを殺めようとした来夜。

その来夜が、今こうして此処に居る。

私の目の前に居る。死を願う程の苦しみを乗り越え、生きること

を誓った《逆》が、《逆》として。そして天星織来夜という一人の人間として。

「ん？どした？」

私の視線に気付いた来夜が尋ねてきた。私は反射的にずっと視線を外す。

「別に。遠慮ないなと思っただけ」

そう返すと来夜は薄く笑った。

「嘉ほどじゃねえよ。ま、基本的に遠慮なんて知らないけどな。いいじゃねえか、お前ん家なんだし。遠慮する理由はないしな。しかも今日は『indigo』のケーキまであるし。ラッキー」

冗談を言う口調で来夜は軽く言い、漬け物を口に放り込んだ。昔は絶対に見せなかった『人間』らしい表情、口調。初めはあまりの変わりように心底驚いたが、最近ようやく慣れてきた。

そんな来夜の隣で、黙々と一生懸命ご飯を頬張る夜空に目をやる。月姫も夜空も容姿は父親譲りなのだろう、二人共綺麗な金髪に深い青い瞳を持つ。容姿端麗という言葉がぴったりだ。

しかし一転口を開くと、夜空は結構毒舌だったりする。正直で辛辣な言葉を吐くこともしばしばだ。涼しい顔して毒をピュッピュと吐く。

こうして冷静に分析している私だが、実のところ来夜のこと、夜空のことあまり知らないというのが現状だ。

特に来夜は兄弟であり家族であるのに来夜自身のことは殆ど噂を通してしか知らない。

来夜が《不穩》で無理矢理ヤク漬けにされたことも、それから抜け出したということも、夜空とつるんでいる事も、バイトをしている事も、その他何もかも。

これでいいのかどうかはともかく、最近ふとした瞬間に『知り合う』必要性を感じる時がある。このままではいけないと、どこから警鈴がならされているような、そんな妙な感覚に襲われる一瞬がある。

(……………今更な)

私は心の中で呟いていた。

今更そんな事言ったって、簡単に出来る筈がないし、出来る気がしない。『相對する』という土台すらない私達が今更分かり合う事など。

《同族》の長男。

《破壊魔》の次男。

《逆》の三男。

《崩壊》の長女。

次女の私。

《同類》の三女。

生死彷徨う四女。

兄弟とは名ばかりの私達。家族という肩書きだけを持って。否、それすら持っていないのかもしれない。

『知り合う』など。

今の私達には、到底無理だ。

(……………)

来夜達三人が盛り上がっている中、私は一人そんな事を考えていた。

そして三人の話の流れが少しずつ変化し、ふと来夜が口にした話題が私を現実に取り戻した。

「そういえば最近、なんか一年のあたりが騒がしくなったよな。よく分からないけど」

「また藤が何かやっているみたいだよ。そんな感じの事ちらっと聞いたけど」

来夜の言葉に、夜空がさらっと呟いた。空想からようやく戻った私は、聞き流してしまいそうな台詞を辛うじて聞き留めて夜空に目を向けた。

「『また』？あいつの本性知っているのか？」

「うん。面倒だから知らない振りしてるけど。少し前に同級生が自主退学なった件にあいつが関係しているっていうのも知ってる」

私の問いに、夜空はさらっと返してきた。

『面倒だから』。夜空の場合その言葉は強がりでも見栄を張っている訳でも虚勢でもなく、本心からの台詞だ。

夜空の背後には、《闇》の知り合い（しかも結構名の知れた一族の一人）がいるので、藤を恐れる理由はない。多分自分が動くような問題ではないと判断してこの立ち位置にいるのだろう。あるいは本当に只面倒くさいだけなのか。どちらにせよ夜空の判断は賢明なものと言えるだろう。

しかし外見に似合わずこいつは結構腹黒いのだ。人は外見ではないという典型的な例とも言えるだろう。

そもそも、外見なんて中身の入れ替えられる容器みたいなものだ。

「その生徒のことは知ってるのか？」

私は取り敢えず訊いてみることにした。来夜は即座に首を横に振り、夜空も首を傾げた。

「『知り合い』っていううちには入らないね。直接話したことはないから。だけど、自主退学するような奴じゃないっていうことだけは知ってる。間違えてもそうならないってね。そもそも自主退学する奴の方が少ないだろ？滅多な事がない限り。特に河柳だし。だから三年の間では『あいつが？』っていう反応の方が大きいよ。みんな表立っては話さないけど」

「裏では相当な悪だったって噂もあるけどな。藤を強姦したとか未遂とかなんとか。でもなんか、意図的に流された噂っぽいな。自主退学の理由付けみたいな感じだな。俺は完璧に出任せだと思ってる。なんとなく、そんな感じがする。もしあいつがした事が本当なら文句なしの退学だしな。とにかく、真実じゃない『感覚』。嘉なら分かるだろ？その『感覚』」

夜空の台詞に来夜が続いた。私は頷いて考える。

意図的に流されたということは『情報の操作』になる。不自然な噂が生徒の間で流れているということは、もしかしたら生徒にグルがいるのかもしれない。その要素は否定出来ないだろう。

今はそこまで突き詰める必要はなさそうだけど。

今は『感覚』だけで。

「あいつ、《闇》の顔も持ってるんだろ？」

来夜がご飯のおかわりを入れながら訊いてきた。夜空はそれを知らなかったらしく、微かに目を見開いて来夜に目を向けた。

「そうなの？それは知らなかった」

「ああ。あまり知られてはいないらしい。《表》と《闇》を使い分けているからな。《仮面》っていつて、《闇》では本物の仮面を付けてるんだ。正体を隠す為に。詳しい事は俺も知らないが、まあ、一応気を付けた方がいいらしい。《仮面》の場合、その対象を文字通り殺すみたいだからな」

「へえ」

奴がね、と夜空は肩を竦めた。それは、同じような内容を聞いた時の『あいつにそんな事が出来るのか』という満月の反応に似ていた。来夜の言葉を黙って聞いている月姫は、一人心配そうに顔を引きつけている。

大丈夫だっただろうか、月姫の前でこんなリアルな話をして。

「氣いつけるよ、嘉。お前、そういうのに何かと巻き込まれやすいんだから。クズだとしても、あいつは面倒だぞ？《仮面》でこられたら余計な。肉弾戦でこられたらお前太刀打ち出来ないだろう」

ん？と来夜は半ば真面目な表情で私に言葉を投げた。口調は冗談半分だが、その目は真剣に心配しているという色をしていた。

本当に、私の身を案じている。

「……………」

私は言葉に詰まった。

来夜にこういう目で見られるのは初めてかもしれない。今までこういう機会がなかったから当然だ。

しかしその瞳は真剣。

こっちが狼狽えてしまう程に。躊躇い、身を引いてしまう程に。どうして、こんな表情を私に向けて。

頼むから、そんな表情で私を見ないでほしい。頼むから——「遅かったな。うん。もう目付けられてるんだよ」

私は視線を床に這わせ、敢えて軽い口調で来夜に返した。そんな心配するようなことじゃないということと、真剣な来夜の表情を直視出来なかったからだ。

その答えに、来夜は啞然としたように口を開いた（月姫も反応した）。

「……お前、そんな平氣そうに当たり前の言うなよ」

「大丈夫。あいつは臆病者だから。そう簡単には手を出してきたりしない」

「まあそうなんだろうけど……」

心配そうな来夜の声色。口の中で何やら呟いてそれを飲み込んだ。本当に頼むから、そんな心配そうな表情（かお）するなよ。私達はそういうものじゃなかっただろ。

「そんな顔するなって。私は《傍観者》だ。怖いものは何もない」何か巨大な岩のようなものに押し潰されそうな心を抑え、私は来夜に言った。

私に向けられる、私を氣遣う表情に耐えられる程、私は強くない。今はそれに耐えられない。

それに私は、あんな奴如きに崩されたりはしない。絶対に負けたりしない。

《傍観者》として。

負ける訳にはいかないんだ。

「そうだよな。心配無用か」

来夜は《逆》の笑みでにやっと笑い、不安を払拭するように食事を再開した。

私も再び箸を進める。

「……………」

ふと、ずっと黙って私達の会話を聞いている月姫に目をやる。月姫は何かを考えるように、ゆっくりおかずを噛んでいた。

多分彼女の中には、私に訊きたい質問があるのだろう。

「……………」

私は彼女から視線を外して味噌汁に口をつけた。

「さっきの話だけど……………本当に平気なの？」

来夜と夜空が帰り、やがて寝室に戻ろうかというタイミング。

ソファに腰掛ける私に月姫は静かに尋ねてきた。大好物の牛乳を飲みながらカーペットの上に座っている月姫は私の方に目を向けている。

決して私を映さない盲目の瞳で。

しかしまるで私を見つめているかのように。

私は目を細めた。

「さっきのって、あの教師の話？」

「そう。嘉がこの前電話で言ってた『不穏』と関係あるの？」

「ああ」

私は隠すことなく頷いた。

月姫には誤魔化しは効かない事を知っているし、あそこまで話して隠せるなど毛頭考えていない。いずれ月姫にも話すつもりだった。

月姫は天井を向いて瞼を閉じた。

「来夜さんがあれだけ心配してるんだもの。ちょっと面倒くさい人なのね、その先生。危険なんだっていうのが伝わるわ。嘉にとってはどうってことないのかもしれないけど。でも、その、『仮面』と

して来たらどうするの？私、そこが一度気になってるの」

「そんなに心配する程じゃない。《闇》の人間ではあるけど、そんなに有名な奴ではないから」

もし身体的な危害を加えられようと、《仮面》として攻撃されようと、精神の《抗争》には絶対に負けない。脅威か否かを考察する程大したことでもない。

たとえ一時的に劣勢に立たされたとしても、必ず挽回する。今までもそうやってきた。

私は《傍観者》だから。

「そうよね。嘉は《傍観者》なんだから」

月姫はにっこりと笑みを零してそう言った。心配の色がまだ残された声色だったが、大丈夫だと自分に言い聞かせているようだった。そして一度地面に落とした視線を再び上げ

「ねえ、嘉」

月姫は再び私を呼んだ。

「なに？」

「あまり無理しないでね」

切り返した私に、月姫は穏やかな声でそう言った。同じ穏やかな表情は、微かな不安の含まれた微笑みをたたえている。

私はその微笑みをじっと見つめた。

《不穏》の度に月姫はこの言葉を私にかける。私を氣遣って言葉を晒す。

こんな私なんかの為に。

今まで『心配』というのをされたことがなかった分、心配される度になんだか物凄く違和感を感じてしまう。これが『普通』なんだろうけれど。

「多分無理はしない」

私は返した。

本当にくだらない《不穏》だ。私を失墜させようとしているという割には、生ぬるいし生半可過ぎる。先月の《不穏》よりは確かに

面倒くさいが、それでもイマイチだ。

それでも。

月姫には、あまり『心配』の表情をしてほしくなかった。らしくないが、そう思っている私がいた。

月姫には、もう《不穩》を経験させたくない。辛い思いをさせたくない。『そういうこと』は〈あれ〉だけで十分だ。

だから私はそう答えた。

月姫はそれを聞いて、曇りのないいつもの穏やかで綺麗な微笑みを見せた。

それはまるで私という存在全てを包み込むように。

「大好きよ、嘉」

【性質】

伝えたい言葉を封印したまま

我武者羅な思いを弄ぶ指先

―深夜満月―

「……………はあ」

私は溜め息をついて、ガチガチに固まった首を左右にゆっくり回しながら廊下を歩いていった。

今日はなんだかいつもの倍以上に体がだるい。あまりにもキツかったので保健室で眠ってきたその帰りだ。

保健室を出る前に、あのオレンジの髪の保健医、銀斧ぎんおの願ねがいが『首が相当こってるから回すといいよ☆』と語尾に星まで付けてアドバイスをくれた。頭痛が続くのは御免なので今そのアドバイス通りに首の体操をしながら教室に向かっているところだ。

授業中なのだろう、静かな廊下。人の気配が全くしない。

実はこの河柳学園はなかなか優秀らしく（金持ちの坊ちゃまなんかが通うんだ、当たり前か）、サボりは滅多に居ない。授業中は廊下が滅茶苦茶静かだ。

まあ、私は一応サボりではないけれど。

（うーん……………キツいなあ……………）

ふう、と溜め息。こういう時は出来れば静かに過ごしたいものだ。多分それは叶わない願いになるんだろうけど。

と思ったその矢先、

（……………げ）

廊下の向こう側に今一番遭遇したくない人物を見つけてしまった。しかもバックする以外逃げ道がない。向きを変えてもその先は結局行き止まりだ。

藤紅藤。なんでよりによってこんな時にタイミング良く現れるんだ。お前は疫病神か？暇人なのか？それとも《不穩》同様、私がこいつを引き寄せているとでもいうのだろうか。

藤は私を認識するとツカツカと歩いてきた。私は逃げる気も闘う気すら失せてその場で足を止めた。逃げるだけ体力の無駄だし、もうこの際どうにでもなれという感じた。相対して気力を使った方がまだマシだ。

正面に立ち止まった藤は見下すような目で私を舐め回し、同じ感情が含まれた声色で言葉を晒した。

「この河柳の生徒でありながら、よくまあ簡単にサボれるわね。銀斧先生にどんな風にたらし込んだの？」

「……………」

お前じゃねえんだよ。くだらない。思考回路、おかしいんじゃないか？

お前こそ河柳の教師でありながら、正真正銘のくだらない事をしているだろうが。一緒にするな。

私はぐっと言葉を飲み込み無視を決めてそのまま通り過ぎようと足を前に出した。もうこいつと数秒でも一瞬でも近い空間にいたくなかった。

しかしその瞬間

「……………」

藤はそんな私の態度に頭にきたのか、私の胸倉を掴み、背中を壁に叩きつけた。大して痛くなかったが、私は（面倒くさ）と藤を睨み付けた。

その眼鏡の奥の目は、煮えたぎる憎悪に満ちている。その口から出る言葉も、尋常ではない憎しみが込められていた。

「そんな顔していられるのも今のうちよ。あんたには『敬意』とい

うものを教えた方が良さそうね。どうせ権力の前には何も立ち得ないのよ。ただの『庶民』が」

思い切り私を見下す口調。軽蔑と侮蔑の言葉。

「いつまでも自分の思い通りになると思ったら大間違いよ。最後に笑うのは誰か今に分かるわ。必ずあんたをこの学園から追い出してやる」

まあ、立派で下らない、取るに足りない決意表明で。

私は只藤を眺めていた。

私は怯まない。

怯えや恐怖も脅威も

最早、何も感じない。

それこそ、

怒りや憎しみ、憎悪や嫌悪感

そういったものさえ失せていた。

どうせこいつは私に勝てないという事を、私は知っている。こんな奴に負ける筈がない事を私は知っている。

負ける方が難しいだろう。負ける気がしない。

それに私は、遊びで負けてやれる程陽気な奴じゃない。氷鳥なんかは《敵》を『そういう』風に翻弄して遊んだりもするようだが、私はそういう事はしない。

そしていつまでもこいつのくだらない『ゴタゴタ』に付き合ってやれる程気は長くない。

しかも、『敬意』って。

こいつの口から出てくるにはあまりに不似合いだ。違和感しか感じない。無意味で、その言葉の意義さえ消え失せてしまう程にあまりに薄っぺら。

「あんたらを消すわ。《表》からも、《闇》からも」

不意に何の前触れもなく、囁くように藤は宣言した。その言葉に、私は藤を睨み付ける。

藤は《闇》を見据えた目で私を睨み付けていた。不意に纏った《闇》。自分がその《世界》に居る事を主張するように。敢えてそれを私に突き付けるように。

『《闇》からも』。

それは、いずれ《仮面》として私と闘うという事以外の何でもない。そして恐らくこれは、私が《傍観者》である事を知っているの。宣戦布告。私が《闇》に居る事を知っているとすれば、そういう事になる。

やれるものならやってみろ。

「五月蠅いんですよ。さっきからギャーギャーギャー」

私は何の感情も持たず、藤の胸倉を掴み返した。左手でシャツをぐっと驚掴みにする。驚いた藤は、ずっと掴んでいた私の制服から手を放した。

これも作戦の一つか？

「……………」

「……………」

私と藤は睨み合う。

只睨み合う。

藤は憎悪と怒りを持って、私は無感情に睨み合う。

今のこの状況では、もし誰かに見られたりしたら完璧に私が不利ではあるけれど。そんなことどうでもいい。ここまできたら相手になってやる。

闘ってやるよ。

「何やってんだ！」

と、なんともタイミング良く、またもやあの男性教師の声が廊下

に木霊した。視界の端から段々その姿が大きくなってくる。

その教師は走り寄って来たかと思うと藤の胸倉を掴む私の手を勢い良く引き離した。藤は既に『演技』に入っており、目を潤ませ肩を震わせてその教師にすがりついている。

やっぱり作戦の一つだったか。

気持ち悪っ（何度この台詞を吐いたか………）。

「あなたこそ、いつまでも自分の思い通りにいくと思ったら大間違いですよ」

男性教師を無視し、藤に侮蔑と軽蔑の敬語をもって私は言う。奴を拒絶する『敬語』で。今誰に誤解されていようが、そんなことはどうでもいい。痛くも痒くもない。障害にすらならない。

こんな手しか使えないのなら、こいつを潰すことなど造作無いことだ。呼吸のようにそれは完成させられる。

「天星織。お前、藤さんに食ってかかって、一体なんなんだ？ 今といい、この前のことといい」

藤を庇い、私を睨み付けて言う教師。その教師の背中越しに藤は勝ち誇ったような表情を私に向けていた。まるで自分が優位に立っていると勘違いしているようだ。勘違いも甚だしい。

これだけで勝利出来ると思うなよ。

私は藤を無視して目を細め、その男性教師に目を向けた。目を細めたまま不快を表わし口を開く。

面倒くさいから早くどこかに行ってくれ。

「先生………もしかして、この人のこと好きなんですか」

「……………は！？」

途端、目を見開き慌てふためくその教師。誤魔化そうと必死に表情を引き締める。あまりに分かりやすい反応だ。こんなあからさまな反応は随分と久し振りかもしれない。啞然としてしまうくらいにはつきりし過ぎていた。

（絶対に、絶対にやめといた方がいいと思うけどな）

そう思ったが、あくまで私の個人的な意見だしこの人に忠告する

義理もないので、私は口を開かないことにした。誰が誰を好きでも、私には全く関係ないし。関心も興味もない。

そんな事より、頭痛も酷いんだ、早く解放してくれ。

「……………気を付けろ。もう藤さんにつつかかるんじゃないぞ」

その私の声が届いた訳ではないと思うが、その男性教師は捨て台詞を吐き半ば逃げるように、藤を庇いながら向こうに歩いていった。私は取り敢えず解放されたという安堵の溜め息をつく。

そして。

「……………」

少し前から感じる視線。その源を探そうと見回すと、少し離れた柱に隠れてこちらを窺うようにしている満月を見つけた。私と目が合うと、満月は苦笑いを浮かべた。

「……………や」

「……………」

「ごめん、盗み見してた。出てこない方がいいかなって思って」

「知ってた。来なくて正解だった」

言うど柱からぴょんと出てきて満月は隣に並んできた。私の顔を覗き込んでずっと笑顔を消す。

「面倒くさいっていうの剥き出しだね。……………頭痛酷いの？」

「最悪」

「頭痛と藤さんのダブルパンチだね」

言って藤が去った方に目をやる。その横顔はひどく冷え切っていて、嫌悪感が色濃く出た表情だった。満月のこんな露骨な表情もなかなか珍しい。

「なんか、ほんと嫌なヤツだね。段々気持ち悪くなってきた」

おえ、と顔を歪ませる満月。マジで吐いてしまいそうなくらいだ。「今に始まったことじゃない」

返し、再び溜め息。頭痛は良くなる気配を見せない。奴と相対したからか、余計ひどくなった気がする。

こんちきしょう。

「……………」

と、満月のオーラが、研がれた刃のようになっていていることに気がついた。

満月は藤が既に去った方向に目を向けたまま、じっとそこを睨んでいた。その纏ったオーラは普段のものとは比較にならない程強烈なものだ。負の感情しか纏わないオーラ。

まるで《本気》のような。

《傍観者》としてマジになっているような。

「夜月はね」

不意にトーンを落とした声で、満月は沈黙を切り裂いた。

ぐっと拳を握り締め唇を噛み締めるその様子は、これからただ事ではないことを口にする直前のような、そんな雰囲気纏っている。

恨みで塗り固められた声色。まるで呪い。

そして満月は同色の声色のまま言葉を綴る。

「夜月は本当に無邪気で純粹で、あたし達と違って《不穩》の《世界》には居なかったの。夜月だけはそのままできてほしかった。あたし達の《世界》に無関係なまま『普通』に生活してほしかった。

……ううん、きっとそれは無理だったかもしれないけど、多分叶わない願いだったかもしれないけど、せめてあともう少し、もう少しでいいから『楽しみ』に溢れた場所で生きてほしかった。一秒でも長くって、そう願ってた。……なのにあの人を奪ったんだ。下らない、自分の快樂の為に」

夜月が晒した真実を明かした言葉を思い出しているのだろうか。今の藤の様子を見て感情がふつふつと再び煮え立ったのだろうか。

満月の瞳には怨みに似た感情が深く渦を巻いていた。今にも大爆発を起こしてしまいそうなくらいにそれは煮えたぎっている。

満月の中の感情は、冗談抜きで尋常なものじゃない。最早それは抑えるのに疲れ果ててしまいそうな程強く大きくなっている。

しかしそれを堪え制御出来るか出来ないか、それは満月の『勝敗』を大きく分ける。満月も、それは十分理解しているだろう。

「……………ふう」

満月は自分を呑み込もうとする感情を自ら抑えるように深く深呼吸し、次の瞬間にはいつもの笑みを浮かべて私を向いた。

それは、自分の中に潜む獣を抑えつける表情。理性を保とうとする強い表情。

「へへ、もう少しで暴走するところだったー。危ないね。もしかしたら、あたし爆発して止まらなくなるかもしれないな。今回は。その時はよろしくね、嘉」

「なんだよ、よろしくつつうのは」

「うん。色々ひっくるめてよろしく☆」

そしていつもの調子に戻すようにおどけた口調で言い、にっこりと笑った。

（……………）

私は満月の中での葛藤を感じて目を細めた。

あんな奴に乱されたくないと思い自分を制御する『理性』と、今すぐにでも奴を《破壊》してやりたいという強い衝動。その狭間に揺れながら必死に理性を保とうと意識している。来たるべき『その時』まで耐えようと堪えている。

一度芽生えた破壊的な感情はそうそう消えるものじゃない。それどころかどんどん強くなっていく。

《不穏》は霞んで見え、その強い衝動を抑えることは骨が折れる。^{けだもの}それを放棄してしまいたくなる程に。それでも、本能だけの獣にはなりたくないと思う。

故の『よろしく』なのだろう。

「……………」

私は今は答えず、只前に目を向けた。

答えはその時に出る。

だから今は黙っておく。

【性質（2）】

授業が全て終わって、学園での一日を終えた後。

私と満月、そして氷鳥は当たり前のように『indigo』のスイートルームに居た。藤のことがあって、ほぼ毎日のように情報交換の為に此処に来る。半ば習慣のようになっていた。

「ね」

注文を終えウェイターが部屋を出ると満月は早速本題に入る構えを見せた。向かいにゆったりと腰掛ける氷鳥に質問を投げかける。

「氷鳥は知っているでしょ？自主退学になったっていう三年生のこと」

「勿論知ってる。あいつがそう仕向けたんだろ」

「そう。でもそれって《裏》情報なんでしょ？」

「そうだな。あいつが自分の”本性”知った奴は処分したり脅したりして情報をコントロールしてるし、疑問に思ってもみんな敢えて表に出さないからな。今のところ、うまい具合に真実はうやむやにされているな」

「じゃ、意外に藤の『本性』知っている人は多いかもしれないってことだね」

「多くはないが少なくはないという感じだな。もしかしたら、想像以上に多いかもしれないし、少ないかもしれない。《表》での出来事だしあまりはつきりはしないけど。でも何故藤があんなに威張っているのか俺には理解出来ないな。ほんと、ふざけた野郎だぜ」

大した家でもないくせによ、と嘲るように氷鳥は鼻で笑った。そりゃ七強に比べりゃな、という私の心のツツコミは聞こえる筈もなく、天井を仰いで一つ溜め息。

「俺もその三年の事はあまり詳しいことは聞いてないけど、大まか

な事は知ってる。その三年の父親は小さな会社を経営しているみたいなんだけどな、藤が自分の家の権力使って倒産ギリギリに追い込んだってのは聞いた。取引相手に金送って取引を止めさせたりとか、嘘の不祥事を作ったり色々な。本人にも危害を加えたらしいしな。敢えてここでは言わないが、他にも聞いて呆れるくらい色々。で、またタイミング悪く病気になってしまったんだと。その三年。そして全て終わらせる為に自主退学した。ま、あんな奴が居る学校にいつまでも居たいとは思わないだろうしな。具体的な理由は知らないけど」

窓の外の景色を見下ろし、氷鳥は一つ息を吐いた。

氷鳥に入っていた情報は、《偽善者》から聞いた情報とほぼ同じ感じだった。あまり必要性を感じなかったが《情報屋》から聞かなかったのだろう。十分なものではあったが、氷鳥にしては深い内容ではなかった。確かにそこまで深く掘り下げる必要はない。

恐らく私達の場合とは状況が全く異なっている筈だから。あまりその三年の情報を入れたところで、何も大して変わらないだろう。他人の事は根掘り葉掘り聞くものじゃない。

「何故あいつはその三年の時みたい私達の周りの人間を攻撃したりしてこないのか。何故もっと私達に強烈な圧力をかけてこないのか。様々な角度から攻撃してこないのか。そこが鍵って感じだな」

私は腕を組み、一点を睨み付けながら呟いた。

すると無言でケーキを一生懸命（一心不乱、とでもいうのか）口に運んでいた満月が顔を上げた。一旦手を止め、うっすらと、意味深な笑み。

「そうだね。まあ、そう簡単には攻撃しないでしょ。いくらあの人が馬鹿でも。というか、あたし達の周りの人は攻撃出来るような対象がいらないのかな。あたしは財閥七強分家の従姉妹だし、理事長を味方にしようと思えば出来るし。しかもそれプラス嘉は《傍観者》として《闇》では有名だし、嘉の長男兄さんも《闇》の恐ろしいネットワーク持ってるでしょ。嘉の長男兄さんだけでもネット

にはなると思うよ。そっちの方が怖いかもね」

「あの人が私の為に動くななんて有り得ないけど」

「そう？でも万が一そうになったら、藤は速攻地獄行きじゃない。それだけじゃ済まないかもしれないし？河柳に居る人間で、長男兄さんの『伝説』を知らない人は多分いないと思うよ。河柳（こし）に在学していたみたいだし、永遠のレジェンドだもの。それに藤は一応『闇』の人間らしいし、それくらいはわきまえている筈だよ。出来るだけ『敵』にはしたくないだろうね」

「いずれにしても、あいつは迂闊には手え出せないんだろうな。流石にそこまで馬鹿じゃないだろうから」

そう満月に返す。その私の言葉に、ティーを味わっていた水鳥が顔を上げて口を開いた。

「もしかしたらあいつは、二人を嵌める為の良い『罠』をなかなか探せずにいるのかもしれないな。『策』を練る段階で既に苦戦を強いられてるんだろうよ」

私達の会話の流れに沿うように加わる。そして流れるように言葉を晒し始めた。

「藤は二人が『傍観者』であることを知っているだろ。だから余計歯がゆい思いをしているだろうな。奴だって『傍観者』の『性質』を知らないという事はない筈だ。その聞いた噂通りに、二人の『性質』が忌々しいまでに自分の計画の邪魔をしていることに、腹が立ってしょうがないだろうな」

「……………」

「『傍観者』の『性質』。『不穏』を自分の周りに集め引き寄せはするものの、やがて自分にとって不利な状況を必ず有利に動かす。『敵』にとって、物事をやりにくくする。まるで第三者が、裏で物事を意のままに操っているかのように。まるで嘲笑うように『敵』の攻撃を無意味なものとし、やがては『不穏』そのものを味方に付けてしまう。今のところ『闇』の『不穏』とは少し違うが、その『性質』に阻まれて、思うように事を運べないでいるんだろうな。ま

して、まだまだペーペーのあんな弱者だ。奴は勝つ気満々のようだが、勝利出来る筈がないんだ。二人に手を出したのがマズかったな」

氷鳥は軽蔑を口調に込めて目を細めた。その鋭い視線は、藤という存在を突き刺し斬り棄てているようだった。

《傍観者》。

『傍らで観る者』という言葉では包含できない意味を持つ異名（呼び名）。勿論最初に自分で名乗った訳ではないし、いつからそう呼ばれるようになったのか覚えていない。

しかしこの《種族》は特殊だと言われているらしい。

氷鳥が言った通り、うんざりする程《不穩》を引き寄せ、嫌になる程《敵》を引き寄せる。しかし《敵》のペースを狂わせ乱す。時には絶対絶命の劣勢に立たされながら、あつと言う間に形勢をひっくり返す。そして何事もなかったかのように自分の《世界》を保ち続ける。

他人ごとのように言うが、身に覚えがないわけではない。そう言われればそういう感じがする。確かに今まで数々の《不穩》を経験してきたが、凶暴で狂暴な連中の多い《闇》の《世界》で武術の心得も何もない私が《傍観者》のまま今此処に居るということが何よりの答えになっている。

どんなに力の差があろうと、どんな《不穩》をふっかけられようと、どんなに劣勢になろうと私は《不穩》を纏い『自分』を護り続けてきた。《傍観者》であり続けてきた。

今回の藤も、生温いと感じるのはそういうことなのだろうか。私達の『性質』があいつの計画をことごとく無効化しているということなのだろうか。

恐らくそうなのだろう。そして満月の言う通り、私達の背後に居る存在も更にネックになっている筈だ。

満月は氷鳥という、財界を牛耳る『財閥七強』の一つの一族の従姉妹だし（金がどんな力を持っているか、藤はよく知っている）、しかも氷鳥は、河柳学園高等部・大学部の理事長の甥にあたる。そ

の気になれば藤を捻り潰すなど容易いことだ。

そして動かないとは思うが、私の長男兄貴や、学園に在籍している（のかしていないのか分からないような奴もいるけれど）その他凶暴な兄弟も脅威なのだろう。

只私達の性格を読んで、誰かに助けを求めたりしないことを知っているから、攻撃の手は止めたりはしない。恐らく夜月もそんな感じで攻撃されたのだろう。その辺り行動や思考を読まれているようで癪に触るが、それはしょうがない。奴如きに助けは必要ない。否、自分から《依頼》する必要はない。

あんな奴、脅威にすらならない。
必ず、叩き潰す。

「だからもう少し《表》で攻撃して効果が零だと分かったら、《闇》の顔で攻撃してくるかもしれないな」

氷鳥はブラックコーヒーを一口飲み、静かなトーンで言った。目を上げた私達を交互に見つめて目を細める。

「もう二人には自分の《闇》の顔を知られても構わないと思っているのかもしれない。だから敢えて嘉に『《闇》からも消してやる』と言ったんだろうな。近いうちに潰すから、敢えて隠す必要はないって思っているかもしれない。多分藤は、《仮面》としてまず嘉を狙う」

そう言って氷鳥は私に視線を固定させた。真剣そのものの表情が私を捉える。

それは、あの来夜の表情と似た色をしていた。私の身を案じるような心配が滲む表情。

「分かってる」

私はその氷鳥の視線から逃げるように視線を伏せて答えた。

こいつまで私を心配して。

私はまた心にのしかかろうとする何かを必死に払うように目を上げた。

「分かってる。私は肉弾戦は全く出来ないから、だろ。片付けやす

いと思うだろうな。だけど、負ける気はしていない。大丈夫だから」
頼むから———そういう表情かおを私に向けないでくれ。本当に、本当に。

「そうか。あまり無理はするなよ」

私の思いを感じ取ったのか否か、氷鳥は薄く笑って表情を変えた。意識して軽い口調で紡がれた言葉。以前にも似たようなことを言われた気がする。まるで月姫が細ぐかのような言葉。

もし《仮面》として攻撃してくるとしたら、先月の《不穩》の時のように氷鳥の助けが必要になるかもしれないけど。でも、今のところは。

私は目を細め、その氷鳥の言葉に応え、宣言するように口を開いた。

「奴に《闇》での《報復》を。そして《表》で《罰》を」

私は

私は《傍観者》だから。

【駆け引き】

ずっと叫んだ

声が死ぬまで

誰だって

認めたくなくても

結局は孤独

―天星織紫幸―

『ヒロ、藤とやり合つとると?』

開口一番。

電話の向こう側は、冷やかすようにそう言い小さく笑った。

《偽善者》。

久しぶりというわけではない電話。相変わらずの雰囲気。まるで私が《不穩》に居るのを面白がっているような口調に私は眉を顰めた。

「楽しいか?」

『そんなじゃないとよ。やっぱりないと思って』

そう言う声は、やはり笑っている。

何か楽しんでいるような口調。あの偽善的な貼り付けられた笑みが見えてくるようだった。

否。

こいつは笑ってはいても、楽しんでも喜んでもいない。ちょっとだけお得な情報があるんよ。きっと役に立つ』

「……………ほう」

『あのな、藤の本性知ってしまつて、脅されてる生徒がおるんよ。その生徒使って何か仕掛けてくるかも知れんよ、藤』

「……………そいつを口止めする為か？」

『そんな感じ。たまたま陸上部員に絡んどるところをその生徒に見られたとよ。あいつも結構マヌケやからねえ。で、「退学になりたくなければ」みたいな感じでその生徒を脅して使つて、何かやらかしてくるよ。近いうちに。しかも嘉と同じ一年の生徒に見られているから、藤にとっては使いやすい。これはあたしが直接《情報》として得たものだから間違いないわ。ちよつとだけお得な情報があるんよ。きつと役に立つ』

「……………ふうん」

『あのな、藤の本性知ってしまつて、脅されてる生徒がおるんよ。その生徒使って何か仕掛けてくるかも知れんよ、藤』

「……………そいつを口止めする為に？」

『そんな感じ。たまたま陸上部員に絡んどるところをその生徒に見られたとよ。あいつ結構マヌケやからねえ。で、「退学になりたくなければ」みたいな感じでその生徒を脅して使つて、何かやらかしてくるよ。近いうちに。しかも嘉と同じ一年の生徒に見られているから、藤にとっては使いやすい。これはあたしが直接《情報》として得たものだから間違いない。別に言つても言わなくても変わらないかなあと思つたんやけど、一応言つとく。少なくとも損ではないやろ？』

「……………そうか」

私は頷く。

あいつが直接仕掛けてこようが誰かを使おうが、《偽善者》が言うように大して変わらないだろう。それは一時的なもので、脅威にすらならないのは同じだ。《表》での攻撃など、《闇》に比べれば取るに足りないもの。

それでも一応頭の隅に入れておいて損をする情報ではない。役に

立った時の事を考えて取り敢えず覚えておくことにした。

『それじゃ、そういうことで。あたしは密かに見ておくけんね、頑張って。あ、別に頑張る必要もないか。ヒイロがあいつに負ける訳ないもんね』

そんな台詞を最後に、《偽善者》との話を終えた。

「……………」

私は数秒携帯を見つめ、溜め息をついた。

何故《偽善者》の彼女がこうして私に情報を流してくるのか分からない。情報を供給し合う程親しい仲ではないし、殆ど接した事もない。しかし動機を探るのは時間と体力と気力の無駄遣いなので敢えて追求しないことにした。あいつは裏が有りすぎる。だから理由は考えない事にする。

あからさまな《敵》ではないのだから、そこまで追求する必要はないだろう。

私の《敵》は別に居る。

「……………」

また一つ、事は進む。

【駆け引き(2)】

「深夜さん。ちょっといいかしら」

藤の授業が始まった時の出来事だった。教室に入るとそのまま藤は満月の席の前に立ちふさがってそう満月を呼んだ。やる気なさに机にだらりと突っ伏していた満月は上体を起こし、怪訝の表情を藤に向ける。

『またなんなんだよ』と言いそうなあからさまに不機嫌な表情。唇が面白くなさそうに尖っている。

対する藤は何か困惑しているような、言い出しにくそうな表情。言うまでもなくそれは演技で、演技以外の何でもない事を私は知っている。私の肌は無意識のうちにゾワゾワと鳥肌が立っていた。

ここ数日、藤はやけにペースを上げているような気がする。様々な《策》を試している。何か焦りのようなものが少しずつ出てきているようだった。今のこの状況も、その延長のようだ。

(いくら《表》で《策》を巡らせても無駄なんだって。《闇》の人間のくせにそんな事も分らないのか?)

また何かやらかすつもりらしい藤を見て溜め息。また下らないことを始めるんだろうなあと思いつつながら私は左手で頬杖について二人に目を向けていた。

クラスが波を打ったような静寂に包まれている。勿論異様な雰囲気を感じているのは私だけではない。クラス中に伝わる程、満月と藤のオーラはピリピリしていた。ほぼ全員が固唾を吞んで二人に視線をあるいは意識を向けていた。

そして全員の注意が集まるのを待っていたように、藤は口を開いた。

いつものぶりっこに、プラス更に演技を加えて尤もらしく。

「あなたが私の財布を盗るのを見たって情報があるの。ちょっと荷

物を見せてもらってもいいかしら」

「……はぁ？なんですかそれ」

くだらないというように満月は怪訝の表情を歪ませた。予想していなかった台詞だろうが、驚いてはいない。只『ムカついた』という表情で藤を睨み付けている。クラス中が引いてしまう程その満月のオーラは怒りに満ちている。

藤は『疑うのはとても辛いけど』と前置きして（よく言うよ）再び口を開く。

「そういう情報があつた以上、形だけでもやらなきゃいけないの。疑われたままなのは嫌でしょう？ちょっと協力してもらえないかしら？」

「別に疑われたままでいいです。あたしはそんな下らないことしませんし他人の評価なんてどうだっていいですから」

優しさをつくろう藤をはねつけるように満月は言い放つ。どうでもよさげな口調で、面倒くさいというように。藤には目も向けない。しかし藤も粘る。

「お願い、深夜さん。私の財布が本当に行方不明になっているの。困っているの」

「……………そうですか」

満月はあくまでも興味なさげに言い、逸らしていた視線を向けて藤を強く睨み付ける。強い嫌悪感の視線。こんな満月を見るのが初めてなのだろう、クラスはどうしていいか分からないというようにそわそわし始めた。確かに居心地は悪いだろうな。

もうこの時点で藤が今度はどんな策を打ってきたのか分かっている。

（次はこの手で来たか。マジで下くだらない）

私は小さな溜め息を吐き出す。

今度はクラスに、私達（今の場合満月）を『悪者』と認識させようとしているのか。わざとクラスメートの中で逃げられない状況を

作った。そしてクラス、しまいには学園で居心地を悪くさせるつもりなのか？クラスを自分の味方にして私達を弾き出すつもりなのだろうか？そしてその輪を広げていくつもりか？あるいはクラスを『盗み』の証人として満月を失墜させるつもりなのか？

それに私達が堪えると思ったら大間違いだ。

《心理戦》なら負けない。

「……………しつこいですね。見たらいいじゃないですか」

もう目も合わせたくないというように満月は視線を外し、机の横にかけてあるバッグを、ドンと硝子張りの机の上に乗せた。腕を組んでもう藤は見えない。不機嫌や怒りを通り越して呆れが強く出たオラだった。

満月もこれから何が起こるのかある程度予想出来ているのだろう。出来ていない筈がない。

それを見て藤は済まなさそうに顔を伏せ、『ごめんなさい。じゃあ見るわね』と満月のバッグを開けた。バッグの口を開くと同時に、藤の動きが止まる。

「……………深夜さん」

藤の声のトーンが下がった。悲しそうな表情で満月を見つめる――しかし満月は逸らしたまま――。じっと満月を見つめていた藤はやがて視線を外し、満月のバッグの中に手を入れた。

「……………」

満月のバッグから出てきたのは、恐らく藤のだろう財布だった。それだけじゃない。煙草とライターまで転がり出てきた。プラスアルファってわけだ。

（……………うわ……………くっだらねえ……………）

呆れ過ぎて溜め息をつくことすら出来ない。私は只呆れて藤を見ていた。

クラスの空気が一瞬重く揺れる。たくさんの感情が入り乱れる雰囲気は異常な程重い。あまりに色々な感情が漂い飛び交っている為にまだクラスの傾向が読み取れない。しかし動揺し困惑しているよ

うだ。

さあ、どう動く。

「……………」

満月に出てきたものを見せ付けるように机の上に並べ、藤は腕を組んだ。首を振って残念という感情と微かな怒りを滲ませて口を開く。

「悪戯にも程があるんじゃないかしら？ 深夜さん。私に対する嫌がらせにしか思えないわ。本当に悲しい。しかもこんなものまで持つて来て」

「センサーこそ悪戯にも程があると思いませんか？ あたしは呆れてます。くだらなすぎて、もう笑うこともできません。怒るのにも疲れしました。ぶっちゃけここまでできたら、呆れるのも面倒ですよ、本当に」

そんな藤の『演技』に、くだらないという響きしか含まれない声色で満月は言い返す。まるで感情を制御する為に言葉を吐き出すように。

「いい大人のクセして、恥ずかしくないんですか？ センサー、漫画とか小説の読みすぎじゃないですか？ それとも、テレビドラマか映画の見過ぎ？ それかかなり妄想がひどいんですか？ あたし達はこんな嫌がらせをする程暇人じゃないし、餓鬼じゃない。それ以前に、こんなくだらないことする程あなたなんかに興味ありません。嫌がらせ？ つまらないジョークですね。あたしとあなたはこういう関係があるっていうんですか」

藤をとことん見下した口調は言葉を綴り、軽蔑しか含まない瞳は真っ直ぐ藤を睨み付けている。軽蔑と侮蔑が満月を突き動かし、流れる言葉は呪いのように。藤はたじろいで、しかしそれを隠すように必死に平常心を装っている。

「……………」

本当にこいつは、稀に見る汚れた教師のようだ。久し振りにこんなに根性が曲がった、否幼稚な教師を見たという感じだ。なんとい

うか……………本当にアマイ。

そもそもこいつは何故教師などしているのだろうか。理由が知りたい訳ではないが、何が何でも教師をする必要などない筈だ。今回は教師という立場を利用して満月に濡れ衣を着せようとしているが、こんなつまらないことの為に河柳（此処）に居るというのか？

こんなことで私達がどうにかなるとでも思ったのか。
甘過ぎるんだよ。

（……………ん）

と、クラスの雰囲気がいつもと違うことに気付いた。

いつも藤に対して好意的な雰囲気のクラス。さっきまではやや藤寄りだったクラスの雰囲気。しかし今は藤に対する疑念のようなものが微かだが混じっているようだ。満月と藤が言葉を交わしている間に、たくさんあった感情はだいぶ絞られ、一つになってきている。藤のやり方に違和感を覚えたのだろうか、クラスが満月よりの感情で揺れているように思える。

（そりゃそうだ。ここまであからさまだったら）

藤はやり過ぎた。こういうことは、せめて私達当事者だけの場所でやるべきだ。あるいはもう少しましな《策》あるいは《罫》を仕掛けるべきだった。クラスに私達に対する疑念を抱かせようとしたんだろうが、それはかえって自分の状況を苦しくさせるものだった。藤の作戦が裏目に出た顕著な例だ。藤の《策》はことごとく失敗していく。恐らく、これから完全に完成する事なく。決して勝利を垣間見る事すらなく。

こんな奴にやられる気がしない。

「……………っ」

満月は不意に立ち上がり、藤を見据えた。驚き目を見開く藤からじつと逸らさず、そして宣言するように。

そう。それは宣戦布告。

「あたしはあたしの証人になれますよ。あたしはあなたと同じレベルしかない人間じゃない。確かに『普通』よりはかけ離れているか

もしないですけど、あなたみたいに墮落した人格はしていないつもりですから」

敢えて藤を馬鹿にするような口調で。それはまるで敢えて藤を挑発し、その本性をクラスの前に晒し引きずり出そうとしているようだった。どこまで耐えられるか、わざとふっかけるように。

その満月の思惑は、思った通り藤を苦しめ始める。『演技』を続けなければならぬ藤を少しずつ苦しめる。

「深夜さん、言葉は慎んだ方がいいんじゃないかしら。私は教師なのよ。一体どうしたの？」

必死に素顔を押し殺して演技を続ける藤。そろそろ限界が顔を出し始めてきただろうか。その口調は若干上擦っている。周りに誰もいなければ、今すぐにでも満月に掴みかかっているところだろう。

その藤の言葉に、満月は「はっ」と馬鹿にするように笑った。本性を表す事のできない藤を更に挑発し、自らの溜まりに溜まった苛々と憎しみをぶつけるように。

「くっだらない。本当にくだらないよ。つまんない。全然笑えない。何が教師？何が憤み？あなたにそんなこと言う資格、あるんですかね。『一体どうしたの』？どうもしませんよ。あたしはあたしのまま、それだけです。どうかしているのはセンサーの方ですよ。そうでしょう？」

そこまで言って開いた口を閉じ、満月は続きを飲み込んだ。その先はまだ今は言うべきではないと判断したのだろう。

恐らく『その時』はもう少し先。藤を失墜させるのは今じゃない。「あなたの挑戦、受けて立ちますよ。あたし達は逃げも隠れもしませんから。どうぞあたし達を墜としてみて下さい」

満月は言い、『演技中』の藤を睨み付けて意地悪く薄く笑った。見方によっては満月が『悪役』に見えるような表情。

それはまるで己の勝利を暗示するような笑みだった。

「あー、すっきりしたー。超気持ちいいー」

長休みの中庭。気分転換しようと私と満月は図書室ではなく中庭に居た。その日だまりが零れるベンチ（只のベンチではない。超が付く高級ベンチだ）に二人腰掛けて風の音を聞いていた。無駄なくらいに広い中庭には、同じようなベンチや丸テーブルセットが間隔を開けて並べられている。とても静かで穏やかな空間。おまけにドリンクサービスがあり、ウェイターやウェイトレスが行き来しているのが度々見受けられる。毎回ツツコミを入れているが、言わせでもらおう。この学園は本当に何に金使ってたんだ。

そんな中、満月は椅子に腰掛けたまま伸び伸びと両腕を空に突き出して背伸びしていた。何かから解放されたように、清々しいまでに気持ち良さそうにしている。

「にゃは」

すっきりした表情で笑い、ウェイターが持ってきた熱いティーに手を伸ばした満月。なんだか既にこの《不穏》が終わったのかと思うくらいに清々しい。

あれで、ここまで吐き出せたのか。

《傍観者》のオーラをここまで薄れさせる程に。あれ程溜まっていた怒りを薄れさせることが出来る程。

「楽しそうだな」

黙って観察していた私は満月に声を投げた。軽く溜め息をついて足を組む。

満月はティーには口を付けず、うつすら笑って頷いた。

「うん。なんだかね、あたし自分でもびっくりするくらいすっきりしたの。まだ一番大切な事には触れていないけど。でも何て言うのかな、『完全な勝算が見えた』っていうか、『もうこれは完璧な勝

利になるな』っていう手応えを感じたっていうか。言ってやつたりよ。あの人、みんなの前では演技してるしかないんだから、ここぞとばかりにボロクソに言ってやった。あの時の藤の表情、見た？何とも言えない歪んだ表情。もう最高だよ」

「成る程ね」

ということらしい。

とにかく言いたいことをほぼ抑えずにぶつけられたのがよかったようだ。まあ、それである程度発散出来たのであれば言う事はないだろう。

今回の件に関して言えば満月は言わば『キレやすく』なっている。いつもは適当にひらひらと軽く受け流しているような満月が、最後までもつか分からないと本人が言うくらいだ。所々で上手くストレス解消しておかないと後々面倒なことになる。

「でも今回は藤、大失敗だったね。大誤算ともいうのかな」

言い、嘲笑うかのように満月は唇を歪ませて笑った。満月にしては珍しい、シニカルな色の強い笑みで。冷ややかな心の底からの軽蔑の笑みで。

「周りを味方に付けたかったんだろうけど、大誤算。というか、本当にあたし達の『特性』を理解しているのかなって感じだよ。あたし達を馬鹿にし過ぎだよ。あたし達のこと何にも分かってない。もしあれが成功してクラスメートがあたしを白い目で見たって、知ったこっちゃないもん。普段から付き合いはないし、だから何？って感じでしょ。『一般論』はあたし達には当てはまらないんだっ。第一、生温すぎだよ。なんでわざわざ《表》で攻撃してくるのかな。そこから間違ってるよね。どうせなら《仮面》で来たら良かったのに。《仮面》で来たって負けないけど。この勝負もらったね。ま、最初から分かってたけど」

親指を立てて私に向ける満月。その声色はまだ終わってはいない《不穏》に戻ってくるように、少しずつ《傍観者》の色に染まっていた。再び《傍観者》のオーラを纏い始めて。

そして満月が再び口を開こうとした時だった。

「あの」

不意に小さな声がして私達はそこに目を向けた。そこには、私達の座るベンチに近付いてくる一人の女子生徒。二人同時に目をやると、その生徒は早足で目の前まで来てピタリと足を止めた。

そして突然

「ごめんなさいっ」

本当に突然その生徒はガバッと頭を下げた。勿論身に覚えのない私と満月は頭の上にハテナを飛ばし、その生徒を只見る。

長い髪の女子生徒。小柄で、制服を着ていなかったらまるで小学生だ。ここの制服を着ているので河柳の生徒で間違いないと思うが（因みにスカーフピンの石の色で同級生と認識出来た）、制服じゃなかったら明らかなる小学生だ。

状況を把握出来ない私は只その生徒を見つめていた。

その生徒はぱっと上体を起こし、泣きそうな表情で。

「私がやっただけです」

そう突然口を開くと堰を切ったように言葉を晒し始めた。

「本当に、どうしてあんなことしちゃったんだろ……本当にごめんなさい。私、自分のことばかり考えて……怖くて怖くて……今更謝っても遅いですよね。許してもらえませんかよね。どうしたらいいんだろ……本当に本当にごめんなさい……」

「あのさ、取り敢えず落ち着いてよ。ね？」

あまりにも動揺しているその様子を見かねた満月はそう助け舟を出し、ベンチに腰掛けるようにその生徒に勧めた。その生徒は崩れ

た表情のまま、周りを気にするようにキョロキョロしながら恐る恐る座った。

「で、どうしたの？あなた、同じクラスだよね」

満月はその生徒を誘導するように質問する。生徒は何かに怯えたような表情のまま頷いた。満月は自分のティーをその生徒に持たせた。

「これ、どうぞ。そしたら少し落ち着くでしょ？まず落ち着いて。ゆっくりでいいから、整理して、それから順に話してくれる？」

「……………はい」

まだおどおどした感じは否めない。その生徒は小さな声で、ありがとうございます、と言い満月に勧められたティーを一気に飲み干した。熱い筈なのに。舌、燃えなかっただろうか？

満月はそれを確かめ僅かな休止を置いて口を開く。

「えっと。取り敢えず名前教えて？」

「あ、はい。遠井といいます。クラスメートです」

ようやく少し落ち着いたようで、遠井と名乗った女子生徒はトーンを抑えた声で答えた。少し丸顔で目も大きく、やっぱり小学生にしか見えない。うーん、クラスメートにいたっけ。クラスメートの顔を覚えていないので何とも言えないけど。

幼い遠井の顔。その表情はやや影がある。

「で、さっきの話だけど」

誘導するように満月は遠井に目を向けた。《傍観者》を押し込めて接する。

「どうしたの？」

そして無駄な言葉は省かれた問いを投げる。しかし物事の真髄はしっかりと捉えている問い。

その満月の言葉に一瞬体を固め、遠井は視線を落とした。唇を噛んで深く息を吐く。膝の上の拳は強く握られている。

「……………」

その様子を見て私は《偽善者》の言葉を思い出していた。その言

葉一つ一つがありありと蘇ってくる。

(……………このことなのか?)

私は黙ったまま遠井に目をやっていた。じっと遠井が口を開くのを待つ。

やがて遠井は決意したように顔を上げた。その表情を殆ど形作っていた先程までの迷いや戸惑いは薄くなっていた。

そして。

「本当に言い訳にしかないですけど、聞いて下さい。私、藤先生に目を付けられているんです。言う事を聞かないと退学にする、酷い目に合わせるって言われて……………それで藤先生に言われて、深夜さんのバッグに藤先生の財布と煙草とライターを入れたんです……………」

「……………」

その瞬間、《偽善者》からの情報と繋がった。生徒を使って何か仕掛ける、と言っていたあの事が蘇ってくる。

ごめんなさい、と潤んだ目を深く俯かせる遠井。そこに嘘や偽りは見られない。成る程な、と溜め息をついて私は視線を外した。

更に満月は追求する。

「そうだったんだ。それは分かったけど、どうして遠井ちゃんはあの人に脅されているの?」

「はい。藤先生が陸上部員にすごい理不尽な理由でいちゃもん付けているところを見ちゃったんです。あの、同級生の河原吟って知ってますか?体育科の。あの人に酷い事言ってたんです。本当に理不尽な事を。それにたまたま出くわしてしまっ……………その時の生徒はいつもの藤先生とはまるで別人で。まさか藤先生があんな人だっ……………」

「で、『痛い目に遭いたくなければ手を貸しなさい』と。そういうこと」

「はい。それであんなこと……………本当にすみません」

遠井は何度目かになる謝罪の言葉を口にして頭を下げた。

どうやら紅藤はまだ吟に絡んでいるらしい。しかもまた見られたのか。全く、呆れたものだ。餓鬼じゃあるまいし、少しは学習してほしいものだ。あまりに詰めが甘過ぎる。というかここまできたら、只の馬鹿としか言いようがない。

満月は不安に押し潰されそうな遠井を安心させるように『大丈夫』と呟いた。テーブルに頬杖をついて淡く笑う。

「しょうがないよ。あんなこと言われたら。やっぱり恐いだろうしね。あたしなら全然なんともないから大丈夫」

「……………」

満月の言葉に、泣きそうな表情を満月に向ける遠井。既に目にはうるうると泪が見えている。

満月はスッと表情を真剣なものにし、遠井に言った。

「でね、あたし達とこういう話をしたのは藤には内緒にして？あたし達とは何も話さなかったし、聞かなかった。全く接点はない。いい？辛いとは思うけど、今は藤に何を指示されてもその通りにして？それがあたし達を嵌める為のものだったとしてもね。藤を失墜させるにはそれが必要なの」

「……………え？」

その満月の言葉に、明らかに動揺して満月に目を向ける遠井。遠井から見れば私達のやり方や考え方は、自らの首を絞めているように感じるのだろう。

そんな遠井に満月は続ける。

「藤は今まで、こんな風にたくさんさんの生徒を退学にしたり精神的身体的な虐待をしてきたの。つい最近自主退学した三年生も、本当は藤が本当にあらゆる汚い手を使って追い込んだの。そんな奴がのうのうと教師しているのはおかしいと思うでしょ？そんな事をもうさせない為に、あたしと嘉は闘わなくちゃいけないの。これだけじゃないけど、闘わなくちゃいけない理由があたし達にはあるの。だから、お願い。そうなった時は協力してほしいんだ」

「……………分かりました」

不安の混じる声色だったが、遠井は頷き、それを快諾した。遠井自身追い詰められている身だから、残される選択肢も少ない。恐らくこれが最善の方法だ。

そして満月は断言する強い口調で遠井に宣言した。

「大丈夫、安心して。絶対にあなたを退学になんかさせない。藤に好き勝手にはさせない。どんな事をされても、あたし達は絶対に負けないから。だから、見てて？」

「……………すみません。本当にありがとうございます……………」

とうとう遠井は泣き出してしまった。

【駆け引き(3)】

その日の帰りは、一人で帰ることにした。

元々一人で帰ることが今まで多かった。最近は満月とよく連んだりしていたので独りになる時間がすごく限られていた。久し振りの『独り』に私は安堵の溜め息をついた。

私は基本的に一匹狼だ。今まで殆どの時間を独りで過ごしてきた。それが日常であり当然だった。今もその感覚は変わらない。恐らく私達の兄弟達もそうだろう。

それ以外選択肢はなかったし、それが当たり前だったから。

その私の中の『当たり前』という固定観念を壊したのが月姫だった。

独りで生きるのは『当たり前』ではないのだと。人は独りでは生きていけない、精神的身体的に支えながら命を全うするのだと。私の中になかった理論を、新しいものを見せてくれた。それが私の中に浸透しているというわけではないが、一つの倫理として私の頭の隅にある。

物心ついた時から持っていた固定観念が簡単に変わる筈はない。それが私の生き方そのものであり続けているのだから、余計にそれは容易に崩れたりほしくない。私自身まだそういう思考パターンにならないのだから、私の思いまで強く影響するには至らない。そして恐らくは私の兄弟達、天星織兄弟も。

たとえば二十歳の《同族》の兄貴。

天星織長男であり、《傍観者》であり《全駆者^{ぜんくしゃ}》として《闇》でその名を轟かせる兄貴。この人は私以上に『独り』を生きる人物だ。誰も受け入れず、誰も傍に置かない。徹底的に《拒絶》する。私達を養ってくれているという矛盾するような一面もあるが、そういう

兄貴しか私は知らない。

たとえば十九歳の《破壊魔》の兄貴。

天星織次男のその《破壊魔》は、『独り』や『人間』以前の問題だ。聞く限りでは奴の目には恐らく、『人』と『物』の違いはないのだろう。《破壊》に、そして全てに感情が伴わないという時点で論外だ。まるで理性がない、『人間』と書いて獣と読むような人物だ。

たとえば十八歳の《逆》^{リバーズ}の兄貴。

天星織三男で時折遊びに来る来夜。来夜は兄弟の中でまだマシな方だ。しかし来夜が夜空という『傍に居る人物』を作ったのは初めてだ。それまでの来夜はやはり誰とも馴れ合おうとはしなかった。

《逆》として《抗争》のただ中にいた。

たとえば十七歳の《崩壊》の長女。

一つ上の長女はとにかくヤバイ奴だ。『面倒だ』『気に入らない』という理由で対象を《崩壊》させる。傍に居る（ある）ものはとにかく《崩壊》させるので誰も求めないのは目に見えている。

たとえば双子の《同類》。

私の《鏡の向こう側》。自分を映したかのような《同類》。私と同じように他人をはねつけてきた、かつての《同族》。しかしつい最近、私のように『傍に居る』人物ができたという。それまではやはり、独りを生きてきた。

たとえば一つ下の妹。

約二年程前《不穩》に巻き込まれ、以来植物人間になっている妹。一番情報が乏しく妹のことは特に分からない。しかしやはり親しい者はいなかったと聞いている。

更に両親のことは、兄弟以上に分からない。母親が《傍観者》と呼ばれ——今もそう呼ばれているかは定かではない——、父親は《殺し屋》と呼ばれていること以外は知らないと言っても過言ではない。両親——特に父親——と話したという記憶はない。それどころか顔を合わせたという記憶も殆どないし、今何処で何をしているの

かさえ分らない。しかし私達兄弟がそうであれば、両親も論外ではないだろう。

ざっとこんなものだ。

こんな中で生きてきた。だからそうそう変化することはない。

それでも。

「……………」

空を見上げる。

鉛色の空。涙が落ちてきそうな色。最近はずっとこんな調子だ。

否、突き抜けるような『青い空』はまだ見たことがないかもしれない。

それはまるで決して抜けられない《不穩》を暗示するように。それを見せ付けるように重く私にのしかかる。私を取り囲んで追い詰め、雁字搦めにしようとするように。

「……………はあ」

さあ、早く帰ってしまおう。

私は空から視線を外し溜め息をついた。そして歩いて行く先に目をやる。

その時だった。

「……………」

目の前に、一つの存在。

紫幸が、ずっとそこに居たかのように立っていた。

《崩壊》、天星織てんせいおり紫幸。天星織兄弟の上から四番目で、一歳上の長女だ。

ウルフカットの金髪の髪、無数の穴の開いた耳。ギラギラと混濁した感情が蠢く漆黒の瞳。河柳の制服を着てはいるが、こいつが着ると軍服か何かに見えてしまうのはこいつのオーラのせいだろうか。一際異彩を放つそのオーラ。身体全体から放たれる、《崩壊》そのものを具現化したような色。その手はすぐにでもそれを始めてし

まいそんな程狂気に満ちている。

「……………」

「……………」

対峙する私達の間言葉はない。

否、感情すら無かった。

私達の間を物理的に隔てているものは何一つないのに、まるでそこに障害物があるかの如く私達は微動だにせず一定の距離を置き、只互いを自分の瞳に映しているだけだった。

随分と久し振りの再会。

でも、何も思わない。何の感情も湧いてこない。

そして暫く睨み合い――端から見れば随分とおかしな光景だっただろう――紫幸はゆっくりとこちらに歩いてきた。その目は端でしか私を捉えていない。私も同様に前方に目を向けたまま、紫幸を視界の隅に映していた。

そしてすれ違う瞬間

「まだ生きてたのね」

何の感情も含まれない乾いた声が私の耳に届いた。紫幸はそのまま私に背を向けて歩いて行く。やがて雑踏に紛れて足音は聞こえなくなった。

《崩壊》。

健在、か。しかもそのオーラを見る限り、狂暴さは更に増しているようだった。

「お前もな」

私は小さく呟き、振り返らず歩き出した。まるで何もなかったかのように、帰路につく。

感情すら無い。

会話すら成り立たない。

紫幸との久々の再会はあつと言う間に去った。

【想】

強さ

それを定義するのは難しくて

『俺は弱くない』

呟いて言い聞かせたんだ

―天星織来夜《逆》―

体育程面倒な教科はない。と私は思っている。

体育という教科や体育が好きな人を批判するつもりはないが、私は体を動かすのが何故いいのか分からない。無駄な体力を使うしメチャクチャに面倒だ。しかも授業のあった次の日に来るあの筋肉痛。斬られても殴られてもいないのに筋肉が痛むのだ。いいことは一つもない。

しかし授業は受けなければ単位は取れない。なので渋々私はこうして、グラウンドの隅っこで突っ立っている。只救いなのは、体育科ではないので体育の時間が少ないという事だ。

と言っても、本当は護身術くらいは会得した方がいいのだけれど。自分で自分を護るくらいしなれば、いつどこで命を奪おうと狙う輩に襲われてもおかしくないのに、なんて悠長なんだ。

自分で自分に呆れてしまう。それでも動きたくないのだけだ。だって、無駄に疲れるし。

そういう面では、紫幸の方が断然いいのかもしれない。滅茶苦茶でもハチャメチャでもグチャグチャでも、『闘う』ことができる分。

《崩壊》天星織紫幸。

あの感じでは、今《不穩》の最中なのかもしれない。あるいは始めようとしているのかもしれない。

対象は、恐らく物ではなく、人。紫幸にとってはどっちも同じようなものなんだろうけれど。

「ふう……………」

なんとなく溜め息。

実際に紫幸が《崩壊》しているところを見たことはない。しかし一度だけその『残骸』は見たことがあった。

あれは酷いつてもんじゃない。

あれをどう表現すればいいのかわからないのだ。私の《破壊》とも《破壊魔》の兄貴の場合ともまた違う。《崩壊》の字の如く、対象を《崩し壊す》とでもいうのか。否、それでも足りない。

根底のものを《崩壊》させ、全体を崩す。敢えて言うならそういう感じだ。そして修復不可能なまでに。

あいつは。

「嘉っ」

と、満月の声が私を呼んだ。何か企んでいるような笑みでニンマリと私を見ている。

「何か考え中？」

「……………ああ、まあ。嬉しくない再会をしたもんで」

「へえ？」

続きを聞かせて、と目を輝かせる満月。私の兄弟の話をして損にも得にもならないぞ、と思いつつ、自分で振ったようなものだったので取り敢えず口を開く。

「昨日、長女《崩壊》に会ったんだ」

「長女ってことは、紫幸さんだね」

「ご名答。よく知っていたな」

「うん。《崩壊》って異名（呼び名）と結びついたから」

満月は答える。

「しかも結構有名だよ？二年生でしょ？嘉の兄弟はみんな有名なんだって。とにかくすごいらしいよね。あたしは紫幸さんの詳しいことはよく知らないんだけど」

「私も知らないんだけどな」

「それもまた珍しいよねー」

ケラケラ笑う満月。軽い口調で言っているが、多分満月には私達兄弟が理解できないでいるのだろう。

家族として、兄弟として血が繋がっているながら、他人以上に他人のようところが。冷め切った、絆の『き』の字もないところが。満月の兄弟は私達兄弟とは正反対だから。

満月の兄弟はみんな《闇》に居るが、結束している。離れていても相手を気遣いいつも気にかけている。『絆』という言葉を知識としてしか知らない私にも、それが感じられる程。

それは私には分からない感覚で。

それはどうしようもないことで。

(…………ふう)

大した意味はない溜め息をつき、腕を組む。そして紫幸の話に戻る。

「ほんと、迷惑な奴だよ。無差別だからな、質が悪い。『気に喰わない』ってだけで攻撃されてみる。まあ、そういう奴は他にも居はするが、たまったもんじゃないだろ」

「確かにちよつと厄介だよな。でもどうして《崩壊》になっちゃったんだろ。きっかけとかあるのかな。あ、それは愚問かな？」

「生まれつきの悪人や《狂人》ってのはいないさ。誰一人としてね。あいつ見るとそう思えない時があるけどな。でも、きっかけつうきっかけはないと思う。少しずつの積み重ね、産まれ持ったもの、環境、性格。そんなもんだろ。私達だって、何か『きっかけ』があって《傍観者》になった訳じゃない」

人格形成が突発的ではなく、時間をかけてゆっくりと完成していくように。それと同じように、各々が出来上がっていく。要因や

引き金となる事があったとしても、それは一瞬のうちに決まることではない。

確かに私達は少し特殊ではあるかもしれない。そういうことで簡単に説明できるというような単純なものではないかもしれない。

だとしても、過程は似たようなもの。突発的でも偶発的でもない。必然ともいえる色々な要素が重なり積もり、固められて出来上がった。

そしてそれは、自分で選んだもの。そうなりたくてなったとか、目指してなったという訳ではないが、自分が甘んじて受け入れた《人格》。

紫幸が《崩壊》になったのも、

満月が《傍観者》なのも、

私が《傍観者》なのも。

私の兄弟達や満月の兄弟達も。

「そうだよね。やっぱり愚問だよね」

満月は『ふああ』と一つ欠伸して背伸びした。極細の腕が空を突き上げるように伸びる。

と。

「よ、嘉」

私を呼ぶ声が聞こえて振り返る。するとそこには、ジャージ姿の来夜がいた。私は首を傾げる。

「体育なのか？」

「おう。隣のグラウンドでな」

来夜はそう言い、向こう側を指差した。その先にある、此処とは別のもう一つのグラウンドで走る生徒が見える。

「一人？」

いつも傍に居る夜空がないので尋ねると来夜は唇の端を笑わせた。

「いや、どっかに居るよ。……ああ、そう言えば」

答えて来夜はすつと表情を消した。それは何か深いことを言おうとしている時の表情だ。

「ちよつとあまり良くない報告あんだ」

思った通りの台詞が来夜の口から出てきた。私は耳を傾ける。来夜が無駄なことは言わないということはここ一ヶ月で分かった。

来夜はあまり間を置かず口を開いた。

「紫幸、また《崩壊》を始めた」

「あー……」

全く予想していなかった訳ではない来夜の言葉に、またその事実を知っていた故に私は声を漏らした。

昨日遭遇した紫幸。あの狂暴なオーラ。強い《崩壊》の色を放っていた紫幸。やはりあのオーラは『そういうこと』だったらしい。

私の反応に来夜は苦笑した。

「なんとなく気付いてたか？」

「昨日あいつに会ったから。なんとなくそれっぽかったから」

「そっか。……一応今回も学園の外でやってるみたいだけだな」

「これまで通りこっちまで巻き込まない程度にやってほしいものだよ、本当に」

返して溜め息。

恐らく私達まで巻き込まれるようなものではないと思うが。今までがそうであったように。そう願うだけだ。

こんな狭い範囲に紫幸も私も居る。それなのに互いの《不穏》に突っ込んだことはない。よくよく考えてみたらおかしいことだ。こんなに頻発しており、時には激しい《抗争》になることがあるにも関わらず、噂でしか聞いたことがないのだ。

それはそれですごく有り難いことではあるのだが。出来るだけあいつの《不穏》には関わりたくない。いや、マジで。

「あいつ、《更正》できないだろうな」

不意に、トーンを更に落とした声色で来夜は言った。何か哀愁感のようなものが漂う、そんな声色。表情も、同じようにやや曇っていた。《逆》ではない、人間の表情。

私はそんな来夜に目を向けて口を開いた。

「してほしいのか？」

「いやあ、無理だろ。定兄さだめじゃないと」

唇の片端を上げ、歪んだ笑みを見せる来夜。その表情は、見たことのないが長男兄貴の笑い顔を連想させ、やっぱり兄弟なんだと再認識させるようなものだった。

その表情のまま来夜は続ける。

「してほしいかほしくないかって訊かれたら、やっぱり答えは『してほしい』だな。せめて無差別に《崩壊》させるのは止めさせたい。まあ、俺も《普通》ではないからあまり偉そうなこと言えないけど。でも、あれは定兄貴じゃないと無理だ」

もう一度長男兄貴の名前を出し、来夜は乾いた笑みを浮かべた。

天星織定。

確かに兄貴くらいの強烈で強力な『影響』がなければ、紫幸は変えられないだろう。まず紫幸自身『更正』という言葉を知らない筈だし、そんな事願ってもいないだろうから。

そして恐らく兄貴にもそんな気はないだろうから、紫幸が変わることはないだろう。今まで同様に、これからずっと続いていく。

今のところは。

「そういえば、藤の件はどうなってるんだ？」

真剣な表情のまま来夜が尋ねてきた。どこまで進んでいるのか、という心配の色が窺われる声色。

私は小さく肩を竦めた。

「あいつ、かなり焦ってる。まだ《仮面》としては来ていないけど、教師としてこっちに攻撃仕掛けてきた。大したものじゃないけど」

そう言って親指を満月に向ける。来夜は満月に目をやり、成る程、

と頷いた。

「まずは《表》で、そして《闇》で、という感じなんだろうな。もう少ししたら《仮面》で来るかもしれないな。気を付けろよ、二人共」

「お気遣いありがとうございます」

来夜の言葉に満月がうっすら笑って答えた。何故か敬礼している。「よ」

丁度その時夜空が姿を現した。軽く手を挙げて来夜の隣に並ぶ。相変わらずの爽やか青年という感じだ。その穏やかな微笑は、流石兄弟、月姫と似ていた。

「ほんじゃ、な」

来夜は手を振り、夜空と向こう側に去って行った。話していて忘れていたが、今は授業中だった。

「やっぱりあいつ、始めてたんだな……」

呟き、ちっ、と舌打ち。紫幸の情報と昨日の事が合致して溜め息をつく。

すると、敬礼を解いた満月が口を開いた。

「まだ始まったばかりなのかな。来夜さん、詳しくは話さなかったね」

「話したくないのか、まだ情報はないのか、どっちか分からないけどな。終わってからまとめて聞いた方がいいと思うぞ、あいつのは」

「そうかもしれないね」

にっとなんて満月は腕を組んだ。そして何処か遠くに目を向けて口を開く。

「来夜さん、嘉の事すごく心配しているみたいだったね」

「……………」

私は黙ったまま満月に横目を向けた。満月が言わんとしている事を探ろうと沈黙を置く。

満月は僅かな沈黙を切り裂き、続きを晒した。

「昔の《逆》の来夜さんだったら考えられないような事なんだろう

けれど。今は『人間』であり《逆》であるんだ。嘉をすごく思っているんだなって、今の短い会話から感じたよ。それが滲み出た。多分ね、多分だけど、嘉は嘉が思う程兄弟達から離れている訳じゃないと思う。なんだか、何かが少しずつ良い方向に変わっていつているんじゃないかな。そんな感じがするよ」

「……………」

私は黙ったまま満月の言葉を聞いていた。

はっきりとは分からない。満月の言う事が正しいのか否か。否定も出来ないし肯定も出来ない。だから今はそれを《情報》として覚えておく事にした。明らかに間違っていると断定出来る訳ではないから。

「……………」

向こうで体育教師が生徒を集めている。そろそろ授業が終わるようだ。取り敢えず、今回もなんとか乗り切った（何もしてないけど）。

私達はゆっくり歩き出した。

「嘉」

体育の授業を終え、教室に向かっていている途中、担任の臨安我哲留りんあんがてつるに呼び止められた。振り返るとそこにはいつものポーカーフェイス。漆黒のスタイリッシュなスーツを着こなし、颯爽と近付いて来る。

担任は手に持っているものを軽く上げて口を開いた。

「悪いが、この出席簿を教室に持って行ってくれないか」

「……………はい」

別に拒否する理由はない。今教室に向かうところだし、丁度いい。

私はそれを受け取った。
すると。

「最近面倒なことでもあるのか」
突然担任はそう訊いてきた。私は少し驚いて――しかし表情は動かさずに――担任を見上げた。

担任は変わらぬ表情のまま変わらぬ口調で言う。

「微妙にだが、最近嘉のオーラが違う気がするな。先月の『あの時』と似たような雰囲気になっている」

「……………」

私は黙ったまま担任の無表情を見つめる。

とても二十四歳には見えない落ち着き。そして雰囲気。この人は二十四という若さでありながら、（理由はよく分からないが）教師の中で強い権力を握っているらしい。現場の教師を統括するというポストに就いていて、この人に逆らえる人はいないんだとか。校長さえ敵わないらしい。

しかしそれ以前に。

この臨安我哲留という人は、只の一般人とは少し違っていたんだ。それを担任の台詞で思い出した。

担任は、恐らく私が《傍観者》だということを理解している。先月の《不穏》（小さなものだったが）の時に本当に少しだが関わった。

とにかく敏感なのだ。何でもそうだが、すぐに勘が働く。だから隠し事は上手くない。本当は《闇》の人間なんじゃないだろうかと思う程だ。

「……………」

隠すつもりはないが、言うか否か私は迷っていた。いずれは必ずこの人の耳にも入る筈だ。今言っても言わなくても。遅かれ早かれ必ず。

「多分」

思考の途中だったが私は口を開いた。

「いずれ先生も関与することだと思います。その時自分の目で確かめた方がいいかもしれません」

「そうか」

担任もすぐに頷いた。敢えて無理に詮索することはしない。必要ならば聞こうという姿勢はいつもと同じだった。いずれ関与することになると担任自ら感じているのかもしれない。私があまり多くを語らないのを理解しているというのもあるかもしれない。

担任は一つ溜め息をつき、再び私に目を向け、次いで満月に目を向けた。

「一応こっちでも、少し一年の辺り、特に俺のクラスが何やら騒がしいと情報が来てる。俺自身もクラスの違和感を感じるしな。まあ何となく予想は出来ているが……あまり無理はするなよ」

これといった感情があまり読み取れない表情、声色。しかしその根底に滲む感情は伝わってきた。

恐らくこの人は頭の中でこれから起こる事がシナリオとして、あるいはあらずじとしてすでにあるのだろう。それどころか、何が元凶なのか、結末がどうなるのかさえ見えているのかもしれない。雰囲気からそんな感じがした。

無理、無駄な詮索や深読みはしないが、周りが気がついた時には既に物事を全て把握しているような、そんな人だ。

やっぱりこの人は、只の一般人じゃない。

「じゃ、頼んだ」

担任はそう口にして踵を返し、去って行った。

その後ろ姿を見送るように担任の背中に視線を固定し、ずっと口を閉じていた満月が口を開いた。

「哲留先生って……『普通』じゃないよね、なんか。全体を既に把握しているのかなって感じだよ」

「確かに」

私も相槌を打つ。満月は肩を竦めた。

「ただ者じゃないよ、あの人。実は《闇》の人間だったりして。有

り得ない話ではないよね」

面白そうにニツカリ笑って満月は息を吐いた。

確かに有り得ない話ではない。もしそうだとしたら、先月の《不穩》の時の態度にも説明はつく。あの状況で『普通』なら私の《敵》だった《刺客》に味方しそうだが、どちらかといえば私寄りの立場だった。しかも私の居る《闇》をまるで理解しているのかと思う程の言葉さえ晒して。

(……………まあいい)

考えたって答えが出る訳じゃない。私は考えるのをやめて再び歩き出した。

【想（2）】

その日の帰り、当然のように喫茶店『indigo』に向かい、いつものスイートルームで私と満月は座っていた。特に何か話す訳ではない。沈黙を共有して同じ空間に座っていた。

今日は割りと静かな一日だった。藤の授業もなかったし、呼び出される事もなかった。藤と関わるようになる前に戻ったようだった。昨日のあの事があって少しは慎重になっているのだろうか。昨日は、慌て急いだ結果があれだった訳だから少しは考えているのだろう。しかし、極端だな。やり方にも平衡やバランスというものがあるだろうに。

「……………くだらない」

本当に。

子供でも分かるくらいのこと、奴は分からないらしい。それとも、只要領が悪いだけなのか。

「うん。くだらないよね」

私の独り言に反応し、満月が返してきた。満月に視線をやると満月は片目を細めた。

ニヒルな笑み。藤と関わるようになってからずっと纏う、今回の《傍観者》としての笑み。

そしてその口から出てくるのは軽蔑の言葉。嫌悪と憎悪の台詞。「やり方が甘いんだよね。昨日のこと、きっとビビってんだね。逆に自分の立場が危なくなるんじゃないかってさ。ま、これで突っ込んではいないからまだ脳は一応あるとして、それでもまだまだ。いい加減正体現わしたら？って感じだよ。《表》に固執する理由が分からない」

思い切り見下すように言葉を晒す。それからティラミスを大きく

頬張った。こういう話をしている時も、スイーツは絶対に忘れない。そんな満月から視線を外し、溜め息。

「まあ、あのクラスメートのこともあるし、陸上部員のこともあるし、《表》と《闇》の両方を早めに終わらせた方がいいような感じもあるけどな。でも絶妙なタイミングは今のところないな。まだ《闇》としては攻撃してきてもいいし」

「そうだね。でも終わらせるなら藤の完全な追放という形で終わらせたいね。《表》《闇》どちらでも。失敗は出来ない。するつもりもないけど」

「完全な運びで奴の《終焉》を演出しなきゃならないな。でもさほど難しいことでもないだろ」

まあ、私の場合多少の怪我なりなんなりはするかもしれないけど。するだろうけど。

「多分ね。あたしは今回は最後まで手を抜かないよ。ふざけも悪戯もしない、今回は」

真剣さを目の中に呼び込んだ満月。一心に《復讐》だけを誓う瞳。満月がこれ程まで《復讐》に燃えるのは、自分が攻撃されているからというだけではない。一番の要因はそれではなく、第一に夜月という弟の為だ。かつて藤に攻撃され、何もできずに大打撃を受け《人形》となってしまうた弟の敵討ちの為。ずっと歯痒い思いを抱いて来て、ようやくその機会が訪れた。それを遂げようと今、《復讐》だけを見つめている。

これが私と満月の違いだ。

兄弟と繋がりのない私との。

「本当はね」

不意に手を止め満月は呟くように言葉を発した。伏せていた視線を上げ、私と目を合わせる。

そしてやや影のかかる声色で。

「あたしはね、本当は仕返しとか《復讐》とか、あまり好きなんじゃないんだ。延々と繋がってくじゃん、そういうの。なかなか断ち

切れないでしょ。生み出すのは『事実』だけで、過去が変えられる訳じゃない。面倒なのは出来るだけ避けれたら、それにこしたことはないし。けどね、藤の場合だけは違う。《復讐》っていうか、当然の報復っていうか、そういうのを与えたいって思う。そうしないと気が済まない。これから続いていたって構わないって思う。だからハムラビ法典に則って『目には目、歯には歯』を適用しようと思うんだ」

ハムラビ法典かよ。

突っ込もうとしてやめた。

いつになく真剣な表情の満月。『本気』を窺わせるその表情は《破壊》すら望んでいるようだ。

目には目を、歯には歯を。

「…………絶望には絶望を」

「そう」

口の中で呟くように言った私に頷き、唇を横に引く満月。その目は笑っていない。スイーツを食べる手も止まってしまっている。

満月は更に口を開く。

「多分ね、あの人、大きな絶望とか挫折とか経験したことないんじゃないかな。経験したとしても、それなりのものだよ。結構家柄もいいみたいだし、あの自信に溢れた感じとか見るとさ、そんな気がする。そんな人って、崩された時のダメージが大きかったりするんだよね。崩され方が半端じゃない。二度と立ち直ることが出来なくなる人もいるし」

満月は淡々と話す。

それは恐らく、今までの《不穏》で見てきたことなのだろう。私もそれが『データ』としてあるので、それを照合し分析して、この《不穏》の結末をある程度シミュレーションできる。予想外の展開になる場合もあるが、過程が多少変わっても結末はほぼシミュレーション通りだ。

淡々と、満月の口調は変わらない。

「藤がどのタイプでも、崩されたら結構なダメージ受けるだろうね。ううん、負わせてみせるよ。夜月の何倍、何乗っていう絶望を与えてやる。二度とあいつの名前を聞く事がなくなるくらいに、あいつの存在を初めからなかったかのように」

それは宣言。

まるで予告。

それはまるで《復讐者》のように。

《傍観者》として《復讐》を誓う。

【固執】

傷はいつか

消えていく

それでも記憶は

染み付いて

消えてくれない

―河原吟―

ランチタイム。

それは私の、学園内で嫌な時間帯だ。普通はそれが楽しみでその為に学校に来ている人も居るくらいらしいが、私はどうも好きになれない。

原因は、無駄に高級感溢れるレストランにある。

レストランといっても、学園内のいわゆる”食堂”のことだ。この”食堂”、レストランと名乗っているだけあって、有り得ないくらい高級だ。世界屈指のブルジョワ校、河柳学園。そのレストランはそこが学校だということを忘れていくかのように全てが無駄に高い。

レストランの内装、絨毯、照明にはシャンデリア、BGMは生オーケストラ、ウェイターやウェイトレス、テーブルからティースプーンまで、これでもかという程高級品を使っているらしい。しかもメニューも、一番安くて三千円だ。たかが高校生の昼食で三千円。

ランチが三千円。

なんといつてもとにかく雰囲気嫌だ。基本的に人が集まる所は嫌だし、集まる人間が金持ちの貴族が殆どでその雰囲気がどうも苦手なのだ。だから昼食はいつも乗り気ではない。できることなら逃げてしまいたい。

こんな文句を言いつつもそこに足を運ぶのは、私の学費を出している長男兄貴が『必ずレストランで昼食をとれ』と月姫を通して命令してきたからだ。一日三千円は積もれば結構な額になる。使わないⅡ口座からお金が減らないとなると、金が口座から減っていないと月姫に電話が来るらしい。言い訳を考えるのも面倒だし、月姫に電話がいくのも悪いので取り敢えずレストランで食事することになっているのだ。しかし、なんだってあんな命令するんだか。

それでも入学当初に比べればだいぶ慣れたけど。やはり慣れる動物なのだ、『人間』というのは。私も生物学的には人間だったらしい。そればかりは否定できない。

(…………ふう)

満月とレストランに入り、溜め息。案内しようとしたウェイトレスを断り席を探して進む。

「あ、幸輔だ」

突然満月はそう言葉を発し、「嘉おいで」とレストランに入っすぐ右側の螺旋階段を上り始めた。確かこの螺旋階段から先、レストランの階が一段上がっている場所は七強と二帝の人間専用の（それと彼らが許している人間）フロアだと聞いたことがある。二帝と七強の人間はとことん特別扱いだ。七強ではないが七強の従兄弟が居るので満月は上がってもいいのだろう。

取り敢えず満月について上がっていくと、大きな丸テーブルの一つに二人の男子生徒が腰掛け食事をしていた。見覚えがある。確か陸上部員だ。毎朝、朝練でダッシュしているのを見た事がある。

満月は二人に声をかけて私に目を向ける。

「紹介するね、嘉。こちらは氷鳥の従兄弟の柳義幸輔^{りゅうぎ ゆきすけ}。河柳小・中

等部の理事長の二男さんで陸上部員。で、こちらが護代瀬斗（しんたいせと）。財閥・護代家の長男さんで陸上部員。二人共同級生だよ」

紹介を受けた二人に目を向ける。

柳義幸輔。色素の薄い髪、鋭い目。そしてなんといっても二メートルはあるんじゃないかという長身で筋肉質な体。そこに居るだけで威圧感を放っている。財閥七強の息子だ。彼の叔父は、ここ高等部・大学の理事長を勤めている。

そして護代瀬斗。ポーカーフェイスに金髪。元々は漆黒の髪だった筈だが、いつの間にか金髪になっている。二人は親友らしく、よく一緒にいるところを見かける。

満月は幸輔の隣の椅子に手をかけて尋ねる。

「一緒に座ってもいい？」

「構わない」

答えて椅子を引く幸輔。ありがとう、と満月は腰を下ろした。私は幸輔とは反対側の満月の隣に座る。

近付いてきたウェイターに注文して一息。

違和感があるような、ないような。食事を再開した幸輔と瀬斗を見て溜め息をついた。話をしたこともないのに当然のように同じテーブルに座っている。変な組み合わせだが、落ち着かない程の違和感ではない。

これといった会話もないまま私は二人を観察していた。二人共ポーカーフェイスのまま黙々と食事を口に運んでいる。特に瀬斗のペースが恐ろしい程速い。まるで流し込むようだ。ちゃんと噛んでいないんじゃないだろうか？

「幸輔ー、瀬斗ー」

と、元気な声が幸輔と瀬斗を呼んだ。私達は一斉にそこに目を向ける。

「……………あ」

そして私と目が合った瞬間、その生徒は固まった。

幸輔と瀬斗を呼んだのは、藤に難癖を付けられていた、陸上部の河原吟だった。私達を覚えていたようだ、私を見て表情が曇った。隣には吟と一緒に来た金髪の生徒が無表情に私と吟を交互に見ている。

そして、しばしの沈黙。吟はバツが悪そうに視線を泳がせる。

「……………取り敢えず座れよ」

幸輔に促され、吟は瀬斗の隣に腰掛けた。一緒に来た金髪の男子生徒はその隣に座る。

この金髪の生徒は、吟の親友。名前は夢織^{ゆめおり}朋也^{ともや}。藤が吟を脅迫していた時にネタにしていた人物だ。どことなく瀬斗と雰囲気似ているポーカークフェイスの生徒だ。二人並べたら兄弟に見える程似ている。

吟と朋也は近付いてきたウェイトレスに注文をしてまた沈黙。吟はずっと気まずそうに視線を伏せている。

「……………ごめん。なんか、俺のせいで面倒なことになってるみたいで」

そして出てきたのは謝罪の言葉。引きつったベビーフェイスが窺うように私と満月を見ている。藤が私達にしていることを噂で聞いているのだろうか。それとも最初の接触したあの時の事を言っているのだろうか。とにかく心の底から恐縮しているようだった。

私は眉を顰めた。

「あんたは何も悪い事はしていないだろ。何故謝る」

「そうだよ。『自分のせいで』って感じるのとは分らないでもないけど、あたし達はそんな風に思っていないし。自分達で決めた事なんだから。あたし達にはそうする理由があったの。だから、胸張って。良心に反する事はしていないでしょ？正しい事を貫くのに、後ろめたくする必要はないよ」

私の言葉に満月が続いた。

吟はその言葉に困惑し、反応に困って目を伏せた。小さく「ごめん」と口が動いたのが見えた。

まあ、当たり前と言えば当たり前なのかもしれない。形的には吟を庇って身代わりで目を付けられているという感じになっているのだ。純粹だという吟が気にするのもしようがないといえましょうがない。

「……………」

と、黙々とランチを食べていた瀬斗がふと手を止めた。何か気に食わないというように眉間に皺を寄せている。

「あの人は特定の対象に、何かと目を付けたがるみたいだ」

「この前は響介先輩と部長だった」

静かな瀬斗の台詞に続くように、朋也の棘の含まれた声が呟いた。腕を組み不機嫌そうな口から紡がれる口調はまるで藤を憎んでいるようだ。

「なんか陸上部でも色々あったの？」

満月が朋也の言葉に尋ねた。朋也は「説明してくれ」というように幸輔に目をやる。

「失礼します」

とそこで私と満月のランチが運ばれてきた。食事に着手しながら私達は幸輔の言葉に注意を向ける。

幸輔はグラスを片手に鋭い目を満月に向けた。

「長いから簡単に説明するぞ。……………くだらない理由で部長に以前からちよっかい出してくる阿呆な野郎達がいてな。よく部長をリンチしてたんだ」

「部長さんて、病氣持ってたて体弱いんでしょ？汚い連中だね」

「ああ。生きてる意味ないな。で、部長がリンチされてところに響介先輩がたまたま遭遇した。普段は全く怒らないんだがな、部長の有り様を見てそんな時はキレてしまった。響介先輩は身長も百九十越えるし、砲丸の選手でパワーもある。でそのパワーで、リンチして

る野郎どもを逆にリンチした」

幸輔の説明を聞きながら私は『響介先輩』を思い出し出していた。

観執みどり響介。財閥七強の一つ、観執家の独り息子だ。何度か見たことがあるが、めっちゃくちゃがたい。明るくて朗らかで笑った顔しか見たことがないので『キレて殴った』というのを想像するのは難しいが、あんなのに殴られたらひとたまりもない。骨折だけでは済まないだろう。

幸輔は溜め息をついて続けた。

「その時の一件をあいつが持ち出してきたんだ。その前に響介先輩の処分は決まっていたが、その内容が気に食わなかったみたいだ。部長と響介先輩になんやかんやいちゃもん付けて部停にしようとしてたんだ。結局どうにもならなかったけどな。多分まだ粘ってんだろ」

「それを未だに根に持ってる、と」

「恐らく。だから今回は吟に照準を合わせた。朋也を墜とそうとな。無関係なくせにくだらないうプライドにしがみついて、無い権力を使いたがっているだけだ。俺達に言わせればあんな奴のプライドや権力なんかクズと同じだ。それ以下だな」

まるで紅藤を文字通りクズ以下としか思っていないような口調で幸輔は吐き棄てた。

(……成程な)

簡単な説明だったが大体の内容は把握できた。

いずれにしても、くだらないことに力を使っているということに変わりない。只の暇人だ。

しかしそこまで病的に権力にこだわる理由が分からない。しかもそれ程大きな権力を持っていないにも関わらず、この行動だ。軽率で暴挙で、それでもって知性の欠けた行動としか言いようがない。あいつがやろうとしている事は、あいつの権力の範疇を超えているのだ。一体何様のつもりなのだろうか。

というより、マジで何がしたいんだ？ 本当に意味不明。理解不可

能。

ますます《表》に居る理由が分からない。意味も何もない筈なのに。まあ、分かりたくもないが。

「……………」

と、私は瀬斗を見て啞然とした。

幸輔の隣では、なんやかんや話している間に瀬斗が（私達が来てから）二セット目のランチを平らげていた。ウェイターを呼んで三つ目のランチコースを注文する。しかも一番高いヤツだ。

いや、値段とかよりも。それ以前に。

「……………」

こいつの胃はブラックホールか？一体いつまで食べ続けるつもりなんだ？そんなに食べて大丈夫なのか？

そう思っていると、幸輔が小さく瀬斗に呟いた。

「それくらいにしとけよ」

「……………」

無言で頷く瀬斗。もしかしたら自分で制御できないのかもしれない。満腹中枢が壊れているのだろうか？それとも只単に胃が大きいのだろうか？

そんな疑問を抱きつつ、私は瀬斗を見ていた。

【固執（2）】

「詳しく聞いてきたよ」

陸上部員と話をした日の放課後、図書室のいつもの指定席に座ったと同時に満月がそう切り出した。主語が抜けていたが、その意味を察して満月に目を向ける。

陸上部員の件は今の私達に直接関係がある訳ではないが、聞いて損をする事はないだろう。

なんだかこれから先、陸上部とは関わっていくような気もするし。満月はドリンクバーで入れた紅茶を口に含み、一つ息を吐いて口を開いた。

「部長さんは、一年の時から部長さんだったんだって。部長さんが一年の時、その時の部長だった先輩から任命されて、それからずっと。陸上部は部長さんが次の部長を任命するって決まってるんだって」

「成る程な。でもいくら決まり事でも、そんな事になったら二・三年は面白くないって奴も勿論出て来るだろうな。年下が部長ってのは」

「そうなのよ。しかも陸上部では特に部長の権力は大きいみたいだし。先輩みんなが意地悪って訳じゃなかったみたいだけど、不満を持った『先輩』達は辞めていったみたい。それはそれでいいんだけど、質の悪い人達はね、色々文句付けて部長さんに暴力を振るい始めたんだって」

「幼稚だな」

「本当だよ。それが三年になった最近まで続いてたんだって。で、幸輔が言ってた『響介先輩』がそれを見つけたって言うのが今年の四月のこと。三ヶ月くらい前だね。嘉も見たことあるよね、響介先輩は。いつも笑ってる優しい人なんだって。めったに怒らないんだ

って」

「そんな感じだよな」

「そんな彼だけど、たまたま部長さんがリンチされてるところに遭遇した。部長さん、体があまり丈夫じゃない上に喘息と重い持病があつてね、その時丁度発作も起こしてたみたい。かなりボロボロでね。そんな部長さんの状態見て、プッチーン」

「普段は怒らないけどキレたら何するか分からないタイプなんだな」「そうみたい。幸輔も言ってたけど、響介先輩は砲丸の選手だし、めっちゃめっちゃ力があるんだよ。で、その彼がそこに居た先輩達を次々殴り飛ばしてね。部長さんが『止めろ』って言って初めて止まってみたみたい。その先輩達は大怪我負ったみたいよ」

「それが事件の発端か」

私は思考を巡らせる。

確かに教師にとっては微妙な問題なのかもしれない。正当なものだと判断するのか、やりすぎだと判断するのか。悩むところだろう。しかし。

「でも処分は決まってたんだろ？」

「そ。そこなんだよ」

満月は人差し指を天井に向かって立てる。

「響介先輩の場合は三日間の停学処分っていう結論が出たって言ってた。一番軽い処分だね。初めてっていうのもあったし、一番悪いのはその先輩達だからね。因みに、その先輩達は勿論退学。色々な状況を比較考慮して決まった決定ね。……処分を決めるのは、あたし達の担任の哲留さんと、生徒会顧問の流星先生と、校長なのね。三人で話し合って理事長に決定を報告する。だから藤は全然全くこれっぽっちも関係ないんだよ。あの人が騒ぐようなことじゃないし、どうこう出来るようなものじゃない。その騒ぎに便乗しようと思つたんじゃない？ 多分」

「成程」

「でもその処分を決める話し合いがされてる間も、秘密裏に何かと

やってみたい。部長さん呼び出して精神的に圧力をかけようしたりね。部長さんは藤の目論見を知ってたからそれなりに対応したみたいけど。元々冷静沈着な人だからね。『ご迷惑おかけしました』って頭を下げて藤のテンションを狂わせたんだって」

「……………大人だな」

「ほんと。陸上部員を護ろうとする部長さんが勝利したってところだね。藤が部長さんにいちゃもん付けてるその時も、たまたま響介先輩が入ってきたみたいだけど、藤に反論する響介先輩を制して頭下げたみたいだから」

「それ考えると、ほんとあいつはどうってことない奴なんだな」

溜め息をついて一言。マジでくだらないことに付き合わされていと痛感。

しかしその『部長』も大したものだ。約二年間暴力に耐えた上に藤にくだらないうことで呼び出されても全く動じない。確かにそれだけの忍耐力と冷静さを兼ね備えているのなら、簡単に崩せはしないだろう。

それにしても。

満月は馬鹿にしたように『はっ』と笑い、テーブルに膝をついた。「藤は本当に『権力』に固執するタイプなんだ。自分の権力の範囲を超えてね。権力乱用とか誤用以前の問題だよ。自分の権力の範囲を分かってないんだもの。僭越なもの程々について感じだよ。幾つかは成功していても、バックに強い味方の居る『対象』には滅法弱い。《闇》ではどうか知らないけど、《表》でのあの人の『力』はその程度しかないんだもの」

「そうだな」

「でも、色々陸上部も大変だよーほんと」

ぐん、と腕を伸ばして満月は言った。ほんとに同情するよ、と溜め息。

私は陸上部に関してふと不思議に思ったことを口にする。

「でも考えてみれば不思議だよな。陸上部って、七強のうちの六つ

の財閥の子供が居るんだろ？それを敢えて攻撃するなんて、馬鹿もいいところだろ」

「確かにそうだけど。でもね、基本校内での権力行使は禁止でしょ？例外もありはするけど。何よりね、部長さんが、校内で権力を使って誰かを攻撃したり墜としたりすることを嫌うんだって」

私の疑問にそう返してきた満月。

「陸上部員はとっても絆が固いんだって。部員はみんな、部長さんが嫌がることはしたくないと思ってる。だからたとえ七強であっても滅多なことがない限り『力』は使わない。藤はそれを知っている」「そこにつけ込んでいるわけだ」

「うん。でも《表》で何度やっても無理だと思うよ。学園内では年下の哲留さんにも権力的に敵わないんだもの。哲留さんは藤みたいな理不尽で曲がった、『悪い』奴を嫌うし。バレたらソツコークビ斬られるよ」

「いずれにしても勝算はないって訳だ」

藤はそれに気付いていない故にこんな事を続けているのだろうか。真相は知らないが、あの自信に満ち溢れた態度には呆れてしまう。

「あ、それから」

満月は思い出したように顔を上げた。

「吟に、藤のことは口外しないように伝えてって幸輔にお願いした。今のところ、藤の注意は吟から完璧に逸れてるからね。もうあたし達しか見えてないから、吟からは逸らしておきたいから」

「成る程ね」

一応その辺りもどうなっているのか気になっていたので、満月の言葉に頷いた。やはり藤には私達だけで精一杯なようだ。

本当に、力不足も甚だしい。

（……………まあいい。あいつのことを考えるだけ無駄）

考えるのを止め窓の外に目を向けた。

【固執(3)】

＊ ＊ ＊

「深夜さん、ね」

次の日の放課後の事。

満月は見覚えのない生徒に声をかけられた。髪の毛の長い女子生徒。長身で目がつり上がっている。スカートを留めるピンの宝石の色が紫なので、三年生なのだろう。怪訝な表情を浮かべながら満月はその生徒と対峙した。

特に感情のない同じ口調でその生徒は口を開いた。

「藤先生が、先生の教官室でお待ちになっている。呼んでくるようにと頼まれたの。天星織さんは先に向かっている。それでは、先生をあまりお待ちせしないように」

「……………」

眉を顰める満月。その生徒はそれ以上何も言わずに、踵を返してスタスタと向こう側に歩いて行った。

(今度は一体何だって言うんだよ、本当に)

いい加減にしてよ、と満月は溜め息をついた。無視しようか否か考えたのは一瞬で、結局向かう事にした。嘉も向かっているというし。もう一つ大きな溜め息をつき、ゆっくり藤の教官室を目指す。

どうせ《不穩》の真っ最中で、そこから抜け出す事など出来ないのだ。今更楽な道などない。

そう自分に言い聞かせながら階段を上がり、廊下を歩いて藤の教官室のドアを開けた。ノックは無意識に忘れていた。相手が藤だからだろうか。

中に入り、ボタンとドアが閉まる。

「……………」

その瞬間、何か嫌な予感がして満月はドアを振り向いた。回そう

とノブを掴む。

「開かないっ」

ノブは全く動かなかった。何か仕掛けられてロックされてしまったようだ。閉じ込められた形になる。

(やられた……………)

再び溜め息。どうやら嘉が先に来ているというのも嘘だったらしい。電話するなりなんなりして確認を取れば良かった、と今更ながら携帯を探す、こんな時に限ってどこかに忘れてしまったようだ。しかも、此処に行くように言ってきたあの生徒。今思えば藤に使われているような雰囲気だった。まるでこうなるのが分かっていたかのような感じた。実際そうなのだろう。もしかすると藤の《身内》なのかもしれない。

(まあいいや……………ん?)

そこで、満月はテーブルの上にある果物の側に無造作に置かれている果物ナイフに目を向けた。照明がついていないので少し薄暗く見えにくい。しかし何か違和感を感じて手に持ってみた。

「……………血？」

眉を顰め、満月は呟いた。

その果物ナイフには、紅のものがべったりとついていた。教官室内を見回してみると、何か異様なものに満ちているのを感じた。何か『普通』ではないものがこの中に漂っている。

(まさか、嘉が!?)

満月は果物ナイフを持ったまま教官室の更に奥に向かった。もしかしたら嘉がやられたのか――――

心臓を鷲掴みにされたような感覚を抑えながら一つ奥の部屋に入る。しかしそこで目に飛び込んできたものを見た瞬間、満月は緊急感や感情がサーッと引いていくのを感じた。

(今度はこれですか)

最早溜め息すら出なかった。

そこにあったのは、あちこち斬られ、ソファの上でぐったりと倒

れている藤だった。血まみれでソファに横たわる藤は眉を顰めて顔を歪め、痛みに唸っていた。それが演技なのか否かまでは分からない。満月は冷めた目でそれを見ていた。

またか。そう呆れながら。

その時、教官室のドアが開く音がした。二つの足音が足早に近付いて来る。しかし満月は動かず只藤を睨み付けていた。

「ひっ」

背後から引きつった声がした。満月はゆっくり後ろを振り返る。そこには、藤に来るように命令されたのだろう、遠井がいた。藤の姿を見て表情を青ざめさせている。まさかここまでするとは思っていなかったのだろう。

そして遠井の隣には、藤に惚れているらしいあの男性教師。藤が、こいつも来るように仕組んだのだろう。その教師も、藤の有り様に愕然としている。声も出せない程だ。

満月は遠井に目を向けた。まだ何か迷っているような表情。満月を失墜させる事に荷担したくないという怯えのような色が窺える。

「……………」

満月は微かに目を細めて遠井を鼓舞した。迷う必要はないと。藤の計画通りにするようにと。

「……………」

遠井は一瞬泣きそうな表情になり、しかし意を決してそのままの表情で叫び声を上げた。

「いやああああ!!」

その叫び声に、弾かれるように男性教師が体を反応させた。そして満月を押しつけるように藤に走り寄る。そして携帯を取り出して救急車を要請した。

(……………あ)

そこで、満月は非常にマズいことに気がついた。

嘉がやられたのではないかと心配してその他の全ての事が思考から吹っ飛んでしまったので、血のついた果物ナイフをまだ握ったま

まなのだ。この状況では本当にマズい。しかし今更捨てる訳にもいかない。捨てても無駄だろう。

（藤の思う壺だな、こりゃ……。まあいいや）

もうどうにでもなれと、満月は視線を床に這わせた。

遠井の叫び声を聞いて野次馬が集まり、哲留と流星が藤の教官室に来るまで、それ程時間はかからなかった。藤は救急車で病院に搬送され、哲留と流星が現場の状況を調べて、詳しい事情を聞く為に満月は哲留の教官室に行く事になった。集まった野次馬の間を、二人に続いて歩く。

（まだみんな帰ってなかったんだ……。これも作戦の内かな）
様々な感情の入り混じる、自分に向けられるたくさんの視線を無視しながら進む。

（……………あ、嘉）

すると人混みの向こうに嘉を見つけ、満月はふと足を止めた。嘉も満月を見ている。そしてゆっくり近付いて来た。

「何の騒ぎだ？」

野次馬に一瞥をくれ、いつもの無表情で嘉は尋ねてきた。しかしそれは、ある程度察しはついているような雰囲気だった。

満月は肩を竦めた。

「……………嵌められた。ちょっと行って来るね」
「そうか」

ふう、と息を吐き嘉は言った。

「ラッシュが引くまで図書室で時間潰してるから。もし終わるのが先で私が居るなら来たらいい」

「ありがとう」

そう小さく微笑んで満月は再び歩き出した。

別室で遠井から事情を聞き、次いで満月から事情を全て聞いた哲留と流星は、考えるように黙り込んだ。違和感に苛まきづされているような表情。流星は心配するように満月を見つめ、哲留は腕を組んでテーブルを睨み付けている。

口を開いたのは哲留だった。

「下す処分があるとすれば停学だ。でも俺は満月がこんな事をするとは思えないし、疑問点がある」

やはり違和感と疑問を持っていたようだ。あの状況では自分の身の潔白を証明するのは難しいが、満月は今回はそれをするつもりはなかった。

「いいんです、先生。あたしを停学にして下さい。あたしの為です」
真っ直ぐ哲留を見て満月は言った。その言葉に流星は目を見開き、哲留は微かに眉を顰めた。

そして低く問う。

「どういう意味だ？」

意味と理由と意義を問う短い言葉。しかしその瞳はずっと先まで

見透かしているように濡れている。ある程度分かっているが、満月の口からはっきり聞こうとしているようだった。

満月はゆっくり言葉を選び、それに答えた。

「今はまだ言えませんが。でも、先生もいずれ分かりますと思います。だから、お願いします」

「……………」

哲留のポーカーフエイスが満月を見つめる。その真意を試すように。満月もそれに視線を返した。

暫く視線を交わし、哲留は小さく頷いた。

「お前がそこまで言うなら、それなりの理由があるんだろうな。しかし俺は完全な黒と認めた訳じゃない。お前の事情も汲むが、俺も流星も、灰色のまま処分を下すというのは嫌いだな。だから大まかな理由は話してくれないか。何故、不当とも取れる処分を甘んじるのか」

「……………」

満月はキュツと唇を噛み締めた。

今の時点で話したくないのは事実だ。しかし曲がった事を憎む哲留が、白黒はつきりしないいわゆる『灰色』の部分で譲歩してくれる事を考えれば、少しは話すべきだと結論を出す。

この人は《敵》ではない、と。

「確かめたいんです」

唸るように満月は声を絞り出した。再び膨れ始めた感情を必死に抑え制御するように、唇を一文字に結ぶ。

哲留と流星はそんな満月を焦らす事なく、じっと満月が口を開くまで待つ。

（……………珍しいな）

哲留は固い満月の表情を見て、目を細めた。

これ程までに怒りのオーラを放った満月を見るのは初めてだ。満月の全てを理解しているとは言えないが、今満月が抱えているものが相当なものである事を哲留は感じていた。

だから敢えて突っ込んで話させようと思ったのだ。少しでも吐き出させなければ、満月が暴走してしまう、と。

「……………」

満月は長い沈黙を置き、ゆっくり言葉を晒し始めた。

「多分、あたしが確かめないと、ずっと続いていくんです。螺旋階段みたい、同じ場所でぐるぐる回って、これからも終わらない。だからあたしがする必要はあるんです。終わらせる為には、これが必要なんです」

具体的な事には一切触れない言葉。

哲留は更に尋ねる。

「荒いやり方だが、これしかない。そういう事だな」

「はい」

真っ直ぐ哲留を見つめる満月。哲留もそれに静かに返した。

「……………ちよつといい？」

と、ずっと黙っていた流星が口を開いた。哲留は頷いて会話を譲る。

穏やかさをたたえた瞳を満月に向け、流星は淡く微笑んだ。

「深夜は、誰か、あるいは何かを護りたいんだね？ 今聞いている限りでは、そういう感じがするんだ」

それは満月を優しく包み込むように。

穏やかに包み込むように。

「……………はい」

二人の優しさに、満月は不覚にも泪がでそうになり、それを堪えて短く答えた。表情を崩してしまわないようにぐっと堪える。

目を伏せて一つ溜め息をつき、哲留は口を開いた。

「本来ならこの時点で処分を決定する事はないが、今回は例外として考慮しよう。しかし先程も言ったように、俺は納得出来ている訳じゃない。だから処分は軽くするぞ」

いいな、と同意しか求めない口調で言い哲留は満月に視線を向けた。流星は只悲しげな表情で満月を見ていた。

「ありがとうございます」
満月は淡く笑んだ。

哲留と流星との話を終えた満月は、教室に戻り、机の横に掛けてあるミニポーチの中に忘れていた携帯を取りに戻った。なんでこんな日に限って此処に入れたんだろうと首を傾げ、携帯を手に収める。そして氷鳥の番号を呼び出し、耳に当てる。

意外に早く氷鳥は電話に出た。

『進展あったのか?』

繋がったと同時に、満月よりも先に氷鳥が口を開いた。満月は苦笑して、まあね、と答える。

「その前にね、ちょっと氷鳥にお願いがあって」

『《情報》か?』

「ううん。あのね、嘉を護ってほしいんだ」

『……………はい?』

氷鳥の理解の範疇を超えた予想外の台詞だったらしく、長い沈黙を置いて氷鳥は無理矢理抑えられた異様な声を出した。普段の彼なら絶対に出さないその狼狽したような声に、満月はまた笑った。

「もう、氷鳥ったら嘉の事になるとすぐ反応するんだから。あのね、あたし、三日間の停学処分になったんだ」

『……………』

その瞬間、電話の向こう側が《闇》を纏ったのを満月は感じた。満月はそのままの口調で続ける。

「藤にまんまと嵌められちゃった。藤の教官室で藤をナイフで斬りつけたって設定でね」

『……………』

「これはこれでいいんだ。藤の出方も見なきゃいけないし。哲留先生と流星先生はやっぱり納得はしていなかったけど、押して押してお願ひしたの。そしたら一番軽い処分だけど、やってくれた。これは夜月の為のあたしの《闘い》だから」

『成る程ね』

冷めた声色で返す氷鳥。それは藤を軽蔑する色。

『で、お前が居ない三日間気を付ける、と』

「うん。多分あたしが居ないこの間に、《仮面》として嘉を攻撃して来るんじゃないかなって思うんだ。今回の《罠》には《傍観者》をバラバラにするっていう意図もあるような感じがする。で、肉弾戦には滅法弱い嘉を今度は狙うんじゃないかな」

『その可能性は高いな』

氷鳥は満月の言葉に頷き、同意した。そして確かな口調で。

『その件、了解した。あまり嘉にはバレない程度にやる。知れたら嘉はあまりいい顔しないからな』

「でも嘉、いつも無表情だよ」

『唯一怒りと不快は表わすだろ』

「そうだね。まあ、あたしが嘉を護ってきた訳じゃないけどさ」

そんな冗談を交わし、満月はスッと表情を消した。《傍観者》を纏い、《制裁者》の氷鳥に告げる。

「冗談抜きで、嘉の命を預けるよ」

【固執（4）】

＊ ＊ ＊

（今度はこの方法できたか……………）

満月の処分の話を思い出しながら、バスを降りた私は家に向かって歩いていった。生ぬるい風が一つ通り過ぎる。その不快感に思わず眉を顰め、溜め息をついた。

あの後満月は図書室に居た私のところに来て、藤が満月に仕掛けた《罠》と処分について報告した。なんだかくだらなすぎて呆れる事も出来なかったが、やはりあいつが本気なのは分かった。これは最早^{ゲーム}ではなく、正面から《傍観者》として《闘い》という形で相対しなければならぬ。

そして満月は、停学中にあいつが《仮面》として私を狙うかもしれないという事に触れた。確かにその危険は大だろう。でも。

（……………どうにかなるだろ）

考えるのが面倒になった私は、いつものノリで呟いて歩みを速めた。

図書室で時間を潰したにも関わらず、人は結構多い。私はやや俯きながら足を進めていた。生温い風がまた吹き抜ける。

（なんだか気持ち悪いな）

嫌な感じがするとでも言うのだろうか。何かべつとりとまとわりつく倦怠感。それは私を押し潰そうとするように。

最近はこんな事ばかりだ。真新しい事ではない。《不穏》があるうちは消えたりはしないだろう。

「……………っ」

と、携帯がポケットで振動した。取り出して確認すると、ディスプレイには『月姫』。耳に当てて電話に出る。

「はい」

『嘉、今どこ？』

「もう少し」

『あ、そうなの？』

うふふ、と嬉しそうな声。その声を聞いて何故かほっとする。

月姫は柔らかい声色のまま続けた。

『夕飯なんだけど、たまには外食もいいかなあと思って。この前来夜さんに、美味しい和食のレストラン教えてもらったの。嘉、和食好きでしょ？』

「いいね」

和食という単語に反応してしまう私。基本外食はしないが（喫茶店は別）たまにはいいかもしれない。

月姫も休みたいだろうし。

『私も丁度行ってみたかったの。じゃ、予約しておくわね。気をつけて帰ってきてね』

「うん」

ぱたん、と携帯を閉じてポケットにしまう。

その時だった。

「……………」

感じる。

たくさんの人が行き来するその中で、じわじわと広がる黒い雨雲のような気配。空気や空間そのものを染めてしまうように、暗黒をゆっくり広げていくオーラ。段々とそれが近付いてくる。

私はこの感じを知っている。

「……………」

私は立ち止まり、ゆっくり顔を上げた。

丁度正面に、その主はいた。

《破壊魔》、天星織沢石。あませおり たくし

天星織家の次男。漆黒の短い髪、身長は高くはないが、異様なまでに長い手足。少し離れているので表情までは見えない。何をする訳でもなく、じっと立ち尽くしている。

と、沢石はこちらに顔を向けた。

「……………」

「……………」

本当に久し振りの再会。何年振りになるだろうか。否、これは再会と呼べる程度のものではないだろう。

私達はただ視線を合わせる。

私達の間を人が横切っていく。たくさんの方が行き交う雑踏の中、只私達は互いを瞳に映す。

否。

沢石の瞳に私が映っているかは定かじゃない。こちらに目は向いているが、認識しているかは判断し兼ねる。それでも沢石はこちらに顔を向けたまま。

只そこに立ち止まり、黒く重い圧力を放っている。否、それは意識して放っているものではない。まるで生まれてきた時からそれを纏っているような。『放たれている』という表現が近いかもしれない。

紫幸のものとは違う、そして比べられない程の重圧。

(…………『奈落』から出たのか)

ふと思いつく。

沢石は、極秘の特殊施設『奈落』に収容されていた筈だ。そこは孤児院でも少年院でも刑務所でもなく、沢石のような特異で手に負えない人間を収容する為の施設だ。その存在は極秘なので《闇》の人間しか知らない程だ。私もあまり詳しいことは分からないが、少し前にそこを管理する《案内人》の一人と接触があったので、『普通の』場所でない事は分かる。

出所したのか（刑務所じゃないが）、脱獄したのか。想像すらできないが、恐らく沢石は私の想像を越えているのだろう。沢石がそこに居る。それが事実だ。

「……………」

「……………」

まだ私達は睨み合う。

特に意味はない。理由もない。

生きていたのかという確認のような、否それさえ含まれない無表情な視線が交錯する。外してもいいのだが、外したいのだが、何故か外せない。

と、沢石はゆっくりと踵を返して雑踏の向こう側に歩き出した。

ゆっくりと小さくなっていく後ろ姿は、とてつもない《闇》を背負っているように見えた。それに雁字搦めになっているように、それがまわりついているように。しかしそれを平然と引きずっている沢石。それ以外知らないというように。

《破壊》だけを身に纏って。

また、生きている沢石に会うことがあるのだろうか。私はそんなことを考えていた。

「……………」

私はその《闇》の後ろ姿を、消えるまで見送った。

【攻撃】

今はまだ

時じゃない

だから黙している

―独門氷鳥《制裁者》―

次の日のクラスの雰囲気は異様だった。昨日あった事を考えれば何も不思議な事ではない。

その傾向としては、『とうとう爆発してしまったのか』というような満月の感情を汲むような色の強いものと、『まさか』という色。その二つで揺れ動いているようだった。担任も、変な憶測をさせないようにか、無駄な事は一切言わなかった。

「天星織さん」

そしてホームルームの直後。遠井が私の席まで来た。もう限界だというように表情を崩し、空いていた私の前の席に腰掛けて向かい合う。私にこうして近づく人間は殆ど居ないので、私の席の周りの生徒は驚いて遠井を見ていた。

顔を上げ、真っ直ぐ遠井と相對する。

遠井のその瞳は恐怖と悲しみと苦しみに染まって。そして吐き出すように。

「天星織さん。昨日、私、深夜さんを停学にする手伝いを藤さんに命令されたんです」

絞り出された言葉。私の周りの席に座るクラスメートが口を閉じたのが分かった。私達の会話に耳をそばだてている。

遠井はそれには気付いていないようだ。否、気付けるだけの余裕がない。震える声で続ける。

「深夜さんは、躊躇う私を、躊躇うなど無言で言いました。でも……深夜さんは何も悪くないんですよ？深夜さんは嵌められたんです。全部藤先生が仕組んだ事なんです。それなのに停学なんて……」

ぶるぶると唇は震え、今にも倒れてしまいそうな遠井。恐らく昨晩は眠れなかったのだろう、目の下にはくっきりと黒いクマが出来ていた。

私はクラス全体が私達の会話を聞こうと静まり返ったのを感じながら口を開く。

藤。

お前がクラスに疑念を植えようとしたのと同じ事をしてやるよ。

お前の『策』は全く無価値なものだってことをはっきりさせてやる。

お前より、お前と比べ物にならないくらい、完璧に。

「それは担任も知っている。だから処分を渋ったみたいだが、あいつが希望したんだ。担任も今苦しい筈だ」

「どうしてそこまでするんですか？」

震える声で呟き。泣きそうな表情で遠井は唇をかみしめた。否、もうすでに泪は頬を伝っていた。辛くて苦しくて、早く楽になりたい。その思いがひしひしと伝わってきた。

こいつも、私達の為に巻き込まれた、いわゆる『犠牲者』だ。あの程度の事は話そうと私は遠井を見つめた。

同時に、クラスにも。

「あいつには、護らなければならないものがある」

その私の言葉に遠井は伏せていた視線を上げた。目は真っ赤になり、ポロポロと泪が溢れている。それはひたすら満月を心配して。

どこことなく、月姫に似ている。遠井を見て思った。

自分ではない誰かの為に泪を流す。自分は赦されるのかと、幾度

となく確証を求める。相手を思う。状況などは全く違うが、月姫と同じにおいがした。

これが『普通』なのかな。

私は同じ口調で言葉を紡ぐ。

「あいつはあいつの大切な人を護り通す為に闘っている。今回の事はその一つの手段だ。そしてこれはあんたを護る為でもある。それと同時にあの根性曲がった奴の本性を暴く為にも、これは必要なんだ。あんたは助けたんだ。失墜させる事に加担した訳じゃない。私達の計画を進めたにすぎない」

言いながら考える。

こんな時満月なら、あるいは月姫ならなんと声をかけるのだろうと。

私には《破壊》の言葉しかない。遠井を気遣えるようなものは持ち合わせていない。

「確かに今は私達が劣勢に見えるかもしれない。だけど必ず、必ず挽回する。どんな窮地に立たされても。今までそうやってきた。だからあんたは何も心配しなくていい」

宣言という形で遠井に、そしてクラスに告げる。決して声量がある口調ではなかったが、盗み聞きしようと静けさに包まれた教室の隅々にまで聞こえただろう。

「……………」

「あんただって、あんな奴がいつまでも野放しにされてちゃいけないって思うだろ？ 私達もそうだ。だけどあいつの『裏』を暴かないとあいつはいつまでも『女王』気取りで、あいつに墜とされる人は後を絶たないだろうな。だから、私達は闘うんだ。あいつを地獄に墜とす為に」

「……………天星織さんや深夜さん自身が痛い思いしてもですか？」

「それでも、やらなきゃならない理由があるんだ。あいつには。それにあんな汚い奴には絶対負けない」

「……………」

私の台詞に遠井は言葉に詰まり、それから暫く涙を流し続けた。

『満月から処分の事聞いた』

氷鳥からそんな電話があったのは長休みの事だった。中庭のいつものベンチに腰掛けていた私はティーを一口飲み、溜め息をついた。「朝からクラスはその話題で持ちきりだよ。みんな気になってしょうがないらしい」

『だろうな。処分、あいつが推したんだってな。哲っさん、渋っただろうに』

「そんな感じで言ってたな。あの人は曲がった事を嫌うらしいから」
『特例だろうな。藤の事も何か勘付いているのかもしれないしな』
言い、氷鳥は藤の事に触れた。

『藤の野郎は、まあそれなりに大きな怪我はしているみたいだが、重傷っていう程ではないらしい。一応精神療養つつう事で一時的に数日くらい自宅療養しているみたいだが………怪しいな』

「怪しい？偽装という事？」

『偽装というか。自宅療養していると見せかけて、『仮面』として攻撃仕掛けるんじゃないかって心配なんだ。“出勤”する必要がないから、いつでも嘉を狙おうと思えば狙える』

「ああ、………それか」

『おい、無関心かよ。悠長だな』

電話の向こう側は苦笑した。しかしそれは真剣に私を心配してい

るというのが窺えるものだった。

どういつもこいつも、みんな私の心配ばかりして。

「そんなに心配か」

『そりゃあな』

ムツとなつて問うと、即答された。似たようなやりとりは初めてではないので、返ってくる答えは分かっていたけど。

しかし、もし本当にあいつが《仮面》として来るとしたら、私には身を護る術がない。状況によっては《仮面》に《心理戦》が仕掛けられるとは限らないし。

やはりここは、氷鳥の力も必要かもしれない。《同盟者》として少し絡んでくれる程度でいいのだけど。あいつも本当は夜月の《復讐》をしたいだろう。

ああ、しょうがない。

「私達、《同盟》、組んでいたよな、確か」

『あ、ああ？ そうだな』

突然振られた質問に、氷鳥は驚きながら頷いた。まさかそれに触れるとは思わなかったような反応。私は構わず続ける。

「あんたも従兄弟の《復讐》に加わりたいだろ。どんな形でもいい。《同盟者》として首を突っ込んでくれ。私に何かあって無駄な心配をかけたくない人も居るし」

幾分遠回りな言い方ではあるけど。今の私にはこういう言い方しか出来ない。

すると電話の向こう側は、不意に沈黙を置いた。まさか私の方からこう言うてくるとは思わなかったのかもしれない。

そして沈黙の後には、力強い言葉。

《制裁者》。

『了解』

【攻撃（2）】

私が体育という教科が嫌いだというのはずっと前からで、今回の内容は更にその中でも最も嫌いなジャンルのものだった。

プール。

プールの授業は取り分け嫌いだ。好きな人が多いようだが、私はこれが嫌い嫌いでしょうがない。特に、着替えが。メチャクチャ面倒くさい。しかも、水着の着心地も最悪だ。あのぴったり締め付ける感じが耐え難いまでに嫌だ。水に浸かるのは嫌いではない。しかし、水の中で何故必ず泳がなければならないのか？しかもあんな露出度の高いものを着て。マジで有り得ない。

と、こんなブツブツ文句を言っているのは、本日最後の最後で水泳の授業があるからだ。私は体調不良を理由にサボっており、プールサイドに設置されているベンチに座っている。

（ほんと元気だよな……………）

授業の残りの十分程を自由時間にされ、とにかくプールの中ではしゃぐ同級生達を見て溜め息。

水を掛け合い、キャアキャアと笑う生徒。黙々と泳ぐ生徒。プールサイドで落とし合いをする生徒。何やら叫んでいる生徒。みんな楽しそうに騒いでいる。見てるだけで体力を奪われてしまいそうになったので、取り敢えず目を伏せる。

校舎の最上階にある室内プール。天井があり太陽の光は窓から少し入ってくる程度なので暑くもない。間違えたらそのまま眠ってしまいそうな程適度な温度が保たれている。

「はい、皆さーん。そろそろ上がって下さーい」

「……………」

本当に眠ってしまいそうになったところで、体育教師の声がかか

った。プールに入っていた生徒達は名残惜しそうにしながらもぞろぞろと上がり、シャワーへ向かう。私も教室に向かおうと立ち上がり、スカートをはたく。

「天星織ちゃん」

と、体育教師（名前忘れた）が私を呼んだ。真っ白な肌、クリクリした大きな瞳、波打つ長い髪。間違えたら同級生くらいにも見える年齢不詳の小柄な女教師。

容姿は人形のようなだが、柔道はなんと黒帯なんだとか。剣道も空手もめっちゃ強いという噂を聞いた事がある。痴漢を柔道の技で投げ飛ばした事があるとか何とか。この人のどこにそんな力があるのだろう。

本当に、人は見かけじゃない。

その教師は両手を「ごめん」というように合わせて言った。

「ほんつつとうに申し訳ないんだけど、最後の忘れ物の確認お願いしていい？ あたしすぐ理事長に呼ばれているんだ。この通り！ 天星織ちゃんに、一生に一度目のお願い！」

「……………いいですよ、別に」

それ言うなら一生に『一度』のお願いだろ、とは突っ込まず、私は答えた。もしかすると、いつか一生に二度目のお願いがくるかもしれない。それはご遠慮願いたい。

するとその教師は、子供のようにはあつと顔を輝かせた。

「ありがとう！ 天星織ちゃんだったら一刀両断されるかもって覚悟してたんだけど、本当に嬉しいっ！ 大好きっ！ チョー好き！」

「……………っうげっ」

突然ギュッと抱き締められて、私は変な声を出してしまった。抱き締められるのは月姫で慣れている筈だったが、体は硬直していた。まさか今されると思わなかったからだろうか。

一刀両断されるかもしれないと思いつつ、何故私に頼んだのだろうか？ 他に頼めそうな人居ただろうに。まあいいけど。

というよりこの人……………イタイ。妃七と同じにおいがする。馴ら

される前に逃げた方がいいような気がする。

というか。

「……………行かなくていいんですか」

尋ねると、はっと私から離れた。

「あまりの感動に忘れてた！じゃ、これ、鍵ね。ごめんね！宜しくね！愛してるよー！あいらぶゆー！うおーあいにー！さらんへー！」
まるで嵐のように去り、プールに静けさが戻った。否、最初から騒がしかったから『戻った』という表情は少し変ではあるけど。
さて。

「……………はあ」

渡された鍵を手の平に握りしめ、私は歩き出した。プールサイドを歩いて更衣室へ向かう。

と。

「っ」

何か気配を感じて私は立ち止まった。私に向けられている、背中にべつとりと張り付く、殺気を含んだ気配。この瞬間を待っていたかのように、それはしっかき私に固定されている。

《仮面》か？

来たか？

「……………っ」

振り返ろうとした次の瞬間、突然後頭部を鈍器で殴られた。脳が直接揺らされたように目の前の世界が回る。

平衡感覚を失ってよろめいた私は後ろから突き飛ばされ、そのままプールに落ちた。そして頭を押さえつけられ、水に沈められる。物凄い力だ。抵抗する術はない。

(……………畜生)

後頭部を抑えられ、私を殺そうとしている奴の顔も見れない。しかしそれが誰なのかは、問わなくても分かっていた。

空気など勿論望めない。段々と思考が麻痺していくのが分かった。
(どうするか……………)
薄れていく意識の中ぼんやり考え、私は目を閉じた。

＊ ＊ ＊

(嘉のクラスはプールだったのか)

嘉のクラスメートの女子とすれ違い、氷鳥は心の中で呟いた。この時間サボっていた氷鳥は、何となく校内を散策中だった。女子の中に嘉が混じっていないか見るが、嘉はいなかった。まあ、この集団の中にいる方がおかしいか、と一つ息を吐いた。

(……………まさか嘉がああ言ってくるとはな)

嘉との電話での会話を思い出して目を細めた。

嘉の方から《同盟者》として関わるようにと言ってきた。それはあくまで《依頼》であってそれ以下でもそれ以上でもないが、氷鳥は嬉しく感じていた。

徹底的に他人を拒絶していた嘉が、どういう形であれ他人との関わりを広げているという事が何より嬉しかった。自分が『拒絶』されていけないことが只単純に嬉しかった。

(前進、出来てるよな)

氷鳥は自分に言い聞かせるように目を前に向けた。

その時。

「……………っ」

突然何かに掴まれたように心臓が収縮した。否、正確には『心』

だ。思いを司る部分が突然けたたましい程の警報を鳴らす。

(……………嫌な《予感》がする)

氷鳥は顔を上げてプールへ急いだ。今の氷鳥を動かしているのは《制裁者》としての『直感』だった。《不穏》に関するそれは外れない。足音を消し気配を消し、《闇》を纏いながら向かう。

プールへ入るドアから入り、気配を消した氷鳥の目の前の光景は、《予感》の正しさを証明していた。

こちらに背を向ける形で《仮面》が、誰かを窒息させようとプールに沈めていた。沈められている人物はさほど抵抗していないようだ、あまり波は立っていない。

(……………嘉!!)

氷鳥はすぐに駆け出した。

対する《仮面》はようやく氷鳥の存在に気付き、慌てて立ち上がった。しかしその時には氷鳥はすぐそこまで迫っていた。氷鳥は躊躇うことなく手を振りかざす。

「……………」

繰り出した氷鳥の攻撃は、一瞬のうちに服から出ていた《仮面》の右腕に『×』の傷を付けた。《仮面》は体勢を整え、氷鳥を振り返る。

黒一色の、顔の輪郭まですっぽり覆い隠す大きな『仮面』。そして頭を覆うニット帽。そして身体の特徴を隠す事を意図された、黒いマント。

「……………」

《仮面》は氷鳥を認識すると、ぱっと踵を返して去って行った。分が悪いのを悟ったようだ。

そんな《仮面》には目もくれず、氷鳥は急いで水から嘉を引き上げる。うつ伏せに沈められていた嘉の意識はなく、呼吸は止まっている。氷鳥は嘉をプールサイドに寝かせ、すぐに人口呼吸と心臓マッサージを始めた。

どれくらい沈められていたのか分からないが、早くしなければ手

遅れになる。

(嘉……………っ)

「……………はっ」

氷鳥の思いが通じたのか、暫く続けていると嘉が息を吹き返した。

「嘉、分かるか」

「ごほっ、げほっごほっ」

まだ意識は朦朧としているようで、氷鳥の呼びかけには答えない。

氷鳥は激しく咳き込む嘉の体を横に向けて背中を叩いてさすった。

【攻撃（3）】

＊ ＊ ＊

（……………ん）

うっすら目を開く。

そして即、思考停止。

（何処だ、此処……………）

淡い水色の、やたら凝った装飾の施された天井を見上げて溜め息。
どうやら私はベッドか何かに寝かされているらしい。

状況を把握しようと頭を上げる為に首に力を入れた。

「……………っ」

少し頭を動かした瞬間、激しい痛みが頭全体に走った。思わず眉を顰めてゆっくり元の位置に戻す。頭痛は珍しい事ではないが、こんな風に痛む事は殆どない。

「……………あ」

思い出した。

プールサイドで後ろから頭を殴られて、プールに沈められて。
で、どうなったんだ？此処は？

見れる範囲で目だけ動かして周りを確かめる。

（病院、かな）

そう考える方が妥当だ。まるでホテルのように品がある部屋なので病室には見えないが、こういう病室を有している病院を私は一つ知っている。恐らくそこだ。それに、薬品の微かなにおいもある。自分の着ている服を触てみると、制服から別の物に変えられていた。濡れてびしょびしょだったし、当たり前か。

それ以前に、私生きてるし。

「……………嘉？」

と、聞き慣れた声がして、その人物が視界に入ってきた。手探り

で私の顔を探す彼女の手を、ゆっくり手を上げて掴む。

その肌からぬくもりが伝わる。

「嘉！」

「……………よう」

酷くかすれた声で言うと、月姫は見えない瞳を安堵に微笑ませた。
「連絡が来て本当にびっくりしたのよ。無事で良かった……………」

蒼い瞳が、泪で潤んだ。良かった、と私の手を強く握る。そして
頬に当てて包み込んだ。

こんな私を心配して。

こんな顔させたくなかったのに。それなのにまた心配させてしまった。

「嘉は本当に《傍観者》なのね」

不意に月姫は言った。私はその意味が分からず、黙って続きを待つ。

優しく私の頬に触れ、月姫は続けた。

「もう少し遅かったら、死んでいたかもしれないって。氷鳥が適切な処置をしていなかったら危ないところだったって。嘉は『危険』を払いのける《傍観者》なんだって改めて思ったの」

「……………」

私の空白の間にそんな事があったのか。確かに私が今此处で生きているのはおかしいと思っていたが。

また、また助けられてしまったのか。しかも、氷鳥に。

いや、何らかの形で加わるように言ったのは私だけだ。何だか……………な。

「氷鳥にお礼言わなきゃね」

ナースコールで私が目を覚ました事を伝えて、お手洗いに行くね、と微笑んだ月姫は病室を出て言った。それを見送り天井を見上げてぼんやり考える。

《仮面》。

恐らく、今回私を襲ったのは間違いなく奴だろう。奴以外いない。

結局最後までその姿を確認する事は出来なかったが、私はそう確信していた。

あの殺気は本物だった。私に対する殺意でみなぎっていた。《表》での藤とは全く比にならない程に。氷鳥が間一髪というところで助けてくれたようだが、氷鳥が来なかったらどうなっていたことやら、という感じた。あのまま水死体になっていたかもしれない。

氷鳥や満月が懸念していた通り、あいつは動き出した。《仮面》として私を先に標的ターゲットにした。

《表》だろうが《闇》だろうが、取り敢えず私を抹殺するという気持ちの本物だということは分かった。

(面倒だなあ……………)

こういう攻撃が続くと面倒だ。常に警戒しなきゃならないし、人気の少ない場所に行くなど言語道断だ。あんな奴に私の行動をコントロールされたくないのだが。

(仕方ないか)

護身術を身につけようとしなのは私だし、《不穩》などそんなものだ、と一つ溜め息をつく。と同時に、部屋の自動ドアが開いた。「よお、不死身の女子高生」

そんな不敵な声が聞こえて私はその入って来た人物に目だけ向けた。

青柳一義せいりゅういちぎ

財閥界最上位に君臨する『二帝』の一つ青柳家の末裔であり、此処青柳病院の絶対的権威者だ。二十代半ばでありながら（しかしそれ以前から）医学界では頭脳・技術、全ての面で異端とも言える程の才能を持つ『二神医』の一人として名を轟かせ、コバルトブルーの目と髪を持つ。

一義はそのコバルトブルーの目でじっと私を見つめた。

「とんだ災難だったな。大体の説明は聞いた。お前面白いくらい見えない何かに守られているな、本当に。どうだ、気分は」

「……………悪い。特に頭痛が酷い」

「だろうな。後ろから殴られた痕があるからな。縫うような傷ではないし、精密検査でも問題はなかった。只、急に吐き気してヤバくなったりする場合があるから、数日は様子を見る。明日には一応普通の病室に移れるだろう。今日は此处で様子見だ」

「……………」

という事らしい。医学は全くの無知なので私はそれに同意するしかない。頭が痛いので動かせないが、目を細めてそれに答えた。

「それに、少し休まなきゃならないだろ？」

意味深な一義の台詞。何かの暗号のような、合い言葉のような言葉。私は只頷いた。

それから一義は軽い問診を行い、不意に真剣な表情を私に向けた。深く青い瞳に私が映る。

「それから、氷鳥から伝言。『お大事に』」

「……………」

「あいつは明日くらいに見舞いに来るらしい。あいつがいなかったらお前は今頃解剖されているんだ。あいつには感謝してもしきれないぞ」

「……………あんたが言うところの恐ろしいくらいリアルなんだが」

「なんだ、人を解剖好きの変態みたいに言いやがって」

ニヤリと笑って一義は唇を歪めた。そして腕時計に目を走らせる。「取り敢えずこんな感じだ。今のところ、特に心配するような事はない。只ちゃんと休む事、それだけだ。暫くは外出禁止。月姫にも説明はしてあるが、分からない事があれば訊けばいい」

お大事に。そう言い残して一義は白衣を翻し、颯爽と去って行った。相変わらず忙しそうだな、と私は息を吐く。

一義があれやこれやと訊かないのは、私が《闇》にいる事を知っており、彼自身《闇》に半分足を突っ込んでいるからだ。それに、大まかな事は氷鳥から聞いただろう。

『休まなきゃならないだろ』。

その台詞の意味も。私が今《不穏》の中におり、これからその《

終焉》を迎えなけりやならない事を知っているから。

「……………」

一つ溜め息。

しかし本当に危なかった。冗談抜きで死ぬところだった。否、本来ならもう既にお陀仏になっていただろう。

《傍観者》。

改めて、厄介で、しかし特異な《種族》だと思う。

自らに《不穩》を引き寄せ、しかしそれを自らの側に付け、やがて勝利する。勿論完璧に物事を運べるわけではないし怪我をする事はお決まりだが、私はそうやって今まで生き残ってきた。

まるでそれは綱渡り。

落ちそうで落ちない紐の上。

よろめかされながら倒れない。

《傍観者》。

「……………」

と、ドアがスライドして人が入ってきた。足音は二つ。今度は誰が来たのだろうか。私はその人物が視界に入ってから来るまで待つ。

「……………」

私は視界に入ってから来た人物を見て少し驚いた。

担任の臨安我哲留^{りんあんがてつる}が、いつものポーカーフェイスで私を見下ろしていた。その後ろには月姫も見える。

まさか、この人が来るなんて。

「具合はどうだ」

椅子に腰掛け担任は低く尋ねてきた。漆黒に濡れた瞳は真っ直ぐ私を見つめている。私はその視線に答えた。

一瞬、有り得ないと思った。

でも以前、担任と仲の良い数学教師の流星が言っていた。この人は自分の生徒を大事に思っているのだと。いつも私の事を心配しているのだと。

この人がどういう人なのかよく分からないけど、こうしてわざわざ

ざ此処に足を運んでくれたというのは、つまりがそういう事なのだ。めっちゃくちゃ忙しい筈なのに時間を割いてくれるというのは。

「あまり良くはなさそうだな。ああ、流星と願から見舞い」

思い出したように言い、担任は手に持っていたお洒落なギフトボックスを見せた。そこには『indigo』のロゴ。みんなಂದだけあの店好きなんだ。

担任はそのボックスを月姫に渡し、私に向き直った。

「数日は安静に、という事らしいな。こんな風に強制的にでも休まさないで、お前は休めないだろう。束の間の休息かもしれないが、しっかり休んで備えたらいい」

「……………はい」

私は答え、只担任の顔を見ていた。

『備えたらいい』。

何に対して備えるのか。重要な事は省かれた言葉。それでも核心を突き、要点を抑えた台詞。確か先月も似たような事を言われた気がする。

一体この人はどこまで私を理解しているのだろうか。それは今は判断出来ない。しかし今私が置かれている状況を、最低でもぼんやりと理解しているのは伝わってきた。もしかしたら、知っていて知らない振りをしているだけかもしれないけれど。

担任は組んだ足の上で手を組んだ。

「取り敢えず、クラスには様子見で数日入院するとだけ報告しておく。あまり色々表に晒されるのは嫌だろう」

問いに、はい、と小さく返す。

これも、この人なりの気遣いなのだろう。満月が停学処分になった時にも、本当に必要最小限の事しか言わなかった。

不意に微かに唇を横に引き（それは微笑みとはほど遠いが、穏やかな表情だった）、口を開いた。

「あまり疲れさせるのも良くないな。帰るとしよう。取り敢えず、ゆっくり休め」

そう言うとは担任は月姫に合図し、部屋から出て行った。この人も本当に忙しい人だ。月姫はお辞儀をしてそれを見送る。

やがて部屋に静寂が戻ると、月姫がベッドに近付いてきた。担任が腰掛けていた椅子を手探りで探し、ゆっくり腰掛ける。

「あの人が担任の先生なのね。丁度お手洗いから出て来た時にばったり会ってね。どうしてか、私を知っていたみたい。声をかけられたの。それで一緒に此处まで来たの」

「へえ」

何故担任が月姫を知っていたのか分からないが（面識があるという事も聞いた事ないし）、そこらへんには触れない事にする。なんだか触れちゃいけないような気がした。何故か分からないけれど。

「優しいのね、先生」

月姫は見えない青い瞳を微笑ませ、穏やかな声で言った。

「多分本当に忙しい中来てくれたのね。そんな感じがしたわ。本当に嘉の事を心配してる。ね、嘉。嘉を思っている人はたくさんいるのよ」

穏やかな微笑み。

それはまるで私の中の何かを懐柔していくように。ゆっくりと溶かしていくように。

私はいつの間にか、この微笑みを願うようになっていた。月姫には悲しい表情をさせたくないと願うようになっていた。

《傍観者》の、この私が。

この私が。

「そうだ、妃七が迎えに来るんだったわ。忘れてた」

大変、と手を叩き月姫は立ち上がった。そして悪戯っぽい笑みを私に向ける。

「外に出ておくわね。今此处に来られたら大変でしょう？ 妃七限定面会謝絶って事にしておくわ」

「……………助かる」

心底そう思った。今奴が来たらとんでもない事になる。『大変』

どこの話ではない。まだ隕石が落ちてきた方がマシだ。本当に墜ちて来られたら困るけど。

バッグを肩に掛け、月姫は私を振り返った。ずれた視線に私は映らない。しかし月姫の思いはしっかり私に向いていた。

そして月姫は、辛さを抑えるような笑みを浮かべた。

「嘉、本当にちゃんと、ゆっくり休んでね」

「分かった」

私は間を開けずに答えた。

月姫には出来るだけこういう表情をさせたくなかった。こんな私らしくないと思いながら、しかしそう思っている自分がいた。

それは自分に嘘をつけない程に固い気持ちを作り上げて。

もうそれを否定したりはしない。

「じゃあ、ね」

月姫はにっこりと微笑み、ゆっくり部屋から出て行った。

「……………」

静寂の部屋。ゆっくりと落ちるリングル液を見つめながら私はぼうつと呆けていた。そして藤、《仮面》の事を考察する。

確か藤は自宅療養中という事だった筈だ。病院ではなく自宅という場所を選んだのは恐らく、私を《仮面》として攻撃し易くする為だ。それならアライバイも作り易いし外に出て行き易い。氷鳥が予測していたその通りに奴は攻撃を仕掛けてきたという事になる。

まさか此処まで来る事はないだろうけれど。来たら来たでもうどうにでもなれ、だ。

（夜月の場合は《仮面》としては攻撃しなかったんだろいうな）

ふと思った。

夜月は《表》に居る時に攻撃された。あの自主退学に追い込まれた三年と一緒だ。だから多分、《仮面》としては相対しなかっただろう。そこらへんはつきりは分からないが、聞く限りではそういう感じがした。《表》に《闇》で向かっていく必要などないし、あの三年も夜月も死んではいない。

恐らく、藤にはまだ出していない《心理戦》という戦術がある筈だ。まだ《表》の切り札的な手段として。夜明を《人形》にしたその方法はまだ残している。

只出し惜しみしているだけか、それだけ自信があるのか。《傍観者》に《心理戦》を仕掛けて勝利するだけの力量を持っているのか。そんなことはあり得ない。

（絶対負けねえ）

強く誓った。

あんな奴、害を生み出すだけだ。私自身あまり偉そうな事を言える身分ではない事は分かっている。奴よりマシと一概に言えない存在だという事も。でもあいつにだけは絶対に負けない。

必ず。

必ず《表》からも《闇》からも抹消し、あいつの名前すら聞かれないようにしてやる。

「……………」

と、部屋のドアがスライドした。人の出入りが激しいな、と思いつつ視界に入ってくるまで待つ。足音は二つだ。

「やあ、嘉」

「……………」

「……………」

私は、担任が入って来た時とはまた違う驚きに、その二人を交互に見つめた。

そこには、満月の双子の姉妹の夜明よあけと夜月がいた。姉弟でわざわざ見舞いに来てくれたらしい。夜明は既婚者で何だかんだ忙しいようだが、今日は外出出来る余裕があったらしい。

夜明は少し腰を折り私を覗き込んだ。

「大丈夫……………ではなさそうだね。大変だったね」

「大して驚くような事でもないけど」

「言うと思った」

うっすらと満月に良く似た笑みを浮かべ、お見舞い、と手に持つ

袋を私に見せた。こちら『indigo』。担任が持って来たやつは月姫に持って行かせれば良かった。今私は体調的に食べられる状態じゃないぞ。

「あ、『indigo』。誰か来てたんだ」

さっき担任が持って来たギフトボックスを見つけて「かぶっちゃったね」と夜明は苦笑した。持って来たものをその隣に並べて私に向き直る。

そして不意に真剣な表情。

まるで満月がそこに居るかのような。

《傍観者》のような。

「なんか、またちょっと厄介な《不穩》に絡まれているみたいね。満夜兄ちゃんと氷鳥から聞いたんだけど」

そしてすぐに本題に触れた。その隣で夜月もじっと私を見つめている。

私は目を細めた。

「姦しいがこればかりはしょうがない。《闇》が絡んでいるし、こういう事もある。今回は《表》もあるから、あんたの姉妹みたいな事にもなる」

「……………」

夜明はそれを聞いて悔しそうな表情で唇を噛み締めた。勿論それは満月が停学処分を受けている事を知っての反応だ。それは以前には見られなかったような表情。まるで満月の《同族》に戻ったのかと思う程のものだった。

夜月も、無表情の中に怒りが煮えたぎっているのが分かった。その瞳には《闇》が蠢いている。暗い暗い瞳には憎悪だけで満たされているようだった。《復讐》の見え隠れする無表情。

椅子に腰掛け、夜明はベッドの手すりに手をかけた。ぐっと握って絞り出すように言葉を発する。

「満月がこの方法を取った理由は理解出来るよ。多分あたしも同じ状況になったら、そうするだろうから。……………ようやく見つけたん

だもんね。夜月を苦しめた、『復讐』すべき『敵』を。それを墜とす為なら、なりふり構わないよ」

淡々と紡がれる言葉は、まるで呪いの呪文のように。『闇』に戻って来たのかと思う程の雰囲気。『傍観者』から外れてしまったという夜明だが、それが戻りつつあるように感じた。

外ハネの色素の薄い髪をさわさわと揺らし、再び私に目を向ける夜明。

「その、教師兼『仮面』って、どんな感じなのかな。あたし、まだテストでしか学校に行ってないから分からないんだ。ほら、あたし通信科だからテストしか登校しないから」

藤の事を尋ねて来た。そういえば夜明は特例の『通信科』に通っていたんだった。私は頭に被害が行かない程度に思考を巡らし、夜明と隣に座る夜月に目をやった。

「一言で言えば、二重人格で絡んで来る、しつこいこの上ない奴って感じだな。まあ、それは『表』での話で、『闇』ではこんな感じだ」

私は自嘲を含めた声色で両手を小さく広げた。『闇』での奴は敢えて説明しなくても、私が見える証になっている。

夜明は真剣な表情のまま私を見つめていた。その表情は何を言わんとしているのか私には分からない。私は只それに視線を返した。

こういう時不意に、私にはあらゆるものが足りないんだろうなと思う。

やがて息を一つ吐き、夜明は夜月に目を向けた。じっと身動きせず床に視線を這わせていた夜月はそれに気付き、ゆっくり顔を上げた。初めて会った時よりは幾分光がゆらゆらと揺れている瞳。しかしまだ本当の意味での光は遮断されている暗い瞳だった。

夜明は微かに唇を笑ませて夜月に言葉を晒した。

「あたし達も闘おう。どんな形でも。自分が自分であり続けられるかどうかは、本人次第だからね。あんな奴には負けちゃいけない。一緒に、行こう」

それは宣戦布告。藤に対する挑戦状。直接関与しなくても、夜月と共に闘うと。その『絆』故に夜明は夜月に誓う。

これは夜月の闘いだから。

私や満月の《不穩》でもあるが、これは夜月も関係している。未だ完結していない昔の《不穩》を夜月も引きずっている。これを断ち切り夜月が夜月を取り戻すのは今だ。『今しかない』とは言わないが、今を逃してしまったら、最早闘う気力さえ失せてしまうだろう。

だから夜月の闘いだ。

夜月と奴との。

「あんたも《終焉》に関与するか」

私は夜月に言葉を投げた。

その瞬間その言葉に反応するように夜月はゆっくり視線を合わせてきた。《闇》に濡れた瞳。それは必死にすがりつく何かを探しているように。出口を求めているように。

私は目を細め、続けた。

「この《不穩》はあんたのものでもある。それが私達へと続いていくんだ。あんたを失墜させようとしたあいつの『最期』を見たくはないか？」

「……………」

夜月は変わらない無表情でじっと考えている。私にすっかり視線を固定したまま、微動だにせずに。しかしその瞳には、躊躇いも狼狽も見えなかった。

やがて夜月は頷いた。

「あいつの『最期』を見届ける」

【攻撃（４）】

翌日だいぶ回復したので、私は別の個室に移された。頭痛も昨日よりはいい。ベッドを起こしてもらい、私はベッドに身を委ねて窓から外の景色を眺めていた。

本当は退院したかったのだが、その願いは一義に一蹴された。まだあと数日は帰さない、という事らしい。病院内であいつは絶対だし反撃するのも面倒だったので、仕方なくこうして非日常的時間を過ごしている。

考え方を変えれば、《仮面》に教われる危険性や藤が《表》の攻撃を仕掛けにくいという面で、今私は護られているのだろう。来たるべき《終焉》まで、気力と体力を温存する為の手段だと思えばいい。

（実際死にかけた訳だし）

それは言い訳の出来ない事実だし、無駄な事をしたりして他人に助けられるような事にはなりたくない。だったらある程度努力しろという声も聞こえて来そうだが、それもそれでまた面倒くさい。だから少しの間は我慢して休んでおこう。

《終焉》は確実に近付いている筈だ。

「…………ふう……………」

小さく溜め息。とその時だった。

コンコンコン。

小さなノックの音が聞こえてドアがスライドする静かな音がした。

ゆっくり窓から視線を外し、そこに目を向ける。

「やあ、嘉」

「……………」

入って来たのは、あの体育教師と停学処分中の満月だった。まさ

か来るとは思わなかった。何故一緒に来たかは謎だが、そこには敢えて触れず、入って来た二人に目をやる。

いつもと変わらない眠そうな笑みを浮かべた満月と、どこか泣き出してしまいそうな表情の教師。否、既に半泣きのようにも見える。二人は並んでベッドサイドに立った。

すると。

「天星織ちゃぁん!!」

「……………」

その教師は突然予告無しに腕を広げ、私に迫って来た。私は反射的に逃げようとして、ベッドに仰け反るように身体に力を入れてしまった。うう、頭が……………。私は馬鹿か。

「先生、駄目ですよー」

私に抱きつこうとしたその教師を満月が寸でのところで止めた。ゆったりとした口調とは裏腹に、素早い動きで教師を後ろから羽交い締めにする。動きを封じられた教師は抵抗せずに頭を垂れてうなだれた。私の状態を見て（恐らく相当悪いのだろう）更に表情を歪める。

その瞳には大粒の泪。

「ごめんね、天星織ちゃん」

ぼろりぼろりと泪が頬を伝い、その教師は私を見つめて呟いた。私は何に対する謝罪か分からずに眉を顰める。

満月から解放されたその人は力無く肩を落とし、床に視線を落とした。

「あたしのせいよ。あたしが天星織ちゃんを残したりしたから……」

「……………はい？」

その呟きに私は思わず切り返した。

確かに私を残したのはこの人だが、この人が謝る必要などない筈だ。この人は藤や《仮面》の事は知らない筈だし、この人が私がこくなる事を予想出来た筈がない。予想不可能で、しかも私にとって

は不可抗力だっただけの話だ。色々な要素が重なって起こった事だが、これは《仮面》と私との問題で、この人は無関係だ。この人のせいなどとは微塵も思っていない。考えを掠める事すらなかった。それを悔やんでいるのか。仕方ないと言えば仕方ないのだろうか。

「あたしが天星織ちゃんに頼まなければこんな事にはならなかったのよ。あたしがやっていれば。こんな事になるなんて……………もう、天星織ちゃんが死んじゃったらどうしようって怖かった……………ごめんなさい……………」

「……………もういいですって」

私は自分を責めるその教師に言葉を投げた。

謝られるのは基本的に好きではない。というかむしろ嫌いだ。酷く違和感を感じるし、もどかしいような歯痒いような、そんな曖昧で気持ち悪い感情が私を包もうとする。私の奥を支配し束縛しようとする。だから私はその教師を止めた。

これに耐えられる程私は出来た人間じゃない。

「……………」

その教師はぐっと唇を口の中に巻き、泪で潤んだ目を私に向けた。それは溢れ氾濫しそうな感情を必死に堪えているようだった。

そして不意に泣きながら笑んで——その相反する筈の表情を同時に浮かべて——、その人は口を開いた。

「天星織ちゃんは強いんだね」

それは予想出来ないような台詞で。

私は只黙ってその人を見つめていた。

その人は泪を拭って続ける。

「強いよ。しかも、只強い訳じゃない。優しさが秘められた強さ。本物の強さ。天星織ちゃんはそれを持ってる」

「大袈裟です。私はそんな立派なものじゃない」
間を置かずそれを否定する。

これは謙遜でも自分を卑下している訳でもない。私は私が謝られ

る事に対して不快に思うから、そしてこの言葉には領けないからそう言っただけだ。私が他人を思いやっていると思っているのであれば、それは誤解でありそれ以外のなんでもない。それは有り得ない事だ。

私にはそんな『人間らしい』ことはできない。

「私は私の感情を優先しているに過ぎない。だからそれは違います。私はそんな評価とは無縁の人間です」

私はその教師を見つめ返して言った。

《傍観者》。『人間』かどうかも怪しい、『人間』だと断言出来ないような私に、こういう評価は不相応であまりに相応しくない。この人の目に映っている私は、私ではない。

「ううん！」

その私の言葉を聞いて、その教師は思いつ切り首を横に振った。ブンブンと髪が振り乱れるのにそれさえ気にせずに。あんまり振ると、脳味噌が前後逆さになったりしないだろうか？首が、ゴキ、とおかしくならないか？と思うくらい激しい。まるで子供だ。

そして不意にそれを止めて私の目を向き、乱れた髪を直そうともせず私にしっかりと視線を固定して。

「違うのよ、天星織ちゃん。天星織ちゃんはそんなじゃないのっ！どうして？天星織ちゃん、自分の事になるといつつも否定するんだから！ううん、あたしは天星織ちゃんとはちゃんと話した事今までないけど！今話したばかりだけど！『いつも』は知らないけど！もうっあんまり自分の事悪く言うあたし泣くよっ」

どんな脅しだよ。どうせなら投げ飛ばすよ、って感じで脅せよ。幾分テンションが熱を帯び段々上がってきたこの人へのツツコミは心の中だけにして私は只溜め息をついた。反論したい事はいくらでもあるし、ツツコミたいところもあるが、敢えて黙っておく事にした。

どうせ言ったところで、またそれを否定される筈だ。あるいは話を大きくされる。これじゃいつまでも終わらない。もうそれは、月

姫やその他の人との会話で経験済みだった。この頃何度も経験している事。だから納得は出来なくても黙っておく。討論をして無駄に体力と気力を使う事は止めておこう。

しかし………テンションがますます妃七に似て来たぞ。これを維持するならお取り引き願いたい。

黙ってしまった私に、慌てて教師は手を振った。

「あ、ごめんね。天星織ちゃんの思っている事は否定しちゃいけなかったね。ごめんなさい。天星織ちゃんが思っている事は思っている事でいいけど、でも天星織ちゃん、これだけは言わせて」

乱れた髪をようやく整えて私を真っ直ぐ見つめる。テンションは少し下げて、私が疲れない程度の高さで言い、ぬくもりを知っている表情で。

それは月姫と同じ類いの瞳。彼女が私を穏やかに見つめる時の、あの表情とよく似ている。それと同じものを感じる。

そしてにつこり微笑んで。

「天星織ちゃんと話したのって初めてかもしれないけど、あたしはこの数日で天星織ちゃんが大好きになったよ。心から天星織ちゃんの『平安』を願ってる」

「……………」

何故、何故。

私は不可解に思いながら、しかしそれを論議に発展させない為に黙ったまま、無表情を教師に向けていた。

何故こんな私なんかの為に。しかも、付き合いは殆どなかった筈なのに。どうして私に対してそういう感情を抱けるのだろうか。一体何をどんな風に思っ。何を感じて。何がどうなったらそうなるのだろうか。

私には理解出来なかった。今のところ出来る気がしない。無理にしようとは思わない。只、事実だけがここにある。

本当に。いつの間に私の周りには、こんなに私を無条件に受け入れる人が集まるようになってしまったのだろう。今までこんな事な

かった。私の《世界》は《闇》だけで、いくら《表》に存在しているとは言っても、私は周りを拒絶し、周りも私を嫌い遠ざけていた。それが続いていく筈だった。これからもずっと。

それがいつの間にか、こういう事になっている。

私でさえ理解出来ない程、私の《世界》は目まぐるしく変化している。私がついて行けない程に、私の中の何かが変わっているのを感じた。

ちゃんと整理しなくては。いつか。

「じゃ、天星織ちゃん」

私を呼び、教師は微笑んだ。幼い少女の笑みではなく、大人の穏やかな微笑を浮かべて。

それはまるで私を包み込むように。

まるで月姫のような微笑みで。

「ゆっくり休んで、無理しないでね。あたしはもう行くね。身体に気を付けて。……………深夜ちゃんはどうする？」

「あたしはもう少し居ます。少し嘉と話したい事があるので」

私と教師が話している間、まるで居ないのかと思うくらい静かに会話を聞いていた満月はそう答えた。教師は「分かった」と返事してもう一度私に向き直った。あの穏やかな微笑を浮かべて口を開く。

「天星織ちゃん、自分を大切にしてくね。天星織ちゃんは今までも今もこれからも、たった一人の存在だから、もう少し自分に優しくしてあげて。天星織ちゃんを大切に思っている人はたくさんいるんだよ。天星織ちゃんに『安らぎ』がありますように」

そう言うのと、深く頭を下げた。そして頭を上げ一つ笑みを残してドアから出て行った。

「……………」

「……………」

静かにスライドしたドアが閉まると、そこには無言が流れた。満月はドアから視線を外し、椅子に腰掛けて私を見つめた。

沈黙がそう続かないうちに満月は会話を始める。

「ごめんね、嘉。昨日来たかったんだけど、家の前、よく分からない人に見張られててさ。停学は原則外出も禁止だからね。あたしなら抜け出しそうだって、哲留さんじゃない誰かさんが、哲留さんに内緒でさせたい。多分藤の差し金だろうけど。これは氷鳥情報」

「へえ、そこまでしたんだな。じゃあなんで今日は出て来れた？」

「ゆっこ先生、あ、さっきの先生ね。あの先生が哲留さんから特別外出許可をもらって来てくれたんだ。嘉の見舞いの為に」

「ふうん。そういう事も出来るんだな。でも例外中の例外だろ」

「うん。哲留さんに全権利があるって言っても間違いないくらいだからね、学園内では。あの人が『白』と言えば黒でも白に変えられるくらい。しかも哲留さんは納得してあたしを処分にした訳じゃないからと思う、すぐOKだったって」

「成る程」

頷き、溜め息。

「なんだかメチャクチャ面倒くさい。家を見張らせるまでするか？ どれだけ暇人なんだ。他にやる事はないのか？ くだらなすぎて聞くだけでうんざりだ。」

満月はニンマリと楽しそうな表情を浮かべて、『ゆっこ先生』の話に触れた。

「すごいんだよ。ゆっこ先生。ゆっこ先生が家まで迎えに来てくれたんだけど、今日もあたしの家見張られていたんだ。で、あたしを外出させるさせないでその人と先生口論になってね。哲留さんに許可もなかったって言っても通じないの。なんかごちゃごちゃいちゃもん付けてあたしを出させないようにするの。どうするんだろーって見てたらゆっこ先生突然プチってキレちゃって、その人に柔道の大技を決めてぶっ飛ばして、しかもおまけにその男が持ってた棒奪って突き付けてさ。『道理が分からない奴は勉強し直して来なさい！ 出直せ！ 下衆野郎（とまでは言わなかったけど）！』って吐き棄て。しかもその相手、めっちゃくちやガタいんだよ？ ゆっこ先生の倍以上ある男の人だった。それをぶっ飛ばしてさ。やがて『メイン！』て

するところだったよ。恐るべし、ゆっこ。思わず拍手しちゃったよ」

「……………」

ちょっと引いた。

どうやら剣道やら柔道やらが強いというあの噂は本物だったらしい。その場に居なくて本当に良かったと思った。出来るだけそういうものからは離れていたい。見るだけで疲れるし。

しかし、そこまでして見舞いに来た訳だ。

（『安らぎがありますように』、か）

さつき最後に『ゆっこ先生』が残した言葉を心の中で呟く。

心の底から滲み出す言葉。まるで私が真の意味での『安らぎ』を知らない事を知っているような言葉だった。まさかあの人も《闇》の人間である訳ではないと思うが（断言は出来ないけど）、なんだか意味深な言葉だった。もしかしたら、なんて思ってしまう。

まあいい。深読みはやめよう。考えたってどうせ分からない。

（……………ああ、そう言えば）

と、そこで昨日担任と満月の兄弟達が持って来た『indigo』のスイーツのことを思い出した。まだ気持ちが悪くて口に出来そうにないので、手付かずのまま残されている。ここはスイーツに関しては底無しの胃を持つ激甘党の満月にどうにかしてもらおう。折角の高級スイーツ、腐らせるのは勿体無いし。

私は満月に声をかけた。

「そういえば昨日もらった『indigo』のスイーツが冷蔵庫に入ってる」

「本当に？ いいの？ 食べても。あたしきつと一欠片も残さないよ？」

「構わない。私は食べれる状態じゃないし結構大量なんだよ」

「やった！！ 一日食べないと禁断症状が出るんだよねー。嘉、救世主♪」

「大袈裟だ」

という私の言葉は流された。満月は勢い良く立ち上がり、冷蔵庫へ直行した。中を開けて「うわぁ」と感嘆の声を上げる。そして担

任が持つて来たものと夜明達が持つて来たものの両方を持つてルンで歩いて来た。やはり両方いくつもりらしい。

甘いものを目の前にしたこいつのテンションはちよっとイタイ。

「……………」

周りにハートと音符を飛ばしながらスイーツタイムに入った満月を眺めながら私は思案タイムに入る。

それにしても、『ゆっこ先生』とはついこの間まで殆ど接点はなかった筈だったのに。全く、人生とは何が起こるか本当に分からない。どう転がっていくのか、変化していくのか、方向を変えるのか。最近それが特に急速に何処かに向かって進んでいるような気がする。それでも。

私が《傍観者》でいる事に支障を来さないのであれば、それはそれでいい。取り敢えずそのままにして様子を見よう。

私の《世界》が広がる事が私にとってマイナスにならないのであれば、それはそれで敢えてどうこうする必要はない。この辺は損得勘定で動くに限る。

「あ、これゆっこ先生が。お見舞いだって」

不意に思い出したように満月はスイーツを一旦箱に戻し、ミニポシェットから何やら分厚い封筒を取り出した。はい、と差し出されたものを取り敢えず受け取り（結構重たい）、中身を確認してみる。

「……………」

確認して、動きが止まってしまった。

おいおい。あの人もセレブ族なのか？

封筒の中には、ぱっと見ただけでは数えられないくらいの札がぎっしり入っていた。数える気力すら失せてしまう程だ。そして控えめに小さなメッセージカードが添えられていた。

「見舞いにしては多すぎるだろうよ……………」

あまりに予想外の『お見舞い』に思考も動きも止まってしまった私に、満月はスイーツを口に運ぶ手を止めた。肩を竦めて口を開く。「ゆっこ先生、嘉の事聞いてかなり動揺してた。こっちに来ながら

お見舞いの花買うって言ってんだけどあまりに動揺してて、それも忘れちゃってね。だからせめてこれだけでもって思ったんじゃないかな」

「『せめて』でこれか……………」

戻って花を購入した方が安上がりだっただろうに。あまりに次元が違う感覚におかしくなりそうだ。でもこれがあの人の精一杯の気持ちなのだろう。貰った側だし、やり方に関して私がとやかく言う事ではない。

シュークリームを頬張りながら（頬のあちこちにクリームが付いてる。小さい屑もぼろぼろ落としてる。もうちょっと上手に食べろよ）満月は更に説明を加える。

「本当は現金ではあまり渡したくなかったみたいだけど、済まなかったっていう気持ちが大きかったみたい。入院費とかも心配だったんじゃない？いくら嘉が河柳通えるくらいの資金を持ってるって知っててもさ。青柳病院の個室って高いじゃん。それは抜きにしても、いても立ってもいられなかったんじゃないかな。少しでも力になりたいって思ったんだと思う」

「……………こんなに気を遣わなくても」

溜め息をついて封筒を閉じ、満月に棚の引き出しに入れてくれるよう頼む。一体あのお金、どうしろっていうんだ。

満月はそれを引き出しにしまいながら口を開く。

「でも思ったよりは嘉の回復が早くて良かった。嘉、イメージ的に回復するの遅そうだからね。まだ死人みたいになってるのかなって思ってたから、ちょっと安心したよ」

「私は老人か」

満月の勝手なイメージにツツコミを入れる。確かに毎日どこかオカシいのは事実だけど、だけどどんなイメージなんだ。

にゃは、と笑って満月は苺のミルフィーユを手を持った。そしてスッと表情を消し、私に目を向けた。

それは《不穏》を問う時の表情。

「嘉、誰がやったかは見てないんだったつけ？」

「まあな。後ろからやられてそのまま。だけでもう答えは分かりきっているだろ」

「うん。九十九・九パーセントね。やっぱり来たね、あいつ。多分あたしが居ない間に嘉を攻撃するだろうって思ってたけど、予想通りだ。真剣にあたし達を殺す気だね」

真剣な表情のまま、もともとミルフィューを口に入れる。食べてから話せばいいのに。そう思ったが黙っていた。

どうせこいつの事だ、「どっちも棄て難い」とか言うんだろう。

満月はパクパクとあつと言う間にミルフィューを平らげた。再び箱の中に手を入れてスイーツを選びながら口を開く。

「あたし一応明後日から学校行けるよ。別に行きたいって訳じゃないけどね。………嘉、大丈夫？相当体調悪そうだよ」

「ああ、最悪だ」

「まだ退院出来そうにない？」

「させてくれそうにない」

「あー、一義先生がね。嘉は無意識に無理しちゃうところあるから、その辺分かっているのかもしれないね。甘えたらいいよ。というか強制入院だから甘える云々じゃないか。あたし、嘉が行けるようになるまで学校休んじゃおうかなあ」

そんな事を言って、シヨコラシフォンを頬張る満月。さっき『不穏』に満ちていた表情が有り得ないくらい緩んでいる。甘いものを食べている時が一番楽しそうだ。

それにしても、食べるペース速すぎるだろ。

「だって、藤はあたしと嘉を離して一人一人攻撃している訳でしょ？という事は、嘉が来れないその間に今度はあたしに攻撃を仕掛ける可能性だってあるって事だよ。それに乗せられない為にもさ」

「賢い選択かもしれない」

私は頷いた。

今回の満月の事も必要で選んだものだったが、私の結果は避けら

れなかった。不要な攻撃を受けない為にも、それは賢明な判断と言えるだろう。

それに。

「まだ《心理戦》が残ってる」

大きな口でシヨコラシフォンを一生懸命食べる満月に、呟くように言う。満月はぴたりと動きを止め、私を見上げた。じっと、真剣になった瞳が私を見つめる。

話し過ぎたのか少し眩暈を感じて目を閉じ、瞼を下ろしたまま溜め息をついて続ける。

「《表》での奴のいわゆる『真骨頂』の《心理戦》がまだ出ていないのに気付いているだろ？ 恐らくそれが近々来る筈だ。私が退院して復帰してもし私達が一緒にいても、必ずどちらか一人に照準を絞って。二人を同時に相手する事はまずないだろう。そんな事したら勝算が無くなる事くらいは分かるだろうし。奴のこの『切り札』は、あの三年や夜月を失墜させるのに使った方法だ」

「……………絶対に負けない」

瞳に抑えきれない程の憤りを呼び込み、唸るように満月は口にした。激しい怒りはこの場の空気を震わせる程強い。それは自分がその相手になってやると、自ら宣戦布告するように。

恐らく藤は、《心理戦》の対戦相手を満月にするだろう。裏付けとなるものは何もないが、私はそう思っていた。《闇》で一旦私を崩し、今度は《表》で満月を崩そうと。多分この方法を取る。交互に攻撃し、段々弱らせようと。

いずれにせよ、私達は負けない。あいつがどんな方法を使おうと、負ける訳にはいかない。あんな奴如きに負ける筈がない。まずは《表》のあいつを終わらせてやる。奴の全てを出させて、逃げられなくなるまで追い込んで、追い詰めて。そして完全なる失墜を。あるいは《破壊》を。

それから《闇》のあいつを。

その存在を完全に。

完全に《無》に。

「ねえ、嘉」

満月がテンションを落とした声色で私を呼んだ。私は満月に視線をやる。

そこには《傍観者》の凍てついた笑みを浮かべた満月がいた。床に這わせた目には、冷徹な色。

満月は呟くように言った。

「早くあいつを墜としたいよ」

それは深い深い混濁した呪い。

ぬらぬらと蠢く《復讐》の色。

奴の《抹消》を願う強力な思い。

今はまだ時じゃない。それを否むように紡がれた言葉。爆発しそうな思いを理性で必死に抑え付ける声色。

私は瞼を伏せ、一つ息を吐いた。

私には満月に言える言葉はない。

「そうだな」

只一言呟き、また一つ小さな溜め息をついた。

《終焉》はまだ少し先にある。

【攻撃（5）】

「よお」

その日の夜。

氷鳥が見舞い（？）に來た。ドアをくぐって小さく手を上げ、こちらに向かってくる。左手には何やら袋が下がっており、右手には大きな花束が二つ。

ベッドの横に立ち、目を細めて氷鳥は尋ねてきた。

「どうだ、具合は」

「変わらず」

「最悪ってヤツか」

唇を横に引いて、小さく息を吐く。そして右手に持つ花束の一つを私に見せた。

「満月が、クラスメートに頼まれたらしい。あいつ夕方來たろ、そんな時持ってくるの忘れたらしくてな。遠井って奴に頼まれたらしいぜ」

「ああ」

遠井、か。私は溜め息をついた。

そういえば、遠井も一応《表》では関与していたんだった。この件と藤が同じとは知らない筈だが、立て続けに『面倒事』に巻き込まれている私を心配しているようだ。

まあ、まだこれは序の口だけだ。本番はこれからだ。

「それから、こっちの花束は、あの陸上部の四人から。幸輔、瀬斗、吟、朋也。レストランで少し話したんだろ？俺が見舞いに行くって言ったら持ってけってな」

「ああ。あの四人ね」

もう一つの花束を見て相槌を打つ。しかし、情報が早いな。幸輔

と氷鳥が従兄弟だからか？陸上部も全くの無関係という訳ではないからか？

（見舞いを貰う程親しくはないと思うんだけどな。まあいいか。まだ吟は少し呵責を感じているのかもしれないし）

一つ溜め息。

氷鳥は花束を棚の上に置き、何やら袋から取り出して私に声をかける。

「スポーツドリンク持って来たけど飲むか？食べるのはまだ厳しいだろうと思ってな」

「……………」

振り返って答えを求める氷鳥に私は只頷いた。氷鳥はペットボトルからコップにドリンクを注ぐ。

セレブ族はいわゆる『庶民』の衣食住とはかけ離れた生活を送っているが、氷鳥は好みが『庶民』寄りのものもあるらしい。最近関わっていて少しずつ分かってきた。好物がコーラらしい。『普通』なら七強の人間がペットボトルのスポーツドリンクなんて買ってきて来ない。しかもコンビニで（袋がコンビニのものだった）。

氷鳥はこちらに向き直った。

「自分で飲めそうか？」

「……………」

氷鳥の問いの意味が分からず眉を顰める。氷鳥は苦笑して説明を加えた。

「いや、コップ持てるか？って。力入るか？」

「……………」平気だ。そこまで悪い訳じゃない」

溜め息をついて返す。

前から感じていた事だが、なんだか氷鳥と言葉を交わすのは少し難しい。否、言葉を交わす事がではなく、『意志』を交わせる事が。氷鳥が言わんとする事を理解するのは他人の何倍も頭を使わないと無理だ。他人だったらすぐ分かるような事も、分からなくなる。何を思っているのか、言いたいのか。

(なんでだろうな……………)

何故なのか私自身分からない。私の理解力が低いのか？それとも只の考え過ぎだろうか。

「大丈夫か？嘉」

目を伏せた私を呼び、氷鳥はコップを差し出した。私は考えるのを止めてそれを受け取る。一口飲むと冷たい感触が喉をすつと通り抜けた。

氷鳥はもう一つのコップに自分の分のスポーツドリンクを入れて、ベッドの傍にミニチェアを引っ張ってきて座った。シャツの胸の七強のバッチが鈍く光る。そして私に目を向けた。

真剣な声色で話を切り出す。

「プールでお前を襲ったのは《仮面》だった」

それは『報告』。

「やはりそうか」

私は短く言ってコップに視線を落とした。

分かり切っていた答え。しかし改めて確かなものとして認識すると腹が立ってきた。何故か無性にムカついてコップを持つ手に力が入る。ムカムカと胸焼けしたような感覚。

氷鳥は水面に雫が波紋を広げるような静かな口調で続ける。

「多分、嘉が独りきりになるタイミングをずっと狙っていたんだろう。あるいは、あの体育教師が理事長に呼ばれている事を知っていたか。満月から聞いたが、たまたま残るのを頼まれたんだろ。もし奴がそれを知っていたとしたら、更に奴にとってやりやすかっただろうな。俺が到着した時は既に嘉を沈めていたから、もしかしたら事前に知っていた可能性も否定出来ない。いずれにしても奴のやりやすい状況だったって事だ。それが失敗する要素など存在しないままで」

「……………」

私は黙って氷鳥の言葉に耳を傾ける。

氷鳥は足を組んで続けた。

「異様な風体だった。体格などの特徴をつかまえられるように考えているのが分かった。服装がな、男なのか女なのか、それさえ分からないようにすっぽり身体を覆うようなものだった。文字通り頭のとっぺんから足の先まで。確かにあれでは《情報》がなければ藤と奴が同一人物だとは分からないだろうな」

「……………」

その『風体』を想像しようとしたが、今の説明では少し無理があった。しかし《表》と《闇》の存在を分断出来るくらいだ。それにちゃんと考えているんだろう。それに、別に想像しなくても、いずれ相対しなければならぬのだ。想像したって私の得にはならない。

「でも、今回あいつは《表》で自分が《仮面》だと認めなくてはならなくなる」

氷鳥が宣言するように言った。私は視線を上げて氷鳥に目を向ける。

氷鳥は片目を細めて。

「奴の腕にバツの引っ掻き傷を残した。だから藤がそこを隠していたら奴が《仮面》で、嘉を殺そうとした事が露わになる」

「……………『印』か」

「そうだ。あいつが《表》の顔の時にそれを突き付ければいい。と言っても、言い逃れされない為には俺が言うしかねえんだけど。だけどそれは誤魔化しようのない『証拠』になる」

「考えたな」

なんて抜かりのない奴なんだ。私は氷鳥を見て溜め息をついた。

（《同盟》を組んで間違いではなかったな）

むしろ想像以上の働きだ。何故そこまでしてくれるのかは分からないが、氷鳥と手を組んだ事は正解だったようだ。もし氷鳥がいなければ今頃私は灰になっているんだし。

それにしても。

私はふと疑問に思った事を氷鳥に尋ねた。

「何故私がプールに居ると分かった？」

「《予感》だ」

問われるのが分かっていたかのように、氷鳥は即答した。その栗色の瞳は私を真っ直ぐ捉えて。

「嘉のクラスメートがプールの方から歩いて来たのを見たっていうのもあるが。その時に感じたんだ。《予感》として『危険』を」

自分の心臓の辺りを親指で、とんと叩く氷鳥。この感覚分かるだろ？とシニカルな笑みで問われ、私は目を細めてそれに返した。

《予感》。

嫌すぎる程に分かる感覚だ。《不穏》の前兆であったり、『危険』を予言する胸騒ぎだったり。あまり気持ちのよいものではない。むしろ気分が悪くなる。

しかしそれは自分の身に起こる事がある程度予測して身構える事が出来るという長所もある。あるいは今回のように、危ういところ助かるというケースも。だから一概に『良くない』とは言えないのだ。

「今回のこの件も、嘉の《傍観者》としての『性質』が勝った顕著な例だと思うんだ」

不意に氷鳥が話を少し変え、私の『性質』に触れた。その口調は淡々と、しかし無感情という訳ではない。穏やかさを兼ね備えた声色で、氷鳥は続ける。

「本来の《仮面》の計画では、嘉はあのプールであのまま溺死する筈だったと思う。あの場で完全に嘉の存在を抹殺する予定だっただろう。もう誰もプールに戻って来る事も入って来る事もない筈だった。俺が来た事に対しての奴の反応があまりに遅かったんだ。誰も来ない筈の場所に俺が現れた。だから反応出来なくて慌てたんだ。そして結果的に嘉は助かり、奴は『印』を付けられた。嘉を抹殺するどころか、自分が劣勢に立たされたって訳だ」

「そうかもしれない」

私は息を吐いた。

その場には居たが私は見ていないので、はっきりした事は言えないし分からない。だけど《仮面》の計画が狂っただろう事はなんとなく感じていた。

氷鳥が言った通り、奴はあそこで私を殺すつもりだった。あの殺意は本物だった。あいつのプランでは私は今此処に生きていない筈なのだ。

それが、氷鳥という《同盟者》の存在によって狂わされた。あと一步で私を殺せるというところで邪魔が入った。

つまりがそういう事なのだ。

偶然ではなく必然。

必然ではなく当然。

まるで何かに護られているように。

絶対的法則で定められているように。

《傍観者》。

最近特にこの『性質』は強さを増している気がする。

「沈められてから先の事は覚えているか？」

立ち上がり、また話題を少し変えて氷鳥は尋ねてきた。お代わりは？と問われ、まだ残っているので首を横に振る。自分の分のスपोर्टドリンクのお代わりを入れて氷鳥は再び椅子に腰を下ろす。

「沈められて先？」

私は問い返して頭の中で思い返してみる。しかしそれは何度も試している事だったのであまり間を開けずに氷鳥に視線を向けた。

「全く。気付いたらベッドの上だった」

「……………そうか」

心底安心したように、氷鳥。

「けどあんたが私を蘇生したんだろ」

「……………い」

しかし一転、そう言った瞬間ギクツとしたように顔が引きつった。唇を歪ませ、私の反応を気にするように横目を向けてくる。バレたくなかったのだろうか？何を思っ『ギクツ』となったのか私には

分からなかった。しかしこんなに狼狽えている氷鳥もなかなか珍しい。

別に後ろめたい事でもないだろうに。

その反応に不思議に思った私だが、理由や意味について敢えて突っ込む事はしなかった。誰にでもあまり深入りしてほしくないものはある。氷鳥がそう思っているかどうかは分からないが、その方がいいような気がした。それに他人に入り込むのはあまり好きではない。

すると氷鳥は安心したように薄く笑った。そしてさり気なく話題を変える。

「あと、あの体育教師の件だけど。名前、鷹桒たかなざ砂小柚木しゅもくだったっけな。間違えたら監督不十分って事で処分って事も有り得たんだが、直接理事長に先に連絡して話はつけておいたから」

「そういえばあんたの叔父に当たるんだったな、理事長」

「ああ。そういう話し合いになる前にな。不可抗力だったって事と、真実がこれから明るみに出るって事を説明してな。具体的な事は一切話さなかったが、理事長も勘はいいからすぐ納得した。俺が『普通』じゃないっていうのも知っているし。その代わり交換条件で、事が終わったら全部報告しなきゃならないけどな。でもこれで、処分の事で哲留が悩まなくて済むし、誰も病まなくて済むだらう」

うっすらと、笑み。

用意周到。本当に、抜け目がない。全て円滑に物事が進むようにと、あらゆるところに目が行き届いている。理事長へ『交渉』までしたのか。ここまでやり手だったのかと私は少し驚いていた。氷鳥が《闇》でも名を挙げている事は知っていた。それでも新しい一面を知る度にそれを再認識させられる。

《制裁者》。

「そういえば」

再び話題を変える前置きをし、氷鳥は新たな話題に触れた。

「今さっきまで夜月と一緒に居たんだが、あいつ、藤の《最期》を

見たいんだってな」

「ああ」

そう言えばそれもあった。私が夜月に提案した事だったのに忘れていた。今氷鳥の言葉で思い出した。危ない危ない。

氷鳥はドリンクを飲み干して続ける（しかしよく飲むなあ）。

「《仮面》の《終焉》の場合は時と場合によってどうなるかはつきりしないが、《表》の藤の《最期》は参加してもらおうかと思っている。ちよつとくらい仕返しさせてやらなきゃ、収まるものも収まらないだろうしな。夜月見たらあいつ、驚くぞ。今の夜月は藤にも負けない程《闇》のオーラを纏っているからな。嘉はどう思う？夜月はどこまで参加させる」

不意に話を振られ、私は目を上げた。しかし答えは私の中に既にあるものだった。私は口を開いてそれに答える。

「あいつが望むなら望むところまで。これから《闇》に生きなきゃならないのなら、少しずつこれで慣らさせてもいいと思う。奴が《仮面》として攻撃していたか否かは別にして、《人形》となる原因を作ったんだからな。どこまで参加するかはあいつ次第だな」

「そうだな」

私の返事を聞いて唇をクツと笑ませその表情を消した氷鳥は、何かを考えているような表情を作った。何かを思い出しているようなその表情は穏やかさそのもの。安堵に満ちたものだった。

そしておもむろに氷鳥は話し始めた。

「さつき夜月と色々話してな。随分と久し振りだったよ、ちゃんと会話らしい会話をしたのは。もしかしたら初めてだったかもしれない。もう言葉を発する事に対する恐怖はないみたいだ。自分の事、家族の事、今思っている事。多くはないが、少しずつ話してくれた。……あいつの人間らしい表情かおを見たのは、本当に久し振りだった」

独り言のように紡がれた言葉。私は只黙ってそれを聞いていた。従兄弟同士でもこんなに相手の事を考えるものなんだな。氷鳥の

言葉を聞き表情を見て、私はなんとなくそんな事を考えていた。

まるで自分の事のように、否自分の事以上に気にかけて、思いやり。それによって喜び、時には悲しみ。笑い、時に悩み。そして『絆』を強め合って。それは私にはよく分からない感覚で。

兄弟や親ともまるで全くの他人のような、他人以上に他人のような、そんな関係しか知らない私は只氷鳥や満月達兄弟を見て不思議に思っていた。

恐らく、本来のあるべき姿というものは満月達兄弟の姿なのだろう。そして『人間』というものは氷鳥のような感情を持つものなのだろう。それはなんとなく『知識』として分かってきた。

しかし、それは多分今の天星織家、天星織兄弟には無理な話だ。基礎も土台もない場所に家が立てられないのと同じ。私達の場合信頼や思いやり云々以前の問題だ。言わば土台さえ据えられないような状態。

だけど。

それでも私は――

「サンキュな、嘉」

僅かな沈黙の後、私の思考をスツと裂くような言葉が空気も裂いた。

氷鳥の口から出て来たのは、何の脈絡もない感謝の言葉だった。何故礼を言われるのか意味の分からない私は怪訝に眉を顰める。

「私は何もしていない」

「してるんだよ」

私の否定を否定し、氷鳥は淡く笑む。

優しい笑みで。

穏やかな笑みで。

あたたかい、笑みで。

「お前が居なかったら、夜月はきつと只の《人形》のままだっただ

ろうな。だけど嘉は、『闇』に生きなきゃならなくなった夜月に言わば息を吹き入れたんだ。生きる《人形》となるように。それを《異名》としてこれから生き抜けるように。立ち上がり歩き出せるその強さを。これがなきゃ、夜月は只『息をしている』だけだっただろうから。それは『生きる屍』と同じくらい無に近い状態だ。嘉は夜月をそこから救ったんだ」

「……………」

「夜月が奴によって攻撃され《人形》にされた事は、勿論いい事とは言えない。まして《闇》に引きずり込まれる要因となったんだからな。だけどそれをプラスに変えたんだ。夜月がまた歩き出せるようにきっかけを与えた。俺達だけでは無理だった。嘉の《言の葉》があったから夜月は今再び『光』を見る事が出来るようになった」

「……………」

それはあまりに真っ直ぐな視線。
穏やかに強く紡がれていく言葉。
まるで私を包み込むような口調。

私は明らかに氷鳥の言葉に狼狽え、困惑していた。何か酷く心が動揺しているような締め付けられているような感覚。しかしそれを表に出すまいと必死に堪える。

「……………私はそんなじゃない」

絞り出すように言うと、氷鳥は困ったような微笑みを浮かべた。
少し哀しみのような色も窺える表情。

そして同じ色の声色で。

「時々、嘉は自尊心が高いのか低いのか分からなくなる時があるな」
言うのと、氷鳥は淡く笑んだ。

そこには、人間としての氷鳥の表情。《制裁者》はそこにいなかった。

「《破壊》の言葉には絶対的な自信があるのに、それ以外の『言葉』に関しては随分と否定的だ」

「私は私が思っているままを口に出しているだけなんだけど」

「そうだろうな。嘉がそう思っているのは分かる。理解しているつもりだ。それを否定するのもなんだけど、ちょっとだけ聞いてくれるか」

真っ直ぐに私を見つめる氷鳥。私の意識を引き込むような視線。こんな氷鳥の表情は初めて見るかもしれない。私の思っている事を否定されるというのに、私は自然と聞く態勢に入っていた。

氷鳥は穏やかな声色で言葉を晒し始めた。

「俺は、嘉は嘉が思う程、『人間』の『言葉』を知らない訳じゃないと思うんだ。その《作用》がそれを物語っているじゃないか。月姫、妃七、夜明、夜月、満月。これだけでも十分嘉の『言葉』の作り出す《作用》が分かると思うんだ、俺は。みんな嘉の言葉で力を得てる。それに、『人間』の『心』もちやんとあると思うんだ。月姫とかにもそんな風に言われた事あるんじゃないか？」

「……………みんな私を買いかぶり過ぎなんだよ」

「いや、それが『真実』なんだよ。事実もそれを証明してる。嘉が心を持っていないなら、月姫も夜月も這いつくばったままだった筈だから。心がなければ、人を立ち上がらせる言葉を綴る事は出来ない」

「……………」

私は頷かなかった。

まだ、私には分からない。自分で確信出来ない。私は氷鳥が言うように自分がちゃんとした『人間』だとは到底思えない。私には分からない事が多すぎる。

只、いつかそれを知りたいと思う。分かる日が来ればいいと思う。昔と違って、知ってもいいと思っている。だからそれまでは、その答えはしまっておこうと思った。

それまでは。

【攻撃（6）】

＊ ＊ ＊

氷鳥は病院を出、まだ騒がしい街の中を歩いていった。帰りが遅いのを心配して電話してきた執事の『迎えに行く』という申し出を断って、ゆっくり歩く。

よく氷鳥はこうして歩く。普通歩かないような距離も、散歩と称して歩く。七強の従兄弟には「有り得ない」と呆れられるが、二・三時間の散歩はザラだ。その時間は自分の中の思いや考えを整理する貴重な時間になっていた。

左手には、さっき販売機で購入したコーラの缶がぶら下がっている。これを両親に見られたら『またこんな安物を飲んで』なんて小言を言われるだろうが、そんな事はどうでもよかった。

元々両親とは殆ど家族らしい会話をした事はない。小さな頃から接するのは必要最低限の事だけで、しかも事務的で、後は世話係に任せっきりでずっと仕事に没頭していた。氷鳥の記憶の中の両親は、小言や説教をしているものしかない。最近から何かと構おうとするが、氷鳥がそれを拒否している。

（全部が今更なんだよ。必要な時には何もしなかったのに）

氷鳥自身、七強の分家の生まれなので両親が多忙であり構う事が出来なかった事や、今それを後悔している事は分かっていた。

しかし一度植え付けられた不信感はその簡単に拭えない。兄弟もいない氷鳥はどんなに使用人に囲まれていても孤独だった。

だから氷鳥は満月達を羨ましく思っていた。どんなに忙しくても満月達の家族や兄弟には信頼や絆を築く態勢が整っていた。《闇》に居ながらも強く結束し互いを思い合う、そういう彼らに憧れていた。

そんな孤独だった氷鳥の手を引いたのは彼らだった。彼らから学

び今までの自分を形作ってきたといっても過言ではない程、彼らの影響は大きかった。『人間』としての人格の殆どは彼らと共に育ててきた。

だから氷鳥は嘉にも、そういうものを知ってほしいと思っていた。嘉も絆とは無縁のまま今まで生きて来た。嘉の家庭環境そのものが特殊で《闇》しか知らなかった嘉はそれを知る機会がなかっただろう。最近少しずつ嘉の《世界》は広がりつつあるが、嘉がそれを知るにはまだ足りない。だから、《闇》にいても『人間』らしく生きられるという事、そして嘉にもそれは可能だという事を知ってほしかった。

自分はそんな立派なものではないと言う嘉の硬い思いを否定してまでも話をしたのはその為だ。嘉がまだ気付いていない嘉の『人間』の部分で嘉自身が気付き、嘉の胸に引っかかっているだろう闇を少しでも軽くしたい。そう思っていた。結局それは出来なかったようだが。

（嘉は、『気遣い』に気付かないんだよね……………）

だから、ああいうぎこちない会話になってしまうのだ。氷鳥はドリンクを嘉に渡そうとした時の会話を思い出して溜め息をついた。

氷鳥が気遣って言葉を発する時、嘉との会話はスムーズにいかなくなる場合が殆どだ。他の話の時ですら『普通』に会話が出来ないのに――それは嘉が今まで培った事のないもの故に――更にそれが難しくなる。突然引っかかり、強制的に止められてしまう感じだ。

（俺が意識し過ぎているのか？）

早く嘉に知ってほしい『感情』がたくさんある。知ってほしい嘉の『良さ』がある。そう思えば思う程空回りしているような気がした。

（……………焦るな）

氷鳥は空を仰ぎ、もう一つ溜め息をついた。

数ヶ月前に比べれば、比にならない程柔らかくなっているのだ。『会話』が出来ている事自体大進歩だ。それだけでもいい。そう言

い聞かせて少し温くなってしまったコーラを喉に流し込んだ。

これは満月からの情報だが、どうやら最近、天星織兄弟三男で《闇》では《逆》として知られる来夜と嘉は、少しずつだが知り合う事が出来ているようだ。兄弟で『知り合う』というのは幾分おかしいかもしれないが、嘉の兄弟の場合それは大きな意味を持つ。嘉が少しずつ変化しているのは、それも理由としてあるかもしれない。前進出来ているという事だ。

あとはそれが家族という単位で出来るように願うだけだ。それが難しいように思えても。それでもそれは不可能ではない。そう信じたかった。

「……………」

と、ポケットの携帯が着信を告げた。機械的な着信音を鳴らす携帯を取り出して相手を確かめると、それは従兄弟の幸輔だった。やっぱりバイブにしておくんだったと通話ボタンを押して耳に当てる。そして幸輔の第一声。

『告白出来たか？』

「……………何の話だよ。ぶっ飛び過ぎてるぞ」

思わず苦笑。思いもしなかった冗談に反射的に返して一瞬ヒヤツとした感情を落ち着かせる。

電話の向こう側もそれを感じたのだろう、小さく鼻で笑った。

『まあいいさ。その様子だと上々だったんだろ』

「一応、それなりに回復している。退院はまだ先だがな。それから、前よりはある程度『普通』に会話出来るようにはなったかな」

ありのままを話す。

そうだ、以前は会話すら成り立たなかった。成り立たなかったというより、嘉が他人を拒絶していたので、『出来なかった』というのが正しいが。疑問を投げても何も返ってこないのが殆どで（無視される事もしばしばだ）、逆に疑問を返される事もあり、話し合うという事は出来なかった。

すると幸輔は「しかしな」と息を吐いた。

『殆どあいつの事は知らないが、あいつはかなり特殊だよな。お前もだが。あいつの容姿が申し分ないことは認める。別にお前の好みにケチを付けるつもりもないんだが………なんであいつなんだ、氷鳥』

「……………」

何故必ず嘉でなければいけないのか、と。

いつだったか以前にも、他の人に訊かれた事のある質問だった。

真新しい訳でも、不思議な質問でもない。

嘉は笑わない。他人の名前も呼ぼうとしない。感情も殆ど表さない。十人中十人が『美人』と評価するような美貌を持ちながら、それを打ち消してしまう程の冷たさを纏っている。《闇》にいない人にも、嘉の冷徹さは群を抜いていると分かる程だ。近寄り難く、言葉を交わす事すら困難だ。まるで人間ではないように思っている人もいるくらいだ。幸輔のような問いは当然と言えば当然の質問だった。

でも。

その答えは一つしかない。

「嘉だから、だな」

あまり間を開ける事なく氷鳥は答えていた。それは以前訊かれた時と同じ答え。迷いも曇りもない言葉。

これはずっと前から変わらない。

『……………そういうと思った。お前がいいなら何も言う事はないな』
氷鳥の答えを聞いて幸輔は安堵したように溜め息をついた。そこには氷鳥のありのままを受け入れる言葉。そして『そう言えば』と思いついたように口調を変えた。

『藤にふっかけられた“面倒事”、どうなっているんだ』

「ああ。それなりに進んでる。まだ終わらないが。嘉が退院したらまた動き出すんじゃないか」

『それにしてもタイミングよすぎるよな。天星織が入院か。お前さつき俺に報告した時言葉を濁したが、どうせこれも奴の仕業なんだ

ろ』

「『どうせ』って。まあ、当たってるぜ」

氷鳥は否定せずに頷いた。藤がやった事に間違いはないので《仮面》の事は敢えて言うまでもない。

電話の向こう側は再び重い溜め息をついて口を開いた。

『吟が異常なくらい心配しているんだ。まだ自分のせいだと思っていてな。あいつ有り得ないくらい純粹だし、仕方ないと言えば仕方ないんだが。でもちょっと可哀想なくらいなんだ。だからあいつの為に、これ以上何もないようにお前が見張っておいてくれ。そう簡単にはいかないと思うが』

「尽力する。多分『何もない』っていうのは無理だろうけど」

『まあ、無理な注文かもしれないな。お前も気を付けろよ、一応は。お前達の《世界》は色々と面倒なんだろ』

氷鳥を氣遣う言葉。口調は淡々としているが、幸輔を知る氷鳥はその中に見え隠れする氣遣いを有り難く感じていた。

「サンキュ。もう奴が二度と面倒事を起こせないようにする予定だから。陸上部にももう何もさせない。あいつはもう少しで終わる」

『そうか』

じゃあまた。そう言って会話は終わった。氷鳥は携帯をポケットにしまい、残ったコーラを飲み干して前を見据えた。

さあ。

近々《闇》での本番が始まる。

【探り合い】

正しいことを行うこと

それが難儀で難解なことを思い知る

―臨安我哲留―

「……………ふう」

何度目かの溜め息。

英語の授業中、私は上の空で机の上に広げてある教科書を只見ていた。藤が英文を朗読しているが全く耳に入ってこない。身体が藤の全てを拒絶し遮断しているようだ。『見ざる聞かざる言わざる』というところだろうか？

（『言わざる』はちよつと違うか）

満月に目を向けると、机に頬杖をつき、明後日の方を向いて（しかも口まで開いている）呆けていた。まだ寝ていないだけマシだろう。あ、もしかしたら目を開けたまま眠ってしまったているのかもしれない。あいつならやりかねない。

あれから一週間後（結局一週間も入院させられた。長すぎるだろ）私も復学し、一緒に満月も復学した。藤はすでに学園に戻っていたようだが、『表』では全く私達に接しなくなった。不自然なくらいに接触を持たない。諦めたというより、絶好のタイミングを慎重に

窺っているようだ。あるいは『あんな事』をされたので満月を怖がっているとかラスに思わせようとしているのかもしれない。しかしそうしようとしているなら、これは無駄だ。

もう私がクラスには藤に対する疑念を植え付けたのだから。藤がやろうとしたのと同じ事を。

(でも……そろそろだな)

《闇》としても攻撃を始めたのだ。そろそろ、小細工のない《心理戦》も仕掛けてくるだろう。否、絶対に仕掛けてくる。勿論、今度是谁にも分からないように。

(負ける気はしないけどな)

肉弾戦ならまだしも、《心理戦》なら絶対に負けない。それは満月も同じ。

(ああ、そう言えば)

私は氷鳥が奴の腕に『×』の傷を付けたと言ったのを思い出し、教科書を持つ藤の腕に目を向けた。しかし残念ながら長袖のシャツの下に隠れ、それを確認する事は出来なかった。そう言えば最近こいつは長袖を着るのが多くなったような気がする。満月にやられたとされる『傷』もある事だし、それを隠す為と表向きはそういう事になっているのかもしれない。

(まあいい。どうせ《終焉》の時に明るみに晒されるのだから)

溜め息をもう一つ吐いて藤のことは頭の中から締め出した。考えたってしょうがない。

すると空間のできた思考の中に、数日前、入院する前の『再会』のことが不意に蘇ってきた。

《破壊魔》、天星織沢石^{あませおり たくし}。

あの、雑踏の中の僅かな『再会』。

人であろうが物であろうが何でも《破壊》することで恐れられ、《闇》の世界で名を馳せる十九の天星織兄弟二男。しかし沢石が恐れられているのは、それ相応の理由があった。

人は物事を行なうにあたって必ず動機を持つ。人を殺すにも墜と

すにも必ずそこには理由や動機がある。『なんとなく』『そこに居たから』『あそこにあつたから』というのも、私がいる《世界》の人間からすれば立派な『理由』。理不尽なものであっても道理から外れていても、それだけあれば十分だ。あの《崩壊》紫幸でさえ、無差別とはいえ『理由』を持って《崩壊》として行動する。

しかし沢石はその理由や動機を一切持たない。感情が無いというより、それ以前の問題だ。産まれた時から盲目な人が色を知らないのと同様、耳の聞こえない人に音が分からないのと同様、沢石は『感情』というのを知らない。どうやって《破壊》の対象が決まるのか分からないが、沢石は只機械的にそうプログラムされているように、そして徹底的に《破壊》を行なう。そこに一切の感情は入らないようだ。

只、私は沢石ではないのでこれ以上のことは言えない。しかしあの短時間の再会ではあつたが、これだけは言えるだろう。

変わらない。

沢石は《破壊魔》のままだった。

恐らくこれから変わることはない。この世界を揺るがしてもまだ足りない程の強い影響がなければ、《破壊魔》はそのままだろう。例えば、私の《同族》の長男兄貴のような存在が沢石を揺るがさない限り。紫幸が『更正』するより有り得ない。本人はそれを望んでいないだろうし（望む望まない以前の問題だが）、兄貴が『更正』させるような事もないだろう。

あの《破壊魔》は。

（ほんと、よく分からないな………）

腕を組んで溜め息。

沢石は学校もろくに行っていない。一応河柳に在学している事にはなっているみたいだが、小学の低学年の時は三分の一も行っていないようだし、それ以来は全く行っていないと聞いている。あいつ

の学歴はどういう感じになっているのだろうか。

（漢字とか読めるのか……？まさか足し算ができないってことないよな）

しかし有り得ない話ではないかもしれない。もしそうであっても沢石本人は全く困っていないのだろうけど。《破壊》するのに、文字も数字も使う必要のない沢石なら不自由する事はない筈だ。他人と意志を通わせる必要もないのだから。

と。

「……………」

授業終了を知らせるチャイムが鳴った。藤は朗読を止め、クラスの生徒達は教材の片付けを始める。

「じゃあ、今日配ったプリント、今度の授業までに仕上げてきてね。今度答え合わせして集めます」 藤はそれだけ言うと教卓の上の教材を集め、私に流し目を向けて出て行った。今日も絡んでこないつもりらしい。ここ数日はこんな感じだ。少しほっとして溜め息をつき、何気なく満月に目を向ける。満月も丁度私に目を向けた。

「……………にゃ♪」

そう口が開いて満月はニツと笑った。右手がVサインを作る。さつきまで起きてるのか寝てるのか分からない生気のない顔していたくせに。分かり易い奴だな。私は片目を細めて視線を外した。

（……………あ、もう終わりか）

これで今日の授業は全て終了したことに気付いた。今日はあつと言う間だった気がする。藤が絡んで来ない日は比較的平和で時間が進むのが早く感じる。

楽しいことをしている時は時間が流れるのが早いという。『楽しい』とは程遠いが、『悪い』時よりは全然良い日だったのできつとあつと言う間だったのだろう。あまり時間を意識しなくて済んだ。それだけでも大分気分的に変わる。

と、担任が早足で颯爽と入ってきた。風を切るように教壇に向かい、教卓の前に立っていつものようにクラスを見渡す。

「ホームルーム始めるぞ。……………なんだ、生気の無い顔だな」

そう一言言い、担任は眉を顰めて一人一人に目を向けた。クラスは少しざわざわとざわめいた。私もほぼ真ん中にある自分の席から、前方の視界に入る分のクラスメートを見渡してみた。

私から見れば背中しか見えない同級生達。しかしその背中から、確かに疲労感のようなものが漂っていた。藤の授業の間ずっと、また何か起こるんじゃないだろうかと緊張状態にあったのだろう。藤の一挙一動が気になってしょうがなかったのかもしれない。

授業中ずっと上の空だったのでクラスの雰囲気は全然気付かなかった。いつもなら場の雰囲気は、読もうと思わなくても読んでしまうのに。私も疲れているのだろうか？

生気の無い顔、か。同級生達は精神的に相当疲労困憊しているらしい。重症だ。

（しかし……………敏感だな）

私は担任に目を向けた。

教室に入った瞬間に感じたのか。流石というのか、この人なら驚くに値しないというのか。

本当に、この人一体何者なんだ？

担任は最前列に座るクラスメートに視線を向けて尋ねた。

「最後の授業、教科は何だった？」

「英語です」

「……………ああ」

そしてその答えを聞いて納得したように一度頷いた。

確信したのだろうか。

そして担任は目を上げ、教壇のテーブルに置いた資料を隅に寄せて口を開いた。

「みんな疲れているようだし、早めに終わらせるぞ。……………明日、数学は急遽小テストをするそうだ。範囲はセクション二と三。軽く復習くらいはやっておくといい。国語はコンピュータールームでだから、国語の時間はそこに移動だな。それから、テストが来週から

始まる。今回は範囲が広いから今から復習しておいた方がいいだろう。後は特にはない。連絡はこれだけだ。じゃあ明日」

本当に短いホームルームだった。一礼してクラスメートは一気に帰る支度をした。次々教室を後にする。私と満月も立ち上がった。

「嘉、満月」

その私達を担任が呼んだ。二人は一瞬止まり、しかしバッグを掴んで担任のところへ向かう。

担任は私達を交互に見て声のトーンを落とした。

「今日はすぐに帰宅した方が良さそうだぞ」

「……………」

「また明日」

予想外の言葉に一瞬止まった私達にそれだけ言い、担任は資料を片手にそのまま教室から出て行った。

私と満月はそれを見送り、顔を見合わせた。

「警告……………かな」

「そうとも取れるな。何か勘付いているようだし」

「哲留さんが言うんだから間違いないでしょ。聞いておいた方が良さそうだね。人混みも我慢して今日はすぐ帰っちゃいます？」

「それがいいだろうな」

私達はそんな言葉を交わし、足早に教室をあとにした。

「深夜さん」

帰り際、担任の警告通りさっさと逃げてしまおうと玄関に向かっていた私の隣の満月にストップがかかった。もうその声の主は誰か

訊かなくても分かった。

一步遅かったか？一瞬満月は迷い、しかし足を止めることにしたようだ。ピタリと止まり、既に表情を消した顔を声のした方向に向けた。

「深夜さん。ちょっといいかしら。少し話があるの」

詰めが甘いわりにしつこいこの上ない、藤。少し怖がっているような『演技』を混ぜながら満月を見つめている。

周りを意識した、意味深な微笑み。穏やかさを繕う微笑。未だ傷痕の残る顔。しかし眼鏡の奥のその瞳は本当の意味では笑ってはいなかった。

それは一種の宣戦布告のように。

「……………」

「……………」

満月は私に目を向けた。

一瞬のアイコンタクト。満月はその一瞬で視線に言葉を乗せ、私はそれを読み取った。そしてほぼ同時にそれに返す。

満月は誘導する藤に付いて離れて行った。私は暫くその後ろ姿を見送っていた。

ここ数日静かだと思ったら、やっぱり狙っていたか。やはりどちらかといえば満月に照準を合わせているらしい。私を攻撃し、今度は満月を少しずつ、ということなんだろうか。全て予想通りだ。読まれている事すら気付いていないのだろう。

「……………」

図書室で待つことにした私は、図書室のある棟までの移動を開始した。一人で帰宅するという手もあったが、敢えてそこで待つ方を選んだ。それには理由があった。

このことは、今日のうちで吐き出させる必要がある。家に持ち帰らせてはいけない。直感的にそう感じていたのだ。《闇》への《終焉》が近付いている今、此处で爆発させる訳にはいかない。それまで耐えさせる為には。

「……………」

私は歩みを速める。

さあ。

いよいよ《心理戦》が始まった。

【探り合い（2）】

静かな空間。だいぶ利用者も減り、広い図書室は一層静寂に包まれていた。私はホットコーヒーを飲みながら読書をし、一人時間を過ごしていた。本から視線を外し、何気なく柱時計に目を向けて時間を確かめる。

満月が藤に呼び止められ、連れて行かれてから、早くも二時間近く経過していた。本一冊読み終わるのも当たり前だ。

しかし思ったより延びている《心理戦》。静かに時を刻む柱時計に目を向けたまま何度目かの溜め息をつく。

藤が私ではなく満月を《心理戦》の『対象』に選んだのは多分、私より崩しやすそうに見えたからだろう。満月の方が喜怒哀楽が激しいように見え（間違はなく私よりはかなりはつきりしているだろう）、それを逆手にとって崩していこうという魂胆だろう。反応を見ても、満月の方が藤の望むような反応をしていたのかもしれない。恐らく、奴は夜月を失墜させたのと同じ方法を使ってくる。夜月と満月が姉弟とは知らないようだが、それとは関係なく《心理戦》で攻めてくる。いわゆる藤の《表》での”真骨頂”という手法で。

あの三年を失墜させたのと同じやり方で。

敢えて私と満月を離し、精神的に支え合わないようにして。二人よりは一人の方が当然崩しやすい。《心理戦》を得意とする《傍観者》を二人同時に相手するという事は流石にしない。そこまでやったら《表》で全てを終わらせてしまおうかと思うくらいだ。

「……………長いな」

思わず呟く。

いつもと同じなら、さっさと切り上げて（キレて）出てきてもおかしくない。同じ空気を吸いたくない筈だし、満月は『こういうこと』に二時間も付き合える程お人好しじゃないし、気は長くない筈

だ。ましてや《心理戦》、自分のペースに持って行って早めに終わらせる筈。

それが、こんなにも長引いている理由は。

(……探ってんだろうな)

それしかないだろう。藤に付いていく直前の満月の無言の視線には、そういう意図も乗せられていた。

そもそも満月は、この《心理戦》を一蹴し拒否することもできた。呼び止められたあの時、猛ダッシュして逃げることもできたのだ。無視を決めてさっさと帰るといふ選択肢もあった。あるいは演技をするしかない藤を脅迫してその場で話し合う気がない事を明らかにする事も出来た。そっちを選ぶ方が、当然だが楽だった。しかしそれを敢えて受けて立つことにした。

恐らく満月は、藤が夜月にした具体的なことを探ろうとしているんだろう。夜月がどんな仕打ちを受けたのか、藤がどんな《策》を使ったのか、あいつの《心理戦》の程度を。それを確かめる為に。そうじゃなきゃ、あんな奴に付き合うわけがない。同じ空気を吸うことだって、できるだけ避けたいくらいなのだ。

そしてそれがこれだけ長くなってくるといふことは、藤のエンジンが全開ということだ。全力で満月潰しにきている。もしかしたらこれで終わらせようとしているのかもしれない。そしてそれに満月は我慢しながらも詮索を入れているのだろう。

戻ってきた時、満月は一体どういうオーラを発しているんだろうか。《闇》を纏っている事は間違いないだろう。

「……………」

その時、ポケットの中で携帯が振動した。この時間帯にかけてくる相手というのは大体決まっている。私は相手を予想しながら携帯を開いた。

相手は予想通り月姫だった。

「まだ学園内に居るぞ」

『あ、先に言われちゃった』

うふふ、と楽しそうな月姫。先回りして言うのと笑ってそう言った。私は問う。

「どうした？」

『大した用じゃないんだけど。お客さんが来てるの。誰か当ててみて？』

「うーん……………」

妃七は論外だし、来夜や夜空は『お客さん』ではない。来ると言えば……………」

黙り込んだ私をフォローするように月姫は笑った。

『夜月と夜明が来てるのよ。夕飯も一緒に食べようって事になってね。帰りを今か今かと待ってるわ』

「ああ。……………もう少しかかりそうだから、帰る時に連絡する」

『分かった。気をつけてね』

「うん」

短く答えて切る。月姫は声や雰囲気ですぐ《不穏》を察知する。できるだけそういったことを知る期間は短くしてやりたい。だから早めに話を切り上げた。

さて。

「……………」

ぱたん、と携帯を閉める。

と、その時。

不意に人影が視界に入り、目を上げた。そこには

「……………」

大きな大きな《闇》を纏った満月が立っていた。

暫く満月はテーブルに上半身を突っ伏したまま、只じっとしていた。まるで人形のように動かない。否、死んだように動かない。呼吸して揺れる肩が、辛うじて満月が生きていることを証している。「……………」

私は黙って待つ。この満月の状態を見れば、奴の《心理戦》が満月にどんな影響を与えたのかは明らかだ。満月の激しく煮えたぎるオーラが落ち着くまで待とうと私は黙って満月を見つめていた。

そう、満月は憤っていた。奴に負かされて落ち込んだのも悲嘆したのでも、まして苦難したのでも苦悩したのでも、疲労困憊し力を失ったわけでもなく、勝敗とは無関係に只猛烈に凄まじく憤っていた。強烈なまでに静かに激怒していた。

今回の《不穩》では殆どずっと怒っている満月だが、これ程までに怒っている満月を見るのは多分初めてだ。

今までの比にならない程に。怒りを超えてしまいそうな程に。

「……………」

それから暫く時が刻まれて。

満月は、気を抜けばすぐに爆発してしまいそうな感情を少しずつ飲み込み、取り敢えず気持ちを落ち着けたようだ。爆発にまでは至らない程度に冷静さを取り戻し、ようやく突っ伏していた上体を起こした。

そして私の目を真っ直ぐに見つめる。深く暗い《闇》の蠢く瞳。ようやく口を開いて言葉を晒す準備が整ったようだ。

そして。

「夜月がどうやって追い込まれたか分かった気がしたよ」

満月はそう切り出した。

少しずつついものの冷静さを取り戻し、普段通りの満月になりつつある。憤りしか含んでいなかったオーラはゆっくりと鎮火していつ

た。

一つ息を深く吐き、満月は続けた。

「思い出すと腹が立つから敢えて内容は言わないけど。簡潔に言う
とね、あたしがどれだけ存在価値が無いか、どれだけ無意味な存在
か、あたしの精神に刷り込もうとしたの。自尊心をズタズタにボロ
ボロにするような言葉を延々と。あたしのせいで、あたしの傍に居
る人にどれだけの害があるのか、とかね。とにかく精神を《破壊》
しようよね。あたしの《精神》はあんなものじゃ《破壊》されない
けど、普通の人ならもたないね。酷かったらもう元には戻らない。
……………あたしが爆発の我慢の限界だったくらいなもの」

「……………そうか」

私は頷いた。

満月が自ら検証実験を行った結論がそれなら、夜月が《人形》に
なってもおかしくないだろう。しかも夜月は《普通》に生きていた
時に、しかも一度ならず執拗に藤に攻撃された。だからそれだけで
済んだのは奇跡とも言えるかもしれない。あるいは夜月には元々、
『普通』の人よりは耐性があつたのかもしれない。《闇》に生きる
『素質』のようなものがあつたのかもしれない。

あの自主退学に追い込まれたという生徒も、人格自体は破壊され
なかったようだし、それも奇跡だったのかもしれない。あるいは《
破壊》されるその前に彼が身を引いたのか。

満月は目を細め、藤を見下げるように鼻で笑った。

「ある程度やり方は分かったから『参りました』って演技したらす
っかり騙されてさ。ほんと笑っちゃうよ。自分の力を過信して過大
評価してる。あたしがギブアップしたと思ってるみたい。自分が優
勢に立ったと信じ込んでる。《傍観者》を馬鹿にし過ぎなんだって」

満月の口調から、優越感に浸る藤の表情が浮かんでくるようだっ
た。満月の話を聞く限りでは、藤は本気で満月に、《傍観者》に勝
利したと——勝利すると——信じて疑っていないようだ。ここまで
来たらもう救いようがない。救うつもりもないが。

そして珍しく『演技』を入れたという満月。私達は基本的にそれをするのではない。しかしそれは藤に対しては効果観面^{てきめん}だったようだ。

そして不意に満月は再び表情に陰りを見せた。

その口から流れ出る言葉は呪いのように。

「夜月はこんな攻撃を受けていたんだ。しかも《不穩》を全く知らない時に。夜月が《人形》になってしまふのは当然だよ。……赦せない。あたしはあいつを絶対に赦さない。地獄より死より深い絶望に突き墜としてやりたい。《表》でも《闇》でも、あいつにとつての最大の恥辱を味わわせてやるよ」

最大の恥辱。

その瞳は《復讐》だけを見つめて。

そう言うとき満月は目を閉じて一つ長い溜め息を吐いた。自分の中の負の感情を外に吐き出すようにゆっくりと深呼吸。解毒するように、何度も何度も繰り返し返す。

そして次に瞼を開いた満月は、すっかり気持ちを切り替えていた。「よしっ、今日はあの人のこと考えるのはもうおしまいっ。これ以上考えてもあたしが損するだけだもんね。また後にしようっ」と

そうにつこりと笑ってみせる。私は目を細めてそれに応えた。さっきの月姫からの電話を思い出して口を開く。

「そういえば、あんたの弟妹がうちに来てるらしい」

「そうなの？じゃ、あたしもお邪魔しようかな♪」

満月は早速立ち上がり、『早く行こうよ』と私を急かした。全くこの切り替えの速さは何なんだ。ついさっきとエライ違いじゃないか。

否、これも必死に努めているのだ。あの深い《闇》をすっかり切り換えるのは容易ではない。それが顔を出さないように無理矢理に押し込めているのが分かった。

「早く行こうっ嘉。あ、その前に『indigo』寄ってケーキ買って行こうよ」

「はいはい」

私は半ば呆れながらも、いつも以上にはしゃぐ満月についていくように歩き出した。

【探り合い（3）】

「……………只今」

「おっ邪魔っしま〜す♪」

ようやく家に辿り着き、私は溜め息をついた。玄関のドアを閉じると、奥の方から『お帰りなさい』という月姫の声。現時点でテンションぶっ飛び小娘の声が聞こえないという事は、妃七はいないということだ。あのド派手で奇抜なヘンテコリンな靴もないから隠れている訳でもなさそうだ。私はほっと胸をなで下ろした。

あいつが居たら、普段の何十倍も無駄な気力を使ってしまう。否、吸い取られてしまう。出来るだけその気力は近付く《不穩》の最後に取りっておきたい。

リビングに入ると、テーブルを囲むように月姫、夜明、夜月が座って私達を待っていた。入って来た私に顔を向ける。

「お帰りなさい。疲れてない？」

月姫が私達の方に顔を向けてにっこりと微笑んだ。僅かにずれた、しかし穏やかな視線が私達を迎える。

私は目を細めて答える。

「大丈夫」

「良かった。今日はすき焼きにすることになったの。随分久し振りだし、みんなでワイワイやったら楽しいでしょ？デザートもあるのよ。夜明と夜月が『indigo』のケーキを買ってきてくれたの」

「偶然〜。あたしも買って来たんだよ」

右手でぶらぶらするケーキの入った箱を入れた袋を見せる満月。やっぱりこの兄弟の考えることは同じらしい。

みんな好きだからな、『indigo』。

「まさかケーキまで一緒ってことないよね。何買ってきたの？」

「プレミアム・フルーツタルト」

「良かったゝ種類は別だ。あたしはチーズスフレ買ってきたよ。最後の一個だったんだー」

夜明の問いに心底安心するように笑う満月。夜月は黙ってはいるがこの会話をしっかり聞いているようで、目を二人に向けて受動的にだが加わっている。その瞳はこの前会った時より更に幾分穏やかになっているように見えた。

「あれ、そういえば夜明。風雅義兄さんはお出掛けか何か？」

思い出したように満月は夜明に尋ねた。夜明は小さく頷く。

「お義父さんに、何か仕事のことでついて行かないといけないみたい。今日はみんなそれぞれ出掛けているの。十二時までに帰れば大丈夫」

「そっか。よかったじゃん。たまには羽伸ばすのも大事だよ」

そんな満月の言葉に、夜明は満月と同じ顔で笑った。

その満月の言葉で、夜明が既婚者だったのを思い出した。相手は金持ちの浦風風雅^{うらかぜ ふうが}。河柳学園の三年だ（因みに陸上部）。純粹に恋愛結婚ということではなく、まあ、色々あって結婚ということになったらしい。今は詳しく訊かないが。

会話が途切れたのを見計らい、月姫はパチンと手を叩いた。

「じゃ、早速夕飯の準備始めましょうか？」

「あたしも手伝う、月姫」

「ありがと。夜月も一緒をお願いしていい？」

支度を始めようと立ち上がり、月姫は夜月にも話を振った。夜月は驚いたように一瞬固まったが、考えるように少し間を置いて頷いた。

「……………うん」

「ありがと。嘉と満月はソファにでも座ってゆっくりしてて。準備は私達でやるから」

エプロンの紐を締め直した月姫は見えない瞳でウインクし、夜明と夜月を連れてキッチンへ向かった。料理をした事もキッチンに立

った事もない私がキッチンに行っても邪魔になるので、私は言われた通り満月と二人ソファに腰を下ろした。

「……………」

夕飯の支度をする月姫と、それを手伝う夜明と夜月の後ろ姿をぼうつと見る。夜月は月姫に頼まれて、慣れない手つきで卵をお碗に割ろうとしている。しかしどうも上手くいかない。見かねて夜明が何やらコツを教え、二つ目以降は上手く割れるようになっていた。

「……………夜月も、ちゃんと出来てんじゃない」

ソファにぐったりした感じで身を委ねながら満月は呟いた。横になってクッションを枕代わりにし、準備を手伝う夜月を見つめている。滅茶苦茶にアバウトで解釈の幅が広い言葉だったが、夜月の様子を見て安心しているのは伝わった。

夜月は自分が心配している程弱くないんだと。

ようやく勝利を手に入れたんだと。そしてそれはもうすぐで完全になると。

「藤は、夜月のこと覚えてるのかな」

そして不意にそんなことを言う。

疲れの見え隠れするその口調にはふつふつと、怒りが再び込み上げてきている。

「多分藤は、それまで自分が墜としてきた人達と同じように夜月を扱ったんだろうね。まるで人間じゃないみたいに、物みたいに。それとも、『今までの勝利』として戦利品みたいに一々全部覚えてるのかな」

「どうなんだろうな」

卵割りが終わり、野菜を切る夜明をじっと見ている夜月の背中を見ながら短く答える。

藤の傲慢で高慢な、そして自意識過剰で自信過剰な性格を考えれば、根拠はないが、恐らく満月の台詞の後半が当てはまるんじゃないかという気がする。多分逐一数え、全部記憶しているのだろう。誰をどういう風に失墜させたのか、誇らしげに全て覚えているのだ

ろう。ほぼ確実に。

それは、奴が『本物』ではないということを証しする。本物なら、そんなこと一々数えないし覚えはない。そんな事を覚えていても、覚えているのは本人だけで、《闇》が評価するのは今現在の實力だ。本当に《闇》を生きるなら、逐一そんな事を覚える事は愚行とされる。生粋の《殺し屋》が殺した人数を数えないのと同じ。

「覚えてても覚えてなくてもいいか。どうせ全部なくしちゃうんだもんね。あいつの全てを『零』にするんだから」

そう言う満月はにっこりと笑い、思考を休めるように目を閉じた。月姫達が支度を終えるまでに、また気持ちを切り換えようとするように。

そうだ。今なんだかんだ言っただけでしょうがない。結末はすぐそこに迫っている。奴の《終焉》という形で終わる《終焉》が近付いている。《表》の最後の攻撃、《心理戦》も来た。もう待つ必要はない。

いよいよだ。

「あいつの持っているものを諸とも崩し去るんだろ。原型を留めないくらい、粉々に粉砕するんだろ。存在も抹消して」

「うん。情けなんていらないよ。手加減も。プライドを碎けばあいつは簡単に終わる。あいつの全てを《破壊》する」

そう言う満月は

《傍観者》は微笑んだ。

その凍てついた笑みは藤の《最期》だけを見つめて。

【探り合い（4）】

「満月……………今日何かあったの？」

月姫がそう静かに尋ねてきたのは、三人が帰って暫くしてからのことだった。

すき焼きの鍋を囲んで賑やかな食事を終えてデザートタイム。夜明達が持ってきたプレミアム・フルーツタルトと満月が買ったチーズフレは甘党でスイーツには目がない深夜兄弟の前にあつと言う間に完売した。食事のあとは一ピースでもやつとだというのに本当に甘いものは好きらしい。うん……………凄まじい食欲だった。

しかも、満月と月姫と夜明はその間ずっと喋っていた。何か直前まで喋るのを禁じられていたのかと思う程のマシングントークで会話が途切れるという事はなかった。私と夜月は聞くので精一杯で、二人で完全な聞き手に回っていた。夜月は時々話を振られ狼狽えていた姿が印象的だった。

そんな賑やかなデザートタイムを過ごし、三人は帰って行った。五人から二人になったので、当然だが静かな空間になった。あまりにギャップがあつて逆に変な感じだ。

そんな中、ソファに座ってティーを飲みながら、月姫は見えない瞳をこちらに向けて先程の問いを私に投げた。穏やかながら強さを秘めた瞳が私に向いていた。

盲目の月姫。

彼女は雰囲気やオーラにとっても敏感だ。見えない分を補おうとしているように、それを人一倍早く感じる。声、口調、呼吸、歩く音、反応、空気。目以外から入ってくる全ての情報をレーダーの如く敏感にキャッチする。見えないものを感じ取り、空気を読み把握する

という面でその能力は傑出していると言える。

月姫に《不穩》を隠すのは、私でも至難の技だ。ほぼ無理といってもいい。それを知っている私は敢えて《不穩》を問われた時、それを隠したりしない。隠すことがいいこととも限らないから。

私は取り敢えず一旦尋ね返す。

「何か感じたのか？」

「うん。楽しんでるのは分かったけど、一瞬一瞬でふっと出てくるの。《傍観者》のオーラが。満月は多分気付いてないと思うけど。やっぱり、どうしても隠せないものってあるのよ。心は正直だから。だから、何かあったんだろうなって思ったの。しかも多分、相当腹立たしいことだったんだろうなって。満月のあそこまで露骨な感情、初めてだったから。肌で感じるくらいピリピリしてた」

真っ直ぐな答え。しかもそれは否定する余地のないまでに見事に的を得ている。

本当に。

「御名答」

答え、私は足を組み替えた。そして同じ口調で続ける。

「今日はいつに直接被害が来たんだ。帰る直前にだったから、ちよっと引きずってたかもしれない。本人はそれが出来ないように努めてはいたけど」

「もしかして、あの先生？」

「ああ。でももう終盤だ。多分数日以内には終わる」

「……………そう」

少し安心したように目を細め、ティーに口を付ける月姫。

いつも月姫は《不穩》の詳しい内容を訊かない。あまりそういう話を聞きたくないからだと思っていたがそうではなく、私にそういう話をさせないようにと月姫なりに気を遣ったのかもしれない。それは最近知った。

「私は嘉を信じているから」

以前彼女はそんなことを言っていた。

だからどんな《不穩》が私に降りかかろうと、私が必ずそれをはね除けることを信じていると。そして自分は傍で見守り、それが終わるのを待っている。私をずっと待っている。

それが彼女の強さだ。

理不尽に《不穩》に巻き込まれ光を奪われても——しかも《闇》を知らなかったにも関わらず——、月姫はそれ以前と何ら変わらずに毅然として真っ直ぐ生きている。強さの中に優しさを織り込んだ、真の意味での『強さ』を生きてそれを貫いている。

そして何よりも、常に人間であることを忘れない。それを自然に纏っている。

それは私には出来ない事で。

「ねえ、嘉」

ティーカップをテーブルに静かに置き、さざ波のような穏やかな声色で月姫は私を呼んだ。何か大事なことを口にする前のような雰囲気。私は顔を上げた。

そこには、本当に穏やかな、そして綺麗な月姫の微笑みがあった。そして

「あまり無理しないでね」

心の底にまで染み込んでいくような声色に乗った、温もりを纏った言葉。《不穩》が終わりに向かう直前に月姫の口から流れ出る言の葉が私の耳と心に届いた。この言葉をかけられるのはもう何度目になるだろう。

あまり多くは言葉を乗せない。しかしこの一言に月姫の思いが凝縮されていた。

それはもう既に固くなっていた筈の私の心に、着実にゆっくり作用していく。

あの頑なな私の心に。

ゆっくり、ゆっくり。

あたたため、溶かすように。

「多分無理はしない」

私は返した。

どうなるかは分からない。しかし月姫に余計な心配をさせない為にも、無理はしない。そう自分にも言い聞かせる。特に今回は既に心配させたから、これ以上は。

「気を付けてね」

そう言い、月姫は立ち上がった。ティーのお代わりを入れようとキッチンに向かう。

私はその後ろ姿を眺め、一つ溜め息をついた。

無理は、しない。

【終焉1】

死ねない

まだ死ねない

あの約束を果たすまで

―天星織嘉―

「昨日あの後ね、夜月と話したんだ」

不意に満月がそう切り出した。

すき焼き&スイーツミニパーティーの翌日の図書室、長休みのこ

とだ。只黙っていた沈黙を破って呟くように。

私は満月に目を向けた。

そこには、穏やかな表情の満月。どこか照れたような雰囲気醸し出す満月がいた。それだけでこれがいい報告なんだと理解できるような、昨日の《心理戦》の後のあの満月が別人にさえ思える程の柔らかな表情。

満月は一つ溜め息をついて続けた。

「散歩に誘って話したんだ。結構話せた。夜月少しずつだけど色々話してくれてね。ほんとに少しずつだけど、着実に前に進めている感じだよ」

「そうか」

「うん。ポツポツ少しずつ話してくれた。今まで知らなかった、夜月が考えている事とか、思っている事とか。あと、最近好きな事見

つけたんだって」

「……………趣味？」

「趣味、になるのかな。短・中距離走だって。走るのが好きって面白いね。結構速いみたいでね。高等部に入学したら陸上部に入ろうかな、って言ってた。幸輔にも誘われたみたいよ」

「陸上部……………」

「縁でもあるのかな」

冗談を言うような口調でそんなことを言い、満月は楽しそうに笑っている。私はそんな満月をじっと見つめていた。

大した進歩だと思う。

ほんの少し前まで、翼を引き千切られた鳥のように這いつくばっていた夜月。藤の束縛から逃れられずに、意味を持てず只生きていた夜月。

言葉を晒すことさえ嫌い恐れ、黙っていることでしか自分を護ることのできなかった夜月が、こうして少しずつ口を開いて真実を明かし、新しい『護り方』を学んだ。『絆』を取り戻した。たとえば《人形》のまま生きていくとしても、藤の影響を断ち切り、それに

勝利して進んでいける。そう証明するように。

「ありがとうね、嘉」

突然満月が礼を言ってきた。身に覚えのない私は眉を顰める。

「私は何もしてない」

「ううん。嘉は夜月の背中を押してくれたんだよ。もう一度、飛んでみるようになって」

「……………」

本当に何か礼を言われるようなことをしたという記憶がないのだけど。なんだかこの前の氷鳥との会話が蘇るような言葉だ。少し嫌な感じがして私は口を噤む。

眉を顰め首を傾げる私に、満月はにっこりと笑いかける。

「それだけ嘉の言葉には影響力があるってことだよ。嘉が意識せず

に口にする言葉でも、只それだけでその人の人生を大きく変化させるんだ」

「……………そんなもんかね」

取り敢えず返して肩を竦める。これ以上否定して話を膨らませてもしようがない。まだ納得はしていないが、一旦ここで止めておこう。それは氷鳥とのあの会話で学んでいた。

私の《言葉》は、人を《破壊》し人格を《破壊》する武器のようなものだから。だから満月や氷鳥の言葉はにわかには信じ難い。素直に頷く事は出来ない。

「もうすぐ終わりそうだね」

遠く、窓の外の景色をぼうつと見つめながら満月は眩くように言った。突然変えられた話だが、何のことかは訊かない。

その答えは只一つだ。

そして答えも一つだ。

『それは既に目の前まで来ている』。

根拠はない。しかし『経験上』、なんとなく『終わり』を感じている。《予感》とでも言うのだろうか。外れたことのないその感覚は、やがて訪れる終わりを予告している。

恐らく、本当にそれは近い。多分今日か明日あたりそれを迎えるだろう。面倒くさいが、終わらないのはもつと面倒だ。私達はそれに関与しなければならぬ。そして私達自身で終わらせる必要がある。

最後、どのような形で終わるのか具体的なことは分からない。私達の勝利で終わらせることは決定していることだが、具体的な作戦などは全くない。なるがままに、いつもの通りに、だ。事の流れるままに、そしてその流れをこちらに引き寄せる。

しかし一つだけ言える。

あいつには、《破壊》の為の『言の葉』は必要ない。私の唯一の

武器を使うまでもない。それを使わなくても、奴は墜とせる。あいつ如きに使う気はない。

それに、満月やその兄弟、そして氷鳥はあいつに《復讐》を誓っている。だから最期のトドメは彼らに任せる。私はそれに関与するくらいでいいだろう。

私は口を開いた。

宣言するように。

「奴は私が《破壊》するまでもない」

「……………え？」

「《表》ではあいつ自身に『失墜』に向かってもらおう。そして《闇》ではあんた達が《復讐》を完成させたらいい。私は補助的に関与するだけでいいんじゃないか？」

私は素っ頓狂な声を出した満月に強い視線を向けた。

「容易い事だろ？ 《同類》」

それは決まりきった結論のように。

最後まで自分達でコントロールしてみせる。奴の本性を引き出し誘い出し、自滅に向かわせる。そんな思い——思いというより誓いに近い——で。

満月は一瞬だけきよとした表情を作り、しかしその次の瞬間には表情を引き締めた。私の台詞の意味を悟り、戦闘モードに近いオーラを放って力強く頷く。

「必ず。夜月の為にも」

余裕さえ感じさせる口調。否、余裕しか含まれない台詞。それは勝利を誓い確信した口調だった。

「よお、二人共」

とその時、氷鳥が軽い口調で私達に声をかけてきた。軽く手を上げてシニカルに笑っている。そして一つ空いていた椅子を引いて腰掛けた。

「何やらそろそろ大詰めみたいだな」

満月からの事前の情報か、私達の雰囲気を読んだのか。足を組み、

そう尋ねてくる。この唇は歪んだ笑みを作っていた。

満月は口を横に引いて笑顔のような微妙な表情を作った。

「そろそろねー。《表》は特にもう近いんじゃないかな。多分、あの人が我慢の限界じゃない？そろそろ仕掛けてきそうだよ」

「確かに。でも、あんまりやりすぎるなよ」

満月の台詞に氷鳥は声を押し殺して囁いた。そして私に目を向ける。

「あいつキレやすいからな。まだ堪えている方だが、そろそろブチってくるぞ」

「分かってる」

「特に嘉。お前、いつもラインギリギリだからな。嘉の《性質》を分かっていてもハラハラするんだよ」

氷鳥は無理をするように軽い口調で言った。

しかしその笑みを浮かべた表情はひどく心配しているように引きつっていた。

一体何を心配しているのだろうか。何故私などを心配するのだろうか。《仮面》に殺されかけたあの事だろうか。確かに心配されてもおかしくはないかもしれないが。

それでも。

私は目を細めて氷鳥を見た。

「そこまで心配される程弱いつもりはない。もし危なくなっても、あいつ如きに失敗は絶対じゃない」

宣言するように言々と氷鳥は再びシニカルな笑みを見せた。

「心理学的に、『絶対』という単語を使う人は、自分に自信がない人が多数を占めるらしい。自信の無さを覆うようにその言葉を使う」
そしてそんなことを口にする。

「でも、嘉にそれは当てはまらないな。嘉は『絶対』的結論を知っているからこそ、『絶対』という単語を使う。そしてそれは絶対に外れない」

「あんたもそうだろ？」

「だからどんな危険を知っていても予測出来ても、嘉のその言葉を信頼出来る」

そんな言葉をさらっと言って、氷鳥は、『制裁者』は不敵で強気な笑みを作った。いつも通りの自信に溢れた表情だった。

(信頼……………か)

心の中で呟く。

私と氷鳥は信頼が築けるような近しい関係ではないような気がするが、それは私の言葉の真意を、そしてその確かさを知っての台詞なんだろう。

氷鳥とは物心つく前から同じ学園に居るので、俗に言う”幼なじみ”に近い。決して仲がいい訳ではない。しかしずっと同じ空間に居る事で互いの存在や在り方を知っているからこそ、敢えて確かめる必要もないという感じた。

そういう『経験』から導き出された結論。そういう意味での『信頼』。

「藤、今度はどんな風に仕掛けてくるんだろうねー」

相変わらず呑気で緊張感のない口調で満月は呟いた。テーブルに突っ伏して、その表情は今にも眠ってしまいそうだ。

私は一つ息を吐く。

「どうだろうな。でもあいつのことだ、ろくなことなんてないし、大したことないだろうな。《闇》ではともかく、《表》で奴に残されている《策》があるかどうかも怪しいところだ」

「確かにー。そろそろネタ切れかもね。多分出し切ったと思うよ。レパートリー少ないんだもの」

小馬鹿にするように『にししし』と笑う満月。

「だから多分無理矢理強引に来るんじゃない？ しかも更に更に、あたしが《心理戦》で全然やられてないの見てブチってね」

「確かにキレそうだな。予想外だろうよ、あんたがダメージ零なのは」

満月のお気楽な台詞に返す。

藤の中では《心理戦》が最終奥義となる筈だっただろう。昨日のそれで満月に大ダメージを与え、そして続きへ進んでいく。満月の精神を《心理戦》で《破壊》し、そして最終的には《闇》で決着を付ける。そういうプランだったんだろう。

しかしあの三年を失墜させた時のようにスムーズに、そして思い通りにうまくいかない。私達の『性質』やバックにいる連中が大きなネックになっているのは目に見えている。それによって《表》で藤が使える手段は殆どなくなった。

僭越さの代償だ。

あるいは傲慢さの応報。

満月は甘そうなコーヒーに手を伸ばし、にっこりと笑った。

「大丈夫だよ。どんな方法で来ても。《心理戦》で負けないんだから、他のやり方で負ける気がしないもの。もし《肉弾戦》で来られても、今まで通り何とかなるだろうし。さっさと最初から《闇》でこればよかったのにね。くだらないプライドにしがみついているから、こんな事になんだよ」

それは悦びのような。

優越感のような。

そんな声色で。

私は頷き、視線を外した。窓の外の揺れる木の枝を見つめながら息を深く吐く。

あいつが仕掛けてくるまでは、頭も身体も少し休めておこう。といってもあまり時間はないだろうけど。

と思った矢先だった。

『一年十五組、天星織嘉さん、深夜満月さん、藤の教官室まで来て下さい』

(……………クソッ)

呼び出しがかかった。最悪なくらいタイミングが悪い。これも私

の『性質』の《作用》なのだろうか？

(…………ちっ)

舌打ちして満月に目をやる。満月はやる気なさそうにテーブルの上に両腕を広げて伸びていた。

「早速だねー。全く……………しようがないなあ」

そんなことを言いながらだらだらと身を起こす満月。『付き合ってやるか』程度の口調だ。

「行くのか？ 奴のところに」

立ち上がる私達に、氷鳥が尋ねた。真剣な視線が真っ直ぐ私達を見つめている。

「ああ」

私は返し、立ち上がる氷鳥に目をやった。その瞳には、相変わらず私達を心配する色が強く滲んでいた。

頼むから、その瞳はやめてくれ。

「そんな心配するなよ。ヤマはまだもう少し先だ。《表》でのものだし。間違えても動くなよ」

「分かってる。俺が出る必要はなさそうだし、動かねえよ、今は」

少し意味深な色の混じった口調でそう言い、行ってこい、と不敵な笑みを浮かべて腕を組む氷鳥に背を向ける。そして満月と一瞬目を合わせ、ゆっくりと図書室の外に向かった。

最終決戦、その第一ラウンドと行こうか。

【終焉1（2）】

「何故呼ばれたか分かるわね」

知るか、そんなこと。

ぶっちゃけ、知りたくねえよ。

教官室に入って来た私達に向けられた藤の第一声に舌の先まで出かかった言葉を、私はギリギリでぐっと飲み込んだ。別に出しても良かったが、取り敢えず引っ込める。

きつと、もっと別のタイミングがある筈だ。それに、口を開いてしまつたら多分止まらなくなる。間違えたら《破壊》にまで至らないとも限らない。

そもそも、こいつが私達を呼び出す理由は一つしかない。しかし私達に非がある訳ではないので、それは『何故』の答えにはならないだろう。それに対して私達は同意している訳ではないのだ。

まして答える気もない。

それに対して口を開く気さえ段々と失せていた。

もともと………なかった。

「……………ふう」

既に面倒くさくなっていた私は、最早癖になっている溜め息をついた。なんだかこいつの遊戯に付き合わされるのに本当にうんざりし始めていた。というより、馬鹿みたいだ。

その溜め息を疲弊と見たのか（まあある意味間違っではないけど）、藤は優勢に立ったと思ひ込んだようで不敵に笑った。

「強がったって無駄よ。それもいつまでも持つと思わない方がいいわよ。あなた達の力なんて、たかが知れてるわ」

（……………ほお？デカイこと行ってくれるじゃねえか）

私は心の中で嘲笑う。

私達が《傍観者》ということを知っていながら、よくそんなことが言えたものだ。少し満月と相対しただけで、もう勝った気である。あれだけの『対面』で私達の持つものを把握したとでもいうのだろうか。私達の《性質》を見極めたつもりなのだろうか。私達はまだ何もしていないし、自分の手の内を見せたつもりもない。

満月が昨日の攻撃で『蝕まれた』と思い込んでいる時点で既にアウトだ。そして私がこいつの攻撃に疲れていると勘違いしている時点で、もうこいつの《表》の攻撃力の貧弱さは露呈している。これで私達を狙い墜とそうとしているのだ。

笑わせるな。

ナメるな。

(……………)

こいつの言葉を聞くのも飽きてきた。喋るのも疲れるが、こいつの『言葉』をぐだぐだ聞かされてくだらない《心理戦》に延々と付き合うよりはまだマシだろう。

そう思い直して口を開こうとした、その時だった。

「いつまでこんなこと続けるつもりですか」

満月が、珍しく私より先に忍耐の頂点を越えた。

藤が《心理戦》を展開しようとするより前に先手を打っておこうとしているかのように、口を開き揺さぶりをかける。藤の《心理戦》に一秒でも付き合ってやるものかという思いが窺い知れた。昨日も散々付き合わされているのだ、そりゃいい加減うんざりするだろう。

「……………なんですって？」

そんな満月を見て藤は驚きに目を見開いた。信じられないというような驚愕の表情で。そりゃそうだ。昨日《破壊》したとばかり思っていた満月が、全く『無傷』のまま《傍観者》として自分を睨み付けているのだから。

まだ状況が飲み込めない藤に、満月は言葉を重ね、重ねる。

「あたし達がこうしてあなたの呼び出しに応えてわざわざ出向いていることに感謝してほしいくらいですよ。まったく、何様のつもりなんですか。そんな大した権力もないし偉い訳でもないのに、オジヨーサマもいい加減にして下さいよね。別に無視することだってできるんですよ、あたし達は。後からなんたらかんたら言われても、それくらい痛くも痒くもないですし？常に優位に立ちたいタイプなんです、センサー。でも残念でした。あたし達、センサーに上に立たれてるって、これっぽっちも思ってますから。立たせる気も全くないですから。何優越感に浸っているんですか。勘違いしないでくれますか？」

流れるような言の葉。まるで台本の台詞を朗読しているような流暢な台詞。それは心の内を全て晒してしまおうとするように。

もう我慢しない。する必要などない。そういう満月の思いが詰め込まれた声色。その怨恨にも似た色を持つ瞳は、じわじわと強烈なオーラを広げ、藤だけを標的ターゲットとして見つめていた。

それだけでは足りないというように、口を開いて反撃しようとする藤をねじ伏せるように更に言葉を並べる。

「自分の力、自負し過ぎじゃないですか？もしかして、昨日の『あれ』であたしがやられたと思ったんですか？《致命傷》を負ったとも思ったんですか？もう聞える程の精神じゃなくなったとでも？ただだけ自信持っているんですか。その自信が実力に基付くものだったらまだ良かったんですけどね。センサー、生温いすもん。これがセンサーの『全力』なら、笑うこともできないですよ。よくあたし達を獲物にしたなって思いますね。忠告しておきます。あたし達と勝負しているだけ無駄ですよ」

「……馬鹿にするのもいい加減にしないよ」

「馬鹿にはしてません。事実と真実をそのまま言ってるだけです。これがセンサーの実力なんです。そして事実なんです。センサーがそれを認めてないだけです。力が無いのにあると思ひ込んで、く

だらない虚栄心にいつまでもすがって、盲目になっているだけです」
そこまで言って満月は口を閉じ、すっと息を吸った。
そして藤の心を突き刺すように。

「どんなに頑張ったって、あなたみたいな弱者にあたし達は墜とせない」

その台詞は確実に藤の虚栄心とプライドを抉った。それを刺激し怒りに引火させる。

「……………そういう事を言うの。分かった。私も忠告するわ。あなたが口を開けば『災い』は《同類》へ行くわよ」

藤は怒りに任せてテーブルの上にあった物差しを掴んだ。そして口を閉ざしていた私に対して物差しを振り上げる。

(……………面倒くさ)

私は動かなかった。動く気は全く無かったし、そもそも避けようという考えが無かった。昔からそうだが、私には危険を回避しようとするものが足りないようだ。というより、何故私なんだ？あ、見せしめか。スケープゴートってヤツか？何か違うような気もするけど。

そんなことを考えているうちに、振り下ろされた物差しはそのまま一直線に私の左肩に食い込んだ。

バキッ

(……………っ)

物差しは軽い音と共に折れ、折れた部分が更に肩に刺さるように食い込んだ。しかもさらにグリグリと食い込ませる。そして折れた反対側の破片は満月の顔に飛んだ。満月は反応したもののよけられず、スッと切れた頬に赤い血が滲む。

「……………」

「……………」

「……………」

そして沈黙と膠着。

左肩が酷く痛む。ちらりと見てみると血がシャツを過ぎてオーバースカートのまで滲んでいた。物差しが折れるくらいだ、手加減など全く無かった。しかもその後更に押し付けやがった。

私がよけなかったのは藤の中で予想通りだったらしい。その表情は優越感に満ちている。まるで仕返しに成功した子供が舌を出して嘲笑っているような、そんな感じだ。

一々ムカつくな。気持ち悪いしムカつくし鳥肌立つし、もうひっちゃかめっちゃかだ。こいつの全てが腹立たしいしレベル低いし。

私は呆れて只藤を見つめていた。満月も同じように藤を睨み付けている。

私達は動じない。こんなことで揺るがされないし、乱されない。それどころか何ら影響もない程、私にとって些細な事だ。敢えて取り上げる程のものでもない。

「……………」

私達は暫く直立不動のまま互いに睨み合っていた。

藤の教官室から出た私達は取り敢えず保健室に向かう事にした。できるだけ、というかあまり他人に見せたくないが、赤く染まった制服を着てる方が余計に目立つ。何だか熱を持っている気がする

し。満月も頬が切れているし、一応処置だけでもしてもらおうということになった。

しかも、時は長休み。廊下にいる生徒達の視線は嫌でも私達に集まってくる。驚いたように目を見開き、何やらヒソヒソ。仕方ないと言えば仕方ないが、本当に勘弁してほしい。

歩きながら満月は血の滲む私の左肩を覗き込んで尋ねてきた。

「嘉、痛い？」

「まあ、生物学的には私も人間だし。神経はあるから、一応は」

「これ、シャツだけじゃなくてオーバースカートも変えなくちゃいけないね。これ落ちるといいけど、落ちなかったら新しく買わなくちゃいけなくなるね。落ちないだろうね……でも、なんで嘉にやったんだろう」

「さあ。別にいいけど。けど……やっぱ一回では終わらなかったな」

「面倒くさいねー。《闇》も片付けなきゃいけないのに。こりや第二ラウンド必要だね。第二弾で終わるかなー終わらせたいなー」

「迷惑極まりないな。全く。奴に付き合ってやる体力と気力と時間が勿体無い」

そんな言葉を交わしながら廊下を早足で歩き、ようやく保健室に到着。ドアをスライドさせる。

「……………」

「……………」

と、保健医の願の他に、そこにいた数名の男子生徒の視線が一気にこちらに向いた。

なんて偶然だ、陸上部のあの四人（吟、朋也、瀬斗、幸輔）が保健医の願と一緒にソファに座ってくつろいでティーを飲んでいた。しかし私達の様子を見て一瞬にして雰囲気張り詰めたものになった。

「どうしたの二人共。ちょっと見せて」

願がすっと笑みを消して立ち上がり、私達に駆け寄る。吟もぱっ

と立ち上がった。

「大丈夫？大丈夫じゃない？」

酷く心配した表情で吟が尋ねてきた。心の底から心配しているのが滲み出ている姿を見ると、柄になく皮肉もツツコミも口にできなかった。他の三人も何事かと私達を見つめている。

「とりあえず処置しよう。嘉、満月、こっちにおいで」

願はそう言って薬箱をつかみ、私達をすぐ横の個室に案内する。

保健室は、願達が座っていた軽い処置だけを行うオープンスペースと（メチャクチャ広いリビングのようにも見えるが）、一つずつ個室になっているベッドルーム（合計十のベッドルームがある）に分かれている。だから一言で保健室といっても結構な広さになる。

個室に入り、ドアを閉める願。私をベッドに座らせて言った。

「はい、脱いで嘉」

「えええ！？」

願の言葉に叫んだのは満月だった。異様なまでに驚いて目を見開き願を見ている。

その反応に願は苦笑して橙色の瞳を微笑ませた。

「そんなびつくりしなくても。傷の具合見なきゃいけないでしょ？」

「そうだけど……そうだよ」

満月は私に目をやる。私は別に変なことを言われたとは思っていないので、オーバースカートを上だけ外して普通にシャツを脱いだ。

「わあ、結構深いね。ちよっと熱も持っているし………どうしたの？」

傷の具合を確かめながら願はトーンダウンさせた声色で尋ねてきた。すぐに薬箱を開けて処置を始める。

「こういうことをしたい人も居るんですよ、この学園内にも」

溜め息混じりに言った私の言葉に一瞬動きを止め、再び手を動かしながら願は更に口を開いた。

「そういえばね、少し前に藤さんが、嘉とぶつかって頭打って足挫いたって来ていたんだ。その時………ちよっとおかしいなと思った

けど」

「阿呆らし……………」

ゾワ、っと一瞬にして鳥肌が立った。

わざとぶつかってきた、あの時のことだろう。ここでも猫被って『演技』していたか。本当にくだらない。それでどうにかなるのも思ったのだろうか？

願は生徒よりの教師だ。いつも生徒の立場から物を見る。だからあいつがどうしたところで疑われるのはあいつだし、何より願も『勘』という面で普通より上だ。そして『道理』というのを知っている。

「藤さんなんだね」

確信したような口調で願は言った。様々な気持ちが混濁した声色。そして唇を噛む。

「あの人の『噂』はチラツと聞いたことがあったけど……………まだ続いていたんだね。これ以上被害が広がらない為にも手を打たなきゃならないね」

「あ、自分達でやりますよ」

そこで満月が口を開いた。処置を続ける願をしっかりと見つめて。

「こういうのには慣れてますから、平気です。それに……………あたし達には、自分でやらなきゃならない理由があります」

不意に真剣な色を瞳の中に呼び込んで。じっとそれは《破壊》を見つめている。

そう。

私達、特に満月には、自分の手で藤を《破壊》に導かなければならない理由がある。強い誓いがある。

《復讐》という譲れない誓いが。

「……………そっか」

願はやや曇った笑顔を見せて、小さく答えた。取り敢えず処置は終わったようで、手を下ろした。

肩に大きなガーゼ。テープでしっかり固定されている。これくら

いなら制服に違和感もないだろう。

願はそこで不意に何かを思い出したように、ベッドの横にあるクローゼットに向かった。

その手には、制服のオーバースカートとシャツ。

「嘉の制服汚れちゃってるから。予備のもの使って。サイズはこれで多分大丈夫だよ」

「……………ああ、はい」

私はその制服を受け取って袖を通した。こういうものまで準備されてるらしい。なんて準備がいいんだ。

「女の子なのに、顔は気をつけなきゃ。満月。傷残ったらどうするのー」

満月の顔の傷の処置に移った願はそんなことを言いながら傷を消毒している。痛いらしく、満月は瞼を固く閉じている。

「よけられなかったんですー。もうちょつとだったんですけど。うー。しみるー……………」

「今度は本当に気をつけてね」

「はい」

私は黙ってその会話を聞いていた。なんだか女の子同士の会話みたいだ。それでも違和感を感じないのは何故だろう。願の容姿と性格のせいかな？

取り敢えず着替えを済ませて処置が終わるのを待つ。そこで授業の開始を告げるチャイムが鳴った。

満月は唇を尖らせて言う。

「あの人ね、物差しで嘉の肩叩いたんです。しかも思いつ切り。したらそれが折れちゃって、しかもめり込んだんです。で、その反対側が飛んであたしの顔に飛んできたんですよ。危ないねー」

「危ないっ。そんな事したの？ 藤さん」

「うん。もう自分をコントロール出来ないみたいです。だからもうこの時点であの人の負けですけど。あたしもコントロール不能にならないように気をつけなきゃ。『理性』を失ったら負けですもん」

満月は軽い口調で言い、口を閉じた。

しかし口調は軽くとも、満月の言葉は決して軽くない。故意にふざけた色を含ませた雰囲気の中に、その真意は隠されている。

おどけていながらも、奥に潜む『獣』は戦闘隊系を整えている。それは少しずつ巨大なものへと成長を止めない。

「はい、できた。出来るだけ目立たないようにしているけど、これが限界。ちょっと我慢してね」

処置を終えてそう願はにつきり笑い、薬箱を閉じる。

右の頬に貼られた肌色に近い色のガーゼは、カモフラージュしているとはいえかなり目立つ。しょうがないと言えましょうがない。

「ありがとうございます」

ぱっとベッドから立ち上がって満月は背伸びをした。自分の制服を持って私も立ち上がる。

願もにつきり頷いて私達はその個室から出た。

既に授業が始まっているので誰も居ない筈………だが、リビング(?)にはまだ満月の従兄弟の幸輔が残ってコーヒーを飲んでいたら。授業がある筈なのにいいのだろうか。

幸輔は出て来た私達に目を向けた。相変わらずあまり表情のない視線。

満月は首を傾げた。

「あらー? 幸輔、授業は?」

「面倒くさい。行かない」

「そーなの?」

あらら、と笑って満月はすっと表情を消した。私はその横顔を見つめて目を細めた。

最早、満月は藤の《最期》しか見ていない。それ以外は二の次にされ、思いは支配されている。

「……………行くか」

私は囁くように満月に言った。満月はゆっくり頷く。そして願に目を向けた。

「先生、どうもありがとうございました。もう行きますね」

「うん。気を付けてね」

「行くのか」

ソファに座っていた幸輔も立ち上がった。私と満月に交互に目をやる。それは私達が何処に行くのか、何に向かつて行くのか分かっているような雰囲気さえ醸し出している。

私は幸輔に目をやった。

「行ってくる」

それだけ告げて。

そして私達は二人に背を向けた。

もう振り向かない。《傍観者》になった表情は二人には見せない。

私達の敵は、只一人。

タイミングや偶然というのは本当に恐ろしい。ここにきて再確認した。

教室のドアを開けて中に入った私達の目に入ったのは、教壇に立ち授業を進める藤だった。ばちっと目が合って一瞬睨み合う。しかし藤はそれがクラスに明らかになる前にその敵意を眼鏡の奥に隠した。

「また遅刻なの？二人共」

困ったわね、というような藤の表情。只困っているように見せかけているだけの表情。『また』ってなんだ。人を遅刻の常習犯みたいに言いやがって。だいたい、誰のせいでこんな事になっていると

思っているんだ。ふざけやがって。

「……………」

私達と藤が相對した事で、クラスの空氣が張り詰めたのが分かった。緊張がこの空間を支配する。チラッとクラスメートに目を向けると、丁度遠井と目が合った。心配と恐れに今にも泣き出してしまいそうな表情をしていた。私は目を細め、スッと視線を外す。

私達は黙っていた。

私は、黙っていた。

「……………」

それは、隣に立つ満月のオーラが煮えたぎったようになっていたからだ。もう抑える事はやめるつもりらしい。多分私が口を開かなくとも、満月が開く筈だ。

その《最期》への口を。

《破壊》へと繋がる言葉を。

そして永遠のような刹那の瞬間の後。

「先生は夜月をへどうでもいい生徒」として扱ったんですね」

突然、満月の口を突いて出た言葉。それは満月が一番藤に対して憎悪を抱いている事だった。

その台詞に、一瞬藤の目が見開かれた。クラスはざわつき、そして固唾を飲んで満月と藤に視線を集める。まさかそこまでストレートに切り出すとは。それは満月の怒りの大きさを象徴しているようだった。

もう満月は止まらない。

「忘れたとは言わせませんよ。多分センサーなら忘れてませんよね、夜月はあたしにそっくりだから、思い出しやすいでしょう？自分が墜とした生徒は覚えていますよね、無駄に自信に溢れた自意識過剰なセンサーなら」

「何言っ……………」

「今更惚けるんですか？それともみんなの前だからですか？とことん汚いですね。おげれつです。自分を守ってももう遅いですよ。多分クラスも大部分の人が薄々気付いてますよ。センサーがおかしいって事も、あたし達が悪くないって事も。だって、変ですもん。センサーの言動も、あたし達に対する態度も。『道理』が分かる人ならすぐに気付きます。……………《仮面》、でしたっけ。それはどうでもいいですけど、もうセンサーの味方につく人はいません」

「……………深夜さ……………」

「あたしの名前呼ばないでくれますか。悪寒がします。吐き気します。なんですか、善人振って。気持ち悪いです。鳥肌立ちます。さぶいば立ちます。この期に及んで知らん顔ですか。まだ演技を続けるつもりですか。本当にそれが通ると思ってるんですか。全て自分の思う通りになると思ったら大間違いですよ。夜月の《復讐》はあたしが果たす。センサーの偽善を暴きます。そしてその本性を引きずり出してみんなの前に晒してやります」

「……………」

私は止まることのない満月の言葉を黙って聞いていた。延々と流れる川の水のように、それは止まらない。クラスは突然のことに呆気にとられている。話の内容や状況を把握できずに啞然としているようだ。満月がここまで攻撃的なのを初めてみたのだろう、更にその内容にも驚き、それがクラス全体を包んでいた。

（……………ちよつと暴走気味だな）

私は少し迷い、一旦満月を止めることにした。ここで延々と言葉を並べてもあまり意味はない筈だし、第一、満月が冷静になる必要がある。普段では考えられない程に憎悪と嫌悪、そして憤りを露わにして感情を爆発させている満月をクールダウンさせる必要があるだろう。

いつもの《傍観者》として相対する為に。

「……………」

私は満月の肩に手を置いて軽く後ろに引いた。満月は弾かれるよ

うに身体を反応させ、言葉を止めて私に目を向ける。

「これくらいにしとくんだ、《同類》」

満月の目を強く見つめて。今はこれだけにしておくようにと。満月の奥に作用するように私は言った。

今はまだ。

見つめ返してくる満月の瞳の色がゆっくりと変わっていくのが分かった。怒りに狂っていたその色が、段々といつもの満月らしい冷静さを取り戻していく。

「……………分かった」

少し長めの沈黙を置き、満月は小さく頷いて目を伏せた。深く息を吸い込み、自分自身を落ち着けるようにゆっくり吐き出す。

そして次に目を上げた時には、いつもの冷静沈着な瞳になっていた。そして藤を睨み付ける。そこには、制御された怒り。

藤はまだ《演技》を続け、満月の言葉に怯え困っているような表情のままクラスに目を向けた。

「みんなごめんなさい、自習しておいてくれるかな。……………深夜さん、天星織さん、ちょっと誤解があるみたいだから、別のところで少し落ち着いて話し合いましょう？」

そしてさりげなく私達を別室に誘い出す。幾分強引なやり方。その眼鏡の奥はぬらぬらと憎悪が蠢いていた。

第二ラウンド開始か。

（受けて立ってやろうじゃないか。《表》のお前を終わらせてやる）私と満月は一瞬目を合わせ、藤のあとについて教室を出た。

さあ。

《表》での《復讐》を完成させよう。

【終焉
1
(3)
】

[illegible]

藤の教官室に入り、教官室の中の奥の部屋の扉が閉められた瞬間、まるで狂気かと思うような藤の笑い声が室内に木霊した。藤は眼鏡を外し、天井を仰いで高笑いする。何かに狂ってしまったような笑い声。それは本当に気味の悪い光景だった。イカレてしまったのかと思う程だ。いや、もうすでにこいつはイカレているんだった。

「夜月、ね」

ひとしきり笑い終えた藤はそう呟き、何か快感に浸っているような満悦の表情で満月に目をやった。

その目はまるで獣けだもののように、本能しかないような色をしていた。

「成程ね。あんたがああ、『出来損ない』の姉なのね。思い出したわ、確かにそっくりね。ふふ、弟が弟なら、姉も姉ね。そうよ、確かにあの子は私がやったわ。餓鬼にはなかなかしぶとかったけど、所詮弱者は弱者なのよ。最後まで悪足掻きしていたけど、メツタギリにしてやったわよ。それがどうかした？この世界は弱肉強食でしょ？」

.....

「どうしてあいつを墜としたか、知りたい？」

藤は馬鹿にするように、蔑むように。

夜明という存在を踏みにじり満月を更に挑発するようにうつすらと嘲笑う。

本当に汚れた笑みで。

「なんとなく『氣に入らなかった』からよ。私の空間に居るのが許せなかったのよ。理由はないけど、存在自体がムカついた。あるで

しょ？そういう事。それだけよ。脆かったわね、あんたの弟は。今も生きてるの？もう死んだのかしら」

「……………そんなくだらない理由で」

その瞬間満月のオーラが、一気に怒りで激しく燃え上がった。動き出さんばかりに握られた拳が大きく震える。しかし私はまだ耐えるようにと無言のうちに満月を制する。

今はまだだ。満月もそれは感じているらしく、自身を燃え尽くさんばかりの激怒を必死にぐっと堪えた。

『何となく』。

それはそれで、十分な動機にはなる。しかし、それは時に、くだらないものとなる。

私は目を上げた。

「そう豪語してる割には本当に大したことないですよ、先生は」

そして、軽蔑を込めた敬語、敢えて挑発的な口調で藤を煽る。満月を再びクールダウンさせるまでの繋ぎとして。それに、私も言いたい事がたくさんあった。《破壊》する訳ではないが、言わなければならぬ『言の葉』があった。

《心理戦》なら負けない。

「結局、他人の目が怖いだけじゃないですか。正々堂々と第三者が居る場所では戦えないからこうして密室に誘い出す。しかも教官室の奥の奥、誰も侵入出来ないように。……………大体、キャラを作って《表》と《闇》に分けている時点で駄目ですね。それだけで私達の《敵》になるには役不足です。先生は自分がどう思われるか、どんな評判が立てられているか、それが怖いんです。人は墜としたいけどそればかり気になる。だから私達のように正面から闘えない。だから《闇》の自分の存在を隠し、《表》では偽物の人格を作り上げる。違いますか」

「ふざけないじゃないわよ。黙っていればベラベラベラベラと」

藤は目をむいて怒りの足取りで私に向かい、一步先まで近付いた。そして胸倉に掴みかかる。すごい形相で睨み付けてくるが（正直、

見るに耐えないヒドい顔だ）私は構わず続ける。

「呆れる事すら出来ないくらい生ぬるいんですよ。自分の評判や権力に固執し過ぎたんですよ、先生は。やりすぎましたね。ここまでしてはいけなかった。踏み越えていけないその一線を越えてしまったんです。そしてそれは、必ず先生自身に戻ってくる。倍以上になつて、私達が必ず先生自身に返す。《破壊》には《破壊》を。《不穩》には《不穩》を。そして先生の無力さと無知を露呈させてやります。そして失墜させます」

淡々と、全く感情のこもらない口調で。『毒』を含むそれは確実に藤に効き始めていた。

そして。

「大人しくやられていればいいものを。ちょっとあなた達は強引に教えなきゃいけないみたいね。《闇》でもどちらでも私が上だという事を」

言うなり藤は私の左腕を取った。電光石火の早業で後ろに捻り上げ、力を込めて限界を超えさせる。

「……………」

次の瞬間、ガクンと肩が外れたのが分かった。さっきやられた傷にも響き、痛みが走る。が、今まで何度か外された事があるので、これくらいの痛みは大したことない。私はいつもの通り、抵抗せずされるがままにされていた。

「……………うらっ」

満月が私と藤を引き離そうと藤に掴みかかった。藤の手は私から放れ二人はもみ合いになる。藤は半ば《仮面》として満月とやり合っているようだ、ある程度《肉弾戦》を行える満月と激しいまでにやり合っている。

満月と藤の力はほぼ互角だ。もしかしたら藤が若干上かもしれない。満月は《心理戦》が主なので仕方ないと言えは仕方ない。しかし満月も激しく応戦している。私は（あんな折れそうな体してよくやるよ）と呑気なことを考えながらそれを見守る。

「くう……っ」

藤は一瞬油断した隙に圧されてテーブルまで後ろ向きに押された。体勢を崩してバランスを失い、空中を彷徨った腕がテーブルの上にあった花瓶を勢いよく弾き飛ばす。

バリッ

花瓶は大理石の地面に叩き付けられ、激しい耳をつんざかんばかりの音を立てて割れた。破片が飛び散る。

藤は構わず足を振り上げ、満月を引き離れた。体勢を戻して足技を繰り出す。満月はそれをなんとかよけながら隙を窺う。

「……はっ!!」

「くう!!」

そして一瞬の隙を突き、満月は藤の懷に突進した。脚をかけながら体当たりをするように体ごとぶつかっていく。藤は体勢を大きく崩して地面に倒れた。

「あああ!!」

地面に倒れた藤はさっき割れた破片を握り立ち上がった。もう理性は吹っ飛んでいるようだ。目が明らかに怒りでおかしくなっている。物凄い勢いで満月を振り切り、私に向かって来る。そして躊躇いなくその手を振り上げた。

「嘉!」

満月の叫び声が聞こえた次の瞬間。

「……………」

右腕に鋭い痛みが走り、ずっと腕の力が抜けた。

視線を落とすと腕は二の腕の上の方から肘の上辺りまでぽっくりと開いていた。じわじわあれよあれよと言う間に紅が広がっていく。結構深く抉られたようだ、それは腕を伝い大理石の床にぽたりぽたりと滴り落ちる。結構な出血だ。

「面倒だな……………」

私は藤にゆらりと視線を向けた。

藤の瞳の中に、冷静さは欠片も無い。感情に支配され最早制御不能になっていた。本能だけの獣のようだ。

「嘉っ」

満月が私に近付こうと動き出した。それと同時に藤は硝子の破片をもう一つ拾い上げて私を背後から拘束した。一つを私の喉に突き付け拾った破片を満月に向ける。

「近付くな！そのまま喉を切り裂くよ」

そう言いながら、私の喉に破片を押し当てる。満月は動きを止め、近付こうにも近付けずに藤を睨み付けた。

そして膠着状態。喉の圧迫感は少しずつ強くなっていく。ふと、先月の《不穩》で《刺客》に少し首に傷を付けられた時の事を思い出した。

少し眩暈がする。もう既に貧血になっているという事はあるまい（否定は出来ないけど）。こんなシチュエーション、確か《透視者》の《不穩》の時にもあったな。なんだか同じ事の繰り返しのような気がする。

そして喉を圧迫する破片がやがて皮膚を裂こうとした、まさにその時だった。

「そこまでだ」

この場に居ない低い声がして。

私達は声がした、この部屋の入り口に目を向けた。私を拘束する藤の身体が、緊張に固くなったのが分かった。

そこには

「……………独門氷鳥」

氷鳥が、まるでずっと前からそこに居たのかと思う程当たり前のように、そこに立っていた。右肩を壁に寄り掛からせ、腕を組んで藤を蔑むような目で見つめている。そのオーラは強烈な重圧を放つ

ている。

そしてその後ろに、もう一人人影が見えた。私は目を細めてみる。

「あんた……………」

その人物が氷鳥の後ろから姿を現わすと、藤のオーラが更に変化した。

そこには、藤によって《人形》にされた夜月が居た。

夜月はじつと藤を睨み付け、無表情でそこに立っている。そこには怯えも恐れも恐怖もない。それどころかもし刃物を渡されたらすぐにでも藤に向かっていきそうな程、そのオーラは怒りを含んでいる。

対する藤はあまりの予想外の人物の登場に動揺しているのが分かった。それもそうだろう、藤の言葉を借りれば以前『メツタギリ』にした筈の『標的』^{ターゲット}が、平静と平然とそこに立ち、しかも煮えたぎらんばかりの憤りの表情で自分を睨み付けているのだから。

私達にとっては全くの想定外という訳ではなかったので、迎えるような視線を二人に向けていた。

主役が来なけりや始まるものも始まらないしな。

夜月は無音で中に入ってきた。そして藤と距離を置いて不意に歩みを止め、未だに私を拘束する藤にしっかり視線を合わせて。

そして硝子のような冷たい声で短く一言。

「成長ないな、あんた」

まるで喧嘩をふっかけるような口調。敢えて煽るように。

二年の時を経て、再び動き出す。夜月の《逆襲》が始まる。ようやく始まった。

(……………)

と、私達以外の気配を感じた。ここに入る一つ前の部屋にだろう

か、まだ誰か居る。しかし今はまだ出て来ないようだ。何となくだが、それが誰なのか分かった気がした。

「……………」

夜月の登場にたじろぎ狼狽えている藤は、動きを止めたまま。どう動いてくるのか窺っているようだ。

しかし動き出したのは夜月ではなく氷鳥だった。組んだ腕を解いてゆっくり歩き始め、スラックスのポケットに手を突っ込んで藤を睨み付ける。そして夜月より数歩藤に近付いて止まった。警戒して私の喉に破片を更に突き付ける藤を嘲笑うように片目を細める。

そして口を開く。

「なんでお前みたいなの、人を殺そうとするような奴が人を教える筈の教師をしているんだらうな、《仮面》」

「……………」

その言葉に藤は反応した。驚愕しているのだろうか、表情は見えないが幾分落ち着きがないような感じた。既にそれはバレているというのに、何故ここで狼狽するのだろうか。

氷鳥は淡々とした口調で尋ねる。

「もう分かっている事だ、お前が嘉をプールに沈めて殺そうとしたって事はな。そんな時、俺に右腕にバツの傷を付けられた筈だ。逃げられない『証拠』として」

トン、と指で自分の右腕を叩く氷鳥。

それに反応し、微かに藤の右腕が動いた。それにしても……………言葉一つ一つに動揺し過ぎだろ。いくら予想外だったにしても。本当にこれで私達に勝利するつもりだったのか？

「往生際が悪いな」

氷鳥は低く言うと、突然動き出した。滑るように一気に距離を詰めると、流れるように藤の両腕を掴み、まず私を自由にする。そして掴んだ腕を背中に捻り上げて床にうつ伏せに組み伏せ、あつと言う間に動きを封じた。そして右腕の袖を肩から力任せに破った。

「……………放しなさい！」

「……………」

露わになった右腕には、確かに包帯が巻かれていた。氷鳥は暴れる藤を片腕で封じたまま、それもスルスルと解いていく。

そこには、何か鋭利な凶器に削られたような『×』のまだ赤くしている新しい傷があった。何かの刻印のような異様な傷。武器を持たない氷鳥がどうやってこんな傷を付けたのか知る由もないが、余裕のない中でこんな事が出来るのは流石だ。

私はそれを確かめ、取り敢えず自分の傷の止血をしようとハンカチで傷を抑えて（しかし出血が多くてこれだけでは足りない……………：）小さく溜め息をついた。

「最近長袖を着ていたのはこれを隠す為だな？俺にこうして追及されないように。あるいは《表》の自分の立場を護る為に。隠し通せろと思ったのか？残念だな、そんなに甘くねえんだよ」

嘲笑うように言い、氷鳥は不意に夜月に目を向けた。まるで汚いものを見ているかのように、眉を顰め目を細めて藤を見下ろす夜月に声をかける。

「夜月、やっちゃまいな」

「……………」

その言葉に引き寄せられるように、夜月はゆっくり歩き出した。藤は地面に押さえつけられながら首を持ち上げ、物凄い形相で夜月を見上げる。

そして次の瞬間

「グアッ！！」

夜月は無表情で躊躇いなく藤の横っ面を、まるでボールでも蹴るように足で蹴り飛ばした。その衝撃で藤の頭は飛ばされ、グキ、と異様な音がして地面に顔を伏せた。あまりの痛さに堪えきれずにいるようだ。もしかしたら頬かどこかの骨、折れたんじゃないか？それか、首がおかしくなったんじゃないか？そう思うくらい変な音だった。鼻血は出ていないようだが、唇は切れているようだ。

氷鳥は冷淡な表情で藤の見下しながら夜月に言う。

「どうする、夜月。こいつを《制裁》するか？それとも、嘉か満月に《破壊》してもらうか？今お前がどうにかするか？」

「……………」

その氷鳥の問いに、夜月は首を横に振った。そして氷鳥と同じ見下すような目を藤に向けた。

それはまるで、なんの感情も持たない《人形》のように。否、『蔑み』で形作られた《人形》のように。

「完全な《破壊》は《闇》でがいい」

《闇》を纏った《人形》は、まるで誓うような口調でそう言った。

それは、《闇》で《終焉》を見届けるといふ宣言だった。既にその準備は整っているようだ。

私はそれを確かめ、腕を抑えながら藤に数歩近付いた。眩暈を堪えながら藤と対峙するように立つ。藤は反応し、横に向けた顔を少しずらして目を私に向けた。その目はまだ抵抗を続けるように激怒を含んでいる。

「くだらないですよ」

私は無感情に口を開いた。

「《闇》の人間ならそれらしく、《闇》の人間だけを標的にすればいいじゃないですか。わざわざ《表》と《闇》に存在を二分するっていう事のメリットが分かりませんね。どっちつかずってヤツですよ。中途半端で生半可。実際、あなたは《終焉》に向かっていきますね。いずれにしても、あなたの実力はこの程度だったって事です。あなたが墮落したと思っていた生徒も、この通りです。失墜されなかったどころか逆に強くなっていますよ」

一気に言って私は一つ溜め息をつく。もうこれくらいでいいだろう。あまり言葉を並べても疲れる。

と、氷鳥は何を思ったか藤の上からどいた。藤はパッと立ち上がって私達と距離を取る。その目はギラギラと怒りに満ちている。

そんな藤を嘲笑うように夜月は口を開いた。

「もう俺はあんたに縛られない。確かに二年前あんたにボロボロに

されたけど、もうそれは過去の事。俺は自分を護る方法を学んだ。教えてもらった。もう絶対に負けない。あんたみたいに、誰かを失墜させる事しかないような人には。『仮面』被って人格を偽っているような人には負ける気がしない」

それは藤を煽るように。

自ら破滅に至る口を開かせるように誘導するように。それはまるで言葉を『凶器』として振りかざすように。

そしてそれは効を奏した。藤は夜月を鬼のような形相で睨み付け（本物の鬼なんて見た事ないけど）、口を開いた。

「なら、試してみようか？もう一度あんたを墮としてみるわ。今度は、再起不能になるように」

そう自らの本性を晒した、その瞬間^{とき}だった。

「ようやく本性を出しましたね」

そんな台詞が聞こえて。私達は一斉に部屋の入り口に目を向けた。そこには、担任の臨安我哲留と、生徒会顧問の流星流星がいた。先から感じていた気配の正体だ。一番いいタイミングを見計らっていたのだろう。藤が言い訳出来ない状況まで待っていたのだろう。もう少し荒く言うと言き聞きた。

藤は驚きと恐怖に目を見開いている。この人にバレたらどうなるのか、藤が一番よく知っている。それが《表》での終わりを意味するという事を。《表》で人を失墜させる事が出来なくなるという事を。だから今まで必死に自分の『本性』を隠してきたのだ。

「……………」

担任は口を開かない。只驚きに青ざめる藤の様子を腕を組んで見つめている。その目には、冷淡な色。冷たい色。ポーカーフェイスの中に、義憤に満ちた表情。

この人は、歪んだことを忌み嫌う。

「……………露呈しちゃいましたね」

ずっと黙って事の成り行きを見守っていた満月が口を開いた。最上級の軽蔑を込め、憎悪と嘲笑を込めて。その唇には、あまりに冷め切った冷笑が浮かべられていた。

「ね、センサーではあたし達には勝利できないって言ったじゃないですか。もうセンサーに言うことはありません。只一つ敢えて言うとしたら、あなたのような人は早く消えた方がいいって事くらいです。大袈裟じゃなく、害しか生み出せないんですから」

そう言う満月は藤から視線を外し、もう口を開くことはなかった。見るのも嫌だと言わんばかりだ。担任に睨み付けられている藤は何も反論する事はしなかった。

「《傍観者》」

そんな藤に、私は再び口を開いた。藤はゆっくり私に怒りに満ちたままの視線を合わせた。

私は抑揚のない口調で続ける。

「私達はそう呼ばれる《種族》だ。《不穩》を集め、やがて《不穩》を《破壊》する。たとえ勝算のないように見える状況になっても、どんな劣勢に立たされても、最後には必ず勝利を手繰り寄せる。あんたもそれは分かっていた筈。最低でも知識として知っていた筈だ。……………先生如きにかできるような《種族》じゃないんですよ」

最後はとことん軽蔑する『敬語』で。

分かりきっていた結末。盲目だったのは藤だけだった。だからこうして今、墜とされている。

あまりに呆気なく。

と、ずっと黙っていた担任が口を開いた。

「一応、説明してもらいましょうか、藤さん。私と一緒に来て下さい。……………嘉。願を呼ぶから、彼と病院で先に手当てを受けてくるんだ。満月と氷鳥と夜月は少し話を聞きたいから一緒に来てくれ」担任は藤に有無を言わせない視線を向け、『お願い』という形の命令をした。この状況で《仮面》を出せない藤は私達を睨み付け、

担任に従うしかなかった。担任は携帯を取り出して願に連絡を入れているようだ。

「……………」

数歩下がって、ずる、と壁を背にしゃがみ込み、私はそんな担任を見ていた。

これが、二十四歳でありながら本物の『権力』を持つ担任の力だ。本物の権力者。

「嘉、また大きな怪我しちゃったね」

満月がそう言いながら私の顔を覗き込んできた。その表情は先程とは一変し、只そこには私の傷を心配する色。私は只肩を竦める。答える必要はない。

満月は自分のハンカチを取り出し（汚れるのに。このハンカチ高いんだぞ）、止血を手伝いながら口を開く。

「哲留さん達、氷鳥が来た時既に向こうに居たみたいだね。だから氷鳥、あの傷の事とかあのタイミングでバラしたんだろうね」

「だろうな。最初から見せるつもりだったんだろ。ホント、予想以上の事やってくれるよな」

一つ溜め息。

「……………」

夜月も私の隣に来てじっと、押さえられている傷を心配そうに見つめている。氷鳥も傷の具合を見に来た。『やっぱり怪我しちゃったな』という困ったような表情だ。しようがないじゃねえか。なんでお前が困るんだよ。

事はどうあれ、ようやく《表》は終わった。

「半分は終わったね、嘉」

満月がそう小さく笑った。私は溜め息について肩を竦める。

「難儀さを考えれば三分の一かな。まだ面倒な方が残っている」

「そうだね」

そして、満月はうっすらと笑み。

それは《最期》を見つめている笑み。

「嘉。願が此処に来るそうだ。少し待っていてくれ。三人は一緒に来るんだ」

担任が携帯をしまい、私達に声をかけた。私達は頷く。満月と夜月は眩暈で最早自力では歩けなくなってしまうた私を両方から支え、傷口を抑えながらソファまで誘導してくれた。

「まだ終わっていない。奴は最後の悪足掻きをする」

私は呟くように、両サイドの二人に言った。

「《仮面》として来るぞ」

【終焉2】

「ちょっと出てくる」

そう言って家を出たのは、夜八時を過ぎた頃だった。

恐らく奴は《仮面》として今晚すぐ攻撃を仕掛けてくる。いつどんな風に来るのか分からない。だから月姫から離れておこうと考えての事だった。今の奴なら、私がどこに居ても殺しに来るだろう。月姫は絶対に巻き込む訳にはいかない。

「……………」

風は生温い。身体にまとわりつくように気持ち悪い感覚がついてくる。

まるでこれから迎える《終焉》を暗示するように。

面倒くさい事この上ないが、これももうそろそろ終わりだ。私達の勝利を持って終わらせる。

「……………」

私のマンシヨンの敷地に入る門のところに、門に寄りかかって俯いている夜月を見つけた。地面に視線を這わせ、アスファルトを爪先で蹴っている。

私はゆっくり夜月に向かって歩く。近付いてくる私に気付いた夜月は顔を上げた。門から体を離し、私を待つ。

「どうした？」

短く尋ねる。すると夜月はやや俯いて答えた。

「嘉ねえと一緒に居れば、《仮面》の《最期》にも参加出来るかな、って。嘉ねえにくっ付いていれば間違いつて思っ」

そして目を上げる。

それは私の『性質』を理解しているような台詞だった。その《闇》に濡れた瞳は、強く私を見つめている。

「お前賢いな」

言い、私は目を遠くに向けた。

「少し歩こう。多分あんたの姉も《制裁者》も動き始めている筈だ。もしかしたら兄弟全員総動員かもしれないな」

促すと夜月は頷いた。

何故夜月が兄弟や氷鳥と一緒にいなかったのかは分からないが、取り敢えず一緒に歩き出す。以前満月が『夜月は携帯を持たない』と言っていたので、多分連絡がつかなかったんだろうと勝手に推測する。別に大した事でもないし、共に《不穩》へ向かえばいいだけの話だ。

私の右に並んだ夜月は、二の腕全体に厚く包帯が巻かれている右腕に横目を向けた。そして小さく尋ねてくる。

「……………怪我はどんな具合なの」

「神経は傷付いていないみたいだ。結構縫われたけど……………しよ
うがないだろ。《不穩》というのはそういうものだし」

夜月の口調に少し呵責のようなものが見えたので、敢えて流すように答える。夜月が心配して気を揉むような事ではないし、痛いのは慣れている。痛みはするが我慢出来ない程ではない。全ては『しよ
うがない』事なのだ。

夜月は小さく、そう、と俯いた。

ゆつくりと私達は歩く。不意に流れた沈黙が、湿気を含んだ風に戯れる。私達は無理に話を作る事もなく歩き続けた。つい最近まで互いを知らなかった私達が当たり前のように共に歩いている。何だか不思議な感覚だ。

でも、この感覚にもだいぶ慣れた。ここ数ヶ月で、誰かが隣にいるという事にさほど抵抗は感じなくなっていた。

それは多分、私の感情の変化だ。それを受け入れるのは並大抵の事ではなかったが、今はこれでもいいと思える。

今は。

「あいつ、クビになったのかな」

と、その沈黙を切り裂いて夜月が口を開いた。

その声色にこれといった感情はない。只藤が失墜に至ったかどうかを確認したいという思いしかなかった。その一言だけで夜月が藤に対して抱いている感情を理解出来る程の《闇》が蠢いていた。

私は正面に目を向けたままそれに言葉を返した。

「あの時あんた達も私の担任に事情を訊かれたんだろ。あれは決定的な場面だったし、担任は何より奴みたいな歪んだ奴を忌み嫌う。以前からマークはしていた筈だし、多分もう奴の《表》での処分は下った筈。もう《表》で出来る事はない。だから最後に残された《闇》で、最後の悪足掻きをするだろうな」

「そっか。……俺も嘉ねえも《肉弾戦》駄目じゃん。氷鳥に何とかに連絡しなくて、大丈夫なの？」

「平気だ。自然と同じ場所に集まる筈だから。それは今までの『経験』で実証済みだし」

「そう。じゃあ大丈夫だね」

頷いて夜月はまた口を閉じた。

恐らく夜月は、満月や私の『性質』を理解しているのだろう。どこまで理解しているのかは別にして、これだけの説明で納得しそれを真実として受け入れるというのは、つまりがそういう事だ。その夜月の口調に、不安や疑問というのは一切感じられなかった。

「嘉ねえ」

夜月が私を呼んだ。

それは呼び慣れない呼び方で――マンションの下でも呼ばれはしたが――、何だか違和感を感じるような呼び方だった。こんな風に

呼ばれた事がなかったからだろうか。私は無言で夜月に顔を向けて続きを促した。

夜月は瞳に何か哀愁のようなものを滲ませ、少し言葉を晒すのを躊躇った。数秒の沈黙を置いて、絞り出すような低い声で、ゆっくり言葉を押し出す。

「俺は、ちゃんと歩けてるのかな。《人形》でも、ちゃんとした『人間』でいられてる？」

そして私に目を向ける。

それはあまりに真っ直ぐで、そして悲しい瞳だった。時折私に自分の存在価値を問う時の、月姫のそれに酷似している。必死に何か確信を得たいと願う、あの辛そうな表情と同じ色。何故自分を受け入れたのかと問うた時と同じ。無表情の中にそれが滲んでいた。

私は夜月から視線を外し、溜め息について返す。

「何故私に訊く？ 姉や兄に訊いた方がいいんじゃないのか、そういう事は」

「いいけど、兄弟では情が入るから。嘉ねえは、絶対に思ってもいないような事は、言わないでしょ。思ったままを言う筈。それに、完全に客観的な意見が、聴きたいから」

「あまり『人間』とは言えない私の口から？」

「嘉ねえは人間だよ。ちゃんとした、『人間』だよ」

不意に、夜月の口調に感情が入った。力を込めて断言する口調には、信念に似た感情が滲み出ていた。私は少し意外に思っただけで、夜月に視線を戻す。

夜月はしっかりと確信を織り込んだ瞳を私に向け、続けた。

「だって、俺に、『護り方』を教えてくれた。『闘い方』を、教えてくれた。言葉を晒す事は、怖くないって事、教えてくれた」

決して多くはない言葉。しかし夜月が私に伝えたいと思っている全ての感情がぐっと凝縮され、言いたい言葉を背後に乗せた言葉だった。

いつもの如く反論したい事がたくさんあったが私はそれを否定す

る事はせず、本来問われていた言葉に意識を戻した。

《人形》として生きる事に定められ、それを受け入れた夜月。しかしその中でまだ戸惑いや迷いがあるのが分かった。自信を持てるように、あと一押しの後押しを求めているという事も伝わってきた。

こんな私の言葉でいいのなら、私は晒そう。私の思う言葉を。

私は口を開いた。

「あんたは立派な『人間』だよ。あんたが思うよりずっと。もう自分の足で進んでいる。言い訳も言い逃れもせずに、ありのままの現実を受け止めて。それが残酷なものでも」

ありのままの言葉を。

「自信を持ってないのも、戸惑いを覚えるのも仕方ないと思う。あんたはまだ《闇》に生き始めたばかりなんだ。今から知っていかなくてはいけない。だけど《不穏》を経験しそれを打破していく時、少しずつ自分というものを確立していける。だから焦る事はない。それにあんたには、傍で共に闘っていける兄弟がいる。あんたを思ってくれる兄や姉が。しっかり自分のあり方を常に吟味していれば、必ず自分で確かな答えを出せる」

私とは随分状況も立場も違う。しかしだからこそそう断言出来た。夜月なら、《人形》としての人格を早いうちに確固たるものとし、同時に『人間』としても確かに成長していける。あまり接した時間は長くないがそう感じた。

僅かな沈黙の後、私は口を開いた。

「あんたは少し、私の《同居人》に似ているかもしれない」

「月ねえに？」

夜月は反応し、尋ね返してきた。私は頷く。夜月は不思議そうに首を傾げた。

「月ねえでも、自分が『人間』か不安になることがあるの？」

「『自分が必要な人間なのか』、自信が持てなくなるみたいだ。彼女も時々、私に自分の存在価値を確かめる事がある。でもそれは彼女が弱いからじゃない。彼女はあんたと同じように《闇》を知らない

い時に深い《闇》を経験した。その傷痕が疼く時に、必ず彼女は私に問う。今のあんたのように」

「……………」

私の言葉に少し悲しげな表情を浮かべ、胸の辺りを掴む夜月。『昔』を少し思い出したような苦しげな表情。

「私は思うんだ、彼女もそうだけど、もうあんたは既にその答えを見つけているんじゃないかって」

私は正面に目を向けて、そう言葉を晒した。

ゆっくり、考えるように。思いと言葉を探し並べるように。

「さつきも触れたが、何より、あんたには無条件にあんたを受け入れてくれる兄弟や従兄弟がいる。それだけで十分だと思うんだ。『人間』というのはへそういうものゝなんだろう。あとはあんたがそれを認識するだけ。それを確信出来たなら、恐れるものは何もない。不安に思う事も、恐れを感じる事も、迷う事も。もう既に出来ている事じゃないか？」

足を踏み外しても、

転げ落ちた訳ではない。

暗闇に躓いても、

立ち上がれない事はない。

泥沼に墜とされても、

再び空を仰ぎ羽ばたける。

そうやって生きて行くものなんだと、私は思う。何事もなく時を刻むなど無理な事。だからもがくのだ。放棄しようとする負の感情を抑え付けながら。

『人間』であるという事を苦悩しながら。それでもその中に少しでも《光》を見つけようと模索しながら。

「そっか。……………嘉ねえが言うなら、信頼出来る。俺はちゃんとした『人間』なんだって思ってもいいんだね」

私の言葉にそう返し、夜月は薄く笑った。

「……………」

初めて見る夜月の笑顔。それは何より夜月が『人間』である事を証ししていた。誰も否定出来ない真実として。

『嘉ねえが言うなら信頼出来る』。何故夜月が私の言葉で確信を抱けるのかは分からないが、前進出来るのならそんな事は大了問題ではない。敢えて追求する事もしない。

そう。

何も煩う事はない。只前を見て、一つ一つ障害を、《不穩》をクリアしていけばいい。越えられない問題はない。どんな難問でも、その気になれば不可能はきつとないのだ。

私達はそういう、リアルな《ゲーム》を闘っている。プライドを賭け、自分の《人格》を賭け、時には生死を賭けながら。

その中で模索し、探し求めながら。

目には見えない何かを見つけようと。

「……………」

「……………」

私達の間を再び沈黙が流れた。

話している間に、たまに月姫と歩く公園の散歩コースに来ていた。結構速いペースで歩いてきたようだ。コースを変える事なく私達は黙ったままそこを歩く。何処へ向かうのか、はつきりした事は分からないが、感覚に逆らう事なく進んでいく。それは恐らく夜月も同じように感じているのだろう。並んで共に歩みを進める。

恐らく、満月や氷鳥も此処に向かっている筈だ。『この辺り』、《予感》のする方向へ。だから敢えて連絡を取る必要はない。必ず《不穩》は此処に集まる。この一帯の何処かに。

と。

どくん、と。

「……………」

「……………」

私と夜月は同時に立ち止まった。同じ感覚を感じて動きを止める。私は目だけを動かして、その元凶を探す。

心臓に直接響くような『胸騒ぎ』。まるでそれを文字通り驚掴みされているような。突き刺されているような。

「……………来る」

口の中で呟くように夜月が言った。じつとその瞳は暗がりを見つめて。

すると正面の方から、《闇》が近付いて来るのが分かった。それはゆらゆらと、そして着実に私達に向かって歩いてくる。私は睨み付けるようにそこに目をやり、夜月は身体を斜に構えた。

《仮面》。

暗闇に溶け込んでしまいそうな黒尽くめの服装。氷鳥が言った通りだ。身体の特徴が全く分からない程服（なのかただの布なのか）で覆われている。仮面も顔面や頭まですっぽり覆っている。メチャクチャ怪しい。ここまできたら変態の域だ。警察に見つかったら職質ものだ。

というより、《仮面》で来るにしても、一々仮面をする必要はあるのか？もう誰なのか分かっていうのに。これは《表》と《闇》を分断する為のものだった筈だ。意味はあるのか？そんなツッコミは心の中だけにし、私は黙ったまま奴を睨み付けていた。

「……………」

「……………」

「……………」

私達は睨み合う。長いような短いような時の中を立ち尽くして。

そして次の瞬間、奴は動き出した。

まるで飛ぶように私達に急接近し、私を庇おうとした夜月を突き飛ばす。満月と似てモヤシみたいに細い夜月は派手に転がされた。《仮面》はすぐ私に向きを変える。その手には、いつから持っていたのか、黒光りする手錠が二つ。

「……………っ」

私の左右の手首に一つずつガチャリと手錠がはめられ、それぞれもう一方は後ろにあった木の添え木に掛けられた。素早い動き。伊達に《仮面》は名乗っていないようだ。

拘束された私に《仮面》は掴みかかった。私の腕を掴む。しかし「……………なっ」

その《仮面》に飛ばされた夜月が走り込み、思い切り体当たりした。《仮面》は私の腕を掴んだまま踏ん張ったが堪えきれず、よろけて少し私達と距離を取った。

「……………」

傷口を強く掴まれ、私はぐっと痛みを堪えた。折角処置してもらったのに台無しだ。両手が拘束されているので、抑える事も出来ない。一気に体力が奪われ、力が抜けて後ろの木に身を委ねる。奴が倒れまいと腕を引っ張ったせいで、手錠が手首に食い込んでしまった。暗くてあまり見えないが、結構痛い。鬱血していなければいいけど。

「あんた、《肉弾戦》が出来ない嘉ねえみたいな人にしか攻撃出来ないの？ あんたの実力はそんなもの？ それがあんたのやり方？ 笑っちゃうね」

夜月は私と藤の間に立ち、そう口を開いた。敢えて《敵》を挑発するような口調、台詞。私からは夜月の後ろ姿しか見えないが、その口調から夜月の表情がありありと思い出せるようだった。

その声色は段々と《人形》を帯びて。

恐れは微塵もなく《闇》を纏い、真っ直ぐ藤と相對する。

「もう嘉ねえに怪我はさせない」

そして宣言。それは強い誓いのようだった。しかし私はその台詞に少し疑問を持つ。

私と同じように《肉弾戦》が出来ない（私程ではないと思うが）夜月の持つ《手段》というのは限られている。藤の場合もし藤を《心理戦》に巻き込むとすれば、まず《肉弾戦》である程度抑える必要があるのだ。

どうするつもりなのだろうか。

「……………」

その台詞に、《仮面》は頭部を覆う仮面を剥ぎ取った。藤が露わになる（だからそれ、必要なかっただろ）。

その表情は、今までにない程の憎悪。

《闇》の人格。

「忌まわしい餓鬼ね。弱いくせに偉そうな口を叩いて。そこまで言うならまずお前から潰す」

そう言うとき藤は夜月に突進した。猪突猛進とはまさにこの事だ。本当の猪の突進シーンは見た事ないけど。でも多分こんな感じなんだろう。

「……………ッ」

夜月は小走りして私から少し距離を取って、そこで藤と組み合った。走れば逃げられただろうが、敢えてそれを選んだようだ。未だ夜月の意図が読めずに私はその様子を見守っていた。

夜月は更に煽るように。

「大した事ないね。本気で走ればあんたは追いつけなかったよ」

「黙りなさい」

藤は夜月だけに全ての神経と怒りを向けて答えた。そして不意に掴み合った夜月の腕を引いた。必然的に夜月は藤の方によろける。前屈みになったところで、藤は夜月の腹部に膝を入れた。

「……………うっ」

小さく呻き声を漏らして夜月は地面に膝をついた。藤は攻撃を止めず、夜月の脇腹を蹴り飛ばして地面に倒した。そして何度も夜月の身体を踏みつける。

「……………」

そこで私はようやく夜月の意図が分かった。

「もう嘉ねえに怪我はさせない」。

そういう意味だったのだ。自分に奴の怒りの矛先を向ける事によって、私を護ろうと。満月達が来るまでの時間稼ぎを。

何故そこまでして。

そこまでして私を。

(なんでそんな事……………誰か早く……………)

私は拳を握りしめた。藤の暴力に耐える夜月にじっと目を向けて、眩暈を堪えてそれを見守る。

私は『私の為に』される行為や感情に耐えられる程強くない。

「……………っ」

藤は地面に仰向けに倒した夜月に馬乗りになり、首を絞め始めた。夜月も藤の手首に爪を立てて抵抗する。そして藤の服の袖を上げ、右腕の氷鳥が付けたあの傷口を強く握った。

「このクソ餓鬼っ！」

痛みに夜月の首から手を放し、藤は夜月に平手打ちを加えた。抵抗しようとする夜月の腕を膝で踏みつけて動けなくし、何度も左右の頬を打つ。痛そうな乾いた音が響く。

そしてひとしきり叩き終えた藤は溜め息をつき、夜月を見下ろした。夜月もキツそうにしながら藤を睨み付けている。肩で息をしているのが分かった。

藤は夜月を蝕もうとするように言葉を晒した。

「あんたは弱いよ。あんたは誰も護れない。あんたの好きな『嘉ねえ』すらね」

再び夜月を失墜させようとするように。精神を壊そうとするように。それが夜月に通用すると信じて疑わないように。

しかし夜月は目を細め、藤を蔑む最上級の声色で答えた。

「あんた、本当に頭悪いんだね」

その瞬間

「……………があっ!!」

背後から藤の側頭部に、容赦ない蹴りが入った。鞭のようにしなった脚が直撃し、その存在に気付かずに構えていなかった藤は飛ば

される。地面を転がり、藤は頭を抑えてそこにうずくまった。流石にすぐには立ち上がれないようだ。

いや、普通ならそこで失神しててもおかしくない。多分私なら失神してる。

その人物は藤を無視して夜月に手を差し伸べ、夜月はその手を取って立ち上がった。

「ありがと、マヅねえ」

「どういたしまして。遅くなってごめんね」

ニッコリ微笑み、満月は答えた。恨みを込めた渾身の一発の後の、優しさをたたえた爽やかな笑顔。このギャップは一体何なんだとツッコミを入れたくなる笑顔だった。まあ、こいつはこんな奴だけど。満月は夜月の傷の具合を確かめて私に目を向けた。挨拶代わりに細め、何とか立ち上がった藤に目を移した。

その視線には、とことん蔑む色。

「なんだか今ので、痴漢を撃退した時みたいにとってもスッキリしたんだけど。気のせいかな」

「いや、気のせいじゃないと思う。例えばまた分かり易い」

そんな台詞と共に、暗闇から氷鳥が現れた。ポケットに手を突っ込み、何かの試合を見物しているかのような表情をしている。そしてシニカルな笑みを浮かべ、藤を見下すように。

《制裁者》。飄々と大きな《闇》を纏って。

それから氷鳥は奴から視線を外し、私の方に歩いてきた。笑みを消し、くっと表情を引き締める。

「いつも遅くなって悪い」

「……………悪いと思っただけならもう少し早く来てくれ」

「そうだよな。嘉の言う通りだ」

私の返答に不意に苦笑を零して一瞬氷鳥は《制裁者》のオーラを消した。しかし次の瞬間にはそれを戻し、私を拘束する手錠を確認した。ちよっと待ってな、と自分の胸元に手を伸ばす。

氷鳥は胸で光る七強のあのバッチを外した。その針で手錠の穴

を何やらカチカチ探り、あつと言う間に手錠を外した。呆気なく手錠は私の手首から落ちる。

「……………」

こういう事も出来たらしい。そんなに針も長くなかったのに、よく出来るな、と一人感心。こいつは何かと色々出来る。《便利屋》みたいだ。

「よし、オッケ」

両手の手錠を外してもらい、ヒリヒリ痛む手首をさすって溜め息。《闇》での決戦は始まったばかりだというのに（しかも大して何もしてないのに）もう既に疲れてしまった。眩暈のする私は木の根元に座り、満月達に目をやる。

満月と藤は一定の距離を置いて睨み合っていた。両方とも動く気配を見せない。相手の出方を見ているのとも少し違う。そこには二人を隔てる感情が厚く壁を張っているようだった。ただ殺気と敵意が間で組み合っている。近付く事さえ嫌だと言わんばかりだ。

と、その時。

「くだらねえんだよ」

聞いた事のある、そんな台詞が聞こえて私は顔を上げた。藤と満月達も、そして氷鳥もそこに目を向ける。

闇の向こう側から、深い《闇》を纏った、《断罪者》《欺きを欺く螺旋》深夜満夜が現れた。外ハネの髪、鋭い視線。だらりと垂れた腕の先には、コーラのペットボトル。それすら凶器に見える程、満夜のオーラは殺気に満ち満ちている。

「……………」

そしてその後ろから、夜明の姿も見えた。二人で来たようだ。満月のそれに酷似した目はじっと、ただ憎しみに藤を睨み付けている。恐らく藤と相對するのは初めてだろうが、藤を睨み付ける夜明はまるで《闇》を取り戻したのかと思う程だ。

(……………あ)

満夜を見て不意に思い出した。

そう言えば満夜は二ヶ月程前の《不穏》の時に右腕に大怪我を負った。それは完全に治ったのだろうか。

(……………そう言えば氷鳥も確か怪我したよな)

その同じ時に氷鳥も結構な傷を負わされた事を思い出した。しかし氷鳥は普段から長袖のシャツを着ているので、どんな具合かまでは確かめられなかった。でもそれは今は重要な事じゃない。

「恥ずかしいと思わない？」

不意に藤が言葉を発した。

自分を取り囲むように相對する私達一人一人に、ギラギラと殺意に満ちた目を向けて。

「こうやって弱者は群れるのよね。一人じゃ私に勝利出来ないから《同盟》を組むんでしょ。馬鹿みたい。あんた達、くだらなさすぎるわ。あんた達、そんなもののなの？」

私達を揺さぶるように。私達のやり方の根本に疑念を挟み、混乱させるようにする意図が見え隠れする言葉。

私達は黙っていた。こいつの言葉に動揺した訳でも、揺さぶられた訳でもない。その通りだと同意した訳でも、まして説得させられた訳でもない。

只、馬鹿にするように。

(今更《心理戦》を仕掛けても無駄なんだよ)

私は目を細めた。

自分が分が悪いのを理解したのか、あるいは私と満月《傍観者》との《不穏》に入って来るなど言いたいのか。いずれにしてもこれは無意味で無駄な言葉だ。もう後戻りは出来ないし、後戻りしようとも思わない。やり方も変えない。変える必要などない。

「群れる事の出来る仲間がいなかったからって僻^{ひが}むなよ」

沈黙を破ってそう言ったのは夜月だった。

今までと比にならないくらい、の軽蔑を持って言葉を晒す。藤を蔑む視線で、まるで今までずっとそうして来たかのように。

『言の葉』を《破壊》の為に用いて来たのかと思う程に、それは流れ出る。

「あんたが孤独なのは、あんたに『絆』を求める強さがないからだよ。独りでは生きられない事を受け入れられない、現実と事実を否定して逃げている奴が、知った風な、偉そうな事言うなよ。否定出来ない事実と真実を退けて、それで『強い』つもり？くだらなすぎて笑えない。自分の持論が俺達をどうにか出来るとでも思っている？そんなに俺達が弱いとでも？群れなきゃ本当にあんたに勝利出来ないと思ってるの？ナメんな」

つい最近まで『言葉』を晒す事を恐れていた夜月が、そんな過去など微塵も感じさせない程に。《人形》、しかも《人格》がほぼ形成された《人形》として、かつて自分を失墜させた人物と対峙する。その《敵》を次は墜としてしまおうと。

成る程、夜月は『言葉』を武器としたのか。私は納得していた。意識的か、無意識か。いずれにせよ私と同じように、《心理戦》向けのようだ。夜月は《闇》で闘う『武器』を見つけた。

『言の葉』という武器を。

「こんなに《敵》が集まったからって心配しないでよ。あんたと対決するのはあたしだけなんだから」

夜月が口を閉じたのを見計らい、満月が言った。

「元々、あたし達《傍観者》とあんたの《不穏》だもの。嘉の《破壊》をするまでじゃないから、あたしがあんたを《破壊》する。嘉に《破壊》させるような、そんなだけの価値もあんたには無いよ」

ほら、おいでよ。満月は藤を嘲笑うように手の平を上に向けて指を『来いよ』と二度曲げた。夜月は後ろ向きに下がり、見物する態

勢に入った。

私達が見守る中、満月と藤は同時に動き出した。

文字通りの《肉弾戦》。藤も武器を持っていないので、身体を全て使って互いに攻撃し合う。

藤の服(?)はゆったりとしていて、身体をすっぽり隠してしまえるような感じだ。故に満月は幾分攻撃しにくそうに見える。満月の攻撃が本当に藤に届いているかどうかは分からない。しかも満月は《肉弾戦》が出来はするが、向いているという訳ではない。見ている限りでも、だいぶ圧されているように見える。

脚を振り上げ、腕を繰り出し。藤と満月はノンストップで動き続ける。

「……………」

と、隣でそれを見守る氷鳥がぐつと拳を握り締めている事に気付いた。満月と藤の闘いを見つめる横顔は、そこにたくさんの感情を滲ませていた。

もどかしさや怒り、自分の手で《破壊》したいという強い衝動。しかし本能に支配されそうになる感情を理性に繋ぎ止めるように、無表情を貫く。

少し離れた所に立つ夜月、更に向こうで闘いを見ている満夜と夜明も、同じような表情をしていた。思いは恐らく氷鳥と同じだ。

その心は《復讐》に満たされている。早く藤の《終焉》を見たいと。

「はあっ!」

藤の怒号の声で、私は視線と意識を闘う二人に戻した。

先に力を失ったのは満月だった。もつれもつれて自分の喉に伸びてきた藤の手を払えず、そのまま地面に倒される。頭を打つのはなんとか避けられたが、さっき夜月がされていたと同じような体勢で首を絞められる。

「……………」

満月も必死に抵抗し、腕を伸ばして藤の肩の辺りに爪を立てる。

藤の喉に手を伸ばしたり腕を叩いたりして抵抗するが、それは無駄に終わった。藤はそれを全て無視して全力で満月の首を絞め続ける。今までの恨みを全て込めるように。

私達は動かない。

そして。

「……………」

ぱた、と。

満月の腕が地面に落ちた。そのまま動かなくなる。藤はそこで満月の喉から手を離した。

「……………」

しかし私達はまだ動かない。黙したままじっとその様を見ている。満月から視線を上げ、藤は怪訝の表情で私達を見回した。何故満月がやられたのに動かないのか分からないというように。不可解に表情が歪む。

だから甘いと言っただろ。

心の中で呟いたその瞬間だった。

「なーんちゃって」

「…………ぐあっ！」

満月はそう言葉を発し、藤のみぞおちに思い切り鉄拳を喰らわせた。不意打ちに反応出来ず一瞬動きが止まった藤を突き放して退かせ、ゆっくり起き上がる。その顔には冷徹な笑み。

「本当に騙されちゃったよ、馬鹿だねー。ちゃんと呼吸止まったか確認しなよ。『死』を確認するのは基本中の基本だよ。あんた本当に《不穩》の意味分かってる？本気であたしを殺せると思ってるの？だから言っただでしょ？〈甘いって〉」

喉をさすりながら言う。死には至らなかったもののやはりキツかったようだ、すぐには立ち上がる事は出来ないでいる。そりゃそうだ。あんな危ないギリギリの線でやっていたら。

（私に何だかんだ言う割には自分も無茶してんじゃねえかよ）

心の中で呟く。まあ、今回は兄弟が絡んでいるからしょうがないと言えましょうがないけど。

満月は本当に『本気』だ。

藤は腹部を押さえながらゆらりと立ち上がり、唸るように口を開いた。

「《演技》しやがって……………」

「これが初めてじゃないけどね。それはあんたの『得意分野』でしょ。あんたがあたしの《演技》に騙されるの、これで二回目だよ。自分は『演技』するのに相手のを見抜くのは出来ないんだ。笑えちゃう」

飄々と返す満月。冷淡な笑みはそのまま。しかしその心は如何なる笑みも浮かべていない。

最大の軽蔑と侮蔑で溢れている。

「五月蠅いわ」

藤は呟き、動き出した。再び満月に向かっていく。対する満月はまだ地面に座ったまま立ち上がれない。否、立ち上がらない。

それは、既に『動き始めた』人物がいたからだ。

「……………」

その時、藤がガクンと脚の力を失ったように膝をついた。藤の襟を後ろから捕まえる人物が膝の裏に蹴りを入れ、藤の歩みを阻んだのだ。

「お前は《断罪》にするには足りない。《欺く》必要もない。しかし《復讐》するに足る」

《断罪者》、満夜が藤を凍えた目で見下ろしていた。いつ藤の背後についたのか、その気配すら消して藤を拘束する。藤はそれに全く気付いていなかったようだ。地面に膝をついた状態で後ろから服を掴まれ、その威圧感に動けないでいる。

怒りと、隠そうとする怯えの滲む声色で藤は満月に言葉を投げる。

「私の相手はお前だけがすると言ったじゃない」

「は？嘘に決まってんじゃない」

しれっと当然のように言う満月。

「あんたに《復讐》したいと思ってるのは、満夜兄ちゃんも夜明も氷鳥も夜月も同じだもの。そんなオイシイところ、あたしだけ独り占めする訳ないじゃん。馬鹿じゃない？ちよっと考えたら分かるでしょ。当たり前的事訊かないでよ」

馬鹿にするような満月の言葉に藤は唇を噛み締め、睨み付けた。対する満月は、涼しげな無表情でそれに返す。

「……………」

と、黙って二人の会話を聞いていた満夜が動き出した。

満夜は電光石火の早技で、藤の右腕、傷のある辺りをわざと掴み、後ろに捻り上げた。そして腕を掴んだまま右の二の腕に、躊躇いなく足を振り下ろした。

ごき、と。

「ああああ！」

骨の折れる音に重なるように藤の叫び声が響いた。棄てるように放されただらりと垂れる腕は肘から先が有り得ない方向に曲がっていた。

満夜は容赦なく藤を蹴り飛ばし（まるで興味がなくなったというような扱いだ）、夜明に目を向けた。

「夜明はどうする」

短い問い。《復讐》を問う言葉。

対する夜明は何か汚いものを見ているような目を藤に向けていた。そしてゆっくり首を横に振る。

「『そういう事』は満夜兄ちゃん達に任せるよ。触るのもヤダ。本当は同じ空気吸いたくない」

ばい菌・病原菌扱いだった。多分藤を近付けたら触れないようにと避け逃げるだろう。それくらいの嫌悪感が滲んだ口調だった。確

かに、害悪を撒き散らしているという点ではばい菌や病原菌に負けず劣らずかもしれない。

「細菌扱いだな」

氷鳥はうつすら笑って言った。夜明の表現がツボに入ってしまったようだ。小さく喉を鳴らして笑っている。

「……………氷鳥」

満夜が氷鳥に目を向けた。その視線は夜明に投げかけたものと同じ問いを含んでいた。

氷鳥はすっと笑みを消し短く返した。

「俺は《最期》を見ればそれでいい。《後始末》くらいで」

自分が直接手を下すまでもないというように藤を見下す。煮えたぎるような先程までの《復讐》の色は静まっていた。今まで観察して、それをする程ではないと思ったのかもしれない。

私は満夜に踏みつけられている藤に目を向けた。

藤がこうして《終焉》へと向かっているのは、数的に不利だからではない。実力があれば数的不利な状況でも勝利する事が出来るのだ。私の長男兄貴や次男、三男や長女のように。結論から言えば、役不足で力不足だったというだけの話だ。

《敗北》。

それは私や満月という《傍観者》に勝利するだけの力量が無いにも関わらず、《不穩》をふっかけた愚かさの代償。

《不穩》を引き寄せ、それを支配していく私達の『性質』に負けた、ただそれだけの話。最初から分かっていたものだ。

あまりにも軽率。

そして傲慢。

それ故の結末。

「なあ、《仮面》」

私は無意識に口を開いていた。藤は地面に伏せながらもピクリと反応する。

『言の葉』は流れるように。

せき止められない奔流のように。
私の意思とは関係なく。

「《仮面》を剥がされた今、お前のプライドはどこにあるんだ？」

《破壊》とまではいかなくても、完璧に藤に《作用》する『言の葉』が、まるで衝動のように私の口から突いて出た。意図して出した訳ではない、自然と零れ落ちた『言の葉』。口を開くつもりはなかったのに。そう思った時には既に遅く、それは藤に《作用》し始めていた。

そしてその次の瞬間

「……………っ」

突然藤が満夜の足をのけて立ち上がり、走り出した。折れた腕を庇いながら全速力で逃げるように走っていく。

「……………絶対逃がさない」

満月は《傍観者》の凍てついた光を再び瞳に呼び込み、その後を追って走り出した。満夜、夜明もそれに続く。

「嘉、後から来るから待っておいでな」

地面に座る私にそう声をかけ、氷鳥も後を追った。足音が遠ざかっていく。

「……………」

と、独りだけ残り夜月が迷うように私を見ていた。行きたいけど私を置いていくのも出来ない。そういう表情。私を氣遣っているのが分かった。

こんな時にも、私を氣遣うのか。そんな必要などないのに。
私はそんな夜月に口を開いた。

「私に構わなくていい。奴の《最期》をお前も見たいんだろ」

「……………」

「楽になったら向かうから」

「……………分かった」

ようやく小さく頷き、夜月は踵を返して全速力で走って行った。
あつと言う間にその姿は小さくなる。そう言えば、夜月は足がメチ
ャクチャ速かったんだっけ。それならすぐに満月達にも追いつ
けるだろう。

「……………」

眩暈に耐えながら私は深く溜め息をついて目を閉じた。

まだ《終焉》は先だ。それに直接関われなくても構わない。その
《残骸》を見るだけでいい。だからもう少し楽になったら私もそこ
へ向かおう。

《終焉》の場所へと。

【終焉2（2）】

＊ ＊ ＊

夜月は満月達を探しながら走っていた。暫く行くと拓けた場所に出て、見慣れた人影を見つけ、そこに走り寄る。

「此処だよ。上に向かった」

他の建物の群れとは離れて一つ孤立して建つ建物の外階段の上を指差し、夜月を待っていた満月が言った。夜月は目を上げてそれを見上げる。

まるで廃墟のような建物。薄暗い中怪しく屋上まで続いている鉄筋の階段。上へと向かう四人分の足音が金属音として下まで響いてくる。夜月と満月もすぐに上がり始めた。

五階程の高さはあるだろうか。思ったより階段は長く上に向かっている。嘉は来なくて良かったかも、なんて思いつつ満月は夜月の後に続いていた。もしこれが嘉だったら階段を見ただけで「後は任せた」と下で待っているだろう。もしかしたらやる気を全く失って《終焉》すら放棄して帰ってしまうかもしれない。

「嘉ねえだったら絶対此処来ないね」

同じような事を考えていたようだ、夜月が前を見つめたままそう言った。《闇》は忘れないが、少しその思考に小休止を入れたような冗談を言う口調。その表情は笑みさえ浮かべているかもしれない。「本当だね。多分そうだと思う」

その口調に安堵のようなものを感じ、それだけ答えて満月は口を閉じた。

（……………はあ、結構キツイ）

軽い足取りで上を目指す夜月に置いていかれないようにしながら満月は懸命に足を動かし続けた。段々息が上がっていくのを無視して同じ歩調を保つ。体力ではもう夜月になかなわらないな、と苦笑い。

「……。……………」

そしてようやく屋上に到着した。そこに入れないようにドアはロックされていたようだが、無残に破壊されていた。やはり屋上に向かったようだ。夜月と満月はそれをくぐって中へ侵入する。

既に到着していた満夜、夜明、氷鳥の背中が見える。三人はじつとその場所に横に並んで立ち、真っ直ぐ一点に目を向けているようだ。二人はそこへ向かう。

「……………」

「……………」

そこにあつた光景^{もの}を見て、二人は三人に並ぶように立ち止まった。藤が屋上の縁にこちらを向いて立っていた。柵が一部壊れているそこに身を置き、少し後ろに動けば下に真っ逆様という場所に立っている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

藤を見つめる五人は何も言わない。只黙って藤を見ていた。藤が何をするつもりなのかは一目瞭然だ。それを敢えて訊くような事はないし、誰も口を開こうと思わなかった。

《復讐》を誓う五人にとって、藤がどんな形で《最期》を迎えるのかという事はあまり重要な事ではなかった。望んでいるのは、藤を《最期》に追い込む事。藤を《終焉》へと誘^{いざな}う事、それだけだ。だから藤を止める事も、藤の行為を煽るような事もしない。

そして藤はギラギラと理性を失った瞳で五人を睨み付けて。

「あんた達に殺されるよりは自分で死ぬ方がマシよ」

そう宣言した。それは単なる脅しではなく本気だという事を、その正気を失ったような表情が語っている。

そんな藤に向けられたのは、『くだらない』という五人の感情だ

った。『それがどうした』と満夜のオーラは言っているし、夜月に
いたっては『だから何?』という感じた。

そんな藤を揺さぶろうと夜月が口を開く。引き留めるのでも薦め
るのでもなく。

《破壊》の作用が含まれている『言の葉』を――本人は無意識だ――
。

「ふうん。それで自分のプライドを守るつもり? そうすれば護れる
とでも思ってるの? ほんとへ馬鹿みたい」

特にこれといった感情の含まれない声色で、《不穏》の始めに藤
が夜月達のやり方に異議を挟んだ言葉をそのまま返す。只藤を軽蔑
し見下して。

それに続くように満夜が呟くように言う。

「最初から殺すつもりはないが。何回も言っているが、そんな甘い
事しねえ。……………くだらねえんだよ」

藤を睨み付けるその瞳はそれだけで藤を呪い殺してしまいそうな
程だ。

そして夜明もそれに続くように不機嫌な口調で言う。

「いずれにしても『除菌』出来るからあたしはどっちでもいいけど
ね」

「夜明、さっきから何気にあいつを細菌扱いだな」

「実際にはそれ以下だよ。生き物以下。ゴミ以下」

氷鳥のツツコミに、更に藤を卑下する言葉を返す夜明。もう言い
たい放題だ。そのオーラは《闇》を纏っているようにすら見える。

溜め息をつき、満月も口を開いた。

「自分で死ぬも殺されるも、結局結果は同じじゃん。追い詰められ
て死ぬんだからさ。どう違うのかあたしにはよく分からないだけ
ど。それか、《破壊》よりはマシ? 『生きる屍』よりはその方が楽
なのかな。……………だったらそんな優しい《最期》はあんたには相
応しくない。そんな『楽』なのは赦さないよ」

言いそして更に深い《闇》を纏って。

「……………」

その満月の言葉が言い終わるか終わらないかという時、夜月が藤に対して歩き出した。それを合図にするように他の四人も足を踏み出す。一歩一歩近付いていく。
その時だった。

藤が、トン、と宙に浮いた。

スローモーションのように、そして一瞬にして五人の前からその姿が消える。五人はそのままゆっくり縁に近付き、下を見る。

薄暗いせいで、遙か下に墜ちた藤の姿は小さな塊のようにしか見えない。殆どその様子を窺い知る事は出来ない。満夜は一つ溜め息をついた。

「行くか」

それに頷き、五人は階段に向かい、早足に下りる。金属音を伴い、一気に下りきった。

そのまま藤が身を投げた辺りに向かう。建物の壁沿いを向こう側に歩いていくと、草むらに黒い物体が見えた。夜月が先頭に立ってそれに近付いていく。

「なんだ……………生きてんじゃん」

まるでどうでもいいというような口調でそれを見下ろし、夜月は《人形》は言った。

＊ ＊ ＊

「……………」

ようやく気分が幾分マシになった私は夜月達が走って行った方向に歩いていった。ジンジンと痛む右腕を庇いながらゆっくり煉瓦が敷き詰められた上を進む。何事もなかったかのような静けさが不気味だ。否、普段通る時はこんな違和感を感じない。この感覚は恐らく、今私が《不穩》のただ中にいるからだろう。

もう《終焉》は迎えられただろうか。そんな事を考えながら私は歩いていった。何をもって夜月達がこの《不穩》の《終焉》とみなすのか、それによっても答えはだいぶ変わってくるけれど。

只、私は夜月達の『勝利』を確信していた。この《不穩》が始まった時からそうだったが、それは見えない将来あきの事をまるで見ているように、確実なものになっていた。手に取るように、既にそれを迎えているように。

と。

(……………いた)

夜月達を見つけた。

あまり遠くない、木々が途切れた、少し拓けたようになっていた場所。少し高い建物のすぐ横で、何かを囲むようにして五人は立っていた。私はそこに向かう。

「……………お、嘉」

私に気付いて氷鳥が振り返った。他のみんなも振り返り向き、意味ありげな表情で私を見つめる。この表情を見る限り、まだ完全な《終焉》は迎えていなさそうだ。

五人の視線を受け、私は彼らを取り囲んでいる『それ』を見ようと近付いた。

「……………」

そこには、酷い姿になった藤が横たわっていた。虫の息、とまではいかない。しかし腕や脚が有り得ない方向に曲

がっている。頭や全身のあちこちから出血もしているようだ。血にまみれた顔は苦痛に歪み、悶え苦しむ嗚咽のように閉まらない唇から声が漏れている。この様子だと、もしかしたら内臓もどうにかなっているかもしれない。

「どうしたんだ、これ」

「向こうから飛んだんだ」

私の問いに夜月が答えた。建物の屋上を指差している。私はそれを見上げる。

その建物は、結構な高さがあった。五、六階はあるだろうか。屋上から飛び下りて自殺を図ったとしたら、九十九パーセント以上の確率で成功するだろうという高さだ。

しかしその僅かに残された『生存』という確率の方に結果が転がったようだ。

「……………この高さから飛び下りて死ななかったのか」

思わず呟いた。

『死すら赦さない』。そういう感じだ。それは偶然か、あるいは。

「ね、嘉ねえ」

夜月は藤に硝子の目を向けて呟くように私を呼んだ。私は夜月に目を向けて続きを促した。

夜月は《人形》の声色で。

「嘉ねえの《言の葉》って、本当に《作用》がハンパないんだね。

あのたった一言で奴にあんな行動を取らせるんだもの」

そう言って私に目を向ける。

「こうしてこいつが死ねずじまいだって事も、多分その《作用》の一つなんだね」

それはまるで、昔からずっと《闇》にいたかのようなオーラさえ放って。そして言葉を晒す。

私は目を細め、口を開いた。

「邪魔、してしまったか？」

自分達の《復讐》に私がいらぬ事をしてしまったか？と。

その私の問いに、夜月は首を横に振った。

「これは嘉ねえの《不穩》でもあるんだもん。そうでしょ？俺達だけやるだけやって満足って、それは不公平だよ。嘉ねえが、俺達が《復讐》出来るようにしてくれたようなものだから」

「そうか」

返して私は再び藤に目を向けた。

私が『言の葉』を晒した事で夜月達の邪魔をした訳ではなかったのなら、それは安心だった。衝動的な『言の葉』だったとはいえ口を開いた事を私は柄になく後悔していたのだ。夜月達の《復讐》に割り込みたくはないと思っていたからだ。

と、黙っていた水鳥が私に目を向けた。それは何かを尋ねる表情。そして。

「嘉……………これも全て計算のうちなのか？」

私の『言の葉』がもたらした《作用》なのか、と。

私は首を傾げた。

「……………計算、というか。出た言葉がたまたまこういう《作用》を残すものになっただけじゃないかな」

曖昧に言葉を濁す。

理由は一つ。それは私にも分からないからだ。というより、所謂『結果論』だから。

私には《作用》の程度を調整する事が出来るが、今回の場合それは突発的なもので、その『重さ』までは考えていなかった。考える時間もなくて口について出たのがあの言の葉だった。ただその中でも《破壊》には至らないようには抑制を効かせたつもりだ。

敢えていうなら『計算のうちではない』というのが答えなのかもしれない。こいつがこういう事になったのは私の『言の葉』だけじゃなくて、その他たくさんの要素が絡んでいた筈だ。私のものだけじゃないものが。だから全くの『予定通り』ではない。

と、話題を変えるように満月がパチンと手を叩いて口を開いた。

「取り敢えず、どうする？救急車呼びます？それとも放置します？」

その問いに、眉を顰めて満夜は満月を見た。

「誰かが見つけたら呼ぶだろ。俺達が呼ぶ必要はない」

「放置プレイですね。………だけど、本当の意味での《破壊》はこの先がいいと思うんだよね。まだまだ《破壊》し足りない。これじゃ中途半端で生半可」

悶える藤を睨み付けて言い、満月は不意に私に目を向けた。うつすらと《傍観者》の笑みを浮かべて。

「ね、最終的な《破壊》は夜月に任せない？ 嘉」

それは提案だった。今すぐではない《終焉》を夜月に託そうという言葉。

その言葉に夜月は驚いたように満月を見つめた。そして少し不安の滲む瞳を私に向ける。

私はその瞳を真っ直ぐ見返し、口を開いた。

しっかりと自分の足を地に付けて立っている《人形》に。

《闇》を生き始めた《人形》に。

「あんたにも《破壊》は可能だ。《人形》として、『言の葉』で奴を《破壊》できる。もう既にあんたはそれを使っている。その方法を、あんたの《人形》としての本能は知っている」

「……………」

「試してみるといい。あんたが奴を完全に失墜させるんだ」

確信を込めて。夜月になら出来ると。それを認識出来るように、じつと《闇》の瞳を見つめて。

夜月はじつと私を見つめ返していた。私の言葉を考えるように、その瞳はたくさんの感情を溢れさせている。

そして。

「ありがとう、嘉ねえ」

夜月の口から出たのは、感謝の言葉だった。と同時に、決意表明の込められたものだった。

さあ。

いよいよ、いよいよ本当の《終焉》が待っている。

【終焉2（3）】

＊ ＊ ＊

薄暗い病院の夜の廊下に、無音で歩く一つの人影。

休業している訳でも廃業した訳でもないのに、ナースも当直医もいない院内。それどころか誰の気配もしない。通常ではあり得ないことが満ちる空間。

まるで《闇》が病院全体を支配するような不気味さ。《終焉》の為に状況が用意されたのかと思う程の『暗闇』。その中、夜月は歩みを進めていた。

夜月が向かう場所は一つ。

ナースセンターの隣にあるICU。

「……………」

目的の部屋のドアを開け、夜月は病室へ忍び込むようにすっと入った。

そのベッドの上に横たわるのは、藤。包帯やらギブスやらで包まれ、酸素マスクを付けられ、その身体は数々の管に繋がれていた。見るに無惨な姿。響くのは、無機質な機械音。

藤の死んだ魚のような目は、ただの硝子玉のように天井に向けられている。生きているのか死んでいるのか、その狭間のような状態。精神状態が普通じゃない事ははっきりしていた。もうそれは崩れかかっている。

あの後誰かに発見されたらしく、藤は青柳せいりゅうではないこの病院に搬送され治療を受けた。氷鳥からその情報を教えてもらった夜月は、その藤の元へ向かったのだ。全てを終わらせる為に。

完全に終わらせる為に。

「……………」

夜月は無音のままベッドの横に近付いた。そこで初めて夜月の存

在に気づき、藤は目だけ動かして夜月を瞳に映した。僅かに見開かれた目には恐怖の色。動かない身体を動かし逃げようとするように肩を動かす。しかし骨も内臓も全身あらゆる場所にダメージを受けている為、殆どそれは意味をなさなかった。

そんな藤を蔑みを持って見下し、夜月は口を開いた。

「無惨だね。無様」

嘲笑うように。

最早逃げる事も闘う事も敵わない藤を更にゆっくり追い込み、戻れなくなるまでに雁字搦めにしていくように。容赦なく攻める態勢を整えて。

さあ。

続きを始めようか。

《闇》を深く纏い、《人形》は言葉を晒す。

「あんたが抵抗できない状態だからって俺は容赦しないよ。苦情も受け付けない。覚悟してね。あんただって卑怯な手を使って来たんだから、文句はないよね。元々フェアな闘いじゃないんだから。……俺はあんたを《破壊》しに来た」

そう前置きして。

殆ど間を置かずに。

「『あの』時、あんたが何がしたかったのか、俺をどうしたかったのか、俺には未だに分からないんだよね。分かりたくもないし理解しようとも思わないけど。考えるだけ無駄だし。だけどさ、俺は知ってるよ。へあんたがやって来た事は全て無駄だった、無意味で無価値な事だった」って事」

「……………」

「ちよつと雑で大ざっぱ過ぎて意味分らない？ ああ、今の状態じゃ、考えるのは無理か。もうだいぶ参っちゃっているみたいだしね、精神的にも」

馬鹿にするように言って夜月は一旦口を閉じた。

最早《心理戦》すら戦えない藤の頭の中が、思考が追い付かずに

どんどん混乱していくのを確かめながら。

自分が発した『言の葉』の《作用》を確かめながら。

「一言で言えば、俺はあんたの影響に《束縛》されないって事だよ。今まであんたに失墜させられたかのように見える人だってそう。誰一人、本当の意味で失墜なんかさせられてない。『破壊』なんかさせられてない。へあんたの攻撃は全然効いていない」

「……………」

口をパクパクと動かして言葉を発しようとする藤だが、声は出なかった。『そんな筈はない、そんなことは有り得ない』という風に唇は動く。懸命に夜月の言葉を否定しようとする。

そんな藤の感情を踏みにじるように夜月は続けた。

「今更、碎かれたプライドにしがみついたって遅いんだよ。もうそれに何の価値も無いんだから。証拠だってあるよ。氷鳥にいが《情報屋》で《侵略》^{クラッカー}の逆誓悟に聞いてくれた。あんたの今までの『ターゲッ』の情報^{ターゲット}をね。勿論知ってるよね？ 《侵略》は。『情報』によるとみんな、ちゃんと『人間』として生きてる」

「……………」

「^{たまな}珠那ゆゆ、^{すもも あんべにいろ ひいろ}李行、^{あまな}紅色緋色、その他数十人。覚えてるでしょ。

あんたが《表》で『失墜させた』って言ってる人達」

「……………」

藤の顔色が変わった。さっと、血の気が引いたように。自分が『攻撃』していた人物の名を夜月が知っているという事に驚愕しているようだった。それは夜月の言葉の信憑性を裏付けるものだったからだ。

それは否定しようのない事実として藤に突き付けられる。

「面倒だから敢えて三人しか挙げないけど。珠那ゆゆは今アメリカの某有名大学に通ってて、歩けなくされた《後遺症》をものともせずに生きてる。成績も首席らしいよ。将来はそのまま大学院に行くんだってさ。

李行はあんたに片腕を不自由にされた後、音大に進んで、今指揮者

を目指してる。将来有望なんだとか。

紅色緋色は、片耳まだ聞こえないけど、ちゃんと真っ直ぐ歩いてる。近々復学する予定らしいよ。モデルの仕事も始めるみたいだし」

「……………」

「《闇》で攻撃された人は、殺されたから命は終えたけど、それは本当の勝利とは言えない。殺されたその人達の意志を継いでいる人がいるから。それに、あんたは知らないかもしれないけど、死んでない人だっているんだよ。《黒》の華々華々（はなばな かか）とか、《毒牙》の煌否狩きつめき ひがりとか。誰一人としてあんたに負けた訳じゃない。あんたが勝ったと思ひ込んでいただけ」

本当に誰一人として藤に負けなかったかというところ、それは誤りになる。しかし『誰一人』という誇張法を、今の藤に否定する力はない。

淡々と紡がれる『言の葉』。

それは段々と藤を蝕んでいく。深く深いところまで。奥の奥まで。

「これで《破壊》したつもり？ 《失墜》させたとしても？ 全然駄目じゃない。《闇》も《表》も中途半端で生半可。〈甘いんだよ〉」

「……………」

「だって、あんた脆いもん。俺は徹底的に壊された、もう壊れようのないくらい砕かれた《人形》だから。だからあんたみたいに、中途半端な奴が、俺を壊そうなんて無理なんだ。まして、その《人形》に命が吹き込まれたなら尚更ね」

「……………」

「気に入らないから壊す、別にいいんじゃない。あんたが何を動機に何をしようと俺には関係ない事だし。好きにどうぞ、勝手にやって？ って感じだし。だけどさ、そんなに強くないのに自由人気取ってさ、何になるの？ 虚勢張ったって、中身空っぽじゃ意味無いじゃん。上手くやってきたつもりなんだろうけど、結果が全て語ってる。あんたが護ろうとしたものの、結局護れなかっただろ。プライドも生き様も、『人格』さえね」

「……………」

「あんたにとって俺は『悪』で、俺にとってあんたは『悪』。だからどっちが勝利したって同じなんだよ。そうじゃない？《闇》でも《表》でもそんなものだろ。あんた言ってたよね、この《世界》は『弱肉強食』だってさ。弱い者は生き残れないんだよね」
ピシピシ、と。

藤の精神が、まるで氷にひびが入る時の音のようなものを伴い。硝子にヒビが入る時のようなそんな音が聞こえるかと思う程に藤の精神は確実に砕けていく。

夜月は息を吐き、口を開いた。

「へあんたのプライドと生き様なんて、その程度のもだったんだよ」

その瞬間

藤の精神が粉々に散った。

感情や理性を全く失った藤の瞳。それはまるで《人形》のようにただの硝子玉と化していた。

『生きる屍』とは少し違う。それはまるで『人形』。命のない造り物。まるで修復不可能なアンドロイド。

「……………ふう」

深い溜め息をついて夜月は藤から視線を外した。

その時。

「……………」

音もなく。

深い《闇》を纏った黒いスーツに身を包んだ男達が、藤のベッドを取り囲んだ。突然そこに現れたように、しかしずっとそこに居たように。夜月は只彼らを見回した。その表情に驚きや恐れはない。

その中で極めて強力な重圧感を放っている男が前に出、夜月と相対するように立った。

じっと見つめてくる漆黒の瞳は鋭い。スーツの胸の辺りには、夜月の見たことのないバッチが怪しく光っている。

男は口を開いた。

「《地獄の案内人》、なくすも 凧守最団。なくすも 凧守最忠実だ」

「……………氷鳥にいが言ってた人？」

「ああ」

夜月の問いに、短い答え。高くも低くもない、しかし重圧感のある声。夜月は忠実と名乗った男を見上げていた。

此処に来る前、氷鳥が《後始末》を《案内人》に任せようと提案していた。《破壊》後は放置しても構わないが、《案内人》に処理させることが一番面倒が少ないと。夜月はそれを承諾していた。氷鳥が既に《依頼》していたようだ。

忠実は夜月から視線を外し、藤に目を向けた。品定めするように、壊れた藤を見る。

「《仮面》ね……………」

くだらないというように呟き、忠実は他の男達に目をやった。すると男達は藤を取り囲み、繋がれたコードやらを引きちぎるように外した。骨折や内臓の損傷、縫合された傷などは全く無視するように、荒く藤を黒い大きな布にくるんだ。そして何か荷物を担ぐようにして病室を出て行く。あまりの早技に、夜月は少し驚いてその後ろ姿を見つめていた。

「……………『奈落』、だっけ」

独り残っていた忠実に夜月は小さな問いを投げた。忠実は頷いて夜月に目を向ける。

「『奈落』に《案内》する」
『奈落』。

それは、刑務所でも鑑別所でもなく、少年院などとも違う、《闇》の極秘収容施設だ。《闇》の危険極まりない人物や、どうにもならない人間を収容する場所。そして風守最団はそこを管理する一団。氷鳥がその長男・忠実と知り合いなのだ。

忠実は目を細め、夜月に言った。

「《人形》、か。《闇》に入ったばかりにしては《人格》がしっかりしているな。《傍観者》に習ったのか、《破壊》は」

「……………」

夜月はコクリと頷いた。

そうか、と忠実は再び目を細めた。

「《傍観者》の影響力というのは強いんだな。《闇》が集まる訳だ。……………お前の力も馬鹿に出来ないな」

行こうか、と忠実は夜月に病室の外に出ようと促した。夜月は頷いて忠実の後に続いて病室をあとにした。初めて会うのに、以前からの知り合いのような距離。その不思議な感覚に夜月は密かに首を傾げた。

満月や氷鳥、《闇》に居る人達はみんなこの感覚を知っているのだろうかと考えながら。

「夜月」

と、廊下に満月と氷鳥がいた。出て来た夜月を迎え、満月は夜月に近付く。

「完了？」

短い問い。全てを凝縮した問い。

夜月は小さく頷いた。他に言葉は要らない。それだけで良かった。「よくやった」

氷鳥も夜月に歩み寄って、頭を撫でた。くしゃつと髪を撫でる。

夜月は少し照れたような笑みを零した。

氷鳥はその様子を眺めていた忠実に目を向けた。そしてクツと唇を横に引く。

「じゃあ《案内》、頼んだ」

「……………」

忠実は軽く目を細め、氷鳥の言葉に頷いた。そしてゆっくり闇の向こうへ消えて行った。

「……………本当に終わったんだね」

藤との鬨いに『決着』がついたんだね、と。

ポツリと夜月が呟いた。溢れ返りそんな感情を懸命にコントロールしている声色だった。

満月は微笑んで確信を込めて答えた。

「終わったよ。夜月が終わらせたんだけ」

「……………」

夜月は目を上げ、満月を見つめた。溢れる程の入り乱れる感情を抱えた瞳は揺れている。

「……………」

無言で満月は頷いた。

終わったんだよ。

【終の始まり】

「藤紅藤さんは懲戒免職になった」

《終焉》を迎えた翌日のホームルーム、担任が連絡事項として短くそう発表した。

担任の話によると、昨日の放課後に審査会が開かれ、そのまま藤の処分が決定したようだ。こんなに早く処分が決定したこととは、やはり前々から調査していたのだろうか。やはり《闇》の《終焉》の前に処分は決まっていたようだ。

その発表に、やはりクラスはどよめいた。全く予想外の出来事ということではないが、動揺は隠せない。

しかし私達と藤のやり取りや、私達がされたことなどがある程度知っているクラスは『やっぱり』とか『やつとか』という雰囲気さえ含んでいた。私が一度遠井との会話で疑念を植え付けたことや、満月がクラスの前で夜月のことに触れた事も効を奏しているのだろう。

遠井も、安堵したように泣きそうに、表情を崩していた。

「嘉、満月」

ホームルーム後、移動教室の準備をしていた私達を担任が呼んだ。

いつもと変わらないクールな瞳が私達を見つめている。

「怪我の調子はどうか」

「……………まあまあです」

抑揚のないしかし気遣いのある問いに返す。少し安堵したように目を細め、担任は溜め息をついた。

「今回の件で、生徒にどう処分を通達するか、慎重な考えをする者もいたんだ。教師の中には藤さんと学園の面子を守ろうと、ただ『退職』ということにしようとした人もいた。藤さんは一応家柄もそれなりにいいしな。でも俺はこういうことを曖昧にはしたくなくてな。だから正直に伝えるよう指示した。それはお前達の立場を守ることになる」

私達の存在をそして尊厳を守ろうと思っているという言葉。その嘘のない言葉をこの人から聴くと、不思議と私の心はそれを自然に受け入れていた。同時に、学園内でのこの人の権力の強さを再確認した。

満月はうっすら笑って担任に問う。

「先生、あの人、自分から辞職するって言いませんでした？」

「ああ、そうだが。何故だ？」

「あの人のやりそうなことですからねー」

馬鹿にするように、不意に《傍観者》の笑みを浮かべて満月は言った。

あんなにボロボロになったのに、どこまでもプライドに執着するつもりだったらしい。しかしそれさえ赦されなかった。

担任は一つ溜め息をついた。

「確かにそれはあの人のやり方だ。でもそれは却下した。然るべき処分は下す必要があるからな」

そんな担任の言葉に、満月は不意にニヤニヤと笑んだ。否、さっきの《傍観者》の笑みはいつの間にかニヤニヤに変わっていた。

「うん、ほんと、そうですよねえ」

「……………にやけているぞ、満月」

「だって、ね。そりゃ嬉しいですよ。先生は嬉しくないんですか？」

「……………」

「嬉しいよね、嘉」

「私に振るな」

目を逸らして溜め息。

担任は沈黙で満月の質問をかわし、組んでいた腕を解いた。

「少し前に自主退学した三年のことが少し気になって、彼の家に行ったんだ。そしたら興味深い話が聞けた。いや、あってはいけない事実だった。だが審査会に出すだけの証拠が無くてな。彼も、もう何もしたくないと言っていて、歯痒い思いをしていたところだった」

「じゃあ丁度良かったですね。あたし達の『事件』」

「二人には悪いがな。あの人に当然の処分を下すという意味ではそういうことだ」

「悪くないですよ。あたし達もすっきりしましたから」

満月はそう言うと言清々しいまでににっこりと笑った。普段通りの表情。何もかも払拭したような表情だった。

担任は目を細めて口を開いた。

「三年生の彼はもう少しして復学する事になった。ただ、体がそんなに強くないから特例の通信科になるが。理事長の計らいで、色々優遇してもらえる事になった」

「良かったですね」

満月は言って、安心したように笑う。

そう言えばその『彼』は、藤に攻撃されていた時に丁度病気になるったんだったつけ（《偽善者》の従姉妹の情報）。色々大変だっただろうけど、それなりの措置が取られたという事は、その三年生にとってもいい事だったのではないだろうか。

担任は窓の方に目を向けた。

「まさか満月の弟の件まで出て来るとは思わなかったが。でも彼の一言で藤の『本性』を晒す事が出来たからな。感謝している。夜月も相当酷い事をされたんだってな。……………もう大丈夫なのか、夜

月は」

「氣遣いありがとうございます。もう大丈夫です。夜月はああいう卑怯な奴には負けない『強さ』を手に入れましたから」

担任の言葉に満月は確信を込めて答えた。真っ直ぐ、違^{たが}わない強い視線。それはその言葉を納得させるに足るものだった。

「そうか」

静かに返して担任は微かに目を笑ませた。無表情の中にも安堵した表情だった（聞き流すところだったが、担任の藤の呼び方が『さん』付けじゃなくなっていた）。

「……………あ」

と、何かを思い出すように声を発する満月。

「そういえば、先生。どうしてあの時、教官室にあたし達が居って分かったんですか？ やっぱり氷鳥が教えたんですか？」

「ああ。氷鳥が夜月を連れて俺のところに来たんだった。その時大まかな話を聞いた。証人が必要だというから流星も呼んだんだ」

「やっぱりそうだったんですねー」

にっこりと微笑んで満月は不意に真剣な表情を担任に向けた。

「良かったです、先生がマトモな人で。この学園、結構テキトーな先生多いじゃないですか。こういう問題をうやむやにしたり、揉み消そうとしたり。さっき先生も言っていましたけど、学園とか肩書きとか、そういうのばかり気にする人ばかりで……………熱血って感じではないけど、でも先生はちゃんと分かってくれてるなって思えます。信頼出来るって思います」

「それは良かった」

ポーカーフェイスを微かに微笑ませて担任は頷いた。相変わらず感情があまり読めない表情だが、その口から流れ出る言葉は真実のみを含んだものだった。それを感じているのだろう、満月もその存在を高く評価しているように微笑んだ。

私はそんな二人の会話を黙って聞いていた。

【終の始まり(2)】

「あら、お帰りなさい。今日は早いね」

家に帰ると、ソファに座って洗濯物を畳んでいた月姫がそう出迎えてくれた。私はバッグを椅子に置いてそれに答える。

「うん。なんとなく早めに帰った」

「そっか。お腹空いた？」

「いや、まだいい」

「分かった」

月姫は洗濯物を早く終えてしまおうと畳むのを再開した。私も隣に座って自分のものと月姫のものを分ける。

すると月姫は微笑んで話を始めた。

「ついさっきまで妃七も居たんだけどね。最近はなんだか家の中が慌ただしいみたいで、家族から連絡が入って慌てて帰ったの」

「……………そういえば、あいつの家族構成とか聞いたことないな」

「あら、そうなの？　そう言われてみれば話したことないかもしれないわね。家族はね、母親と、義理の父親と、妃七と、異父兄弟の弟の四人家族。小さい頃に妃七の父親が亡くなってる。弟の名前は依^よ来^きって名前で、小学校二年生。すごく引^く込み思案ですごく人見知りするの。人見知りってレベルじゃないな。うんと……………対人恐怖症ともちよつと違うんだけど。多分それで依来が不安定なんじゃないかな」

「ふうん。性格的なものではないってことなのか？」

「うん。最近、段々内向的になったみたい。元々はスッゴい明るい子なのよ。本当に可愛くて。今も可愛いのは可愛いけど。原因もまだ分からないみたい。家族は物凄く仲いいし絆は固いから、多分外的要因じゃないかって言ってたわ。だけど今は原因が分からなくて。」

………ちよつと夜月に似てるかな、雰囲気だ」

「成程」

色々と初耳だ。そして複雑なようだ。

これだけしか聞いていないが、聞く限りでは、月姫が言うように夜月の場合となんとなく似ているような気がする。満月が最初に夜月のことを話した、あの時の感じと今の感じが似ている。

月姫は不意に膝に手を置き、静かに微笑んだ。

「嘉、いつか依来に逢ってあげて？」

少し哀しげな表情で、泣きそうな声色で。

今月姫が何を想い何を堪えているのか。何を言い、伝えたいと思っているのか。この数ヶ月でだいぶ分かるようになってきた。月姫の表情や声色からそれを読み取れるようになってきた。

しかしそれを”分かる”ことはできるが、今の私にそれを”理解”することはできない。感情移入出来るような、そんな感情はない。でも。

「そうだな」

私は返した。

決して気休めでもその場しのぎの言葉でもない。理解出来なくても、したいと思った。理解出来ないとしても今は構わない。

今は。

そして何時か必ず。

「でも、嘉ちよつと変わった」

月姫はふつと笑顔になった。首を傾げる私に微笑んで。

「他人のことをよく訊くようになった。色んな情報を入れるようになった」

「……………そう？」

「うん。前は全く尋ねて来なかったけど。今はちよくちよく訊いてくるでしょ？他人に関心を示し始めてるんだなって。嘉は嘉が思っている程冷たくないのよ」

ご飯まで時間があるからデザートでも食べましょうか、と月姫は

キッチンに向かった。いや、ご飯が先だろ、というツツコミを入れようと思ったがやめておく。

月姫は何やらごそごそ音がした後戻ってきた。

トレイに乗せられて運ばれてきたのは、カスタードプリンとアイスティーだった。それをテーブルに並べながら月姫は口を開く。

「さつき夜月が持ってきてくれたの。好きなんですって、このプリン。嘉に『ありがとう』って伝えてくれって」

「……………そう」

その『ありがとう』は何に対する礼なのか。このプリンの感謝の意味は。多分尋ねてもそれは分からないだろう。今までがそうであったように。だから敢えて追求せずに私はプリンを手前に寄せた。

洒落た硝子の瓶に入っているプリン。そしてその瓶には『indigo』とレイアウトされた、またまたお洒落なステッカー。中身もそうだが、この硝子の瓶が高いんじゃないだろうか？

蓋を開けて一口。プリンは結構久し振りだ。当たり前の話、甘いが悪くない（あの激甘党の夜月のオススメだ。どんな味なのか何となく想像出来るだろう）。

「ねえ、嘉」

プリンをスプーンですくいながら月姫はまた口を開いた。穏やかな表情は淡く微笑んでいる。

そして、問い。

「《不穏》。終わったの？」

「……………なんで？」

「嘉のオーラの感じが朝から違う感じがするの。ほんの少しだけど、柔らかい」

月姫の波打つ金色の髪が、さわりと揺れる。全身から放たれるオーラは何かを『優しさ』で圧倒するように。

そして変革させるように。
懐柔していくように。

「ああ。終わった」

短い言葉で返す。

それだけで十分だ。月姫にはそれだけで伝わる。

その答えに月姫は微笑んで一つ頷き、プリンを口に入れた。美味しそうにご満悦な表情だ。

そして月姫はまた何か思い出したように手を止めた。

「そういえば、ビッグニュースがあるのよ。本当にびっくりよ。多分嘉でも驚くと思うわ」

「…………私『でも』って。で、なに？」

「今日、定さんから連絡があつたのよ。今月末から夏休みでしょ？ 沖繩に遊びにおいでって」

「…………兄貴が？」

私は耳を疑って月姫に尋ね返した。月姫は頷く。

天星織兄弟の長男、天星織^{あませおり さだめ}定。《傍観者》、《全駆者》として名

を馳せる冷酷非情で無情な人物だ。私達の生活を金銭面で全面的に支えているのは兄貴だが、この人は《闇》でも知らない人がいない程に有名な人だ。しかも、冷淡で冷徹な人物として、だ。

そんな兄貴が？

「悪いジョークじゃないのか？」

「あら、定さんがそういうこと言うような人じゃないのは嘉が一番よく知っているでしょ？」

「……………だよな」

どうやら本当らしい。

あの人があるんこと言うなんて、天地がひっくり返っても無いようなことだったのに。一体何がどうなったからこんなことになったのだろうか？もしかして、この世の終わりなのか？

でも。

兄貴とはもう何年もともに話をしたことも顔を合わせたこともない。連絡は全て月姫や他人を通してだ。だから兄貴が今どういう状況でどんな状態なのか、実際のところ分からない。なら、こういうことも有りなのだろう。

旅行、か。

「沖縄か……………」

「行こうよ、嘉。旅行行ったことないでしょ？リラックスしてきましょう」

ウキウキワクワクといった表情でにっこりと笑う月姫。

どういう風の吹き回しでそういうことになったのか分からない。

それ以前に、あの人の考えていることはあまり読めなかったりする。私をこうして金銭面で援助している事だってそうだ。

《同族》である筈だけど。

(……………ま、いいか)

《敵》ではないから。

「いいんじゃない」

「やった！早速計画しましょ」

もうすっかりテンションが上がった月姫はニタニタが止まらない。頭の中は沖縄でいっぱいなのだろう。そんな月姫の様子を見て目を逸らす。

「……………」

また何かが動き出した。そんな感じがする。具体的なことは分からない。しかし何か胸の中のものが揺れている感じ。でもそれは、『負』の色は含まれていないようだった。

進んでいける。今までのように。後退せずに、衰退せずに。

さあ。

始まり続け、終わり続ける明日へ。

【
t
h
e

E
N
D
】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0300q/>

傍観者-HARD RAIN-

2011年1月23日19時40分発行